
規格外の男

零時

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

規格外の男

【Nコード】

N9128K

【作者名】

零時

【あらすじ】

神の暇つぶしで世界から追放された男。

このままほかの人間同様、神の玩具になるかと思われた。しかし、彼は規格外。そう、本当に、規格外だった。

彼は神を殺して新たな世界に降り立った。

これからこの世界の歴史は少しずつ変わり始める。

能力・技・アイテム紹介と解説を、それぞれの話のあとがきに付けています。見てやってください。

256万PV、ユニーク30万人突破!!

総合評価が3000を越えた・・・だと・・・?・・・マジで!
!?

プロローグ 1

眩しい。

おかしい。今、自分は寝ているはずだ。体内時計はまだ朝でないことを告げている。

ならば瞼に感じるこの光はなんだ。目を開けた。

「おう、起きたようじゃな」

声が聞こえた瞬間、目を閉じる。

「ちよつ、いきなり無視かの!？」

五月蠅い黙れ、今自分は寝ているんだ。あと数時間、惰眠をむさぼる権利が自分にはある。そうやって無視を決め込もうとしたが、

「この状況を説明したいんじゃが・・・」

仕方なく彼は目を開けた。真っ白な空間に老人が浮いている。

「説明してもらおうか、ご老人?ここは何処で、あんたは誰で、どうして俺がここにいるのか」

少し視線に怒りが混ざっているのは仕方のないことだろう。

「あーここはじゃな、神の間と言つところじゃ」

「大層な名前だな」

「だってわし神じゃもん」

しばらく無言。

「で？」

「は？」

「で、どうした？神が何の用だ？」

彼のその言葉に、神（？）は呆れた顔で言った。

「おぬし、なんか敬意を払うとかないのか？」

「あんたは敬意を払われるようなことをしたのか？あんたは俺を拉致し、こんなわけ分からん空間に連れてきた張本人だぞ？」

そういつてやると神（暫定）は黙った。

「で、どうして俺がここにいる？」

「それはじゃな、おぬしに異世界に行ってもらいたいんじゃないよ」

何か嫌な笑みで神は言った。

「ほう、その理由は？」

「暇つぶし」

「・・・」

彼の瞳に冷たい光が宿る。が、神は気付かない。

「ちなみに行く世界もおぬしが決めてよいし、どんな願いもうつ叶えてやるう」

「よし、今すぐ俺を元の世界に戻せ。それが俺の願いだ」

「それだけは無理じゃ。おぬしはもうあの世界に『存在しなかった』」

ことになったからのう」

さらに瞳の光が冷たさを増す。

「そうだな……。なら」

「ほう、行きたい世界が決まったのか？本などのフィクションの世界も可能じゃぞ？さあど「死んだ後、というものを経験してみたい」
……は？」

「前から知りたかった。死んだ後、生き物はどうなるのか。その意識は何処へ行くのか」

消える？

現世をさまよう？

それとも死後の世界というものがあるのか？

「俺は、知りたい」

「つまり、死ぬ、ということじゃぞ、それは」

「構わん。さっさとやれ」

「……そんなことを言ったのはおぬしが初めてじゃ。じゃから」
の願いはサービスとしてやるう」

そして彼の意識は光に包まれ、途絶えた。

プロローグ 2

結論から言うと、死んだ後には何か別のところに行くらしい。
今彼は、何も無い空間に浮いている。

(味気ないところだな・・・)

そんな感想を抱いた。

周りは闇。ただ、真つ暗闇ではなく、何かで光を遮られた部屋にいるような中途半端な暗さだ。

(死んだ後というからには、他の生き物もいると思ったんだが・・・)

何もない。誰もいない。

だがあたりを探っていて、気付いた。

なにか、いる。

いる、というよりむしろ・・・

(この闇全てが・・・。この場所全てが・・・)

蠢いている。はじめはゆっくりすぎて分からなかったが、この空間は動いている。

（まさか・・・、死者は、この空間そのもの。ここは、死者の魂を集めておく場所、輪廻転生までの魂の倉庫か？）

そんな推測を立てた。
その瞬間だった。

ぞわり。

闇が動いた。それも、はっきりと分かるほど。
同時に、彼は頭痛を覚える。

（なんだ！？）

自分の頭が押さえつけられているような、圧迫感。

「ぐうっ！」

ナニカが入ってくる。彼の心に、入ってくる。

（くそつたれ！）

悪態をつくも、どうしようもない。

次の瞬間、彼の頭に大量の情報が流れてきた。

それは、ここにいる魂たちの一生であった。

サラリーマンとして一生を終えた魂。

異世界で勇者になった魂。

人の体に生まれながら、実験動物として死んだ魂。

マフィアになって多くの人を不幸にした魂。

共に死の瞬間までも愛し合っていた二つの魂。

神に弄ばれ、人に弄ばれ、哀れな人形として死んだ魂。

その能力ゆえに仲間からも受け入れられることのなかった魂。

大切な友と一緒に生き抜いた魂。

ありとあらゆる魂が、それが前世『生まれてから死ぬ瞬間まで』の記憶が流れ込んでくる。

自分がいくつにも引き裂かれ、無理やり同時に映画を見せられている気分。

そんな時間が無限と思えるほど続いた。
終わったとき、彼はすぐ眠りについた。

心が、自分を守るために、情報を整理するために休息を必要としたのだった。

だがひとつ、奇妙なことがあった。

あれだけの苦痛を受けておきながら、彼は眠りにつく時、微笑を浮かべていた。

それは自らが知りえないことを知った愉悦か、それとも……。

プロローグ 3

「へえ、あそこから戻ってきたか」

目が覚めた時、目の前にいたのは老人シジイではなく、少年だった。

「・・・神か？」

「ぴんぽーん」

「何でそんな姿なんだ？」

「だってさー、お前俺に敬意を払わないじゃんかよー。せつかくあの威厳たっぷりの姿してたのにさー」

「・・・とりあえず彼は神ゴッドを無視することにした。

「・・・聞きたいことがある。今俺に見えている線や点は何だ？」

「あー、多分それは『直死の魔眼』って奴だ。ありとあらゆるモノの「死の線」や「死の点」が見えるんだぜ？」

死に触れたせいかなー、と神は笑って言った。

「それを斬ったり、突いたりするとどうなる？」

「「線」ならその斬られた場所が『死』んで、「点」なら存在が『死』ぬんじゃないかな？」

「・・・なんて眼だ」

「ラッキーとでも思っとけば？」

神のあまりに軽いノリに、彼は自然とため息が出た。

「で、行く世界は決まったか？」

「決まってると思うか？」

「質問に質問で……ってまあいいや。じゃあこっちで勝手に決めるぞ？」

「別にどうでもいい」

「はぁ……。じゃあ次だ、三つ願いを言え」

再びここで疑問が浮かぶ。

「……さつきから思っていたんだが、神ならば人の心ぐらい読めるんじゃないのか？」

彼がそう言うと、神は苦い顔をした。

「……時々いるんだよ。お前みたいに心に障壁、心性障壁って物を持つてる奴がな。そういう奴の心は、本人の同意がないと読めないんだ」

「それはよかった」

「……で？ 願いは何だ？」

「別にないが？」

呆れ顔をされた。

「あのさ、あんたはこれから異世界に行くわけ。ドラゴンに会うかもしれない。悪魔に会うかもしれない。未知の宇宙生物に会うかも

しれない。そうなったときどうにかするために、なんか能力とかほしいだろ？」

「そういうものなのか？」

「そうなんだよ！・・・もういいや。勝手にこっちでつけてやる」「それは助かる」

ちよつと考えて神は言った。

「願い一つ目。『筋力や気、魔力などを無限にする』ってのはどうだ？」

「待った。その願いは・・・」

「ん？」

「『筋力や気、魔力などの上限を無限にする』というものにしてくれないか？」

「どう違うんだ？」

「努力さえすれば、どこまでも魔力などが上がっていく、つまり最初は自分のから鍛えていく、ということだ。」

「なんでそんなめんどくさい事・・・」

「努力と共に身につけねば、力をコントロールできないからな」

「わざわざ努力するとか、訳分からん奴だな・・・。ともかく二つ目。『不老不死+肉体年齢自在変化』」

「それはどうやっても死なないのか？」

「まあ厳密に言えば違うな。全身一瞬で消し飛ばせば死ぬだろ・・・多分」

「これに関しては別に何も無いな」

「よし。じゃあ3つ目。好きな能力をやる。自分でなんか考えろ」「・・・ふむ」

「漫画や小説、ゲームなどの能力でもいいぞ？」

「そうか・・・。なら『あらゆる能力を自在に操る能力』、というのはどうだ？」

神は絶句した。

「お前……」

「どうした？」

「……分かった。『あらゆる能力を自在に操る程度の能力』だな？」

「『程度の』というのは付けてないが……。待てよ？確かそれは東方の……」

それを遮る様に神が手を振りつつ言った。

「いいんだよ、細かいことは。ただ……」

「ただ？」

「そこまでの能力になると、制限がかかる。能力を自在に操るにはおまえ自身がその能力の経験をつむしかないぞ？」

「最初からそのつもりだ」

「ならいいが……。そら」

神が手をかざす。

「これで3つの願いはお前に反映された。次に……」

神が別のほうに手をむける。扉が現れた。

「この向こうがお前がいく異世界だ。「ネギま！」の世界といえは分かるか？」

「名前と内容を多少知ってる程度だ。そこで何かしなければならぬのか？」

「別に？おれはただ、お前というイレギュラーが入ったあの世界が、

どういつ風に歪むか見てみたいだけだが？」

彼の瞳に再び冷たい光が宿り始める。

「その門だが……」

「ん？」

「あんたが今支えているのか？」

「いや？今はもう俺がいなくとも開いたまんまだが、それが？」

「ということはあんたがいなくなったら、そこは開きっぱなしか？」

「いや、条件を付けてある。『何かがここを通ったら閉じる』ってな」

「そうか。そこまで聞けば十分だ」

彼は神に歩み寄る。

「どうした？」

神は気づくべきだった。彼の眼に酷薄な光が宿っていたことを。

彼がどこから取り出した剣が、神を貫いた。

「がっ……」

何故だ。何故自分が貫かれている。

「色々してもらって悪いが、これは俺の譲れない部分でね」

何故だ。何故この男の剣は自分を傷付けられる。

「何でこんなことをするのか聞きたいだろう？教えてやるよ。」

一つ目、あなたは『暇つぶし』に俺を呼んだ。

二つ目、あなたは『俺の存在』を『最初から無かった』ことにして、断れなくしてから俺を異世界に送ろうとした。

三つ目、あなたは『世界が歪むのを見る』ために『その世界で生きるモノたち』を蔑ろにした。

あんたが、俺という人間をよく知ってから呼んでおけばこうはならなかったのにな。

知ってるか？あまりに悪ふざけが過ぎると怒られるんだぜ？」

彼は告げ、そして剣を引き抜き、神を地に倒れさせてから言った。

「何で自分が傷ついてるか分からないって顔してたな。簡単なことだよ。『無限に剣を生み出す程度の能力』を使って剣を出し、」

ニヤリと笑って告げた。

「『神を傷つける程度の能力』で刺し貫いた」

そのまま剣を弄びながら言う。

「あんたがこの能力をくれなきゃ、俺はあんたに手出しできなかつた。そのことと、死後の世界ってものを見せてくれた。それだけは感謝してるよ。」

だから、と彼は続ける。

「『存在』から殺してやるよ」

神が最後に見たのは、振り下ろされる剣だった。

「さて、と」

剣を消して彼は一人呟いた。

「行きますか」

彼は門をくぐった。

後に残されたのは、主を失った空間だけだった。

プロローグ 3 (後書き)

どうも、零時です。

ここでテンプレ破壊発動!!

いや、誰かこうすると思ったんですけどね。

だって、今までいた世界から神の暇潰しで消された、とかなったら絶対俺は許さないですもん。

あと、チートっぽく見えますが、今回は神が完全に油断してたからうまくいっただけです。

主人公 + 紹介（『スクナ解放、そして・・・』まで）（前書き）

ちよつと整理してみた。

主人公 + 紹介（『スクナ解放、そして・・・』まで）

主人公

あかつき

暁（Akatsuki）

暁は偽名。本当の名前は昔に捨てた。

正確な年齢はわからないが、大体20代後半のはず。

・性格

普通の人間だったと自分は思っているが、実際は人とずれている。最近ようやくそのことに気づきだした。

大抵の事には怒らないが、自分への過度の干渉や強制には徹底的に抗う。

基本誰にでも飄々とした態度で接する。が、完全に敵対した相手には容赦しない。

・容姿

黒髪に琥珀色の眼。身長は186cm。

顔はかなり良い。だが、美しいではなく格好いいほう。

能力を全開にすると髪と瞳の色が変わる。

服は基本適当。大体黒の服を着ている。

若作り。どう見ても10代後半〜20代前半。

・趣味

鍛錬と読書、そしてたまに未知の探求。

読書はよくするが、時を止めて読む（時間がもつたいたい）。

そのため、一日に100冊読んだことも。

未知の探究とは、あたりの散策から謎の迷宮に挑戦など様々。

・特技

一通りの武術を修めている。

人の気配、気持ちには敏感。

料理はかなり得意。というか、プロ級。
他にも色々。

・その他

生まれ育ちに秘密があるらしい。

『暁』になる前はかなりヤバイ雰囲気を持っていた。
とある人物に出会って、今の性格になった。

〈能力解説〉

『あらゆる能力を自在に操る程度の能力』

・どんな能力でも一応使うことが出来る。故に努力すれば無敵になれる。

・だが、そのままではただの器用貧乏。

・1つの能力を完全に使いこなすには数年から数十年かかる。

『心性障壁』

・自らの精神をあらゆる影響から守る障壁。生まれつきのものである。

・精神攪乱だけでなく、記憶や心を読むことなども防ぐ。

・ただし、脳に直接作用するもの（機械など）には効果がない。

- 『努力が報われる程度の能力』
- ・努力すればその分成果がきちんと出る。伸び悩むことはほぼ無い。
- ・この能力は、暁が元々持っていたものを能力化したもの。

『^{ちよくし}直死の魔眼』

TYPE - MOON 作品より

- ・あらゆるモノの存在の綻びが黒い「線」や「点」となって見える能力。
- ・そこを切る、突くことで問答無用であらゆる存在に『死』を齎す。
- ・『死』んだ場所は治癒や再生、行動不可。
- ・ただし、望んだ場所にいつも「死の線」があるわけではないので、「足を『殺』して動けなくする」などの作戦を立てるのはほぼ不可能。（相手にもよるが）
- ・存在の根源を切ったり突いたりするので、腕力は不必要。
- ・存在に限界が無いモノや、その『死』が理解できないモノ、その時代において破壊もしくは殺すことが出来ないモノには「死の線」も「死の点」も視えない。
- ・ちなみに、『死を理解した脳と眼』が揃ったの能力のため、厳密に言えば魔眼ではない。

『記憶』

- ・死後の世界で暁が得た記憶。

・生物無生物や、有形無形、並行世界なども問わずありとあらゆるモノの記憶がある。

・ただし、『今自分がいる世界のモノの記憶』を見ることはできない。

・リアルタイムでその『記憶』が更新されているのと、それに暁が耐えられないからである。

・ちなみに、この『記憶』を持ったことで暁の脳の容量が（強制的に）増えた。

・もうひとつ、この記憶には秘密があるのだが、暁はまだ気づいていない。

シエラ・トワイライト (Sierra Twilight)

暁の『あらゆる人生の記憶』から生み出された人格。ちなみに女性。

名前は、「俺が暁だから、お前は黄昏トワイライトでいいだろ」と、暁が決めた。

シエラはフィーリング（暁・談）。

・容姿

銀色の髪に琥珀色の眼だが、現在の肉体は、暁の能力で生み出されたもの。

シエラの魔力により、肉体と人格の固着がなされている。

そのため、シエラは魔力をあまり使いたがらない。

顔は綺麗だが、あまり感情を表に出さないために近寄りがたい印象を持たれている。

が、本人は人付き合いが面倒なので、それでいいと思っている。
身長174センチ、体重は秘密。というか、知ってしまったら死ぬ。

・性格

基本面倒臭がり屋。理由がないと動かない。
しかし、面倒見はいい。
容赦ない物言いをする。そのため余計人が遠ざかる。
でも、やっぱり本人は気にしない。

・趣味

料理と読書。

よく図書館にいる。

暇なときはバイトで料理することも。

・特技

いろいろ。

とりあえず、人並み以上に何事もこなせる。

あえて挙げるなら、『お仕置き』。

『お仕置き』された人は数日から数週間、銀と琥珀の幻に惑わされるという。

・能力

暁の能力（劣化版） + 下記の能力

・その他

休日は基本自宅（学園長との『お話』の結果貰った）で読書（本の代金は暁が払っている）。

気が向けば散歩に出かける。

だが、そんなときはたいてい何らかの思惑がある。

リヨウメンスクナノカミ（両面宿儺・Ryoumen Sukun

a)

暁によって解放された飛驒の鬼神。

『日本書紀』には、人々を苦しめる悪しき者であった、とある。が、元々は人々に恵みを与える守護神であり、善なるモノであった。

朝廷に齒向かった罪で討たれ、封印されていた。

・容姿

人間大のときは四本の腕、前後二つの顔を持つ光る人型。

元の大きさになると、頭に角が生えるなど『鬼』の面が出てくる。

・性格

さっぱりしている。暁に恩義を感じ、『主殿』と呼ぶ。

話し方が古風。だが……

・趣味

放浪。自分の世からどれだけ世界が変わったのか見て回りたいらしい。

・特技

弓矢。これは『日本書紀』の記述による。

・能力

?????? スクナの特特殊能力。

Fate風ステータス

（暁）

『転移直後』

【ステータス】

筋力	D +	魔力	E
耐久	D +	幸運	A
敏捷	C	宝具	？

【スキル】

・心眼（真）：A
死線を潜り抜けてきたことによる、ほぼ直感の如き戦闘思考。
その眼は、数十手先の行動も予測する。

・千里眼：D
人間に見える限界の地平線まで見える。
が、そこが限界でもある。

・魔眼：EX
直死の魔眼を所持。

・才能：EX
『記憶』によるあらゆる能力、技能の才能。
それは『才能がない才能』などにまで及ぶ。

【固有能力】

- ・ オーバーリミット 全能力開放

自分の中のあらゆる能力を暴走させ、表に引きずり出す。
使用後、一定時間全能力使用不可。

『原作開始直前（リミッター有り時）』

【ステータス】

筋力	A++	魔力	A++
耐久	A++	幸運	A+
敏捷	A++	宝具	？

【スキル】

- ・ 心眼（真）：A+

死線を潜り抜けてきたことによる、ほぼ直感の如き戦闘思考。
その眼は、数十手先の行動どころか、相手の表層心理すら読み取る。

- ・ 千里眼：B

ついに地平線の向こうすら見ることが可能になった。
つまりは透視。

- ・ 魔眼：EX

直死の魔眼を所持。

- ・ 並列思考：B+

思考を最大100分割可能。

- ・ 才能：EX

『記憶』と『あらゆる能力を自在に操る程度の能力』によるあらゆる能力、技能の才能。

それは『才能がない才能』などにまで及ぶ。

『原作開始直前（リミッター無し時）』

【ステータス】

筋力	EX	魔力	EX
耐久	EX	幸運	A+
敏捷	EX	宝具	？

【スキル】

・心眼（真）：A+

死線を潜り抜けてきたことによる、ほぼ直感の如き戦闘思考。

その眼は、数十手先の行動どころか、相手の表層心理すら読み取る。

・千里眼：B

ついに地平線の向こうすら見ることが可能になった。

つまりは透視。

・魔眼：EX

直死の魔眼を所持。

・並列思考：B+

思考を最大100分割可能。

・才能：EX

『記憶』と『あらゆる能力を自在に操る程度の能力』によるあらゆる能力、技能の才能。

それは『才能がない才能』などにまで及ぶ。

【固有能力】

ロスト・ビューティフル・デイズ

・『失われた楽園』

固有結界。

世界との境界は、吹き上がる炎。

『クロス』が全てを失ったときの風景を再現している。

それは全てがアカい世界。

効果は『内部に存在するものがあらゆるモノを失う』。

それは、気や魔力といった物だけでなく、『生命力』や『水分』、

『感情』、『記憶』、『存在』にまで及ぶ。

失わせるだけでなく、暁が吸収することも出来る。

その場合、吸収した相手はシエラと同じような存在（暁の中に存在し、暁の力で外に出られる）になる。

・???????

未覚醒の能力。

くシエラく

【ステータス】

筋力	B	魔力	A
耐久	C +	幸運	B
敏捷	B +	宝具	?

【スキル】

・心眼（偽）：B
直感・第六感による危険回避。

【固有能力】

ナイツ・オブ・ミラージユ
・蜃気楼の騎士達

大気から、自在に操れる騎士を生み出す。ある程度の自我も付与可能。

騎士達を武器に変形することも出来る。フォームチェンジ（形態変化）

騎士達を拡散させ、蜃気楼で相手を惑わすことも可能。ただし、大気なので風の魔法には弱い。

使用には魔力を消費する。

『シエラ』という人格のオリジナルの能力のため、暁もシエラほどうまくは操れない。

くスクナく

【ステータス】

筋力	A +	魔力	B
耐久	A +	幸運	C

敏捷 C - 宝具 ?

【スキル】

・心眼（偽）：B
直感・第六感による危険回避。

・神性：EX
神にどれほど近いか。
鬼とは言えど神なのでスクナは最大の神性を持つ。

【固有能力】

・?????
スクナの特殊能力。
『両面』や『神』に関係することらしい。

読者のための質問コーナー（9/15版）

暁

「暁と」

シエラ

「シエラの」

暁&シエラ

「『規格外の男』質問コーナー」

シエラ

「……なんですか、これは」

暁

「何、色々と作者に至らぬところがあつて『理解不能！！理解不能！！』つてなる奴もいるだろうと思つてな」

シエラ

「それで質問コーナーを？」

暁

「ま、そういうことだ。と、言うわけで読者の皆、『こつてどういうこと？』『や、『もっと説明しろ』など思つた事（場面）があったらじゃんじゃん質問してくれ」

シエラ

「それでは行きます」

『フラグどこまで回収するの?』

暁

「……………」

シエラ

「直球ですね。で、どうなんです?」

暁

「知るか!!元々作者だって『ここまでフラグ立つとは思ってなかった』とか言ってるんだぞ」

シエラ

「あなたが勝手に突っ走るからでしょう」

暁

「俺か!?俺のせいなのか!??」

シエラ

「ところで、このままパクティオーしていくとネギのラカン戦は……」

暁

「そこなんだよなあ……」

『修行がいるなら「あらゆる能力を自在に操る」って言わなくね?』

暁

「あの神も言っていたが、一人の人間に『どんな世界の技能・能力でも使える』ってのは重過ぎるんだ。だから出来る限り負担を軽くするため、最初は『使えはするが能力（技能）は未熟』ってしたわけだ」

シエラ

「まあ、何もなしにズームパンチや火拳なんか出来たら怖いですね」

暁

「最初の頃の俺がやってたら、まず間違いなく間接外した痛みやら腕が燃えた火傷やらが来ただろうな……」

『神を殺せてチートじゃない？だったら何がチートって言うんだ、けしからん！』

暁

「まあな、あいつが初っ端から俺が能力使えるとは思っていなかったから、不意打ち出来たわけだし」

シエラ

「『記憶』が役に立ったわけですね」

暁

「ああ。あとは心を読まれなかったことも大きいな。あつてて良かった心性障壁、ってか」

シエラ

「あんなのでも神ですしね。もし読まれてたりなんてしていたら能力封印や剥奪されていたかもしれませぬね」

暁

「ああ、ちなみに神は他にもたくさんいるぞ？担当世界別やら何やらで色々あるらしいぜ。本神ほんじんに聞いたから間違いない」

シエラ

「全部がアレみたいでないのは救いですね」

暁

「今度この世界と俺の元いた世界とかの神に就任した奴は『事なかれ主義』だしな」

シエラ

「何だか中間管理職みたいな神ですね……」

暁

「上位神とあのゴミみたいな奴との間で気を揉んだりしてな」

シエラ

「何だか読者から質問が来そうなので答えておきますが、暁はエヴァと別れてからの約600年の間に他の世界にも行っています」

暁

「ああ、その世界間移動の際に他の神に出会ってな。そいつはいい奴だったからしばらく一緒に居たんだ」

シエラ

「他の世界に行った時の話は別作品として出す……かもしねません」

『やっぱりカモ要らないんじゃないかな』

暁

「だよな」

シエラ

「いえ、自分が許したんだからそこは否定すべきでしょう？」

暁

「あー、ネギの前だし一回だけ許そうかなーとか考えちゃったんだよな」

シエラ

「まあ、暁の罰を受けて多少は大人しくなった……箒ですが」

暁

「どうだかなあ……？」

シエラ

「まあ、次がないことは分かっていますし大丈夫でしょう」

暁

「そう祈るぜ」

『【過去編】腕折るのはやりすぎだろ』

暁

「あー、そうか？訓練で腕折っても別に構わんだろ。2、3日で治るし」

シエラ

「それはあなたが異常なだけです。しかし、支障になるものがそれほど無いのならば構わないのでしょうか。だからといって毎回折るのはあんまりですが」

暁

「あれは向こうが負けを認めないのが悪い」

シエラ

「でもあなたから仕掛けたこともあるのでしょうか？」

暁

「そりゃあ、まあ……」

シエラ

「五十歩百歩ですね」

『【過去編】つまらん&長い』

暁

「質問じゃぬえー！こんな質問を寄越すなんて作者は何をやってん

だ

シエラ

「作者は現在課題やら合宿やら大会やらで忙しいそうです」

暁

「そのスキマをぬってこれを書いているのか」

シエラ

「そんなことより本編書くべきでしょう」

暁

「まあな……でもつまらないって書かれたときは結構落ち込んだっぽいぞ」

シエラ

「一日で復活しましたがね」

暁

「でもまあ、頑張って書いてははいるみたいだが」

????

「でもそれって作品の出来に大して影響してませんよね?」

暁

「なんだ、急に霧がわいたぞ」

シエラ

「気にしたらダメです。こっぴつのは」

暁

「ああそつだ。作者は過去編をとりあえず書くことにしたそつだ。『強い』要望があればシエラやスクナ以外の戦闘も書くそつだが」

シエラ

「それだけ書く気力が残ってるんですかね」

暁

「……作者アイツだからなあ……」

『書かれてない空白の期間は何をしてたの?』

暁

「あ?そりゃあ色々やってたさ」

シエラ

「具体的に言いなさい」

暁

「あー、具体的に言つと……」

エヴァと別れる

お尋ね者に

賞金首

ちよこちよこ異変や事件を解決して回る

くこの間に異世界に行ったり

大戦介入

魔法世界の真実を知る

大戦終結

なんかやってた

く異世界とネギま世界を行ったり来たり

シエラの人格を作り出す

麻帆良に来る

・・・こんな感じか？」

シエラ

「『なんかやってた』ってなんですか、『なんかやってた』って」

暁

「そりゃあ後でのお楽しみに決まってるだろ」

シエラ

「質問コーナーで疑問を増やしてどうするんですか・・・」

読者のための質問コーナー（9/15版）（後書き）

さあ来いよ！！貴様ら全員、微塵切りにしてやるぜ！！

くき、切れた・・・ぼくの体の中で解説が切れた・・・決定的な解説が・・・！！

『ズームパンチ』

「ジョジョの奇妙な冒険」より

・波紋使いが使うパンチ。関節を外し、射程を延ばす。

・関節を外す痛みは波紋で和らげる。

『火拳』

「ONE PIECE」より

・主人公ルフィの義兄、ポートガス・D・エースの『メラメラの実』による技。

・拳を炎と化しての打撃。海賊船を一気に数隻破壊出来る威力を持

?

ある日、森の中

迂闊だった。門の出口がまさか空中に出てるとはおもわなかった。結果、そのまま落下。といっても地上数メートルのところだったから怪我はない。だが・・・

「ひどい冗談だ」

まさか森の中に落とされるとは思わなかった。木に登って周りを見ても村一つ見えない。

そして何より大事なものは、食糧の問題だ。しかし、付近に生き物の気配はなし。

「何故だ？これほどの森ならば生き物がいてもおかしくないはず・・・」

そう、まったく生き物の気配がない。異常だ。

「不老不死だから死なないとは思うが、飢えて動けなくなったらお笑い種だぜ」

そもそも俺は、たいしてこの世界の知識を持っていない。友人が、たまたまこれにハマっていて、いかにすばらしいか半日ほど聞かされた。そのときに覚えた程度だ。

「こんなことだったら好きな本の世界にしとくんだったな」

ジヨジヨとか、と舌打ちしつつ漏らす。と、その時閃いた。

「『波紋』だ……」

『波紋』なら飢えも緩和できると何処かに書いてあった。

「だが、十分な波紋を練るためには……」

能力を発動する。

「『呼吸を操る程度の能力』」

これなら数日かからずマスターできるはずだ。そして、

「同時展開、『気を操る程度の能力』」

この二つで『波紋を操る程度の能力』自体の鍛錬も可能だろう。まために、

「同時展開、『波紋を操る程度の能力』」

これで波紋の熟達の速度が、3倍とまではいかなくとも2倍にはなつた筈だ。

それにこの森で自身を鍛えておけば後からが楽だ。しかし……ここで時間を潰していいのか？

「ここがすでに原作の時代だという可能性も無くはない、が……」

神の性格を考えるとどうもそれより前に送るような気がする。

「もう少し生かしくべきだったか……」

だが過ぎてしまったことは仕方ない。まずは人里を探すことだ。できれば漫画の中の人物がどのように生きているのか、見てみたい。そのため……

「発動『千里眼』」

駄目元だったが使えた。10キロ先ぐらいまでしか見えないが。これじゃ『四里眼』だな……

「ん？あれは……」

視界に引っかけたものをもう一度よく見る。

「道……か？」

正確に言うとは獣道だ。だがもしかすると、という可能性もある。とりあえず、その方向目指して歩いていくことにした。もちろんさっきの能力は三つ全て展開したまま。

なぜ能力で転移or食料を作らないのか。簡単だ。転移は数メートルしか出来ない。食料は、栄養が無いものが出上がる。

「波紋を覚えたら今度は物を作り出す能力を鍛えなければいけない……」

しみじみと呟いた。

「歩いてきたはいいもの・・・」

俺の目の前にはでかい鱗の塊が寝ている。簡単に言つとドラゴンってやつだ。

「生き物がいないのはこいつのせいだったか・・・」

何でこんなことになったかといえば、『四里眼』の精度の悪さのせいだ。草の中の緑の鱗に気づかなかつた。ただそれだけ。目的の道近くまで来てようやくだ、と曲がり角を曲がったら、そこにいた。

(しかし・・・)

声に出さずに思考する。

(流石というか、寝ていてもここまでのプレッシャーを感じるか・・・)

戦うべきでない相手であると判断して、この場を離れようとした。が、後ろに出した足がちょうど枝を踏んだ。

(尻尾には要注意、か)

「一般の人間の中ではトップクラスの強さの自信があるんだがな・・・っと！」

尻尾を伏せてかわす。気や波紋のおかげで何とかかわせた。振り下ろされる爪を飛んで避け、迫る牙を空中で身を捻って回避する。

(こりゃ、能力使っても勝てないかもな・・・)

そう思ったがとりあえずやってみる。

「『縮地』！」

出来損ないの縮地で背後に廻り、ドラゴンの背に剣を突き立て・・・られなかった。

(剣がへし折れるって・・・どんだけ堅いんだ！)

おまけに傷ひとつついていない。

『直死の魔眼』で見えるドラゴンの「死」は、ほぼ全て体の前面にある。だが、

(飛び込んで行って無事でいられる確率は一割以下だな・・・)

飛び込んで行ってブレスで消滅なんてことになったら洒落にもならない。

攻めづらい。

(くそ、どっしたら・・・)

爪をかわし、牙を避け、尻尾を回避する。
すでもう5分がたっている。

(全力で闘ったが・・・)

どうしても勝てる方法が見つからない。

(どうすればいい！何か・・・何かないのか！)

一瞬攻撃がやんだ。ドラゴンを見ると口内が燃えていた。

(『ブレス』だと!?)

「『我に仇なす者』の『通過』を【禁】ず」

さらにもう一枚膜がドラゴンを囲み、ドラゴンの体当たりは弾かれた。

今度は尻尾で木を吹き飛ばしてきた。

「『あらゆるモノ』の『通過』を【禁】じ、」

もう一枚膜が張られ、木も弾かれる。

「『あらゆるモノ』の『回避』を【禁】ず」

その言葉と同時に最後の膜が張られる。

「『四重結界・禁の型』」

ドラゴンはもう逃げられない。

「術式付与・『反射』、対象・『四重結界』」

結界に反射の術式が組み込まれ、この結界に触れたものを『反射』するようになった。

もう俺の意識はほとんど無い。ただ何かに誘われるように力を使う。

「オーバーリミッツ
『全能力開放』」

俺にあるあらゆる『力』が俺から噴き出す。

『剣』が、『槍』が、『炎』が、『氷』が、噴き出す。

「形成・『弹幕』」

その言葉で『力』は弾になり、

「『包囲』」

その言葉で結果以内に設置され、

「秘奥『弹幕结界』」

放たれた。

ある日、森の中（後書き）

やだ・・・なにこれ・・・

自分で書いててなんですが、これはひどい

4 / 19 ちょっとおかしかったところとかを修正

〈解説〉

『波紋』
はもん

「ジヨジヨの奇妙な冒険」より

・特殊な呼吸法により血液に波紋をつくり、太陽と同じエネルギーを体内に生み出す。

原作では対吸血鬼用等に使用される。

・使用者は、寿命が延び、老化が遅くなり、傷の治癒も早くなる。
また、空腹や喉の渇きも緩和できる。

・元は気や仙道と同根であるらしい。

『千里眼』
せんりがん

・様々な話に出てくる能力。

文字通り千里先を見通すことも出来れば、ただ単に目が良い事の形容であったりもする。

『だんまくけっかい弾幕結界』

「東方project」より

・元は、やくもゆかり八雲紫のラストスペル「ゆかりおうぎ紫奥義」『だんまくけっかい弾幕結界』」。

・この話では、暁が操れる『力の結晶』を全て呼び出し、全方位から放った。

人外（天然）と吸血鬼（幼）

（ Akatsuki Side ）

目が覚めた。というより、気がついた。
目に映るのは青い空。そして・・・

「体が動かねえ」

ピクリともしない。首すら動かない。
体に意識を集中する。

「筋肉断裂、複雑骨折、内臓破裂、大量出血、気や魔力の枯渇による意識の混濁……。よくぞここまでって感じたな」

おそらく全能力解放の反動だろう。だが、つい先ほどまでただの人間だった俺がよく吹き飛ばずに済んだものだ。

痛みは波紋が和らげていた。こういう時、呼吸だけでできる波紋は便利だ。
しかし暇だ。

「この間に能力の鍛錬でもしておくか」

さて、何をするか……。時間はたっぷりある。

『死』の世界で『あらゆる体験』をしたおかげか、あらゆる能力の使い分けは分かる。

「ただ、能力自体が未発達じゃあ、意味ねえんだよな……」

ドラゴンとの戦いを思い出す。いや、戦いというよりあれは……

気が、魔力が、ドラゴンの鱗を剥ぐ。露出した肉を風が裂き、炎が焼き、冷気が凍てつかせる。

それは戦いなどではなかった。ただの『暴力』だ。

ドラゴンを貫通した弾は、結界に触れて跳ね返る。その弾はドラゴンに当たり……。その繰り返しだった。

地面が掘り返され、木は薙ぎ倒される。

同時に俺の体も傷ついていく。

『力』に耐えられず、足から血が噴き出し、腕が弾け飛ぶ。

そして……

残ったのは結界の形に抉れた地面と、全身から血を流しズタボロになった俺だけだった。

「力が足りずに器用貧乏か、力の暴走で自爆の二択しかないんじゃないか
あな・・・」

二度とあんな事にならないようにしなければ。

『あの日』のように自分の手から大切な物を零さないためにも。

「それじゃ、まずは『ザ・ワールド世界』から・・・」

・・・

あれから数年経った。

俺は、十数個程度ではあるが能力をマスターした。

時間停止中に訓練したりしたから、俺自身の時間は50年ほど経っているが。

それと、鍛錬の時に気付いたのだが、ドラゴンとの戦いの時に、俺は「結界だけは」まともに張れた。あれはどうやら俺自身の能力が『領域』に関する物だったかららしい。だからそれだけは完璧に使える。

その能力は、領域を『定め』、そこに指示を『付加』することで、事象を操るものだ。時まで操れたときは驚いた。

そして結界も『領域』を区分する物だからか、俺はかなり得意だ。だからあのプレスを弾くことが出来たのだろう。

そしてこの森だが、ドラゴンを殺したせい（？）で動物が増えた。というよりも戻ってきた。

おかげで『物を作る』能力の鍛錬の時に、比較するオリジナルに事欠かなくなった。サンプルは沢山あるに越したことはないからな。

つぎに人里だが、この森の出口に一つ町があった。それなりに栄えているようだが、俺の居るところには誰も来ない。・・・どうもドラゴンの伝説があるかららしい。森の奥深くに行くとドラゴンに食われてしまう、という言い伝えがあるようだ。そのせいで、俺は人に飢えている。あー、会話してえ。

そして今の『時代』だが・・・ん？誰かこっちに来るのか？

〈Eva Side〉

とうとう人間に捕まってしまった。多分これから、彼らは私を髑つて楽しむのだろう。

だけでもう、どうでもいい。逃げるのも、生きるのも、もう疲れた。吸血鬼になってから、ずっと追われ続けてきた。

追ってくる人は違っても、追ってくる目的は変わらない。

誰もが、私が苦しむのを見て喜んだ。それに抵抗すれば、憎悪した。そんな人間を見るのも、もう飽きた。

本当にもう、どうでもいい。

どうやら私はドラゴンの巣に行かされるようだ。

百年以上前からずっとそこにいるらしい。
ドラゴンだったら、私を殺してくれるだろうか。

両腕は縛られ、両足には重り、両脇には監視の人間。
私は今、森を歩いている。
両脇から何か下卑た声で言ってくるが、聞こえない。

『ここから先はドラゴンの巣』

看板の前で、彼らは帰っていった。
ここまで一本道で、私が戻れないことを知っているから、彼らは帰ったのだ。

その看板を通り過ぎて、私は進む。
歩いて、歩いて、歩いた。
ドラゴンに会えることを願って私は進む。

その果てには、広場があった。
もう、辺りは暗くなってきた。
広場の真ん中で火を熾している男がいる。
その男はこつちを向いて笑った。

「よし。こんなところまで散歩か？」

〔 Akatsuki Side 〕

目の前には、10歳くらいの少女。

「食うか？」

こんがり焼けた肉（鹿）を差し出す。

「……。（じくじく）」

暗いぞ、コイツ。

さっきからこの調子だ。

最初に話しかけたときも、両手足とも自由にやってたときも無言だったからな。

本来なら、こう、自由になった喜びとかがあるもんじゃないか？

「嬢ちゃんはどうしてココに？ここがドラゴンの巣だったのは知ってるだろ？」

とりあえず尋ねてみた。どうやって来たかは『千里眼』で見たが、

事情は知らない。

「……」

「言いたくないなら言わないでいいぜ。無理矢理聞き出そうとは思わねえよ」

「……」

「それで？いつまでココにいるつもりだ？」

「……ずっと」

「あん？」

「ずっとココにいる」

「おいおい、冗談だろ？自慢じゃねえが、ココで暮らせるのは俺ぐらいのもんだぞ？」

「……」

だんまりか。余程複雑な事情なのか？

「……」

「……」

ちくしょう、せっかく人と話せるかもしれないと思ったのにな……。

「……お前は」

「ん？」

「お前はどっしてココにいる？」

おいイ？お前ら、今の言葉聞こえたか？……じゃねえよ！驚いて変になっちゃったか、俺？

それにしても『お前』か……ずいぶん乱暴な言葉遣いだな。

「どうしてっていても前からココにいたからな。習慣だな」

「ココにいたドラゴンは？」

「あー・・・何だったらいいかね・・・」

どうしようか。本当のことを話すか？それとも・・・

「まあその、俺が殺っちまったよ」

何となくだが、コイツに嘘をつくのはいけない気がした。

「・・・本当にか？」

「ああ」

「どうやって？」

「いやその、なんというか、だなあ・・・」

魔法って言うわけにもいかねえしなあ・・・。どうするよ。

「・・・魔法か？」

「嬢ちゃんはエスパーか？・・・いやそれより・・・」

「なんで私が魔法を知っているか・・・だろっ？」

「考えを読むんじゃないやねえよ」

しかし、本当に「知っている」のか？おとぎ話ではなく、本物の魔法を・・・

「知っている理由。それは私が・・・」

「うん？」

「私が・・・」

あんたがどうしたってんだ？

「吸血鬼だからだ」

人外（天然）と吸血鬼（幼）（後書き）

（解説だとか？よからう、やってみる。このDIOに対してッ！）

『ザ・ワールド
世界』

「ジョジョの奇妙な冒険」より

・DIOのスタンド。

・パワーもスピードも最高クラスのスタンド。

更に射程距離は、近距離パワー型のスタンドとしては異例の10
m。

『時間停止』の能力を持つ。

孤独を知る者

〔Eva Side〕

言った。

この男に、私が吸血鬼だと言った。

何故だろう。何故私はこの男に正体をばらしたのだろう。

まあ、どうであるともう終わりだ。

この男も血相を変えて私に襲い掛かってくるに違いない。

私はそっと目を閉じた。

「そうか」

その男はそういっただけだった。

驚いて目を開く。

男はこちらに背を向け肉を焼いていた。

「・・・何故だ？」

私は問うた。

「何がだ？」

「何故私を恐れない？」

いままで吸血鬼と知られて、人間に嫌われなかったことなどない。

「なんでお前を怖がる必要がある？」

振り向き、男は信じられないことを言った。

「なに……？」

「お前は背を向けた俺に襲い掛からなかった。こちらに害がない相手をどうして恐れる必要がある？」

「嘘だ」

私はそう言った。

「私は吸血鬼だ。闇に生き、人に恐れられ、嫌われ、生きていく者だ」

感情が昂り、口数が増す。

「そんな私を人が嫌わない筈がない。私を傷つけない筈がない」

言葉を吐き出し続ける。まるで心の底の想いを吐き出すように。

「お前も私を恐れるのだろうか？嫌うのだろうか？だったら私を殺してくれ。消してくれ。私はもう……嫌われるのも、生きるのも、疲れたんだ」

そこまで言って私は黙った。

「なあ」

今度は男が口を開いた。

「確かに人は闇や、闇に生きるものを恐れる。だがそれは、それが何なのか、どんなものなのかが分からないからだ」

男は続ける。

「だから俺は、どんなものかが分かるのなら、恐れる必要も、嫌う必要もないと思っている」

それにだ、と男は付け加える。

「その外見と、自分を殺してくれ、という言葉からお前はなりたくて吸血鬼になったんじゃないかなさそうだ。大方、吸血鬼というだけで嫌われてきたんだろ？」

そう言って、男は私を

抱き寄せた。

「今まで苦しかっただろうなあ、寂しかっただろうなあ」

男の手がゆっくりと私の頭を撫でる。

「だけど、少なくとも俺はお前を理由もなく嫌わないし、恐れない。俺は、」

孤独さびの辛さを知っているから

男のその言葉を聞いたとき、私は涙が出てくるのを感じた。

「だから、今は思う存分泣きな？我慢してきた分だけ・・・な」

あたたかい、やさしいこえがきこえる。

私は、久しぶりに思い切り泣いた。

＼ Akatsuki Side ｝

腕の中にはまだ嗚咽を漏らしている少女。

その頭を俺は撫で続けていた。

この子が言った言葉。

『吸血鬼だから魔法を知っている』

つまりこの子は、魔法的な何かで吸血鬼になったということ。そしてその外見の年齢から、自分でなりたくてなったとは思えない。

その時点で、俺は大体の予想がついていた。だから、恐れなかった。嫌わなかった。だが、この子にとって、俺のこの態度はかつてないほどの喜びだったろう。

この子は『あの時』の俺と似ている。人に嫌われて、傷つけられて、独りで、誰にも理解されずに生きてきた。

だから、この子には俺にとつての『あいつ』のような存在が必要だった。

『あいつ』は、他人や常識に惑わされず、『俺自身』を見てくれた。誰も知らずとすらしなかった『俺』を理解しようとしてくれた。あいつに救われたから、今の俺がある。

だから、俺はこの子にさっきの言葉をかけた。

それは偽善かもしれない。自己満足かもしれない。

だが、俺はそれで救われる人がいるならそれでいいと思う。

気高い理想とやらのために人を傷つけ、「仕方なかったんだ」だの「時には犠牲も必要なんだ」だの言つて切り捨てた人達のことを忘れていく奴等よりは数万倍マシだろう。

だったら俺は偽善で人を救おう。自分の目の前で人が死ぬのが、傷つくのが、苦しむのが嫌だから救うのだ。その偽善のために切り捨てた人々の分を俺が背負うのだ。そして、その信念を最期まで貫こう。それが俺が『あの日』に誓ったことなんだから。

「……泣き止んだか？」
「……ああ……」

それを聞いた俺は少女に尋ねた。

「名前、聞いてもいいか？」

「何故だ……？」

「ただ、俺が聞きたいと思ったただけだ。だめか？」

「いや、いい。私の名前は……」

そして俺は信じられない名前を聞く。

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ」

「……」

「……何だとッ!？」

これがあの「闇の福音」ダークエヴァンジェルだと!？」

物凄く居丈高で他人を見下したような態度と聞いたが、これは……
まあ待て俺、時代が前だからこんななのかもしれないだろう？
ん？エヴァに会ってるということ……

ということはまさか、もう俺は原作介入してしまったのか!？
もしや、ドラゴンを殺したことが引き金になったんじゃないか……

「……まあいいか。原作とかは関係ない。こいつらは『今ここで生きている』んだから。俺は自分が思ったとおりに行動しよう。」「どうした？」

あまりにも黙りすぎたせい、エヴァがこっちを覗き込んできた。

「ああ、いや、なんでもない。ただ、いい名前だと思ってな」

途端にエヴァの顔が真っ赤になる。同時に笑いかけたのが効き過ぎたか。

「エヴァって呼んでもいいか？」

強引に話を逸らす。

「え、あ？い、いいぞ」

よかった。エヴァンジェリンじゃあ呼びづらい。

「おまえは？」

「俺か。俺は暁だ」

「アカツキ。アカツキ、か……」

何か噛み締める様に繰り返すエヴァ。

「そういえば、エヴァはどうしてそんな言葉遣いなんだ？」

とりあえず疑問に思ったことを尋ねてみる。

「あ、こ、これはだな、外見のままの言葉遣いをしていては人間に舐められると思ったからだ。威圧すれば、逃げやすくなるからな」
「へえ、そうなのか。勿体ねえな、可愛いのに」

また真つ赤になるエヴァ。やばい、失言が多いぞ、今日は。

「か、からかうな!」

「す、すまん（からかってるつもりはないんだがな・・・）」

ん？そういえば・・・

「エヴァって今何歳だ？」

「年齢か。私は今20だな。吸血鬼化して10年だ」

10年であそこまで心が荒んでいたのか……。だったら、エヴァに喜びをプレゼントしてやろう。

「なあ、エヴァ」

「なんだ？」

「20歳の体になりたくないか？」

「なりたくないか、だと？なれるものなら、なりたいさ」

そっぽを向くエヴァ。とりあえず告げる。

「なれるぞ」

エヴァが凍った。

「・・・おーい」

返事がない。

「エヴァ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「エヴァ！」

「ひゃ！？な、何だ！」

「いや、なりたいか？」

「も、もちろんだ！」

ま、当然だろう。止まった『時』が動くのだから。

「よし、だったら俺に任せろ。吸血鬼化は解けねえが、肉体の成長くらい簡単だ」

「本当か！」

「嘘ついてどうすんだよ。ほら、目を閉じな」

「分かった」

目を閉じたエヴァの肩に両手を置く。

「成長した自分をイメージしろ。肉体と精神の両方から助けてもらう」

そう言うと、エヴァからイメージが流れてきた。

「よし、そうだ。そのまま・・・」

精神のイメージと肉体の情報から体を作る。

よし、2つにはほとんどズレがない。・・・今だ！

「ハアッ！」

力の行使と同時に、エヴァの体は光に包まれた。

「・・・成功・・・したのか？」

恐る恐るエヴァが尋ねてきた。が、

「・・・すまん。完全には肉体を成長させられなかった。俺の力不足だ。期待させるようなことを言っすまねえ・・・」

そう、エヴァの体は15歳程度にしか成長していなかった。

「・・・」

エヴァはゆつくりと目を開いた。
自分の体を見る。

腰まで伸びた髪、しなやかな肢体、15相応の胸の膨らみ。
それを見たエヴァが突然泣き出した。

「エ、エヴァ？」

「ちがつ……ひつく……違うの、嬉しい、の……」

言葉遣いが女の子らしくなっている。

「……ありがとう……」

その言葉に、俺の胸は熱くなった。

久しぶりに、嬉しくなった。

「なあ、エヴァ。その言葉遣い、やめねえか？」
「ん？何故だ？」

数分後、元に戻ったエヴァに俺は提案した。

「だから、15ぐらいまで体はなつたんだ。もうそんな言葉遣いする必要はねえよ。女の言葉遣いでも十分だぜ」

「何が十分なんだ？」

「威圧だよ。圧倒的な力を見せれば、勝手に敵は逃げてくぜ？」

「圧倒的な力など私は持ってないぞ？」

「何？魔法は使えないのか？」

「残念ながらな。使えるように努力したことがないからな」

意外だ……。とつくに使えていると思つたんだが……
だったら……。……。……。

「……よし！分かつた！」

「……なんだ？」

「エヴァがそんな言葉遣いをしなくて良い様に、俺が魔法を教える……」

「何だと!？」

「安心しろ、手取り足取り教えてやるから」

「いや、ちが……」

「よし、まずは魔力を感じるところからだな。そのためには……、
エヴァ」

「な、なんだ？」

「なんだ？、じゃなくて、なに？、だろ」

「え、いや……」

「エヴァ〜?」

「な、なに?」

「そう、それでいい。・・・エヴァ、こっちに背を向けて」

「何をするん・・・するの?」

「いやなに、ちよつと俺の魔力を流すだけだ」

「ちよつ、それは危険なんじゃ・・・」

「そらっ」

「ひゃあああああああ!!」

「あ、そうだ。ちよつと変な気分かもしれねえが大丈夫・・・・・・・・・・
だと思っが」

「はあ、はあ、ちよ、ちよつと、思っつて・・・」

「はっ」

「ひいひいひいん!!!!」

「せいっ」

「はああああああああん!!!!」

「おらっ」

「だめええええええええ!!!!!!」

・・・・・・・・・・・・・・・・

その夜は、エヴァの悲鳴が絶えることはなかった。

孤独を知る者（後書き）

（解説）

『肉体年齢の操作』

・肉体から『こうなるであろう』という未来を、精神から『こうなりたい』という願望を、それぞれ読み取り、両方の違いををすり合わせて変化させる。

・ただ、吸血鬼は『肉体の時間が止まっている』ため、そこから肉体の時間をずらすのが難しい。故に、今の暁では+5歳が限界だった。

暁

〔Eva Side〕

結局、口調を変えさせられることになった。

まあそれはいい。魔法を覚えるのもいい。だけど……

「……これは死ぬ」

模擬戦をアカツキとすることになった。

「安心しろ。死にゃあしないって。……死ぬほど痛いかも
しれないがな」

「ちよっ、むしろそっちのほうが嫌!」

「この内にあるモノの【死】を禁ず」

「え……」

「コレで死なないだろ」

「それは死ねないって言うんじゃない……」

「そうとも言っな」

たぶん何を言っても無駄だ。

だが、アカツキは鍛え方は正しいし、きちんと休ませるし、手加減

はするし、何だかんだ言っても優しい。

私は強くなっている・・・はず。けれど、アカツキは私の鍛錬が終わった後に自分の鍛錬をする。しかも私の倍の時間。だから私は、彼にいつまでも追いつけない。

私がそういうと彼は、

「それはどうだろうな。エヴァには無限の時間があるんだから、いつかは追いつくさ」

そういつて私の頭を撫でる。その度、私は子ども扱いするな、と怒るのだけ。

だから、口ほど鍛錬の厳しさを心配してるわけではない。

とはいえ、毎回必ず、魔法障壁の訓練のためにはいえ『魔砲』をぶっ放してくるのはやめてほしい。

最初それに驚いて障壁を張り損ねて、直撃をもらってしまった。その時は、アカツキが治るまでそばにいてくれたからラッキーだったと思っっている。

あの時のアカツキの心配そうな顔が・・・こう・・・胸に・・・

「おい！」

「ひゃ！」

「行くぞって言ってるんだが・・・」

「わ、分かった・・・」

集中しなきゃ。気を抜いてるとあっという間にやられる。

「行くぞ、エヴァ！」

暴風が、襲い掛かってきた。

結局私は、全治一週間の怪我を負った。

＼ Akatsuki Side ！

魔法を教え始めると、エヴァは急激に強くなっていった。
エヴァは努力を惜しまない。だから伸びる分がかなり大きい。
しかも、やはり魔法の才能が抜群であるため、教えるこっちも楽だ。

この分だと、10年せずつに・・・

これは修行開始から一週間した頃、エヴァが俺に尋ねてきたことなんだが。

「ねえ、アカツキ」

「どした？」

鍛錬に使う武器を造りながら答える。エヴァには武術も教えている。あつて損はないだろう。

「アカツキはいろんなことが出来るけど、それも魔法？」

「いや、これは俺の能力だな」

「どんな能力？」

こちらを覗き込んで聞いてくる。

エヴァになら話してもいいだろう。別に隠すことでもないしな。

「ああ、『あらゆる能力を自在に操る程度の能力』だ」

「・・・」

エヴァが黙った。

「どつした？」

「・・・な」

「な？」

エヴァがこっちを睨みつけて叫んだ。

「何それずるい！」

「ずるいって言ってもなあ……」

頭を掻きながら言う。

「努力しなけりゃただの器用貧乏だぜ？ こんなの。一つの能力を習得するのに30年ぐらいかかったからな」

「30年……？」

エヴァが怪訝そうな顔をする

「何か変なことでもあるか？」

「アカツキって今何歳？」

「……あー……」

不老不死って伝えてなかったな、そういえば。

「俺ってさ、不老不死なんだな、実は」

「……」

「黙ってて悪かった。忘れてたんだよ」

「……アカツキも吸血鬼？」

「いや、違うな。単なる不老不死だ」

「どうして？」

「いや、『神じん為い的てき』な出来事になっちまった」

「ふーん、『人じん為い的てき』な出来事ね……」

向こうが勘違いするのは勝手だ。

「・・・ねえアカツキ」

「ん？」

「アカツキの能力で吸血鬼から人間に戻したりすることは出来ないの？」

「・・・俺は吸血鬼化の儀式を知らないからな。儀式のことが分からない限り、『吸血鬼化の解除』というピンポイントで能力を使うことになる。が、大体がそんな能力は習得に時間がかかる。それも、数百年単位のな」

「そう・・・」

「だが」

「え？」

「使えるようになったら、必ず戻してやるよ。人間に」

「・・・ありがとう」

あとあの村だが、とりあえず3年に一度ぐらいの頻度でドラゴンの雄叫び（声まね）を聞かせることにした。そうすればこっちに人は来ないだろう。

それからいろいろあった。

俺の料理を食べたエヴァが料理を覚えてくれと言いだしたり。

俺の能力を使えるようにしろ、と言ったり。ま、無理だといったが。

そのことで喧嘩して、1週間程離れて暮らしてたらエヴァが泣きながら戻ってきたり。

村人が旅人を雇ってドラゴン退治を頼んだこともあった。

ま、その旅人は別大陸に転送してやったが。

本当に、いろいろあった。

楽しかった。

この世界には俺を知る人も、俺が知っている人もいない。

そんな中でここまで毎日が楽しくなるなんて思わなかった。

10年後。

とうとうエヴァの修行が終わった。もう十分だと俺が判断した。と同時に、俺はエヴァと別れることにした。

これはエヴァの自立という意味でもある。

「エヴァ」

いつも通りに魔力のコントロールの訓練をしていたエヴァに話しかける。

「何？アカツキ」

「今日でお前の修行は終わりだ」

「え？」

エヴァの魔力が乱れ、あたりに溢れそうになる。エヴァの肩に手を置いて、それを防ぎながら続ける。

「だから、お前との生活も今日までだ」

なんで、とこちらを向いたエヴァの口だけが動く。

「お前はもう一人で生きていける」

「でも」

「それに」

何か言おうとしたエヴァを遮る。

「今のお前は俺に依存している」

この10年間でエヴァの俺への信頼はかなりのものになっている。だからこそ、

「10年前の生活が怖いのは分かる。だが、一度お前は俺から離れ一人で生きるべきだ」

感情を隠し、無表情で続ける。コロゴガ、イタム。が、心が痛めば痛むほど、俺の声は冷たくなっていく。

「今のお前は、一人で生きるのが怖くて、心細くて、俺に縋っているだけだ。違うか？」

「それは・・・」

「だから、だ」

エヴァを抱き寄せる。始めて逢った時の様に。

「一人で、人の中で生きられるようになるんだ。そうしたら、また逢えるさ」

「でも、人の中では私は生きていけない・・・」

「確かに吸血鬼は人に嫌われる存在だが、こちらから歩み寄る姿勢は崩すな。俺みたいな人間がいるかもしれない。『お前自身』を見てくれる人間を大切にしろ。そういう人間は貴重だ。・・・だがな」
肩を掴み、エヴァの目を覗き込んで言う。

「こちらの伸ばした手を払いのけて、襲い掛かってくる奴には容赦は要らない。こちらが生きるために必要だから、抵抗するまでだ」
ただし、と続ける。

「そうして振り払ってきた命を忘れるな。振り払ってきたからには、いつ自分が振り払われる側になってもいいという覚悟を持って」

エヴァが頷く。
そして最後に、と俺は笑って告げる。

「信念を持つんだ、エヴァ。そしてそれを貫き通せ。そうすればお前は一人でも大丈夫だ」

「・・・私はアカツキに依存していた。だけど・・・」

エヴァが俺の目を見た。

エヴァのの目の中には「希望」があった。「強き意志」があった。

「大丈夫そうだな」

エヴァを離して背を向ける。

「アカツキ！私は、あなたが・・・」

振り向いて、止める。

「その続きは、今度逢った時だ」

今度こそ、立ち去る。

エヴァが泣いている気配を感じたが、振り返らなかった。

なぜなら、俺も泣いているから。

「人との別れがこんなにつらいのはいつ以来だろうな・・・」

一人漏らす。

エヴァが告白しようとするのは分かっていた。だが、その感情は本当の恋愛感情ではない。それは俺に安心感を求めているだけだ。故に、俺はそれを言わせるわけにはいかなかった。

これからエヴァはもう一度世界に歩き出す。それはとてもつらく、怖いことだろう。

だが、それでも俺はそうしなければならなかった。

我が名は、
暁。あかつき

暁とは、世界が夜の闇から昼の光へと変わる時。

故に、我は世界の『闇』に惑いし者を『光』へと導く者。

同時に、何時までも『光』と『闇』の狭間に留まる者。

光の中に歩き出す者を見送る者。

暁（後書き）

（解説はパワーだけ！）

『【死】を禁ず』

・暁が領域に付与した指示。
この指示の発動中は、『死ぬ』や『消滅する』ことが出来なくなる。

・その効果は、暁の『力』（魔力、気、妖力etc・・・）を消費して発動し、その『死』を無かった事にする。

・そのため、力が尽きる、もしくは足りなかった場合、強制的に『領域』は解除される。

『まほう
魔砲』

・魔力で作った極大レーザー。

・東方projectの『マスタースパーク』や、リリカルなのはの『スターライトブレイカー』を参考にしたい。

く吸血鬼化解除が出来ないわけ

・ものすつごく簡単に言うと、鍵の形が分らないのに合鍵を作ろうとするようなもの。

・『解除』の概念のみで能力を完成させなければならぬため、膨大な年月が掛かる。

だんだん話が大きくなって・・・

「これからどうするかね・・・」

暁は呟く。

何せ今は原作の600年ほど前である。

「暇つぶしって訳じゃあねえが、魔法世界ってのに行ってみるか」

「なんでこうなるんだよ」

額を押さえつつ、暁はぼやいた。

「おい、てめえ！何処向いてやがる！」

いかにもとといった感じのチャライ金髪あんちゃんが吼える。両脇には取り巻き二人。片方は茶髪で、もう片方は赤毛だ。

ここは、とある町。
魔法使いもいるらしい、と聞いた。
そいつに魔法世界の行き方を聞くために来たのだが。
とりあえず入った宿屋兼酒場で絡まれたのだった。

「まさか酒場で目を付けられるなんてな・・・」

映画かよ、と呟く。

「おい！無視すんじゃねえ！」

仕方なくそつちをむく。

「兄さん方は俺に何の用で？」

「てめえ見ない顔だな。この町に何の用だ？」

まさかこれだけ聞きに来ただけってこともあるまい。

「観光だよ。他になんかあるかい？」

「嘘だな」

あからさまに嘲笑が三人の顔に出る。

「ここら辺に見物になる物なんて無いからな」

なあ、と顔を見合わせて三人は笑った。

周りの人々は戦々恐々、といった有様だ。

「まあ、放浪って言ったほうが正しいが・・・。で？」

「あ？」

「俺に用はそれだけかい？」

「いやなに、余所者にここの礼儀を教えてやろうと思ってな」

俺は何かしただろうかと考えるが、思い当たる物は当然無い。

「俺は何かしたかね？」

「そうだな・・・お前の」

金髪がニヤリと笑った。

「顔が気に食わねえっ！」

顔面にパンチが飛んでくる。

同時に、両脇の二人が男の膝にキックを放った。

誰もが、次の瞬間に男は地に倒れ伏すと思った。

が、

「げっ！」

「ぎゃっ！」

悲鳴を上げ、地に倒れたのは取り巻き二人だった。

暁が、飛んできた足とは逆の足の膝を一瞬で蹴り碎いたのだ。

そして、顔面に飛んできた腕を掴み、捻り上げていた。

「おいおい。いきなり襲ってくるから、つい反撃しちまったじゃねえか」

にこやかな笑顔だが、目は冷たく光っている。

「このっ・・・ぐう！」

「そっちから仕掛けてきたんだ。返り討ちになっても文句は言うなよ？」

そのまま暁は金髪を放す。

「てめえ！」

金髪の顔が怒りで歪む。その勢いのまま金髪が振り返った。その顔に、

「ぐえっ！」

パンチが叩き込まれ、金髪は膝から崩れ落ちた。

「まったく、最近は何騒いでいけねえな」

頭を掻きつつ、男は去っていった。

周りの人々は啞然とした表情で男を見送った。

「しかし、あいつらなんで俺に目を付けたんだか」

そんなことをぼやく。

が、本人は気付いていないが、暁はかなり人目を引く存在感を放っているのだ。

精悍な顔、琥珀色に光る目、180センチ以上の長身。むしろ目に留まらないほうがおかしいのだが。

「なんでかねえ・・・？」

本人は気付いてなかった。

「で、こうなつたと」

周りには数十人の男達。

「てめえこの間はよくも！」

「あー、分かった分かった」

「何!？」

「あんたらは俺に仕返しに来た、それであつてるよな？」

「」「」「」「」「」

全く、暇なことだ。

「もっとやることあるだろ？」

「てめえをぶちのめすまでは何もしたくないね」

「はあ・・・」

数分後立っていたのは、暁とあの金髪だけだった。

「ば、化け物・・・！」

金髪が恐怖のにじんだ顔で言う。
そこに、暁が一步近づく。

「言ったはずだぜ？」

「ひっ」

金髪は後退りする。

「地べたを舐めたい奴だけかかって来いってな」

もう一步、暁は近づく。

「うわあー！」

金髪は背を向けて逃げ出した。

「逃げられるとも思ったのか？」

背を向けた先に、暁が立っていた。

「は？」

「自分の行動に責任って奴を持ってよな」

暁の拳が金髪の鳩尾にめり込んだ。

「コレで仕舞いっと」

その場から暁は立ち去った。

「で、何でそこから立派な魔法使いに狙われることになるわけ？」

「見つけたぞ！多くの人々を傷付けた『琥珀の目の男』！」

「おい、まさかそりゃあ・・・」

「聞いた話では、幻術のような力を使うそうだな！」

「話を・・・」

「来ないならこちらから行くぞ、覚悟！」

「聞けつつってんだろ、オラアッ！！！」

拳が魔法障壁を純粋な腕力だけで『叩き割り』、顔面にめり込む。

「いっしょ」

魔法使いは数十メートル吹き飛んで、そのまま動かなくなった。

「・・・やべえ」

「一発KOかよ。」

「・・・ま、気は感じるし、死んでないだろ」

そのままその場を立ち去った。

あれから、暁は賞金首になった。

人殺しはしていないが、狙ってくる者達全てを叩きのめしていたのであつという間に有名になった。

ただ、旅の最中にある村を救ったりもした。

そのとき、ある吸血鬼を倒した。

そのことを人々はなかなか信用しなかったが、行く先々で暁が面倒事を解決しているのを知ると、皆揃って不思議がった。

なぜ、彼が賞金首なのか。

その事を知ろうとする者もいたが、その情報がない。

故に、暁は狙われ続けるのだった。

そして数十年後。

「二つ名が『光と闇の二面性』アンビバレンツねえ……」

大層な名前になったものだ、と暁は漏らす。

「それにしても、賞金首つてのは面倒だな」

なにせ、有名になればなるほど相手が大人数になってやってくるのだ。

「何回もピンチだったしなあ……」

傭兵1000人斬りの直後に、マギステル・マギ立派な魔法使いに見つかったこともある。

「疲労困憊で满身創痕のあの時は、こいつのおかげで助かったがな」

その手にあるのは『仙豆』。

ただし、暁の自作である。

「しかしこいつを作るのに、一週間分の全部の力が必要なんだよな」

しかも、かなりつらいし、痛い。

文字通り、血と汗と涙と力の結晶である。

「こいつを飲まなきゃいけなかった時は思わず血の涙が出たぜ」
また作らなければいけない辛さを思って、である。
保険として常に一個は作ってあるからだ。

「さて、これからはどうしようか・・・」

逃げ回るのも癪であるが、毎回撃退するのも面倒くさい。

「ま、なるようになるか」

曉は、当てもなく歩き出した。

そして、数百年の月日が流れた。

だんだん話が大きくなって・・・（後書き）

次回はようやく大戦期です・・・

くさあ、イカレた解説の始まりだ！く

『化け物』

・デビルメイクライの『魔人化』の使用など、変身能力を使ったため。

『幻術』

・縮地がそう見えただけ。

『仙豆』

「ドラゴンボール」より

- ・気や怪我などを『死んでない限り』全快させる豆。
- ・更に一粒で数日は食べ物が必要なくなる。

V S ・ 紅き翼

（ Nagi Side ）

俺は、ナギ・スプリングフィールド。

俺は戦っていた。

周りには頼りになる仲間がいた。

たとえ、どんな奴らが来ようと大丈夫だと思っていた。

最近、ラカンが入ったからなおさらだ。

しかし、「そいつ」は俺達とは桁が違った。

「そいつ」は、規格外だった。

目の前には一万を超える敵。

「よっしゃ！お前ら行くぜ！」

そういつて俺はいつも通り敵に突っ込んでいく。

いつもなら、その後魔法で吹き飛ばす。

だが、今日は違った。

「どきな、若造」

魔力を感じ、とっさに横に跳んだ。

次の瞬間、さつき俺がいた場所を超密度の魔力が貫く。
それが敵陣に着弾した。

爆発、いやむしろ消失。

敵陣で魔力は破裂し、一瞬で周りの地形ごと敵を全て消し飛ばした。

「誰だ！」

詠春が振り返りつつ尋ねる。

そこには、男がいた。

黒く、あちこちに撥ねた髪。

琥珀色に輝く目。

そして何より、その体は龍の鱗のような物で出来た鎧に覆われていた。

膨大な魔力を感じる。

男が口を開く。

「俺か？俺は、暁」

こいつが、あの・・・

「『カオス・エンペラー混沌の帝王』ですか・・・」

アルが呟く。

「何だ？俺はそんな風に呼ばれてんのか？」

どこのカードだよ、と呟いている。・・・カード？

「その姿は何だ？」

ラカンがたずねると、男が光に包まれた。

俺達はとっさに身構えたが、男が人間の姿に戻っただけだった。

「これが。これは一種の変身能力だな」

「で、あなたはここで何をしているんです？」

アルが尋ねる。

「とある組織に喧嘩を売られてな？買ってやったところだ」

「喧嘩を売られた？」

お師匠が怪訝そうに聞いた。

「ああ。『仲間になれ、さもなければ殺す』ってな」

それは喧嘩を売られたって言うのか・・・？
・・・ん？いい事思いついたぜ！

「なあ、あんた」

「あん？」

「俺達の仲間にならねえか？」

仲間みんなから「何コイツ」見たいな目で見られた。

＼Akatsuki Side＼

「俺達の仲間にならねえか？」

ナギがそんなことを言って来た。

ふむ、確かに『紅き翼』にいれば何かと便利かもしれないが・・・

「断るぜ」

「何でだよ！」

「そうですね、利害は一致しているはずですが？」

えーと、アルビレオ・・・だっけ？が言う。
さっきナギに「コイツ何言ってるんだ」的な視線を向けといてよく言うぜ。

「俺は一人が好きでね」

「そうかい・・・」

ナギから不穏な気配がし始める。

「ただし」

付け加える。

「俺に勝てたら仲間になってやってもいいぜ？」

待ってましたとばかりにラカンの顔が輝く。

コイツさっきからうずうずしてたからな。

「俺は一対一でも、一対多でもいいが？」

「一対一だ！まずは、詠春いけ！」

急に指名されうろたえる詠春。

「なんでいつもいつも・・・」

いつもこんな扱いなのか・・・

「神鳴流剣士、近衛詠春。参る！」

「来い！」

Other Side

「斬空閃！」

飛んできた衝撃波に、暁は剣を作り、技を放った。

「蒼破刃！」

斬空閃は蒼破刃で掻き消される。

そのまま暁は間合いを詰め、

「爪竜連牙斬！」

連撃を放つ。

「くう！」

読春は辛うじてかわし、そのまま刀を突き出す。

「はっ！」

「遅い！」

右足を下げ、半身で暁はかわす。

ここに追撃を、と読春は思ったが、暁は半身からさらに回転を続ける。

「飛天御剣流、」

暁は右足を踏み込んだ。丁度、背を刀に向けた形になる。だが、さらに暁は回転し、

「龍巻閃！」

読春の首筋に刀を叩き込んだ。

「甘い。突きならば『牙突』を超える技を出せ」

「次は俺だ！」

上空から降ってきた声に暁は空を見上げる。

「おらぁ！」

ラカンは空中から大剣を振り下ろしてきた。
その大剣を、暁は左手の『逆刃刀を造り直した』封炎剣で受け流す。
そのまま右手に炎を宿し、

「タイラン、」

がら空きの胴体に右手をめぐませ、

「レイブ!!!」

同じように炎を宿した左のストレートで、殴り飛ばした。

「隙だらけだ。次は最初から全力で来い」

暁は振り返りながら、

「魔砲『ファイナルスパーク』！」
「何!?!」

魔法を唱えていたゼクトに向かって超極大レーザーを放つ。

「くっ、クラティステイ・アイギス最強防護!」

ゼクトに強制的にガードさせる。そして、

「見えたツ! 武装錬金! 形態、フォーム『サンライトハート・改』!」

見切った「死の線」を突撃槍で、ランス

「貫け! 俺の武装錬金!」

斬り裂いた。

ただ、ゼクトには槍の穂先は当てず、すれ違いざまに鳩尾へ一撃食らわせた。

「俺は、先に進まなきゃいけないんだ」

「次は私ですね」

「うお！」

暁が止まったところに重力魔法が飛んできた。
横方向の重力に吹き飛ばされ、次いで縦に落とされる。

「なかなか、これは、反則臭いな！」

吹き飛ばされながら暁は叫ぶ。

この状況では、暁はただ振り回されるだけだ。

「あなたに言われたくありませんね」

「ま、そりゃ、そうか！」

だから、と暁は付け加える。

「お前の負けだ！」

「何ですって？」

暁の体から何か人型のものが出てくる。
それが何かアルビレオが知る間もなく、

「『スタープラチナ・ザ・ワールド』
星の白金の世界』 ツ！！！」

世界は凍った。

止まった世界で、暁はアルビレオにスタンドを近づかせ、

『オラアッ!』

鳩尾を殴らせた。

そしてそのまま、スタンドを消して世界の再始動を告げる。

「そして時は動き出す」

「が!」

アルビレオは吹き飛んだ。

「やれやれだぜ」

「さて、次は貴様だ」

「流石、と言っておこうか？」

ナギがニヤリと笑って言う。

「それはこちらの台詞だな」

暁も笑っている。

「なあ、『サウザンド・マスター千の呪文の男』」

「何だ、『カオス・エンペラー混沌の帝王』」

暁が提案する。

「術で勝負しようじゃないか」

「いいぜ。だが、あとで吠え面かくなよ？」

言い終わると同時に、ナギが詠唱を始める。
暁も詠唱を始める。

「ヘカトンタキス・カイキーリアリス・アストラブサトー
百重千重と重なりて走れよ稲妻」

先に唱え終えたのは、ナギ。

キリアキブル・アストラペー
「千の雷！」

雷が、暁を包む。

ウエニアントアエビワトウタムムフ加ガヒモヲササキ主・テンベスタヤウストリーチアキヨウタイス・フルグリエンス
「来たれ雷精、風の精、雷を纏いて吹けよ南洋の嵐」

だが、ナギの攻撃はそれでは終わらない。

ヨウイス・テンベスタース・フルグリエンス
「雷の暴風！」

雷が、荒れ狂う。空間を喰らい、暴れる。
閃光が、辺りを覆った。

暁がいた場所は、もうもうと粉塵が漂っていた。

「おい、死んでねえだろうなー？」

呼びかけたその時、ナギは聞いた。

「天光満つる所に我は在り」

砂煙の向こうから、声が聞こえてくるのを。

「黄泉の門開く所に汝在り」

砂煙が晴れたところには、無傷の暁^{アイツ}。

「出でよ、神の雷」

この時、ナギは理解した。

「これで終わりだ。インディグネイション」

コイツは俺達とは経験も、能力も、桁が違つと。

VS・紅き翼（後書き）

ルビ振りが大変だった・・・

（また、解説でござるな）

『カオス・エンペラー
混沌の帝王』

・『アンビバレンツ
光と闇の二面性』と同じ理由。

『そうはじん
蒼破刃』 『そうりゅうれんがざん
爪竜連牙斬』

「テイルズオブシリーズ」より

・蒼破刃は剣を振りぬいて繰り出す真空波。性能はTODのスタン
のもの。

・爪竜連牙斬は移動しながら繰り出す連斬。性能はTOEのレイス
のもの。

『ひてんみつるぎりゅう
飛天御剣流』 『りゅうかんせん
龍巻閃』

「るるるに剣心」「より

・飛天御剣流は、戦国時代に端を発する古流剣術。
あらゆる『速さ』を使い、敵を倒す様が天を飛ぶようなのでこの
名がついたらしい。

・龍巻閃は飛天御剣流の技。体を回転させて繰り出す。
突きに対してはかなりの脅威となりえる。

『がとつ牙突』

「るろつに剣心」より

・新撰組参番隊長、斎藤一の「架空の」技で、新撰組の「片手平
突き」を昇華させた技。

・通常の「壱式」、上から突き下ろす「弐式」、対空迎撃用の「参
式」、そして奥の手として上半身のバネのみで繰り出す「零式」が
ある。

『タイランレイブ』

「ギルティギアシリーズ」より。

・暁が放ったのは、Ver.。右のアップーの後、左のストレ
ートで殴り飛ばす。

・封炎剣は炎を呼び出す際の補助に使用。

『魔砲「ファイナルスパーク」』

「東方project」より

・霧雨魔理沙のスペルカード。極太の魔力レーザー。

・魔理沙はミニ八卦炉はっけろによるサポートでこれを放っているが、暁は自身の魔力のみで同等の威力を出している。

『武装錬金』 『サンライトハート・改』

「武装錬金」より

・武装錬金は、錬金術の粹を集めて生成された超常の合金『核鉄』かくがねが、人間の闘争本能によって作動し、それを形にした唯一無二の武器。

・また、核鉄は生存本能に働きかけ、治癒力を高める効果もある。

・武装錬金は己の闘争心を形にしたものなので、通常、他人の武装錬金を発動することは出来ない。

・が、暁は『あらゆる武装の武装錬金』（名称未定）を持つので、

規格外。

『スタープラチナ
星の白金』

「ジョジョの奇妙な冒険」より

・空条承太郎のスタンド。

・最強のパワー、弾丸を掴み取るスピードと精密動作性、更にD I Oとの戦いで目覚めた『時間停止能力』を持つ。

・そのため『無敵のスタープラチナ』と呼ばれる。

・『スタープラチナ・ザ・ワールド
星の白金の世界』は、『時間停止能力』に目覚めたスタープラチナ、あるいはその時間停止の技名。

『インディグネーション』

「テイルズオブシリーズ」より

・天から雷を落とす術。

・この詠唱はファンタジアのゲーム開始時のダオス戦や、エターニアのゼクンドウス戦、ジアビスの秘奥儀などのインディグネーションの詠唱より。

戦いが終わってから・・・

（Naggi Side）

目が覚めたら見えたのは、青い空だった。

「・・・あーあ、負けたのか」

「おう、起きたか」

声に驚いて跳ね起きると、そこには・・・

幸せそうな顔で料理を食べている仲間達と、
エプロンを付けて料理をしている暁がいた。

「・・・」

「怪我は治しといてやったぞ」

「ああ・・・」

「食つか？」

目の前に差し出されたのは、チャーハン。

「ああ」

とりあえず一口食ってみた。

「うめえ！」

「だろ？」

自慢げに暁が言う。

「おかわり！」

おかわりだと？

「おい、ラカン！俺の分はあるんだろうな！」

「知るかよ、そんなこと！」

「マジかよ！」

急いでチャーハンをかきこむ。

「しかし、何故これほど料理が上手いのですか？」

アルが尋ねる。

「まあ、なんというか、一人でやってるうちに自然と？」

「何で疑問系なんだ……」

気にしたら負けだぜ、詠春。

何がかは知らないがな。

「おかわり！」

「ラカン！てめえ、速すぎだろ！」

よく見たら、アルもお師匠も自分の分は確保してやがる。

「まだまだあるからな、いっぱい食っていいぞ！」

おお、助かった。

（Akatsuki Side）

「で、なんで飯を暁が作ってるんだ？」

満腹になったナギが尋ねてきた。

ちなみにラカンは寝ている。

「暁が仲間になったからですよ」

俺より先に、アルが答えた。

「は？俺達が勝ったらじゃなかったのか？」

「まあ、仲間というより、同盟じゃな」

「大きな戦いには手を貸してやる。それ以外は自由に動かせてもらう、だそうだ」

ゼクトと詠春が説明する。

「自分勝手すぎねえ？」

「あなたには言われたくないと思いますよ」

ナギが無然とする。ナイス、アル。

「で、最近なんか大きな戦いはありそうなのか？」

「いえ、今はまだ何とも・・・」

ま、当然か。

「じゃ、俺はこれで」

「ちよつと待った、どうやっておぬしと連絡を取る？」

「大声で空に向かって叫ぶ・・・とか？」

「・・・」

なんだよ、冗談じゃんか。

「頭の中で呼びかける。それで十分だ。」

「便利だな」

「ああ、そういえば」

「ん？」

「あなたはどんなことが出来るんです？詳しく知りたいのですが」

まあ、味方の能力把握は大事だな。

「何でも」

「は？」

「だから、何でも出来る」

「・・・あなたもバグキャラでしたか」

「失敬な。俺は努力で今の力を得たんだぜ？」

「・・・何年ぐらい修行したんだ？」

えーとあの時と、あの時と・・・ああ、精神と時の部屋もどきを『領域』の力で造り上げたこともあったな。

「・・・1500年ぐらいじゃねえか？」

「・・・」

詠春！。口閉じろー。

「つー訳だ。ナギ、才能は努力してこそそのものなんだぜ？いつまでもあんちよこ見て、おまけに魔力の練りは雑。だからお前は俺に勝てなかつたんだよ」

死の線が見えやすかつたのなんのって。

「・・・努力すれば、お前に届くのか？」

「まあ、時間が圧倒的に足りないが、かなり強くなれるだろうな。

俺の五分の一ぐらい」

「・・・それは強いのか？」

「そうだな、今のお前10人分ぐらいじゃねえ？」

「・・・」

詠春！。ゼクトー。目がヤバイぞー！。

「んじやな。しっかり修行しとけよ」

そのまま俺はこの場を後にした。

その後、グレートブリッジ奪還作戦に、俺は参加した。

最初はちまちま敵を吹っ飛ばしてたんだが、面倒臭くなったんで『領域』使って『敵だけ上空に吹き飛ばし、味方を地に下ろす』という『指示』を与えた。その直後に空中に結界張って『弾幕結界』発動。最後の一撃は全方位からのジェノサイドブレイバー。跡形無くきれいさっぱり吹き飛んだ。

その戦いで俺は称号がついた。マスター・オブ・アビリティ「万能の支配者」やら、「ジェノサイド大虐殺」やら、「人外」やら……。そんな称号もらってもなあ……。ファンクラブも出来たらしい。おい、俺って賞金首じゃなかったっけ？

「最近はまだ国が意地になって、逃げ続けるあなたに賞金を懸けているだけですからね。意外と人気だったんですよ？あなた。強くて美形、どこからともなく現れて民を救う琥珀色の目の男ってね」

アル、心を読むんじゃないやねえ。
あと、しばらくしてガトウとタカミチが仲間になった。

が、

ガトウと戦うことになった。

「・・・ひでえ冗談だ」

何で皆でガトウを煽るんだよ。

・・・まあ、『咸卦法つて意外と簡単だし、大した事ないんだよな』
とか言った俺も悪いが。

「行くぞ！」

こっちに向かってくるガトウ。
しかたねえ。一瞬で終わらせる。

「『スターフラチナ星の白金』ッ！」

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ
オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ
オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ
オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ
オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ
オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ
オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ
オラオラオラオラアッ！！！」

「ぐうっ！？」

スタープラチナにガトウの動きを封じさせ、俺自身はガトウの体に手を添える。

「咸卦法は、気と魔力を融合させる技だよな」

「なにっ!？」

「そのバランスが崩れたら・・・どうなるかな？」

「しまっ・・・」

「遅い。狂え、マジック・バースト魔力暴走」

俺の魔力をガトウに流し込む。それがもたらすのは咸卦法の強制解除。そして、

「ぐああああああああっ！」

魔力の行使中に他人の魔力が強引に流れこんで来る激痛。体の内も外も等しく痛いんだ、これは。ガトウが気絶したのを確かめてから魔力を流し込むのを止める。

「ま、これから頑張るんだな」

それからしばらくして。ガトウに呼び出しを食らったので何かと思
つてきてみれば。

アリカ姫と会った。・・・誰だっけか、そりゃ？と、この世界に来
たばかりの俺なら思っただろうが、伊達に数百年も過ごしてねえよ。
俺の日課は新聞を読むことと、鍛錬することだぜ？

「どうも、お目にかかれて光栄だ」

とりあえず、挨拶すると。

「気安く話しかけるな」

おおこわいこわい。

「・・・馬鹿にしているのか？」

「ありゃ、口に出てたか？」

「貴様・・・」

「そうカリカリすんなって。俺はあんたがたに協力するつもりで来
ているんだぜ？」

「む・・・」

「それにだ、せつかく綺麗な顔してるんだ。怒ってたら損だぞ」

ぶん殴られた。痛え。

とりあえず、『紅き翼』は内偵をすることになった。
俺は、特に何もしなかった。

ナギと一緒にアリカに連れ回されたせいでもある。

まあ、俺は能力目当てっぽかったがな。主に荷物運び。

しっかし、この姫さん理不尽だなあ、オイ。

一日に5回以上ブツ叩かれそうになったぜ。

俺は時止めで逃げているが、ナギは直撃を食らっている。痛いんだ
よな、あれ。

ああそうだ、その最中に敵に襲われたこともあったな。

まあ、メンドかったからアリカはナギ任せにして敵を『滅びの爆裂^{バース}
疾風弾^{トストリーム}』で吹き飛ばした。

何？せつかくのフラグを？知るか。あれはあの二人がお似合いだよ。
俺は友人でいい。姫さんと付き合うのは大変だからな。

なんやかんやでお尋ね者になった。

俺はその場にいなかったし、

「ま、元通りになったただけだしな」

「のほほんと言ってる場合ですかっ!」

周りから敵が迫ってくる。

「仕方ねえなあ。みんな、俺につかまれ」

よし、全員いるな。

「何をするんじゃ？」

「こつだよ！」

造った神竜王ドラグーンスピリットが輝き、俺は竜の鎧に包まれる。

「それは、会ったときの!？」

「しっかり掴まってるよ！」

タカミチを片手に抱え、周りに仲間を引っ付かせて俺は飛び上がる。

「(極弱) 神竜弾！」

肩から撃ち出される魔力が追っ手を落としていく。

殺しちゃうくないぞ？気絶だ。落ちた後は知らん。当方はアフターケアは行っておりません。

さて、離脱だ。

「全速前進DA！」

「ちよつ、速すぎ！」

「WRYYYYYYYYYYYYY！」

「聞こえてませんね・・・」

久しぶりに全力で飛んですつきりしたぜ。

その後、いろいろあったが「夜の迷宮」ノクティス・ラビリンントゥスからアリカ姫を救出した。相変わらず敵無しだな、こいつら。そういつたら、

「一人で半数片付けたあなたに言われたくないな・・・」

詠春、ため息つくとき幸せも逃げるし老けるぞ。

で、隠れ家（俺のじゃないぞ？あくまで「紅き翼」アラルフラのだ）に戻ってきたんだが。

「掘っ立て小屋ではないか！」

「掘っ立て小屋って言うな。俺が見つけてきてやったんだぞ。しかも、外はボロいが中は綺麗という隠れ家にぴったりの場所じゃねえか。しかもその改装費用は俺が負担したんだ」

思わず失礼なことを言ったテオドラに反論してしまった。

「何だ貴様、無礼であろう！」

「助けてもらった相手の家を悪く言う相手に払う礼儀なんぞ、持ちやないねえな」

「何？貴様、何者だ！」

「・・・曉だ」

「貴様がああ『大虐殺』ジェノサイドじゃと!?!」

その称号で呼ぶな。

「嘘をつけ！貴様みたいな青年が・・・」

おい、コイツ知らないのか？

「あゝ、俺は不老不死だぞ」

「・・・」

「で、何か言うことは？」

笑顔で言う。ただし殺気全開で。

「・・・すまんかった」

おおっ、ガクガク震えてるぜ。

流石にかわいそうになった。抱えあげて肩の上に乗せる。

「こつちこそ悪かったな、殺気なんか放つたりして」

「・・・ふん。そう思ったらお前の・・・」

「おいおい、俺には暁って名前があるんだが？」

「・・・暁の話聞きか」

「聞かせるってか？いいぜ。何が聞きたい？」

「むきー！先取りするでないわー！」

「ははは」

「笑うなー！」

まるでエヴァだな。あいつもからかうと楽しかった。

俺らがそうしている間にナギはアリカ姫となんか誓いを交わしていた。

戦いが終わってから・・・（後書き）

（解説だと？軟弱者が！）

『ジエノサイドブレイバー』

「テイルズオブシリーズ」より

・バルバトス・ゲーティアが、手に持った巨大な斧から放つ巨大ビーム。

・テイルズには場違いな威力と範囲でファンを震撼させた。なんと画面端まで届く。

・作者と友人達との間での通称は「理不尽ビーム」。
理由は、TOD2ではガードしても死ぬ、TODではガード不能、二段ジャンプ＋上昇技を使わないとかかわせないから。

『滅びの爆裂疾風弾』
バーストストリーム

「遊戯王」より

・青眼の白龍の必殺技。
ブルーアイズ・ホワイトドラゴン
口から放つ巨大ビーム。

『じんりゅうおう神竜王ドラグーン』 『じんりゅうだん神竜弾』
「レジェンドオブドラグーン」より

・あるランク以上のドラゴンが死ぬとき、その眼の中に魂と魔力が凝縮され宝石のようなものになる。
これがドラグーンスピリットである。

・ドラグーンスピリットに選ばれたものは、ドラグーンと呼ばれるものに変身できる。

・神竜弾は神竜王ドラグーンが使えるドラグーン魔法。
肩にある射出口から魔力の弾丸を撃ち出し、敵を爆殺する。

最終決戦

〔 Akatsuki Side 〕

あれからナギたちはいろいろ潰して回った。
俺はその内一割ぐらいを潰した。一人で。
というか皆が一人で行けて・・・。

「おぬしの攻撃に巻き込まれたら死ぬるからな」

くそ・・・楽しやがって・・・。

まあ、一割しか潰してないのは・・・

「暁ー！今日も話を聞かせるのじゃー！」

第三皇女コイツのおかげだな。
楽でいいいな。

「ようし、今日は何にするか」

「この間、昔古龍を倒したと噂に聞いたのじゃが・・・」

「ああ、あの時か。あれは、意外と強かったぜ。戦ったら・・・」

そんな感じで日々は過ぎていった。

それから色々あったがようやく、ラストダンジョン最終戦場だ。
風が吹いている。

空中に浮かぶ巨大な宮殿。

その全容が見える位置に俺は立っていた。

「……」

とうとう、ここまで来たか……。

「何をしてるんだ？」

「……ナギか」

「まさか、弱気になったわけじゃねえよな？お前が」

「当たり前だ」

「だったら何でぼんやりしてるんだよ」

「……いや、長かったと思っただけ」

「お前が生きてきた年月に比べればたいしたことねえだろ？」

「いや、充実していた、ということだ」

「そうか」

そうやって二人並んでみると。

「あの……」

「ん？」

「あ、セラスじゃねえか」

ああ、さっき向こうにいた奴か。

「ハッ！・・・その」

ははあ、これは・・・

「サインか？」

「な、何故それを!？」

「さっきナギにもらってたろ？」

「お前、見てたのか？」

「いや、聞いてた」

「あ、あの、ご返事は・・・」

「別にいいぜ。・・・ほら」

「あ、ありがとうございます!」

「ああ、そうだ」

「はっ？」

「おまじないもサービスとしてやる」

セラスの手を掴み、引き寄せる。

「な、なにを」

額に、キスした。

「!？」

別に変な意味じゃない。

「特製のまじないだ。自己流だが、かなり効果はあるはずだぜ?あ

んただけじゃなく、その周りにもな」

なにせ、運命すら捻じ曲げる幸運がついてるからな。

「ありがとうございます……」

ふらふらと去っていった。……もしかして作戦に支障が出るか？

「ナギ」

「なんだよ」

「お前らとの日々は楽しかったぜ」

「なんだ、いきなり？」

「……なんでだろうな」

俺にもよく分からん。

「じゃあ、予定通りに行くぜ！」

「ああ、俺は外をやる。終わったらすぐ行く。それまで持たせろ、ナギ」

「へっ、お前が来る前に片付いてるさ」

「はっ、威勢がいい事で」

「油断してやられんなよ、ラカン」

「てめえこそな」

「油断なんかするかよ」

俺は油断したこと無いぞ。たとえあらゆる力が使えても、こっちは一人なんだ。油断なんかしてたら、俺はここにいなえよ。

「まあ、バグキャラのあなたなら大丈夫でしょう」

「ちょっとは心配してくれてもいいだろ、アル」

せめて一声……

「どこを心配する必要がある？」

もういいよ、ちくしょう。

「ゼクト、死ぬなよ」

「おぬしもな」

やっぱ普通こうだよな、最終決戦前の会話は。

「何か？」

アル、心を読むなって。

「詠春」

「なんだ？」

「その刀、ちよつと貸せ」

「あ、ああ」

こつちをこつして、こつをこつ組み替えて・・・

「ほら、夕凧・改だ」

「どう変わったんだ？」

「切れ味と強度と、気の伝導率かな」

「・・・ありがとう」

「気にするなよ。仲間だろ？」

「ああ・・・！」

「生きて帰れよ」

「もちろんだ！」

さて、あいつらも行ったことだし・・・

「セラス、敵を宮殿の中と『敷地の外』に逃がさないようにしてくれ」

念話でセラスに話しかける。
セラスしか知らないからな。

「外・・・ですか？」

「ああ」

ここで、全てに終止符を打つ！

準備が出来たのを確認し、力を解放する。

「おおおおおおおー！」

俺の髪と瞳の色が変わる。
紅に輝く髪、そして瞳。

「俺の『奥の手』を見せてやる」

手を前にかざす。

「範囲、『墓守り人の宮殿の中をのぞいた敷地内』」

淡い虹色の光が宮殿の周りを包む。
俺の髪と瞳の色が蒼くなる。

「対象、『宮殿の外に在るモノ』」

今度はそこにある存在全てが光に包まれる。
今度は、碧。

「命を発す！【我に仇なすモノ】の【存在】を【禁】ず！」

髪と瞳が黄金に輝いた。

とたんにすさまじい重圧が俺にかかる。

これが奥の手なのは『存在を消す際の反動』が『俺一人』に『全て』
かかるからだ。

大量の存在を消すために、かつてない反動が俺に一気に押し寄せる。
いわば世界に生じた歪みが俺だけの体にフィードバックする。

「負けるか……」

かざした手から血が噴き出す。

「負けて、たまるか……」

人の、そして世界の運命を、少数の奴らが決めようというのが気に入らない。

「絶対に……勝つ……！」

頭が割れそうに痛い。

「絶……対に……守……る……！」

思い出すのは、この世界で今まで会ってきた人々の笑顔。そのとき、俺が感じた気持ち。

「ぐっ……！」

右膝の関節が砕けた。

「まだだ……」

まだ、消し去るには足りない。

「まだだ・・・」

まだ、勝つには足りない。

「まだ、だ・・・！」

まだ・・・守るには足りない！

全身を引き裂かれたように血が噴き出す。
全身を潰されたかのように骨が砕ける。

「負ける・・・ものかあああ！」

そして、光が全てを飲み込んだ。

「ハア、ハア、ハア・・・」

あたりにはもう敵はいない。

「セ、セラ・・・ス・・・来てくれ・・・」

念話でセラスを呼ぶ。

「な、何でしょうか！」

少しして、セラスが来た。

「これを・・・俺に・・・」

目で、地面に転がったエリクシールを指す。

今の俺は指一本動かせない。嘔むことすら出来ない。

だから、こんなこともあるつかと仙豆よりこっちを選んだ。

「飲ませて、くれ・・・」

「は、ハッ」

口の中に液体が入ってくる。

全身全霊でそれを飲み込む。

「・・・よし」

回復したのを確認して、立ち上がる。

「行ってくる」

ナギたちが待っている。

「・・・お気をつけて」

「ああ。助かったぜ、セラス」

そういつて、俺は宮殿へと急いだ。

俺が到着したのは、丁度ナギが敵のリーダーらしき奴の首を掴んでいたところだった。

「俺は要らなかったかな・・・」

そう呟いた次の瞬間、ナギは撃ち抜かれた。

「ナギッ！」

叫んだ途端、膨大な力を感じた。

「いかん！最強防護！」
クラテイスター・アイギス

「くそ！【あらゆる攻撃】の【通過】を【禁】ず！」

ゼクトと二人で障壁を張ったが、一瞬で砕かれそうになる。

（馬鹿な、『領域』ごと吹きとばすだと！？）

防ぎきれないと判断した俺はとっさに結界を張る。

「『魅力的な四重結界』！」

ライフメーカー
敵の攻撃が俺の結界に吸い寄せられる。

「うおおおおお！」

そのまま俺が張った境界は割られ、俺は攻撃の直撃を受けた。体が欠けていくのが分かる。意識が遠のく。

でも俺は、皆と共に戦わねえと・・・

あの誓いを守りてえんだ・・・

絶対に守るって・・・

戦わねえと・・・

守るんだ・・・

戦う・・・

守・・・

Other Side

「暁！」

アルが暁を呼ぶ。

暁が張った結界で紅き翼の面々にダメージはほとんどなかった。だが、その分暁は……

「これ、は……」

視界が晴れ、見えた暁は、

下半身は消し飛び、右腕もなかった。心臓も撃ち抜かれ、左顔面はえぐられて脳がはみ出していた。

「いくら不老不死とはいえ、これではしばらく行動できんじやろっ……」

ゼクトが呟く。

「……行くぜ、お前ら」

そんな中、ナギは歩き出した。

「ナギ!?!」

「ナギ、ありゃあ駄目だ!」

「死にますよ!?!」

仲間が止めようとする。

それに反論しようとナギは振り返り、止まった。

「……暁……?」

「武装錬金、フォーム形態、クロススレアー十字槍・激戦プラス投影」

そこには、暁がいた。

傷もなく、服も元通りになっている。

ただ、ナギは感じていた。

(こいつはいつもの暁じゃねえ!)

ナギは叫んだ。

「暁!」

「ナギ」

ぞっとするような声だった。

「それに、他の奴らも」

肌が粟立つ。

「ここから去れ」

「どうしてです!」

「そうだぜ!ここまで来て・・・」

アルとラカンが食って掛かる。

駄目だ、今の暁に逆らうなといたいだが、ナギは声が出ない。
いや、出せないのだ。

「邪魔なんだよ」

「なんだと!？」

詠春が目を見開く。

「今のは聞き捨てならんぞ」

ゼクトも険しい顔だ。

が、暁は気にした風もなく続ける。

「お前らは邪魔なんだ」

そして、顔に酷薄な笑みを浮かべて告げた。

「全力を出して、あいつを『殺す』にはな

ようやく、皆が理解した。

普段、暁は『殺す』という言葉を口にすることはない。

敵になれば、容赦はせず平然と殺すが、『殺す』という単語を言うことはなかった。

暁は面倒臭そうに、誰もいない空間に向かって呼びかけた。

「いるんだろ？造物主ライフメーカーさんよ」

途端、黒いローブを纏った人物が現れる。

「さっきの攻撃を『読んで』あんたらの目的は分かった」

「・・・何故我らの邪魔をする」

「そうだな、強いて言えば・・・」

暁はニヤリと笑って言う。

「お前の一存で世界の命運が決まるのが気に入らねえ」

「・・・いずれ全てのものが絶望に包まれるというのにか」

「そうかも知れねえな。だが、それはこの世界の人々全てが歩んできた結果だ」

「その存在すべてが幻でもか」

「ああ、だがコイツらは『今ここに存在する』。幻でも何でも、現にこうして『生きている』」

暁の雰囲気が変わった。

「偽者でも、化け物でも、そんなのは関係ねえ」

「こうして存在が幻だっただけ関係ねえ」

暁の脳裏には何が浮かんでいるのか。

まるで、同じようなことを経験したことがあるように……

「人の歩んだ結果が それこの世界の崩壊 なら、別に構わねえ」

かつて自分が偽者だといわれたかのように……

「だが、この世界の運命を決めるのは、お前じゃねえ。ましてや、俺でもねえ」

そしてそれに歯向かった事があるかのように……

「この人間、いや、この世界にいる全てのモノが決めるんだ」

そして、

「大体、世界を無に帰すという事は、それまで『生きてきた』人々全てのことを否定するってことだ」

「俺は認めねえ」

「例え幻であつてもな……」

「こんなに必死で『生きている』奴等を消そうだなんて、認めねえ」

暁は造物主を睨みながら言う。
ライフメーカー

「だから、この世界の奴らのために……お前を殺す」

言い終わると同時に造物主ライフメーカーから攻撃が飛んできた。
イマジンブレイカー
暁は幻想殺しイマジンブレイカーでそれをかき消す。

腕に抱くは、全ての力。

次は両横から飛んでくる。
剣を投影し、「死の線」を切る。

頭に宿すは、全ての記憶。

後ろから飛んできたものは滅・波動拳で相殺した。
雨あられと降ってくる魔力は『エムゼロ・シールド』で突っ切る。

心に抱くは、全ての希望。

ライフメーカー
造物主に向かって駆けていく。

「一体なんなのだ、貴様は……」

驚愕を隠し切れない造物主ライフメーカーに向かって告げる。

「俺は、規格外さ」

「切り札、その2だ！」

腕を掲げる。

「『リミット・ブレイク
制限解除』」

途端に暁の『力』が十倍、いやそれ以上に跳ね上がる。

「右手に『気と魔力』を、左手に『妖力と霊力』を」

精神の力と肉体の力。妖怪の力と人間の力。相反する力が暁の両腕で渦巻く。

「右手に『神力』、左手に『魔力』」

この魔力は『魔法の力』ではない。『悪魔の力』だ。

「『融合』」

まるで爆発でも起きたかのように辺りが『消し飛ぶ』。

「ま、これこそ真の究極技法アルテマアートつてもんだと思うぜ」

ライフメーカー造物主から再び攻撃が飛んでくる。

先ほどまでは『領域』を使っても防げなかった攻撃を、暁は

「ふっ」

軽く手を払うことで掻き消した。

「おおおう、驚きすぎて声も出ねえってか？」

「……………」

「さて、いい加減そろそろ締めにしようぜ」

先ほどの倍ほどもある攻撃が飛んできた。

そして暁は……………

「……………!!!」

「終わった、か……………」

誰もいなくなつた宮殿で、暁は一人呟いた。

「黄昏の姫御子も、外に転移させたし」

僅かな気配から探し出し、結界を強制解除して転移させたのだ。

「ま、後は後の世代に託すか？いや・・・また俺が出てくるのもい
いかもな」

さて、と暁は言う。

「後は、この儀式か」

既に、魔力減衰現象はどんどん拡大している。

だが、

「さあて、最後の大事な事だ」

いつもと変わらない様子で暁は言った。

「『領域』、展開！」

最終決戦（後書き）

ライフメーカー倒しちゃいました。
ま、いいですね。

最後、ライフメーカーに何をしたか。それはまあ、後でわかります。
……多分。

「俺は俺のより良い解説に会いに行く！」

『エリクシール』

・いろんな話に出てくる不老不死の靈藥。

『魅力的な四重結界』

「東方project」より

・「東方萃夢想」の八雲紫のスペルカード。

・発動すると、目の前に結界を張り、それに敵を吸い寄せせる。

・この話では、敵の攻撃を集中させる効果を暁が付与した。

『武装錬金』ゲキセン「激戦」』

「武装錬金」より

・錬金戦団、イクサベ戦部 ゲンジ 敵至が創造するクロスシアー十字槍の武装錬金。

・特性は、創造者の高速自動修復。（武装本体も含め）
たとえ跡形すらなくなっても再生する。

・ただし、身に着けているものは直らない。

『投影』

「fate/stay night」より

・衛宮士郎、アーチャーの魔術。

・便利なので、暁はこの能力をかなり極めている。（変装など）

・吹き飛んだ服はこれで再生（と言うより作り直）した。

『読んで』

・あらゆるモノの「情報」を「読んで」理解する。攻撃を讀んで、それを放った敵のことを理解することも可能。

・暁が『死』の世界で手に入れ、修行して覚醒した能力。

・暁は、いつもは「プライバシー？何それ、おいしいの？」などの能力を封印している。

『イマジンプレイカー
幻想殺し』

「とある魔術の禁書目録」インデックスより

・触れさえすれば、あらゆる異能・超能力を打ち消す能力。

・暁は幻想殺し『もどき』を使う。

・原作では右手に宿っているが、暁はどこにでも付与可能。（ただし、負担増）

・高密度の力などは消すのに時間が掛かるが、暁は能力を高密度に
して対応した。

・暁の能力自体が消えてしまいそうだが、実際は『もどき』であるため無問題。

というか、一度それで失敗したため、アレンジしたのがこの能力である。

『滅・波動拳』

「ストリートファイターシリーズ」より

・殺意の波動に目覚めたリュウが使う技。

・暁はフルチャ・ジヴェルを使用。

・殺意の波動をこめた波動拳。溜めれば溜めるほど反動も大きくなる。

・修行で、暁は殺意の波動を少しではあるがコントロール可能になった。

ただ、修行中は周りが大変なことになった。

『エムゼロ』

「エム×ゼロ」より

・原作では、魔力磁場と言うものを抑える領域を作り、魔法を無効化する。

・訓練により、その形を操作できるようになる。

また、自身から離れたところにも動かせるようになる。

・そこから暁は、魔力を封じる『領域』を展開し、魔法を無効化する能力としてアレンジした。

・『シールド』はエムゼロを盾のような形にして、自身の前方に置く。

↳ 魔力減衰現象

・暁が『領域』を使ってどうにかした。

・ただ、現象の細部までは理解していなかったため、反動を抑えられずにオスティアは墜ちた。

後日。

〔 Nagai Side 〕

決戦のとき、暁に外に転移させられた俺たち。でも、俺たちは宮殿の中に戻っていった。魔力減衰現象が収まる際、宮殿が崩れ落ちて、お師匠が行方不明になった。

そして、暁も戻ってこなかった。

それからいろいろあった。オスティアが墜ちたり、姫さんが処刑されかかったり。俺達は英雄と呼ばれるようになった。だけ……

「なんでお前がいるんだよ、暁！」
「よ。久しぶりだな」

俺たちの前には死んだと思っていた暁がいた。

「死んだと思っていたんだが・・・」

「勝手に殺すなよな。あ、これうめえ」

今、俺達がいるのは京都だ。みんなで集まったら、

「おう、遅かったな」

とか言って待ち合わせ場所で先回りしてるんだぜ？
一発殴った詠春は悪くない。

「ん、アスナか。なに？『吸血鬼の話』が聞きたい？おーけーおー
けー」

のんびりしてんじゃねえよ。

「・・・ロリコンですか？」

「テオドラとも仲良かったしなあ・・・」

あ、暁が『あの笑顔』になった。

「オツケエイ。アル、ラカン。一度死に臨んでみようか」
「「ごめんなさい」「

土下座か。
くいくい。

「・・・ああ、すまねえ。きちんと話すから、な？」

姫子ちゃん、暁になついでるな。
タカミチ、落ち込むな。

「それにしても、ラブラブだな。お前ら

悪いかよ。

〔 Akatsuki Side 〕

目の前でストロベリーというか、桃色というか、そんな空間をつく
っている二人はおいとくとして。
クイクイ。

「ん？」

「・・・お話」

なに？もう三つもしたのにまだ！？

ちなみにアスナとは墓守り人の宮殿で知りあった。
逃げさせる際に顔を覚えていたらしい。

「・・・おなかすいた」

「おう、そうか・・・ちょっと待ってる」

バッグ（カモフラージュ用）の中に手を突っ込み、異空間からつく
つておいた料理を取り出す。

「ほい、サンドイッチ」

「・・・ありがとう」

「おい、あと一時間で夕飯なんだぞ？」

「けち臭い事言うなよ、詠春。なー」

「・・・なー」

やべえ。かわいい。

「で、鬼神の封印が解けたと」
「そうなんだ！」

「・・・お前から厄介ごとによく巻き込まれるなあ」
「「「「お前あなたに言われたくないなですわ」「「「「

ハモんな。

「ようし、俺が行くぜ」

「暁が出るなら、俺達はいらねえな」

なに？

「そうだな」

「がんばれよー」

ラカン、酒用意してんじゃねえ！

「おい！誰か一人ぐらい・・・」

「頑張ってくださいね」

肩を叩かれた。

「・・・」

がっくりと肩を落とす。

「それもこれも・・・」

スクナに向かつて斧を構える。

「てめえのせいだ、オラアアアアア！」

出力全開の理不尽ビームでスクナの上半身が吹き飛んだ。
ジェノサイドプレイヤー

「なんとという八つ当たり・・・」

「かわいそうだな・・・（スクナが）」

うるせえよ。

結局、そのあと現地解散になった。
これから、また少しづらつくかな。

そしてまたしばらく、月日が流れた。

＼Takamichi Side＼

ガトウさんが亡くなって数日後。

僕の元に暁さんが殴り込んできた。

「タカミチ！」

「あ、暁さん!？」

「アスナの記憶を封印したっていうのは本当か!？」

「え、あ、はい」

「貴様、それがどういう事か分かっているのか？」

暁さんから殺気が叩きつけられる。

なんだ!？どうしたっていうんだ!？

「どういうこと……とは……」

「何故記憶を封印した……」

「それが彼女の……」

為になる、と言おうとしたがそれは叶わなかった。

「それ以上言うな」

暁さんが剣を僕に突きつけていたからだ。

「失望したぜ、タカミチ・T・高畑」

!？

「何を……」

「貴様がそんな偽善……いや、独善的な奴だとは思わなかったぜ」

「何が言いたいんです!？」

訳が分からず、叫ぶ。

「わからないのか？貴様等はこれまでの『アスナ』という人間を否定したんだぞ！」

その言葉に愕然とする。

「ぼ、僕達は……」

「あの子の為を思って、か？なら、『アスナ自身の意思』を尋ねたか？違うだろう。それでよくアスナのためなどと言えたな」

「それは……」

「貴様等は……」

あの滅多に怒鳴ったりしない暁さんが怒っていると言う時点で、僕は気付くべきだった。

「貴様等は『アスナ』を『殺した』んだ！」

この世界で、一番怒らせてはならない人の逆鱗に触れたことを。そのまま拳が飛んできた。直撃を貰い、壁に叩きつけられる。

「……記憶の封印の解除はしない。俺達の都合で、アスナを振り回すわけには行かない」

そのまま、暁さんは背を向ける。

「精々自分のした事の罪の重さに苦しむんだな、タカミチ」

そのまま、暁さんは去っていった。

壁に寄りかかったまま考える。

僕は、何をしてしまった・・・

僕は、何故アスナちゃんに尋ねなかったのだろう・・・

ただ一言、「今を、過去を、覚えていたかい？」と、そう問えば
よかったのに・・・。

僕は・・・

後日。(後書き)

今回は少し短め。

次は現代・・・かな？

『ジェノサイドプレイヤー
理不尽ビーム』

・『戦いが終わってから・・・』を参照。

主役交代・・・？

「????? Side」

「ここですか・・・」

私は麻帆良に降り立った。

今日からここで働くことになる・・・と思う。

「確か、学園長のところに行かなければならないんでしたね」

歩き出す。

周りの人たちは私とすれ違つと、驚いたように立ち止まり、私のほうを振り向く。

自分で言うのもなんですが、『銀色の髪の美女』を見れば当然でしょう。

コンコン

「どうぞ」

「失礼します」

中にいたのは、学園長とタカミチだった。

「さっそくじゃが、用件を聞かせてもらいたい」

「・・・これを」

学園長に手紙を渡す。

「・・・」

「なんて書いてあるんです、学園長？」

「私をここで教師、そして警備員として働かせろ、と書いてあった
のでしょうか？」

「・・・その通りじゃ」

「書いた人は誰ですか？」

タカミチの質問には、私が答える。

「暁ですよ」

「何だつて!？」

「マスター・オブ・アビリティ万能の支配者が何故こんなことをするのじゃ？」

「・・・彼の息子のことでしょう」

「察しがいいですね。聞いたところ、来月に来るようですが」

まだ10歳でしたか。それで教師が出来るのでしょうか？

「ところでじゃ、君の名前は・・・？」

ああ、そういえば言ってませんでしたね。

「私の名前は・・・」

名前を告げる。

「シエラ。シエラ・トワイライトです」

「しかし、暁さんは何が目的で君を・・・？」

「ナギの息子がどんな風に育ったか知りたいから、だそうです」

「何故、自分で来ないのなの？」

「用事があつてそれを片付けるため、だそうです」

その後は、二人の質問に答えていった。

「それでは、よろしくお願い致します」

「あいわかった。君は2・Aの副担任でいいかの？」

「ええ。別にどこでも」

これで終わりですか。

「とじろで・・・」

帰ろうとしたところで呼び止められる。

「君と暁さんはどんな関係なんだい？」

彼と私は・・・

「多分、一心同体だと」

随分と一方的な一心同体ですがね。

「そ、そうか」

「ええ、彼のことから分からない事は無いです」

ほとんど、ですが。

「それでは」

そして私は学園長室を後にした。
まったく。何故私がこんなことを。

教室に行くと、罌が仕掛けてありました。
何故こうも早く私が来たことを知ったのでしょうか？

ともかく、

ドアを開け、落ちて来た黒板消しを受け止め。

一歩踏み出し、横から飛んできた矢を黒板消しと手刀で撃墜。

もう少し先にあったバケツは殴り飛ばして、窓の外に。

「今日からこのクラスの副担任になったシエラ・トワイライトです」

「……おー！」「……」

「何かありますか？」

「質問していいですかー？」

「構いません」

途端に怒涛の質問攻撃が始まる。

このクラスは……

噂で聞いたよりも遥かに常識破りのようですね。

「歳は？」

「秘密です」

「身長・体重！」

「174センチ。体重は秘密です」

「趣味はー？」

「料理と読書です」

「なんか特技ってあるの？」

「色々です」

「担当教科は？」

「英語です」

「外国人なん？」

「そういうことにはしておいてください」

「今度手合わせを」

「お断りします」

・
・
・

・
・
・

・
・
・

「やれやれ、ようやく終わりましたか」

結局、自分の授業を潰しての質問会になった。

「まあ、後で詰め込めばいいだけのことです」

一部の生徒にとっては地獄でしょうが。

「これから、騒がしくなりそうです・・・」

けれど、思っていた以上に楽しい日々になりそうです。

そういえば、彼は今頃・・・

＼ Akatsuki Side 〵

暁だ。主役交代だとおもったか？
ところで、俺は魔法世界にいるんだが・・・

ただいま絶賛揺さぶられ中。
相手は、テオドラだ。

「うがー！なぜ何も連絡をよこさなかったのじゃー！」

がくがくがくがくがくがく……
最終決戦から一つも連絡をやらなかったのがいけなかったらしい。
がくがくがくがくがくがく……
しかし、こつも揺さぶられては……

「なんとか言わんかー!」

いや、言えねーよ。足を体に回して、首も掴んでるし。
仕方ない。

『テオドラ、やめないと口で話が出来ねえ』

念話で話しかける。

「心配させた罰じゃ!」

がくがくがくがくがくがく……
気持ち悪くなってきた……。

『テオドラ……』

「テオじゃ!」

『わかったから、テオやめろ。マジでやめろ』

このままだと俺の寿命(とテオの顔面)が気持ち悪さでマッハなん
だが……(嘔吐話)

「仕方ないのう……」

ようやく離してくれたか。

「あ、あと十数秒続けられてたらやばかったな・・・」

それにしても・・・

「ところでテオ」

「なんじゃ？」

「なんで俺にくつついたままなんだ？」

テオが悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「聞きたいか？」

「やっぱいい」

「そうか、聞きたいか・・・って、むきー！」

ははは、やっぱこうでないとな。

「久しぶりに会ったが・・・」

テオを引き剥がして言う。

「なんじゃ？」

「テオ、綺麗になったな」

ぼっ！、と一瞬でテオの顔が沸騰する。

「綺麗だなんて・・・」

そのまま妄想に突入していった。「・・・結婚・・・」とか聞こえてきた。

まただよ。あれか！？『無意識に異性に惚れられる程度の能力』か

！？そんなもんいらねえよ！・・・もちろん嬉しくない訳じゃないが、どうして俺なんだ？

「あ、暁？」

真つ赤になつたままのテオが言う。

「なんだ？」

嫌な予感がする。

「その、わ、妾と・・・」

「うん」

無言詠唱する。

「パ、バクティオー仮契約を・・・」

「俺が好きなのか？」

「う、うむ」

やっぱりか・・・

「だったら、俺をお前に惚れさせてみな？そしたら、してやるよ」

テオは嫌いじゃないが、愛しているわけでもないからな。バクティオー仮契約をするんだったら、そこまでの関係になつてからしたい。たとえばあつても『契約』なんだからな。

あつけにとられているテオ。

よし、逃げるか。

「じゃあな、テオ」

「あ！待つのじゃ！」

「次にあつたときまでに、女を磨いとくんだな」

そして、俺は転移した。

そして、

「・・・絶対、惚れさせる！」

テオは一人、俺を落とすことに燃えるのだった。

覚悟が足りない

〔Sierra Side〕

警備員の顔合わせとして呼び出されました。
あの学園長ジジイのことです。何か考えているに違いありません。
用意はしておきますか。

「手合わせ……ですか」

事前に学園長室で確認。

「うむ」

「つまり、私の実力を知っておきたい、と」

安直ですね。

しかし効果的です。

「そうです。いくら暁さんの分身とは言え……」
「分身？何のことです？」

そんなこと一言も言っていないですが？

「え？ 暁さんと一心同体だと・・・」

「ああ、それですか。言い方が悪かったですね。正確に言うなら、私は彼からできた人格です」

「ほ？ どういうことじゃ？」

「私は、彼の記憶の中から組み上げられた人格です。故に、私が知ったことは彼も知ります。その逆もわかりです」

まあ、私から彼へ情報を送るのには拒否権が無いのに、彼から私に情報を送るのは彼に選択権があります。

「記憶から・・・？」

「昔、あることで彼は様々な人間の記憶を手に入れたのです。その中から私が作り出されました。ですから、私と彼は別人と断言しています。一心同体は間違いですね」

まったく、彼の分身だなんてとんでもない。あんな変態と一緒にしないでほしいですね。

〈Other Side〉

そのころ暁はくしゃみが出て止まらなかったそう。

「くしゅー！」

「おい、にいちゃん。大丈夫か？ 風邪か？」

「いや、噂されてるんだよ・・・へぷしー！」

「ペプシ・・・?」

〔Sierra Side〕

「ああ、タカミチ」

「ん?」

「暁から伝言です。『お前の罪を忘れてないだろうな?』だそうです」

「・・・ッ!」

「それと学園長」

「・・・なんじゃ?」

「私が暁と関わりがあることは秘密にしておいてくださいね」

「何故じゃ?」

「暁がそう言ったので、私は知りません」

大方、そのほうが面白いとか考えてるんでしょうが。

「それでは、顔合わせに行きますか?」

「う、うむ」

世界樹前の広場に全員集まったところで、紹介が始まった。

「今日から警備員として働くシエラ君じゃ」

「シエラ・トワイライトです。よろしくお願いします」

頭を下げるが、周りからは値踏みするような視線ばかり。少し失望しました。

「学園長、この人の身元は？」

ガンなんとかが尋ねてきました。

色黒でメガネ。

・・・ふむ、胸元に不自然な膨らみ。

銃、あるいはその弾倉ですか？

ということはCQCでも使うんでしょうか。

「これ以上ない人からのお墨付きがあるから大丈夫じゃよ」

「しかし・・・」

ガン・・・は納得していないようでしたが、学園長に諫められました。

「これから手合わせですか？」

静かになったところで私は問うた。

「うむ、君の相手はタカミチじゃよ」

「本気で言ってますか、それ？」

呆れたものだ。

私の実力も見抜けないのか。

「なんじゃと？」

「わたしはてつきり、全員が掛かってくると思ったのですが。というか、そうでないと話になりません」

途端に周りが殺気立つが、かまわず続ける。

「この程度なら、私でも全員相手できます」

「……じゃがのう……」

面倒くさいですね。

「分かりました。それでいいでしょう。ただし、」

今度はタカミチに言う。

「殺す気で掛かってきなさい、タカミチ」

殺気を飛ばす。反射的にタカミチが攻撃してくる。

「くっ！？居合い拳！」

私は、手刀で真空波を起こし、居合い拳を打ち消す。

「殺す気で、と言ったでしょう？」

右手に気を宿す。

「受けてみなさい！」

衝撃波がタカミチに迫る。

「ふっ！」

ふむ。相殺するだけの力量はありますか。しかし、

「咸卦法を使わないまま、私に勝てるだけでも？」

そのまま、タカミチに近づき、耳元で囁く。

「あなたの覚悟チカラを見せなさい」

「く！」

タカミチの攻撃をかわしながら更に言う。

「あなたの罪は、^{アヤマチ}あなたが全てを懸けても償えない」

「なら、せめてあなたの全てを以って、」

「く、うおおおおお！」

隙だらけですね。しかも、この程度で揺らぐられるとは。

「あなたが遠ざけようとした『^{マホウ}世界』から『^{アスナ}彼女』を護って見せなさい」

「さあ、見せてみなさい。あなたの『^{チカラ}覚悟』を！」

「おおおお！威卦法！」

ようやく使いましたか。

「さあ、来なさい」

見定めましょう。暁の代わりに。

「は！」

「遅い」

蹴りかわし、足を払う。

「せい！」

「振りが大きい」

フックを受け流し、胴を突く。

「うおおー！」

「まだまだです」

ラッシュを捌いていく。

「護れるのですか？あなたの覚悟チカラで」

「護れるじゃない！護るんだ！」

更に攻撃が激しくなる。

「言うことだけは立派ですね」

しばらく攻防した後、告げる。

「さて、そろそろ終わりにしましょう」

「させるとでも！？」

「いえ、そうせざるを得ないんですよ、あなたは」

手をかざす。

「鬼門封じ」

「何!？」

一言でタカミチは動けなくなる。

流石にまだこれから抜け出せるほど強くはないですか。

そのまま、私は駆け寄る。

両手の中に『護行』と『金』ゴールドを作り出す。

「水は木を生み、」

木の力を込めたショットガン、

「木は火を生む、」

焔の斬撃、

「火は土を生み、」

雷を帯びた斬撃、

「土は金を生む、」

金の力の籠もったハンドガン『ゴールド金』での連射、

「そして金は、水を生む」

最後に刀で一閃。

「『森羅万象』。これがこの世を司る理なり」

拘束が解けると同時に、タカミチは崩れ落ちた。

「安心なさい。気絶しただけです」

私は周りに言った。そうしなければ、勘違いする者が現れただろう。

「学園長、これでいいですね？」

「う、うむ。十分じゃ」

その言葉を聞きこの場を去る際に、気絶したままのタカミチに呟いた。

「……あなたの覚悟はまだ足りない」

「それで、どこまで行ってくる気ですか？」

その声をかけつつ振り返る。

「やっぱり、気が付いてたのね」

現れたのは、金髪の少女。おや、この少女は……。

「エヴァンジェリンですか」

「私を知っているのね」

「ええ」

^{アカツキ}彼經由ですがね。ともかく……

「ふむ、口調の約束は守ったということですか」

「……何を言っているのかしら?」

しかし、これは違和感満載ですね。15の見た目で大人の雰囲気
が漂っています。ついだに貫禄も。

……暁のおかげせいでしょうか。

「で、私に何か用ですか?」

「あなた、何者かしら?」

「私は私ですが」

「そうじゃないわ」

「では何か?」

「何故あなたから懐かしい気配がするのか、聞きたいのよ」

おや、隠すのを忘れていましたか。

「懐かしい……とは?」

「とぼけないで。暁なんでしょう?」

だから、私をあの人外と一緒にするなといっているのに。

「残念ながら、私は暁ではありません。しかし・・・」

「しかし？」

「近いうちに逢えるでしょう。ナギの息子が来ますからね」

啞然としたエヴァを置いて私はその場を去った。

一カ月後。

ようやくネギが来たそうです。

「で、顔合わせのために私を呼んだ、と」

「うむ」

やれやれ。私は彼が来るまでの代理だと言つのに。面倒ですね。

・・・

今私の目の前には問題のネギがいる。
ですがなんですか、この甘ったれたばーやは。

「えっと、シエラ先生、ですね。よろしく願いします」

ネギと挨拶を交わしました。が、

「こちらこそ」

礼儀正しいのはいいですが、どこか甘いですね。・・・大丈夫なの
でしょうか？魔法使いとして。

だいたい、さっきむこうで魔法を使いましたね。もしかして、ナギ
並みの馬鹿ですか？

「・・・」

「まじむじむ」

ネギたちが去った後、学園長が尋ねてきた。

「……正直に言っつて、期待外れでしょう」

まだ十歳で教師になるとか、あれでは不可能でしょう。

「厳しいのう」

「彼には理想を叶える力も無ければ、理想を支える覚悟も無いです。あれでは誰も救えない……」

むしろ、周りの人を巻き込み、傷つける。

「……では、私は授業があるので、これで」

「……ネギ君のサポートはお願いできないじやろうか？」

調子の良いことを。実の孫すら巻き込む気のくせに。

「彼次第です。それと、タカミチ」

「……なんだい？」

「アスナをしつかり護らないと、あの少年のせいで『あの世界』に巻き込まれますよ」

そのまま私は学園長室を出た。

・

・

「やはり、彼にはまだ早すぎると思います」

「そうかのう……」

「下手するとお孫さんを巻き込むんですよ!？」

「うーむ……」

「せめて、部屋は別にすべきかと」

「しかしのう……」

「学園長!」

……

……

扉越しに二人の会話を聞きながら、少しタカミチを見直しました。

ようやく『護る意識』を持ったようですね。

それにしてもあの学園長は……

ぶつぶつと文句を言いながら、私は今度こそ学園長室を後にしました。

ちょうど2・Aの前でネギに追いつきました。

「あ、シエラ先生」

「これから中に入るのですか?」

「はい」

「では、私の合図の後に入ってきてください」

「え？はいはい」

トラップに気が付いてないのですか……。

「入るときはまず上を確認してください。これからは気をつけてくださいね」

とりあえず、ドアを開ける。

上から水風船。受け止めて、窓の外に。

もう一步進む。

ペイントボールが飛んでくる。ビニール袋でキャッチ。中で潰れる。

箒が柄を先にして飛んできた。掴み取る。

更に一步。

エアガンが左右から玉を飛ばしてくる。地に伏せ、手に持った箒で叩き壊す。

バケツが上から降ってきた。そのまま箒でホームラン。同時に箒を掃除道具入れに投げ込む。

更に一步。

濡らしてある床。道具入れから反動で飛んできた雑巾で拭き取る。教卓に着いた。

「それでは、全員課題プリントを明日までに3枚ですね」

「……………全員!?」

「見ていた人も同罪です」

その一言でクラスが静まり返る。
やれやれ。毎回こうなるのが分かっているのに何故するのでしょうか。

「さて、皆さん知っているようですが、今日から新しい担任の先生が来ます」

ドアのほうをむく。

「ネギ先生、どうぞ」

その後は、さっさと逃げ出しました。

背後から歓声が聞こえてきて、自分の判断の正しさを確認しました。

歓迎会などもあったようですが、興味ないですね。
私自身のもやりませんでしたし。

Other Side

夕方の校舎を一人の男が歩いている。

「やっぱり、『識^しってる』のと『知^ちってる』のでは違^{ちが}うからな」

独り言を漏らす。

そのままぶらぶらと歩き回っていると、男は一人の少女を見かけた。

少女は、大量の本を抱えていた。ふらふらしている。

「ありゃ危ないだろ・・・」

と、男が眩いた瞬間に少女がバランスを崩す。

「おいつ・・・!？」

助けようと駆け出した男の視界の端に、一人の少年が映った。

男は、少年が持った杖が光っているのを見た。

咄嗟に男が手をかざすと、その光は消える。

うろたえる少年。改めて助けに駆け寄る男。

しかし、その僅かなタイムロスで、男が少女を助けるのに間に合わなくなる。

が、再び男が手をかざす。

その瞬間、男以外の全てのものがゆっくりと動く。

そして、間に合った男は少女を支えた。

すると、また物が普通に動き始める。

「大丈夫か？嬢ちゃん」

「え？あ？だ、だいじょぶ・・・です・・・」

だが、少女はその動きに気付いた様子はない。

「そっちの坊主は？」

男は向こうに呼びかけるが、返事がない。

見ると、遠くに二つの背中が見えた。

(見られちゃったのか)

そう理解し、心の中で舌打ちする。

(タカミチ・・・)

一応忠告はしていた。それでも防げなかった。まあ、当然の評価ではある。

「あ、あの・・・」

「ああ、すまねえ」

少女を抱えていたことを思い出す。

「立てるか？」

「じ、実は足を捻ってしまって・・・」

「そうか。だったら仕方ねえな」

「はい？・・・ってひゃ！」

突然抱えあげられ、少女は悲鳴を漏らす。

「保健室まで連れて行ってやるから」

「でも、あの・・・」

少女が焦ったように言う。

「ん？」

「えっと・・・」

焦るのも当然だ。いま、男は少女を横抱きに、つまりお姫様抱っこをしている。

「？・・・しっかり掴まっとけよ」

「はい・・・」

しかし、少女がそれを言うことが出来ないまま、男は歩き出す。
しかし、数歩進んだところでピタリと停止する。

「・・・？」

「あー、その、だなあ」

「保健室ってどこだ？」

ばつの悪そうに聞いてくる男が可笑しくて、少女は笑ってしまった。

「あつちですよ」

「すまん」

保健室に行くまでの間、少しだが会話を楽しんだ二人だった。

「それじゃ、俺はこれで」
「ありがとうございます」

頭を下げる少女。

「気にするな。ああ、あと本だが、図書館に運んどくぞ?」
「え、いいんですか・・・?」

そんなことまで、と言っが、

「なに、ついでだからな」
「場所は・・・?」
「大丈夫だ」

そういつてひらひらと手の中の地図を振る男。

「じゃあな」
「はい」

そのまま男は去っていった。

「あ、名前、聞いてない・・・」

しばらくしてから、少女　宮崎のどかは呟いた。

それでも、彼女の記憶には、男の琥珀色の瞳がすっかり焼きついて
いた。

覚悟が足りない(後書き)

↓解説?そいつは重畳↓

『森羅万象』
しんらばんしょう

「ナムコ×カプコン」より
ナムコ×カプコン

・有栖零児ありす れいじと小牟シャオムウの必殺技。

・小牟シャオムウが敵を『鬼門封じ』で拘束し、零児が『柀樹』ハリウッド、『火燐』かりん、
『地禮』ちらい、『金』ゴールドの順で攻撃し、最後に小牟が仕込み錫杖の刀『水燐』すいれんで一閃する。

・要するに、技は五行説の五行相生の順で繰り出されるということ。

『魔法が発動しなかった』

↓のどかが階段から落ちるところで↓

・封魔力領域とでもいうべきものを暁が張ったから。

『ゆっくり落ちた』

・時間がゆっくり進む領域を張ったから。

タカミチ株上昇、学園長株暴落。

〔Sierra Side〕

ネギがきた次の日でした。

私が廊下を歩いていると、向こうからタカミチが歩いてきました。なにやら険しい顔で、学園長室に向かうようです。

「どうかしたのですか？」

「ああ、シエラ先生。少しネギ君のことで学園長に用があったね」
「・・・話を少し聞かせてもらいましょう」

というわけで、私たちは横の空き教室に入りました。

「『人に気付かせるな』。・・・これで話が出来ますね」
「ええ。実は、昨日のことなのですが・・・」

・・・タカミチ説明中・・・

「・・・思っていた以上に酷いようですね」
「ええ。僕もあそこまでとは思いませんでした」

話が終わるとお互い険しい顔になっていました。

「アスナはどうするのです?」
「・・・まだ、引き返せます。『裏』に関わっていない今ならまだ・・・!」
「では、そのためにはまずネギをどうにかしないとダメですね」
「ええ。ですから、学園長に会いに行こうとしていたんです」
「私も行きましょう」
「助かります」

あのジジイには、前から少し言いたいことがあったんです。

それにしても、暁は最近滅多に『記録』をよこしませんね。
なにか・・・あるわけないですね。暁ですし。

そのころの暁。

「・・・なんかひどいことを言われてる気がするぜ」
「おい、考え事してていいのかよ?」

「大丈夫だ。食らえ！」

「うお、死んだ！」

「飯、約束通りお前の奢りな」

「いや、今のハメでしょ？俺のシマじゃ今のノーカンだから」

「限られたルールの中で勝利条件を満たしただけ」

「くそお！もう一回だ！」

「ふん、どうなっても知らんぞ！」

・・・ゲーセンで遊んでいたとき。

学園長室に入ると、ジジイがすつとぼけた声で言いました。

「ほ？二人とも険しい顔でどうにかしたのこのう？」

「それは本気で言ってるんですか！？」

タカミチが食って掛かる。

「まだ早いと言ったはずですよ！あつという間にアスナちゃんに魔法がばれたじゃないですか！」

「タカミチ、落ち着きなさい」

後で思う存分言っていていいですから。

「学園長、やはりネギはまだ子供です。それなのに、一般人と同じ部屋で暮らさせるとは、何を考えているんです？」

「むう……」

「おまけに、勝手に人の未来を占うわ、日常生活で障壁張りっぱなしだわ。それでよく立派な魔法使いを目指そうと思っただけです」

「それは言い過ぎなんじゃないか？ 彼はまだ10歳……」

「関係ありません」

言い訳をぴしやりと遮る。

「目標を持ってそれに進むのであれば、それに対する覚悟を持つのが普通です。歳など関係ありません」

その時、学園長室のドアがノックされた。

「ネギ・スプリングフィールドです……」

「ネギ君？ わしや呼んどらんぞ？」

「私が呼びました」

学園長の言葉に私が答える。

「ネギ君、いい機会だ。僕達の話聞いてくれ」

「話……？」

「呼び捨てにさせてもらいますが、ネギ。あなたは昨日、神楽坂明

日菜に魔法を見られましたね?」

「何でそれを!? というか、シエラ先生も魔法先生・・・?」

「見られたか、と聞いているんです」

「は、はい」

私の気迫にネギが押されています。少しはこれでことの重大さを感じてもらえるといいのですが。

「ネギ、あなたは自分のしたことがどういふことか理解していますか?」

「え?」

「・・・ネギ君。普通の人が魔法を知ることとは、この麻帆良では、いや、どこであつても危険なことなんだ」

タカミチが私に続けて言います。

「魔法を知っているということは、危険に巻き込まれやすくなるということなんだよ。」

「君にその責任が取れるかい?」

「で、でもあれは・・・」

「それに」

ネギの言葉を遮ってタカミチが続けます。

「ネギ君、君の夢は何だ?」

「それは、立派な魔法使いに・・・」

「それなのに、一般人を危険に巻き込むのかい?」

「!」

「ネギ君。君にはまだ少し魔法使いとしての意識が足りない。」

今日から僕と一緒に住もう。その意識が身に付くまでね」

「・・・はい」

「そんなに落ち込む必要は無いよ。それよりも、これからどうするかを考えるんだ」

「そうですね・・・」

「・・・わしは？無視？」

「あなたは私とこっちです」

がっしと学園長の肩を掴んで言います。

「なんでわしの肩を掴んで離さないんじゃ？それに引きずる必要は・・・」

「いえ、すこし私たち之间には『お話』が必要だと思いましてね」

「その内容は・・・？」

「ふふ、ふふふ、うふふふふふ」

ああ、考えるだけで楽しくなってきました。

「・・・助けてくれ！タカミチ君！」

「逝ってらっしゃい、学園長」

タカミチ、目が屠殺場に送られるブタを見るような目になってますよ。

「・・・ネ、ネギ君！」

「ネギ君、そろそろ授業だろう？」

「あ、そうですね。それじゃあ、僕はこれで」

私たちの雰囲気気付くことなく、ネギは出て行きました。

「ネギくん！わしを見捨てないでくれー！」

ふふふ、私たちがネギにこの殺気を気付かせるとでも？

「さて、ゆっくり」 お話 『しましょつか・・・？主にあなたの責任について・・・ね』

それから数日、学園長は『銀色怖い、琥珀怖い』といって仕事にならなかつたそうです。

その分の仕事？やってあげるわけないでしょう。むしろ増やしました。

ちなみに、『お話』の最後のほうにはタカミチも参加していたのは秘密です。

ネギ、（実質）初めての授業です。

「じゃあ、一時間目を始めます。テキスト76ページを開いてください」

ふむ・・・

「今のところ 誰に訳してもらおうかなあ。えーと・・・」

皆さん・・・目を背けるのは逆効果って知ってましたか？

「じゃあアスナさん」

あら、バカレッドに当ててしまいましたか。

当然答えられるわけもなく、アスナはクラス全員に笑われることになる。

「アスナさん、英語ダメなんですね」

ネギ、その発言はどうでしょう。

「ネギ先生？」

「はい？」

「今の発言はなんですか？教師が教え子を馬鹿にしているとしても？」

「え、いや、そんなつもりは……」

「いいですか。確かに何度いっても出来ない、やろうとしない生徒にはそういう言葉を使ってもかまわないでしょう。しかし、あなたはまだこのクラスをよく知らない。それでは、今の発言は問題ですよ」

「は、はい」

「それとアスナさん」

「はい！？」

「馬鹿にされたくないなら、せめてきちんと勉強しなさい」

「はい……」

「あと、大してアスナさんと変わらない成績の人にもこれは言える事ですよ」

「……うつ……」

「まあ、大人になって『あの人馬鹿だよー』などといわれたいなら別に構いませんが」

「……」

その後は肅々と授業が進みました。

それから、またしばらく時は流れて。

「ネギの本採用の試験？」
「うむ」

まあ、最近は私たちの指導で先生としても魔法使いとしても自覚が出てきたから丁度いいとは思いますが。

「内容は？」

「2-Aの最下位脱出だよ」

タカミチの口調が段々と砕けてきました。別に構いませんが。

「・・・タカミチ。それは、不可能なのでは？」

「う・・・」

あのクラス、勉強嫌いが多すぎますからね。後、面倒臭がりも。

「『面倒臭いですね』が口癖のあなたに言われたくないよ・・・」

おや、口に出てましたか。しかし私は面倒でもきちんやりしますよ？

「まあ、少し様子を見てみましょう」

「そうだね・・・」

「・・・やっぱわしは無視なの？」

「ああ、いたんですね」

「もうお亡くなりになったかと」

「・・・」

タカミチも言うようになりましたね。

・・・！

「・・・タカミチ」

「どうしたんだい？」

「私たちは何もしないでよそつですよ」

「・・・何故？」

まったく、彼は・・・

「暁がどうにかするそつです」

サンライズ、いったい何者なんだ・・・

〔 Akatsuki Side 〕

ハッハー！久しぶりにメインだぜ！

図書館島にやってきたんだが。（不法侵入）
・・・広すぎだよなー。ここ。

「まあ、その分読む本には事欠かないが」

実は、たびたびここに入り浸っていたりする。

「さて、今日は・・・と、ん？」

誰か来たぞ？

咄嗟に本棚の陰に隠れる。

「ってネギたちが」

ということはもう期末考査か。はえーなー。

「隠れておくか」

今見つかると面倒だ。

「そこにいるのは誰でござるか？」

くそ、気配遮断が間に合わなかったか。

「……」

どうすっかな。逃げるか？

……仕方ない、出て行くか。

と、その前にこれを付けて……

「よく気付いたな」

暁（仮面装着ver）が現れた！

……じゃなくって。

ちなみに仮面は斎藤……ゲフンゲフン、ムジュラの仮面を形だけ
まねたものだ。

ちなみに声も少し変えてある。

「誰ー！？」

「んー。誰って言われるとな」

なんて名前にしようか。

「……サンライズとでも呼んでくれ」

「なんでここにいるんですか」

隊長（？）が聞いてくる。

「本を読むために決まってる」

「……できるでござるな」

忍者（？）がつぶやいた。

「何のことやら」

やれやれ。こんなとこでこいつらに会うとはな。

「で、そっちこそ何でここにいる？」

「実は、頭が良くなる魔法の本を探しに……」

「……なんでまたそんなモンを」

「えっと、期末考査でうちのクラスがいい点を取らないと、大変なことになるので……」

「だからって、道具に頼っても意味ないだろ……」

ん？確かこれはネギの試験だったよな。

「だが、中学生はここまでだろ？潜れるのは」

「う」

はぁ……

「……しかたねえ。見逃してやるよ」

「ホント!？」

「ただし、俺が付いていく」

「……何故です？」

「そりゃあ、危険な地下図書館に、女子供だけで行かせるわけには

いかねえだろ」

というわけで、俺はついていくことになった。地上待機組にもそのことは伝えられたらしい。その際、シエラに手出し無用と送った。

暗い図書館の中を進む。

意外と引つかかったら命取りなトラップもあるんで警戒ながらだ。

「わー、本棚の上を歩くんですか？」

「何考えて作ったんやろね、ホント」

「案外何も考えてなかったんじゃねえか？」

となんとか言っていると、

「きゃー！」

早速トラップに引つかかったのかよ。

「あらよつと」

落とし穴に落ちていく佐々木（ってネギが呼んでた）を追って飛び降り、空中で抱え上げ、壁を蹴って戻ってくる。

「あ、ありがとう」
「どういたしまして」

佐々木を降ろすと、
カチツ　ぐらっ

今度は本棚が崩れてきた。

「南斗獄屠拳！」

とりあえず本棚を吹き飛ばし、
ばらばらばらばら

「火中天津甘栗拳！」

降ってくる本を受け止める。

「……やはり出来るアル」

「……でござるな」

……余計目を付けられた。

「あぶぶぶぶ　た、助けてーっ！」

今度はお前か！
ネキ

……そついえばコイツ魔法封印してるようだな。

「なあ、帰ったほうがいいんじゃないねえ？」

「それは出来ません」

「・・・なんか妙に気合入ってるな、こいつ。・・・綾瀬夕映・・・
だっけ。」

「・・・楽しんでないか？」
「もちろん」

親指を立ててきた。
駄目だコイツ・・・早く何とかしないと・・・
とか言っていると。

「ピロピロピロ」

『こちら地上班ですー。その先に休める場所があるのでそろそろお
弁当にしてくださいー』

ん？今の声どっかで聞いたな。

「なあ、今の誰だ？」
「のどかです」

のどか、のどか・・・？
・・・ああ、あのときの。

「ふーん」

「・・・のどかを知っているのですか？」

「ちよっとな」

「・・・」

というわけでようやくたどり着いた（表の）最深部。

「ここか」

「ええ、魔法の本の安置室です」

「!? あっ・・・あれは!?」

「ど、どうしたのネギ!?」

「ああ、あれはメルキセデクの書だな、伝説の魔法書の」

「はい！あれがあれば・・・」

で、喜び勇んでみんなで突撃する、と。

そうしたら・・・

「この本が欲しくばわしの質問に答えるのじゃ、フオフオフオ！」

ジジイ・・・絶対に楽しんでるだろ・・・。ゴーレムまで使いやが
って・・・

・・・ま、ネギのためなんだろうな。多分。だから、今回は見逃す
ぜ。

「がんばれよー」

「手伝ってくれないの!?」

「いや、だって俺、魔法書とか知らないし。それに英語の勉強にな
っていいじゃねえか」

そして。

「・・・おさる?」

こいつらは最後の最後で「ら」を「る」と間違えたのだった。

・・・って、おいイイイイ!? あのハンマー食らったら普通に死ねるでしょう!?

ドッギヤ Zーン!!

「アスナのおさる〜!」

「いやああ〜!」

こうして俺たちは落ちていくのだった。
汚いなさすが妖怪きたない。

だが、このまま落ちては、下が水であっても気絶は確実。
なら、

「すまん!」

「な!?!」

「わ!?!」

とりあえずそばにいた夕映とこのかを抱える。
体を縦にし、皆より早く落ちていく。

「抜けた!下は水か!」

なら何とかなる!

落ちる寸前に二人を上を投げ上げる。

そして俺は、水面を蹴り飛び上がる。

次に落ちてきたクーフェと佐々木、長瀬を掴む。
同じように上に放り投げる。

最後に、ネギとアスナを投げ上げた。

この間わずか1秒!

「ふゝ。疲れたぜ……」

「あ、あれ?」

「僕たち落ちたはずじゃ?」

みんなが目を瞑っていて助かった。

「それより、ここは……?」

「……ここは幻の『地底図書館』!?!」

「なに!知っているのか、綾瀬!?!」

……一度言ってみたかったんだよな、コレ。

で、助けがくるまで勉強することになった。
地下だが日が差した美しい場所。
これは昼寝には絶好の場所だな。

「じゃあ、勉強がんばれよ」

そういつて俺は横になる。

「く、自分はしなくていいからって・・・」

「こつも堂々と寝られると・・・」

「少し腹が立つでござるな」

ああ、眠い・・・

「それより、この人の仮面の下が気になりますね」

「そやなく。どんな顔なんやろ」

「・・・取ってみる？」

「ええ！？失礼ですよ！」

「しっ！声が大きいアル！」

「す、すみません・・・」

「そつと、そおつと・・・」

「・・・取った！」

「素顔があると思ったか？一枚重ねだよ！」

「ふははは、俺を出し抜こうなんて二千年早いぜ！」

「うゝ！ムカツクゝ！」

「（……………いつか剥いで見せます）」

「……………できるでござるな」

「……………そうアルね」

とまあ、勉強の合間にこんなこともはさみながら、時間は過ぎていった。

そして、期末考査前日。

「あゝ、快適すぎるだろ、ここ」

アルがずっとここにいられるのもわかるな。
ま、面倒だから会いにいかねえけど。

「キヤーーーーーッ!」

何だ!?

急いで駆けつけると・・・

「助けてー!」

「フオフオフオ」

ゴーレムが佐々木を掴んでいた。

あんのクソジジイ・・・

「僕の生徒をいじめたなっ!いくらゴーレムでも許さないぞっ!」

おい、ネギ。まさか・・・

「ラス・テル（ハッ）・・・・・・・・くっ!」

おお、人前だっことを思い出したか。

・・・それとも封印をか？
どちらにしても成長したな。

「おい、ネギ！捕まってる生徒を守れ！」
「え！？」

「お前は『先生』だろ！こっちは俺に任せろ！」

「！！・・・はい！」

「いくぜ！」

「フオ！？」

前に飛び出す。

久しぶりだが、うまくいくか？

「コオオオオオ！」

呼吸を整える。

「震えるぞハート！」

波紋を生み出せ。

「燃え尽きるほどヒート！」

人の勇気をこの手に！

「刻むぞツッ！心臓のビートッ！」

伝われ！

「サンライトイエロー・オーバードライヴ山吹色の波紋疾走ツッ！！！」

拳がゴーレムの足を砕く。だが、まだまだ！

「連打アアアアアツツ！！」

拳で撃つたところから、ゴーレムが砕けていく。数秒でゴーレムは土に還った。

崩れるゴーレムから佐々木を救い出す。

「大丈夫ですか、佐々木さん！」

「た、助かった〜」

「・・・強すぎ・・・」

「すごいわ〜」

「（・・・絶対に剥いで見せます）」

「・・・やはりできるアル（ひじょうなまじか）」

「ん？」

なんか落ちてるな。

「・・・メルキセデスの書か」

「やった！それさえあれば！」

「で、どうやって帰るんだ？」

「」「」「」「」「」「」「」

『無駄じゃよ・・・』

どっかからジジイの声が聞こえてくる。

『普通にここから出るには三日はかかるからの・・・』

「三日!？」
「それではテストに間に合わないアル!」
「落ち着け、よく聞いたか? 『普通に出るには』だぞ?」
「ということは・・・」
「隠し通路か何かがあるってこと!？」
「ま、そうだろうな」
「そうと決まれば、早速探すぐいぢるよ」

で、散々探し回って見つけたのは滝の裏側。

「うわ、ベタだな」
「何か書いてあるよ」
「え」と『問1 英語問題・・・』

問題を解くと扉が開いた。

その後も順調に解いていくアスナたち。
しっかり勉強の成果は出ているようだな。
だが、

「よし、急ぎましょう!」

「うん!」

「おい、暗いのに走ると・・・」

「きゃっ!」

綾瀬が躓いた。

「こけるぞ・・・って言おうとしたのになあ」

「あ、足を挫きました・・・」

・・・ふう。仕方ねえな。

「ほらよつと」

抱えあげる。横抱き（お姫様抱っこ）で。

「あ、ありがとうございます」

「気にすんな」

顔が赤い。・・・この体勢は失敗か？

まあ、照れているだけだろう・・・多分、いや、きつとそつ。

さらに進んでいくと。

「あ!地上への直通エレベーターですよ!」

全員早速乗り込む。だが、
ブブブブブブブ

『重量OVERデス』
「ですよー(笑)」

こう都合よくいく訳がないんだよな。

「こつなつたら服を脱いでも・・・！」
「おいやめる馬鹿」

俺がいるっつーの。

「・・・ちよつと本貸してみる」
「?ええよ」

外においてみる。
ピン

『重量OK』
「・・・やっぱりな」
「え・・・?」

「この本には持ち出し禁止措置がしてあるんだ」
「と、」

「いうことは・・・」
「ま、これを持って試験を受けることは無理ってこった」
「」「」「ええ〜!」「」「」

というわけで、ネギたちは泣く泣く本を地下においてきたのだった。

「外に出れたーッ!!」

「あ、あれ？サンライズさんは？」

「そういえば、どこにもいないアルな」

「ふむ、一度手合わせしてみたかったでござるな」

「サンライズさくん！」

「……ついに仮面を剥ぎ取れませんでした」

そう騒いでいるネギたちを見ながら、

「……頑張れよ、ネギ」

図書館島の建物のでっぺんで俺はつぶやいた。

ちなみに、学園長はシエラが再び地獄に叩き落したそうさだ。

数日後、ぶらぶらと俺は歩いている。

「まさか、一位になるとはね・・・」

この間のことを思い出す。

なんやかんやで、結局学年一位にあいつらはなったのだ。

「それにしても、ネギか・・・」

最初見たときは驚いた。

あのナギの息子があんな真面目なヤツになると誰が思う？

ナギを知っている誰もが最初は自分の目を疑い、次に現実を疑うだろう。俺もそうした。

だが、そんなことよりも・・・

シエラも同じように思ったようだが、ネギは真面目で夢を信じている。それはいいことだ。

「だがその分、まだ現実が見えていない。まだ甘い」

はあ、とため息が出る。

「この世界は幸せだな・・・」

俺のいた世界だったら、あつという間にネギは潰れていただろう。

「・・・」

俺のいた世界。その中でも俺がいた場所。

あそこでは、夢は『生きること』だったからな。

いや、むしろそんなことすら考えなかったかもしれない・・・
そんな風に昔を思い出していると。

「見つけたぞ！こつちだ！」

「ん？」

視線を前に向けると。

「逃げる着物の少女と追っかける黒服ズ・・・」

これって傍から見たら完全な犯罪だよな・・・。
とりあえず逃げる少女に並んで話しかける。

「もしもし」

「ひゃ！？」

まあ、クロスステップで走る男が話しかけてきたら驚くよな、普通。

って今の自分の姿を考えて笑いそうになった。シニールだ。

「どこのお嬢さんか知らないが、何で追われてるか聞いてもいいかい？」

「え〜と〜」

面倒臭い事情でもあるのか？

「・・・まあ、ともかく」

そう言っただけは少女を抱き上げる。横抱きで。というかそれ以外に出来ないだろ。

「ふわ!？」

「まずは逃げないとな」

縮地の8歩手前ぐらいでいいか。

「ひゃあ〜!」

後日、着物を着た少女を運んで爆走する男という都市伝説が出来たとか何とか。

「ま、ここまで来れば大丈夫だろ」

というか、少しやりすぎた感が・・・

「あの〜、もういいんやけど・・・」

おっと忘れてた。

抱えていた少女を下ろす。

「急に抱えたりしてすまねえな」

「いいんよ、むしろ逃げてくれて感謝やわ〜」

うん、いい笑顔だ。

「ところで、さっき聞いた追われてた理由なんだが・・・」

と聞こうとしたところでネギが向こうから歩いてきた。何でだ？
とりあえず知らない振りするか。

「あ、こんにちは」

「おう、こんにちは」

「ネギ君、こんにちは〜」

「え？何で僕のこと知ってるんですか？」

「ウチや、ウチ」

「え？ウチ・・・！こっ、このかさん！」

「そやえ〜」

・・・まただよ（呆れ）

というか、気付けよ俺。

でも、確かここはネギが空から飛んでくるはずだったが・・・。
シエラたちの指導の成果がきちんとでているようだな。

それにしても、俺には何かしらの意志が働いてる気がするな。
・・・まさかあの神を殺し損ねたか？

「あの、どちら様でしょうか？」

おっと、今は目の前のことに集中しないとな。

「なに、ただこの嬢ちゃんの逃げる手伝いをしたただけだ」
「でも、助かったわ」

「そうなんですか。ありがとうございます」

「・・・なんで坊主がお礼を言っただ？」

我ながら白々しいな。

「このかさんは僕の生徒ですから」

うん。改めて聞くと思いつきり不自然だな。

「・・・まあ、頑張れよ」

「はい！」

「ねえねえ」

「ん？」

何だ？

「さっきはありがとな」

「おう」

「それで、よかったら名前を聞かせてほしいんやけど・・・」

なんだ、そんなことか。

「暁だ」

「・・・？それだけなん？」

「ああ」

「そっか、暁っていうんやね。ウチは近衛 木乃香っていうんよ」「このか、か。いい名前だな。なんとというか響きがよく似合っている」

「ありがと。・・・ふふふ」

「？どうした？」

「噂の『琥珀色の目の男の人』の名前を聞いたんゆーてみんなに自慢しよ」

「・・・噂になってるのか？」

初めて知ったぞ。

「あ、それ僕も聞きました」

「何？」

「なんでも、困っているときに現れ、助けてから颯爽と去っていく正義の味方みたいな人だとか。暁さんがその人なんですわ」

なんじゃそりゃ。俺はヒーローかよ。

・・・まあ、多少人助けをしたのは事実だが。

「で、結局なんで追われてたんだ？」

「・・・お見合い用の写真を撮らされるところやったんよ」

「お見合い？その年でか？」

「まだ早すぎると思うやろ？」

「・・・お見合いってなんです？」

知らないよな、ネギは。

「まあ、簡単に言えば、男女二人が会って話してみても、結婚してもいい相手か確かめる日本の風習だ。将来のパートナー探しともいえるな」

「へえ」

「で、何でまたお見合いなんかする羽目に？」

「うちのおじーちゃんの趣味なんよ」

またジジイか！

「・・・やめて欲しいか？」

「そやねー、まだうちには早いと思うんよ」

「だったら任せろ」

「へ？」

ネギたちに背を向け、携帯（自作）を取り出し、シエラにかける。

「・・・あー、もしもし？」

「・・・なんで携帯なんですか」

「・・・いやあ、人前だから」

「で、何の用です？」

「ああ。このかのお見合いをやめろって言うといってくれ
『ジジイにですか？』

「ああ」

『で、なんでまたあなたはこんなことを頼む羽目に？』

「ちよつと追われてるところを助けたんでな。ついでだ」

『・・・お人よしですね』

「別にいいじゃねーか」

『わかりました。学園長には私から言っておきます』

「助かる」

『・・・で』

「うん？」

『いつまで私はここで教師をしなければならいんですか？』

「そうだな・・・。多分もうすぐだろ」

『・・・本当ですね？』

「ああ」

『・・・わかりました』

携帯をなおす。

ネギたちのほうに向き直る。

「というわけで、これからはもう多分お見合いはしなくていいだろ」

「えっ！？今の短時間でOKなんですか！？」

「すごいわ〜」

「まあな。さてそれじゃ、俺はこれで」

「あ、さよなら〜」

「またな〜」

「・・・フツ。会えるといいな、また」

俺はその場を立ち去った。

サンライズ、いったい何者なんだ・・・（後書き）

「人間は解説するのだ、してみせるッ！」

『斉藤』

「リトルバスターズ！」より

・はりゃほりゃうっまっうー！

『ムジユラの仮面』

「ゼルダの伝説 ムジユラの仮面」より

・太古の呪術などに使われていたとされる仮面。

・月を落とすほどの力と、遊びを至上とする歪んだ人格が宿っており、この仮面をはめたものは力を得るが、大体ムジユラの遊び道具にされる。

『南斗獄屠拳』

「北斗の拳」より

・南斗聖拳の足技。上空へ向けてのライダーキック。

『火中天津甘栗拳』

「らんま2分の1」より

・火の中にある天津甘栗を火傷しない様にとることがこの拳の修行方法である。

・すばやく拳を繰り出せば火傷しない・・・らしい。

『ドツギヤ Zーン』

「ジヨジヨの奇妙な冒険」ほか

・（物理的・精神的問わず）すごく衝撃的なことがあったときに流れたりする字幕。

・ギユバ Zーンとか、ギヤイ Zーンとか、ズキュウウウウンとかが親戚。

『サンライトイエロー・オーバードライブ』
『山吹色の波紋疾走』

「ジヨジヨの奇妙な冒険」より

・『太陽の波紋』と呼ばれる。波紋の中では基本的な技。波紋を宿して相手を殴る。

くあの神ミコく

ちゃんと消滅してます

番外・暁のある一日

〔 Akatsuki Side 〕

朝、目が覚めるとそこにはたくさんのお目玉。
全部が一斉に、ぎょろりとこっちを見た。

「精神衛生上良くないよなあ、コレ」

今いるのは「スキマ」の中だ。

「ま、便利って言えば便利だが」

いろいろなものが入られる。自分ごと。

「さて、今日一日何をしようか」

こうして俺の一日は始まった。

麻帆良についたものの、俺はシエラと合流する気はまだなかった。

これは「とある計画」のためだ。

「つてもなあ……。暇なものは暇だ」

道を歩きながらぼやく。

ああ、賞金首時代が懐かしい……。。

「えくん！」

「ん？」

道端で子供が泣いていた。

「どうした、坊主。俺に言ってみな？」

「ひつ……。ひつく……。あ、あのね、大事なね、おもちゃがね、こわれちゃったの」

見ると足元には、砕けた人形。俗に言う戦隊物のロボットだ。

「……。転んだときに下敷きにしまったのか」

「……。きのうのたんじょうびに、買ってもらったの」

「……。そうか。友達に見せに行く途中だったのか？」

「……。うん……。見せるってやくそくしてたのに……。。」

……。よし。

「ちょっと俺に貸してみろ」

「……。何するの？」

「まあ見てな」

砕けたところを手で覆う。手をどけるとロボットは直っていた。

「あ、あれ！？何したの！？」

「なに、ちよつとした手品さ」

少しだけ時間を戻しただけだ。

「それよりもほら、これで友達のところに行けるだろ？」

「うん！じゃあね、きれいな目のお兄ちゃん！」

そういつて男の子は駆けていった。

「次は転ぶなよー！」

「綺麗な目・・・か・・・」

「なあ、綺麗な目だってよ、皆・・・」

また、ぶらぶら歩いてくるよ。

「ちくしょー！」

「とれないよー！」

「かえしてよー！」

「・・・あん？」

子供が数人集まって騒いでいる。

見ると、木にボールが引つかかっているようだ。

「・・・はあ・・・」

今日は何だもの日（人助的な意味で）か？

「おう、どうしたんだ？」

「・・・お兄ちゃん、だれ？」

一人だけの女の子が尋ねてくる。

「ちょっと通りかかっただけの普通の人さ」

「ねえ、お兄ちゃんならあのボール取れる？」

ま、あのくらいなら簡単だろ。

・・・といつても5メートルはあるが。

「何であんなところにボールが？」

「みんながね、わたしのボールをとってかえしてくれないの」

「なるほど、で勝手にボールで遊んであそこについてか？」

「うん」

「おい、坊主たち。人のものを勝手に取って遊んじゃ駄目だ、って言われたことないのか？」

「あるよ、あるけど……」

「けど何だ？」

「……」

「からかうのが楽しいのか？」

「……うん……」

「そんなやつは嫌われるぞ？嫌わりたいのか？」

「ちがうよー！」

「だったら、きちんと謝りな。ほら、ごめんなさいって」

そういうと、五人ほどいた男の子たちは謝り始めた。

「……これで許してやれるよな？」

「……うん！」

「それじゃ……はっ、よっ、ほっ」

木を登っていく。

「ほら、ボールだ」

「わあ、ありがとうお兄ちゃん！」

「それじゃ、仲良く遊べよ」

「うん！じゃあねー！」

「ばいばいー！」

「……」

「はは、ありがとうだったよ、この俺に」

「この・・・俺に・・・」

「・・・久しぶりだよな・・・お礼を言われたのは・・・」

「『俺たち』の世界も・・・これだけ、優しかったら・・・」

で、今度もぶらぶらしていると・・・まあ、とにかくいろいろあったんだ。

人力運送する羽目になったり（ギガントックプレッシャーって便利だな）、

歌舞伎をする羽目になったり（素人を代理に使うなよ）、

消防士（！？）の真似事をする羽目になったり（いいのか！？それでもいいのか！？）、

本当に、いろいろ・・・。

「オウフ」

つ、疲れた・・・

「とつか・・・」

なんでこう、厄介なことが集まってくるんだ・・・。

「・・・姿変えよう」

俺は目立つらしいからな・・・。

「・・・誰もいないな」

気配はない。視線もない。

「・・・ハア！」

「・・・ま、これでいいか」

姿は、学ランの前を開けれ中にTシャツを着ている。
身長も170センチに。

まあ、ぶつちやけて言うつまんま『武装錬金』の『武藤カズキ』な
んだけどな。
・・・って

「にゃー」

「・・・猫か」

「にゃー」

「みー」

「・・・あれ？」

「にゃー」

「みー」

「にー」

「……どーしょ……」

増えてきたぞ……

「にゃー」

「みー」

「にー」

「みゃー」

こういふときは……

「何を隠そう、オレは猫招き（猫を呼ぶ的な意味で）の達人だッ！」

現実逃避だ。

がさっ

「……誰だっ!?!」

現れたのは、

「……」

ロボット少女だった。

「えーと、どちらさまでしよつか?」

「絡線茶々丸です」

え？エヴァの従者の？

「あ、えっとオレは」

・・・なんて名乗ろう。

「・・・暁って言います」

普通に名乗っちゃったよ。

「えっと、絡繰さんは何で」

あれ、口調が変わってるぞ、オレ。

あ、地の文も。

「この子達に餌を」

「へー。毎日やってるの？」

「はい」

「・・・手伝ってもいい？」

「はい、どござい」

「・・・」

「・・・」

しばらく無言で餌をやる。

「かわいいね」

「・・・そうですね」

「猫もだけど、そうやって餌をあげてる絡繰さんもかわいいと思っ
たよ」

「・・・！？」

あれ？動きが止まった。

「（エラー、エラー。謎のプログラムが自己繁殖中）」

「ん、どうかしたの？」

「・・・わかりません」

・・・？

「何故だか、あなたには茶々丸と呼んで欲しいです」

「まあ、それぐらいなら別にいいけど。・・・茶々丸さん」

「・・・」

あ、あれ？煙が出始めたぞ？

「それでは、わたしはこれで」

「え、あ、うん」

あ、そうだ。

「茶々丸さん、また明日！」

「・・・はい」

オレのある一日はこうして終わった。

番外・暁のある一日（後書き）

あ、あれ？なんでこんなことに？
ど、どうしてこうなった・・・。

〈解説ナド容易イ！〉

『スキマ』

「東方project」より

・八雲紫が操る空間。境界と境界の「すきま」。

『ギガンテックプレッシャー』

「King of Fighters」や「CAPCOM VS
SNK」より

・ルガルル・バーンシュタインの、相手を掴んでから壁際まで運び

(高速スライド)、そのまま壁にたたきつける技。

・ゲームによっては、パワーゲージにより一往復になったりする。

・あまりにステージが広いと、「これってただ運びたいだけじゃね？」というほど運ぶ時間が長くなる。

・そのためついた名前が『運送技』。

・あろうことか、格闘ゲームで似たような技を持つキャラを集めた『ルガール運送株式会社』というネタまで出来てしまった。

桜通りの吸血鬼

〔Sierra Side〕

明日から新学期です。

ネギは試験をクリアしたのですが・・・

（いったい、いつまで私はこうしていればいいのですか）

すまんが、もうちょっとだけ我慢してくれ

（だから、その『ちょっと』がわからないからこうして聞いているんですか？）

そうだな・・・もうすぐ、吸血鬼騒動が起きるだろ。それが終わったらだな

（・・・何を考えているんです？）

ネギのレベルアップを狙ってみようかな、と

（・・・私たちだけでは不十分、と？）

いや、それとは別方向のレベルアップさ

（はぁ・・・自分勝手なのは相変わらずですね）

うるせーよ

（やれやれ、そういうことなら仕方ありませんね）

頼むぜ

暁との念話を終えると、思わずつぶやいてしまいました。

「まったく」

「ん？どうかしたのかい？」

「いいえ、なんでも。．．ネギ、最後、いきますよ」

「は、はい！」

ちなみに、ネギの訓練は今も継続中です。

といつても、主に魔法の「使い方」を教えているんですが。

「『ナイツ・オブ・ミラージュ 魔気楼の騎士達』、三体展開」

騎士たちが現れ、剣を振り上げて三方向からネギに襲い掛かる。

「サキタ・マギカ 魔法の射手・セリエス・ルーキス 連弾・光の3矢！」

騎士たちの剣はネギの魔法でわずかに軌道をずらされ、当たらない。

「ふむ、最低限の力だけで剣の軌道をずらしましたか。はい、今日
はここまででいいでしょう」

「は、はい！ありがとうございます！」

礼をしてネギは去っていきました。

「ネギ君、だいぶ強くなったな」

「体術もあなたと少しは打ち合えるようになりましたしね」

「まあ、魔法使いとしてなかなかになったかなと思うよ」

「見習いとしては、ですけどね」

「はは、厳しいな」

「ですが、心のほうは・・・」
「・・・ああ」

まだまだ・・・ですね。

さて、新学期なのですが、

「ネギ、今日は身体測定です」

「あ、そうでした！みなさん、身体測定ですので、えと、あのっ、
今すぐ脱いで準備してください！」

「「「「「「「「「「」

・・・はあ。

「「「ネギ先生のエッチ〜ッ！！」「」
「うわ〜ん！間違えました〜！」

・・・先生としてもまだまだでした。

で、ネギと外で待っているんですが。

「ねえねえ、ところでさ最近寮ではやってる……あのウワサどう思う?」

「ああ、あの桜通りの吸血鬼ね」

……吸血鬼ですか。確かエヴァが起こしていたんですね。

「何かねー満月の夜になると出るんだって。寮の桜通りに……まっつ黒なボロ布につつまれた……血まみれの吸血鬼が……」

「キ……キヤーツ!」

「もー、そんな噂でたために決まってるでしょ」

「そんなこと言ってアスナもちよっとこわいんですよ」

「違うわよ! あんなの日本にいるわけないでしょ!」

「それはどうかしら、神楽坂明日菜」

「え?」

エヴァですか。

「ウワサの吸血鬼はあなたのような元気でイキのいい女が好きらしいわよ……。十分気をつけることね……。ふふ」

……どうしてこれではれないんでしょう?」

怪しさ満点じゃないですか。

「え……。!? あ、はあ……」

「あれ……。?」

おや、ネギも何か気づいたようですね。

「そういえば、最近また新しいウワサを聞くんだよね」
「え？」

ん？

「なんかね、琥珀色の目のカツコイイ男の人が、困ったときに現れるっていうウワサなんだけど」

・・・ 暁・・・ 何やってるんですか・・・

「あゝ、ウチその人にあつたんよ」

「え！ホント!?!」

「うん、名前も教えてくれたえ」

・・・ あのとときですか・・・

「な、なんていう名前なんですか？」

「あれ、本屋ちゃんも興味あるの？」

「い、いや、その・・・」

「のどかはその人に危ないところを助けられたんです」

「はうつ!?!」

「えゝ、ホント!?!」

「まゝそれは後から聞くとして、名前なんていうの？その人」

「暁ってゆーてた」

「へえ、かつこいゝ!」

「暁さん・・・」

私にこんな仕事を押し付けておきながら・・・

暁・・・ 今度あつたら殴りますよ・・・

一方、そのころの暁は。

「……う、寒気が……」

「どうしたの？」

「な、なんでもねーよ、婆さん。それより、今日はこの先の神社まででいいのかい？」

「……本当、毎日おぶつてくれて感謝してるよお、あなたには「
気にすんなって」

（……はあ、一発殴られないと駄目か……）

「先生ーっ！大変やーっ！まき絵が……まき絵がー！」

「何！？まき絵がどーしたの！？……っつて」

ドアや窓を開けたらAの面々が見たのは、顔面が床にめり込んだネギでした。

私がつさに頭を地面に叩き付けたからなんですがね。みんなが下着姿で出てきたからです。

「わー！先生大丈夫ー！？」

死んじゃいませんよ。・・・多分。

で、復活したネギは生徒に残された魔力を感じ取り、それを追うことにしたのでした。

・・・一人で抱え込む癖はどうかしないといけませんね。

〔Other Side〕

夜空に大きな満月が浮んでいる。

「じゃあ先帰っててね、のどかー」
「はいー」

桜の花びらが夜風に舞う。

「フンフン」

通りに響くのは風の音。

「あ・・・桜通り・・・」

少し風が強くなる。

「か、風強いですねー・・・。ちょっと急いっちゃうかなー」

のどかは怖さを紛らわそうとする。

「こ・・・こわくない〜・・・こわくないです〜こわくないかも
〜」

桜が、ざわり、と揺れた。

「こわっ・・・！・・・？」

何も気づかないならよかった。が、のどかは気づいてしまう。

「え・・・」

街灯の上に、黒い布をまとった女が立っているのを。

「ひ……」

「27番、宮崎のどかね……。悪いけど少しだけその血を分けてもらおうわ」

「キヤアアアッ！」

「待てーっ！」

「！！」

その声で女は止まるが、のどかは恐怖のあまり気絶してしまっていた。

「僕の生徒に何をするんですかーっ！」

ネギはその場に駆けつけ、魔法を放つ。

「魔法の射手・戒めの風矢！！！」

サキタ・マギカ

アエル・カプトウーラエ

「あら、もう気付いたのね。」

レフレクシオー
「氷楯」

ネギの魔法は女の魔法に弾かれる。

(やっぱり、犯人は魔法使い……！)

魔法の衝突の余波で、女がかぶっていた帽子が吹き飛ばされ女の素顔があらわになる。

「へえ、驚いたわね。凄まじい魔力だわ……」

「えっ……。君は、ウチのクラスのエヴァンジェリンさん!？」

「ふふ……。さすがに『彼』の息子だけはあるわね……」

「！……何者なんですか、あなたはっ!?! 僕と同じ魔法使い

のくせに、何故こんなことを!？」

「簡単なこと、この世にはいい魔法使いと悪い魔法使いがいるってことよ、ネギ先生……?」

そうしてエヴァはネギへ向けて魔法薬を投げる。

フリーゲランネクサルマティオー
「氷結 武装解除!！」

だが、

「!風楯!！」
レフレクシオー

今度はエヴァの魔法がネギの魔法に弾かれる。

「あら、いい反応ね。十歳とは思えないぐらい……」
(このぐらい、まだシエラさんの『騎士』のほうが対応が難しい!・
・それにしても……)

「なんや今の音!？」

「あつネギ!」

「アスナさん!このかさん!」

「ふふ……」

その騒ぎに紛れてエヴァは闇に消えていく。

「あつ、待て!」

ネギはそれを逃がすまいと二人に頼む。

「二人とも、宮崎さんを頼みます!僕はこれから事件の犯人を追いますので、心配ないですから先に帰っててください!」

「え、ちよつとネギ君・・・」
「じゃあー！」

ドンッ！と音を立ててネギは走り去った。

「ネギく・・・うわっ、はやー！」

「ちよつとネギーーッ！」

すでにネギは夜闇の向こうに行っていた。

「・・・」

「・・・とにかく、のどかを運ばなきゃね」

そこに、一人の男が現れた。

「よう、また会ったな」

「あ、アンタは・・・」

「よう、また会ったな」

とりあえずそう声をかける。まあ、一部始終見てたんだが。

「あ、アンタは・・・」

「サンライズさんや」

そう、今の俺の姿は仮面の変人・・・ゲフンゲフン、仮面の男、サンライズだ。

ちなみに今日の仮面は『石仮面』だ。

「吸血鬼つながりということだ」

「はあ？いきなり何言ってるの？」

「気にするな」

「どうしてここにおるん？」

「夜の散歩をしていたら音が聞こえて、来てみたらネギが走り去って行くのを見てな・・・その子を運ぶんだろ？俺が運んでやるよ」

「え、いいの？」

「これぐらいいたいたした事じゃない・・・ほら、行け。ネギが気になるんだろ？」

「っ！・・・ありがとう」

アスナは走り去っていった。

さて、アスナは自分から『裏』に首を突っ込んでいこうとしているぞ・・・どうする、タカミチ？

で、その後のどこを届けた俺は、ネギのところへ急いだ。

ネギは茶々丸にあしらわれていた。やはりまだ一人では戦えないということだろう。

それにしても早く着きすぎたな。アスナはまだこっちに向かっている途中だし。

あ、ネギが捕まった。

「私はあなたの父、つまりサウザンドマスターに敗れて以来魔力も極限まで封じられ、もくもく15年間あの教室で日本のノー天気な女子中学生と勉強させられてるのよ!」

あ、エヴァの地が出た。・・・やっぱりあんまり性格変わってないな。

「・・・私は『あの人』を探さないといけないのに」

・・・俺じゃないよな、うん。だってほら、もう600年ほど昔の話だぜ?そんな長い間ずっと探してるわけ・・・ないよな。ないはずだ。きつとそう。たぶん。ありえないって、H A H A H A。

と、俺が現実逃避しているうちにネギの血を吸っているエヴァにアスナキック炸裂。．．．なあエヴァ、蹴り飛ばされて「あぶぶぶぶーっ」ってお前．．．。

あ、エヴァがキレた。アスナと打ち合ってる、が．．．。おい、いくら魔力がないとはいえエヴァは俺が鍛えたんだぜ？それに生身でついていけるアスナ．．．．．ちよつと不気味。

あなたには言われたくないと思いますが

シエラ．．．。

おや、エヴァたちは一旦引くようだな。これだけ長引けば、まあ仕方ないか。

「勝ったと思わないことね．．．」

もう勝負ついているから．．．．．じゃねえって。

うーん、最近『記憶』から電波が飛んでくることが多いぞ。

次の日。

「おう、どうしたタカミチ」

俺はタカミチにシエラを通じて呼び出されていた。

「……どういづつもりです」

「何のことだ？」

「何故アスナちゃんをエヴァに関わらせたんです！」

ああ、シエラに教えられたか。

「やれやれ、まだ分かっていないようだな、タカミチ。本当にアスナがずつと魔法に関わらず生きていけると思っていたのか？ そんなことはネギに関わった時点で不可能になったんだぜ？」

「そんなことは……！」

「あの性格でネギと無関係を貫けると思ってたのか？ そりゃ無理ってもんだろうよ。なんせネギの夢は……」

どうあっても『裏』に関わる。

「……くっ！」

「あのな、タカミチ。他人の人生ってのは軽いもんじゃねえ。お前ごときが命を懸けても守れる保障はありゃしないんだ」

そう、せいぜい自分のついでに助けるぐらいが関の山だ。

「他人の人生なんて、自分の人生を捨てても守れないことのほうがむしろ多い。それは分かってたはずだぜ？」

「それでも、それでも僕は……！」

「……お前にできること、できないことをよく考えな」

そうしたら・・・

しばらくすると、あのオコジヨが学園に入ってきた。・・・やっぱ
リネギはアスナと仮契約すんのかね。

まあ、あの動きだったら並みの相手には負けないだろうが。

・・・待てよ、オコジヨが来たということは、もうすぐか？

二日後、エヴァに言い負かされたネギは勝つためにアスナと仮契約
した。

やれやれ、エヴァに釘を刺される前にタカミチに相談できただろう
に。

さて、これからだ。

まずは、そのネギの『一人で何でもできるといふ自信』と『魔法に
対する幻想』をぶち壊す！

・・・また電波か・・・。それにしても、これじゃあ俺はストーカー
だな。ずっと見張ってるのも疲れたし、少しぐらい目を離しても
大丈夫だろ。

〈Negi Side〉

カモ君の言つとおり、まずはどちらか片方をやっつけようといふこ
とになった。そして、エヴァンジェリンさんと茶々丸さんを尾行し
ていると。

「茶々丸って奴の方が一人になった！チャンスだぜ兄貴！！一気にボコつちまおう！」

「だめだ、人目に付くとまずいよ。もう少し待って……」

「な、なんか辻斬りみたいでイヤね」

もう『魔法』に関わる人を作らない。僕は『立派な魔法使い』マギステル・マギになるんだから。

そうして、茶々丸さんを尾行していたけど、

「お姉ちゃんありがとう」

女の子の風船を取ってあげたり、

「あ、茶々丸だー」

「茶々丸ー」

子供たちに人気だったり、

「いつもありがとう茶々丸さん」

おばあちゃんを運んであげたりして、とても悪い人（え、ロボットだったの！？）には見えなかった。

そして、ドブ川の真ん中に仔猫が箱に入って流されていたとき、茶々丸さんは気にせず川に入ろうとした。けど、

「待った、茶々丸さん！オレがやるよ、それ」

そういつて川の中に入っていった人がいた。

学生服が汚れるのも構わずに仔猫を助けたその男の人は、茶々丸さ

んと知り合いみたいだった。学生服の人は楽しそうに茶々丸さんと話している。茶々丸さんも、少しだけ笑っているような……。

「それにしても、よかった。茶々丸さんが川に入る前に通りかかって」

「ありがとうございます」

「いって。それじゃ、あそこに行こうか」

「はい」

そういつて二人は歩き出す。

「……………」

「……………」

「メチャクチャいい奴じゃないのーっ！しかも町の人気者だし！！」

「え……えらい！！」

本当に悪い人には見えない。なんで……

「あ、ほら！見失っちゃいますよ、兄貴！」

僕たちはあわてて二人を追った。

「にゃー」

「みー」

「みゃー」

「にー」

「なー」

茶々丸さんと学生服の人は猫にエサをあげていた。

周りには鳥も来ている。

「……………（ほろり）」

「……………いい人だ……………」

僕はこの人を狙うのはやめようと少し思ったけれど、この後のカモ君の説得で覚悟を決めた。
しばらく二人は何か話していた。

「それじゃ茶々丸、また明日！」

「……………はい」

学生服の人がいなくなるのを待って僕たちは壁の影から出た。

「……………こんにちはネギ先生、神楽坂さん」

僕たちが姿を現すと、茶々丸さんは立ち上がった。

「……………油断しました。でも、お相手はします……………」

「茶々丸さん、僕を狙うのはやめていただけませんか？」

「申し訳ありませんネギ先生。私にとってマスターの命令は絶対ですので」

最後の頼みも聞いてくれなかった。

「うう、仕方ないです・・・」

小声で、アスナさんにさっき言ったとおりにしてくれるように言う。

「・・・では、茶々丸さん」

「・・・ごめんね」

「はい。・・・神楽坂 明日菜さん・・・いいパートナーを見つけましたね」

「行きます！！シス・メア・バルスベル・デケム・セクンダヌニストラ・ネギイ契約執行 十秒間！！カケラザカネギの従者『神楽坂 明日菜』アスナ！！！！」

契約執行を受けたアスナさんが飛び出していく。それと同時に僕は詠唱する。

「ラス・テル マ・スキル マギステル！」

茶々丸さんを横から見る位置にかけながら詠唱を続ける。

「ウンデキム・スピーリトウス・ルーキエウンテイス・サギテント・イニミケム光の精霊11柱、集い来たりて敵を討て」

放つ瞬間少し迷う。でも、カモ君の言葉を思い出し、迷いながらも魔法を放った。

「サギタ・マギカ魔法の射手 セリエス・ルーキス連弾・光の11矢！！」

「……！追尾型魔法至近弾多数……よけません」

魔法の矢が、茶々丸さんに迫る。

「すみませんマスター……。もし私が動かなくなったらネコのエサを……」

その言葉を聞いてとっさに僕は魔法の進路を変えようとした、けど、

「危ない！」

その声に気をとられて、魔法から意識がそれてしまった。
茶々丸さんをさっきの学生服の人が突き飛ばして、その人は、

「がつ……！！」

僕の魔法に全身を貫かれた。

「え……？」

ゆっくりとその人は倒れていく。左胸に穴が開いているのが見えた。
自分の全身から血の気が引いていくのが分かる。

仰向けにその人は倒れて、その拍子に、ごろり、と首がこちらを向いた。

焦点が合わない目がこちらを見た。

＼ Akatsuki Side 〵

あれから姿を変えたので、ちょっとそこから辺を歩き回っていた。そうして、しばらくうろついているよ。

「ん？あれは・・・茶々丸さん？」

どうやらドブ川に入って仔猫を助けようとしてるみたいだ。でも、そんなこと女の子にさせるべきことじゃないよな。

「待った、茶々丸さん！オレがやるよ、それ」

「暁さん・・・」

「よっ」

ドブ川に飛び降りて、仔猫の箱を拾い上げる。

「もう大丈夫だぞ〜」

そのまま川から上がると、拍手で迎えられた。

「やるな、兄ちゃん！」

「かつこいー！」

「偉いわねえ」

なんだかくすぐつたい。

「いやあ、お似合いだね、お二人さん！」

「え！？」

突然のその言葉に驚く。茶々丸さんのほうを見ると、

「……………(しゅ〜)」

煙、煙出てるって！

「ね、ねえ茶々丸さん。この子、あの場所に連れて行くこうか」

「……………そうですね」

反応がちよっと遅かったけど、(多分)大丈夫！

「それにしても、よかった。茶々丸さんが川に入る前に通りかかって」

「ありがとうございます」

そういって、ペこりと頭を下げる茶々丸さん。

「いって。それじゃ、あそこに行こうか」
「はい」

そして、オレたちはあの場所に向かった。

「……………」
「……………」

二人で無言でネコにエサをやる。

ここで出会ってから、何回か茶々丸さんとネコにエサをやるうちに、この時間は無言だといつの間にか決まった。

「よし、今日もよく食べたな」

ネコにエサをやり終わった後、そう言っつてネコを一匹ずつ抱えては撫でる。すると、

「……………」

茶々丸さんがじっとこっちを見ていた。

「……………？茶々丸さん、どうかした？」

「……………いえ。……………」

そうは言っても、茶々丸さんはずっとこっちを見ている。というより、ネコを撫でていているオレの手を見ている。……………この光景、昔に見たことがある。ということとは……………」

「はい、茶々丸さんの分」

そう言つて、茶々丸さんの頭を撫でてあげた。

「……………」

オレに撫でられている間、ずっと茶々丸さんは下を向いていた。あれ？違つたかな？

「……………イヤだった？だつたらゴメン」

「いえ……………」

「あ、よかつた。茶々丸さんずっと撫でて欲しいみたいだから」

「……………茶々丸」

「え？」

なんだつて？

「私を茶々丸と呼んでください」

えつと、それはつまり……………」

「呼び捨てにしるつてこと？」

「……………はい。……………自分でも何故だかは分かりませんが……………」

「・・・」

「・・・。。わかつたよ、『茶々丸』」

そういって、笑いかける。返事を待っている茶々丸が、どこか不安そうに見えたから。

「・・・よし、今日はここでお終い！さ、散れーお前たちー」

そう言ってネコや鳥を散らす。そうしないとどこまでもついてくるからだ。

「・・・それじゃ『茶々丸』、また明日!」
「・・・はい」

いつもとちよつとだけ違う別れの言葉を交わして、オレはその場を立ち去った。

そして帰る途中、オレは聞いた。

「契約執行
シス・メア・バルスベル・デケム・セクンダストラ・ネギイ

十秒間!!!

ネギの従者『カクラザカ神楽坂

明日菜』!!!」

な、まさか茶々丸と戦うのは今日だったのか!? くそ、こういう時こそ『記憶』が必要な時なのに!
それに、何故ネギたちの気配を感知できなかったんだ!? くっ、分らないことだらけだ!
オレは全速力で今来た道を駆け戻った。

「魔法の射手 サキタ・マジカ 連弾・光の11矢!」

オレが辿り着いたのは、ネギが魔法の矢を放つ瞬間だった。

「危ない!」

オレは咄嗟に茶々丸を突き飛ばした。突き飛ばしてしまった。
オレはさっきまでそんなことするつもりはなかったのに。

「がっ……!」

全身が貫かれる。心臓を撃ち抜かれたのを感じた。
地面に倒れる。首がごろりとネギのほうを向いた。
ネギの悲鳴が聞こえる。

(まずい。このままではネギは壊れてしまう)

立とうとする。この程度、かつてのものに比べれば大した事はない筈だった。

だが、オレの体は動かない。

(まさか、この体は……!)

『完全に』武藤カズキのものに変化しているということか。
だから、ネギたちの気配も分からなかった。『力』もほとんど使う
ことすら思いつかなかった。無意識に茶々丸を突き飛ばしていた。

(だったら……)

予定が狂うが仕方ない。オレは元の姿に戻った。

体が光った。傷がふさがる。背が伸びる。瞳の色が変わる。服が変わる。

「「「え．．．」」」

その場にいた全員が言葉を失った。

「茶々丸、これが本当の俺の姿だ。騙すような真似をしてすまない」
「暁．．．さん」

暁は今度はネギのほうを向く。

「ネギ、久しぶりだな」
「．．．．．暁さん．．．．魔法関係者だったんですか．．．？」

その言葉に暁は頷く。

「そつだ。だが、こんな形で会う羽目になるとは思わなかった。これはいつたいたいということなんだ？」

「え．．．？」

「お前は茶々丸を『殺そうとした』。そつだな？」
「．．．それは違います」

ネギは否定する、が

「いいや。あれは確実に茶々丸を『殺せる』威力だったぜ。俺はあれを喰らったから分かる」

「……………」

黙ったネギに暁は言う。

「ネギ、お前はエヴァンジェリンと戦うのか？」

「はい。……………それも知っているんですか？」

「ああ。……………ネギ、一つ問うが、お前がなりたいものは何だ？」

「『立派な魔法使い』……………です……………」

「お前がなりたい『立派な魔法使い』はこんな戦い方をするのか？」

「え？」

「確かにこうやって敵の戦力を確実に削いでいくのも、一つの『立派な魔法使い』の戦い方だぜ？だが、それでお前は納得できるのか？」

更に続ける。

「現にお前は茶々丸に放った魔法を直前で逸らそうとした。そんな

お前がなりたい『立派な魔法使い』はこんなことはしないだろう」

「……………」

「そして、相手を『殺す』ことも」

「……………」

「よく考えな、ネギ。一度ゆっくりとな」

「……………はい」

「……………あ、ネギ！待ちなさいよ！！」

去っていったネギをアスナも追っていった。

「さて、茶々丸」

「何でしょう」

今度はまた茶々丸のほうに向く。

「俺のことはエヴァンジェリンには黙っていてくれないか？」

「分かりました」

「……理由は聞かないのか？」

「……あなたは理由がないのにこつこつことをする人ではありません」

それを聞いた暁は笑った。

「ありがとう、茶々丸」

その笑顔を見た茶々丸は言った。

「……やはりあなたは暁さんなのですね」

「は？」

「……笑顔が一緒ですから」

「……」

珍しく暁が呆然とする。

「それでは」

「あ、ああ……またな」

立ち去る茶々丸を暁は見送り、スキマに消えた。

桜通りの吸血鬼（後書き）

くっ、キャラが暴走する！

〈解説解説ウ！〉

『石仮面』

「ジヨジヨの奇妙な冒険」より

・太古に作られた人を吸血鬼にする仮面。

・血が染み込むと仮面から針が飛び出し、人間の脳の特殊な場所を突いて吸血鬼化させる。

・『柱の男』カーズが自らを究極生物にするために作った。もともとは生物の更なる力を引き出すためのもの。

『暁の身体変化』

・肉体を『完全に』別物にする。

・オリジナルがいる場合、それに性格が影響される。能力も同様。

番外？ 暁とシエラの休日

〔 Akatsuki Side 〕

AM 09:13

あれから、ネギはいろいろ考えているようだ。

目指す『立派な魔法使い』の在り方。自分がしたこと。するべきこと。

アスナも一緒に考えてやっているらしい。本当に相性がいいな。

それにしても、なぜ俺は……………

「レストランで料理をしてるんだ？」

別にいいじゃありませんか。暇だといったのはあなたですよ

シエラ、確かに俺はそう言ったが。

「だからといって何故……」

「曉さん、カルボナーラひとつです」

「はいはい……」

こうなったのはシエラに嵌められたからだ。

暇だったらここに来てほしいといわれたから来てみればこの有様だ。

「ま、金も手に入るし、いいか」

半ば強引に自分を納得させた。……本当は仕事の必要ないぐらい金は貯めてあるんだがな。

〔Sierra Side〕

AM 09:21

さて、すこし曉に仕返しをしたことですが、どこかに出かけまじょうか。

「とは言ったものの、何か嫌な予感がします」

しかし、外に出なければ本も買えません。ここにはネットつながってないですし。

外に出ると、日差しが私の目を眩ませた。

「・・・」

しばらく黙って日に当たる。

ここしばらく、休日は家にこもっていましたがね。眩しくて仕方ありません。

「・・・さて、行きますか」

とりあえず目指すのは本屋です。

「あら、シエラさん」

「こんにちは、奥さん」

「おう、姉ちゃん。今日も一人なのか？」

「そうですね親方さん」

「あああああシエラさん！僕と今日一緒に」

「お断りします」

「だっはははは！断られてやんの！」

「昨日玉砕したのはあなたでしたよね」

「・・・orz」

近所の人次々と声をかけてくる。

さすがに近所の人との付き合いは私でもやっているが、

「シエラさああん！俺だ！けっk「獅子戦吼」げふう！」

なぜ何処からともなく変態が寄ってくるんでしょう。

「ふはは！次は俺g「連牙弾」ぐおえ！」

「おっしゃ、こんd「臥龍空破」ぎゃば！」

「「「シエ」鷹爪落瀑蹴」あぶう！」

「「「「そk「殺劇舞荒拳」ぶべら！」

すぐに変態の山が出来上がりました。

「相変わらず容赦ないなー、姉ちゃん」

「容赦する必要などないでしょう？」

「ま、確かにな！」

「それでは、いつも通りお願いします」

「おう、警察に渡しとくぞ」

「はい。それでは」

やれやれ、だからあまり外に出たくないのです。

〔 Akatsuki Side 〕

AM 10:19

「少しだけ憂さが晴れた気がする」

最近シエラが精神障壁を覚えて向こうのことが分かりづらくなったから、今は詳しくは分からんが。

「まあ、破ろうと思えば関係ないことなんだがな」

ただし、後が怖いのでしないが。

「ハンバーグ一つとお子様ランチ一つです」

「やれやれ」

働きますか。

フン！セイ！ハア！オオツ！オオリヤ！セツ！シツ！

ウオオオオオ！・・・テテーン

P M 1 2 : 0 6

というわけで休憩時間だ。

何？料理してる声じゃなかった？

勘違いするな、あれは俺じゃない。

あれは、

「フハハハハ！完璧だったな新入り！」

・・・俺の隣にいる馬鹿だ。てんぢやう

「なんで『俺が料理している時に』掛け声をかけるんです？」

「む、邪魔だったか？」

「当たり前だ馬鹿」

おう、敬語を忘れるほど邪魔だった。

「……もうやらないで下さいよ」

「善処する」

「あ、あ？今何だったコラ。磨り潰すぞこの野郎」

「さあせんつしたあ！」

「よし、許す。「暁さーん!!」「……ん？」

なんか店員2人（女子）が走ってくる。

「なんだ？」

「今噂になってる琥珀色の目の男の人って暁さんですよね？」

「……多分な」

「「きゃ〜!!」「」

なんか嫌な予感が……

結局休み時間のほとんどをこの二人に費やしたのだった。畜生、俺の昼飯……。

Sierra Side

PM 02:37

今私は本屋にいます。
ですが。

「だからここにこの節が係って・・・」
「ふむふむ」「ふむふむ」

・・・なぜ授業をしているんでしょうか、私は。

ぞまーみる

殴りますよ、暁。

「せんせー質問です!」

「はい、何ですか?」

本屋で生徒に見つかって、質問を受けて答えていたらこうなってしまいました。

しかも後から後からやってきます。

無常にも時間は過ぎていくのです。私の休日が……………。

Other Side

PM 16:49

「・・・よう、シエラ」

「・・・暁ですか」

夕暮れの中2人は偶然出会った。
2人とも疲れているようだ。

「・・・はあ」

2人同時にため息をつく。

「・・・災難だったな、お互い」

「・・・すみません」

「まあ、いいさ。たまには」

「たまには、ですか」

「……………はあ」

またため息をついた。

「……………後少し頼むぞ」

「……………分かりました」

「……………はあ」

「今日は疲れたな……………」

「はい……………」

そう言つて二人は夕焼けを見て黄昏るのであった。

今日の教訓。

人の嫌がることはやめませう。

番外？ 暁とシエラの休日（後書き）

（解説）

今回の技はすべて『テイルズオブシリーズ』（特にTOEから）です。

『獅子戦吼』

・獅子形の鬨気を相手に叩き付ける。相手を吹き飛ばす技のことが多い。

『連牙弾』

・素早い拳での連打。片手ですべて放つ。

『臥龍空破』

・アッパーからつなぐジャンピングアッパー。

『鷹爪落瀑蹴』
たしなすしでくはくしゅう

・上空から気弾（？）を二発放った後、急降下蹴り。

『殺劇舞荒拳』
ころげまわらげこけん

・拳とか蹴りとかいろいろ連携する技。シエラが放ったのは最後炎が出る奴。

再会

〔 Akatsuki Side 〕

週明け、エヴァが風邪を引いたらしい。

……何故？もしかして、また布団を蹴っ飛ばして寝てたんじゃあ……

「……有り得るな」

少し様子を見に行ってみるか。無論遠くから。

ネギがエヴァの様子を見に来ていた。果たし状らしきものも持っている。

「果たし状とは……古風だな」

というか、何故知っている？

「おや、茶々丸が出てきた」

ネギに看病を任せて出て行った。

「……無防備というか、人（？）がいいというか」

さて、ここでネギが夢を覗くのか？

……夢を覗くってかなりのプライバシー侵害のような気がするが……。

まあ、憧れの人の手掛かりがようやく掴めるのだから、分からないでもないんだがな。

「ふんふん、やはり覗くのか」

ついでに俺も覗いてみよう。ナギにどうやって負けたのか、そこんところ詳しく知らないからな。

で、覗いてみたんだが。

浜辺でナギとエヴァが対峙している。エヴァは幻術を使わず、15の姿のままだ。

「ついに追い詰めたわよ『千の呪文の男』サウザンド・マスター。この極東の島国でね」

ふーん、片手に吊り下げているのがチャチャゼロか。なかなかの術の組み方だな。

「今日こそ貴方を打ち倒し、マスター・オブ・アビリティ『万能の支配者』の行方を聞かせてもらおう」

「……やっぱ俺探してたのかー！いや、嬉しくないわけではないんだがな……」

で、少しの会話の後にナギに襲い掛かったのだが。エヴァ、あのナギの顔に気付け。絶対何か企んでるから。

「えーとこの辺だっけ……」

「……ああ、前に俺が一度ナギを嵌めた手か。ボスンツ！」

「きゃあ！」

やばい！深淵の入り口（落とし穴）だ！……何だ今の。

そんな間にもナギは落とし穴にネギやニンクを入れまくっている。外道だ。

「卑怯者！魔法使いなら魔法で勝負しなさい！」

「やなこった。俺は本当は5、6個しか魔法知らねーんだよ」

ああ、魔力の練り方は覚えたが、結局最後まで術はほとんど覚えなかったからな。

「魔法学校も中退だ。恐れ入ったかコラ」
「なっ……!」

威張ることじゃねえって。

ネギも呆気を取られているようだな。(ちなみにネギからはこっちが見えない)

「それに俺あいつの居場所知らねーんだよな」

……まあ、異世界とか飛んだこともあるしな……。
誰にも行方を知らせていないから仕方ない。

「付きまとわれるのも面倒だから、変な呪いをかけてやるぜ。えー
とマンマンテロテロ……」

うわぁ……。

「や、やめて!これからは自分で探すからあ!」

インフェルヌス・スコラスティクス
「登校地獄!」

「いやぁぁぁぁぁ!」

ん？まだ夢が続いているぞ？

ここは・・・森のようだ。暗い森をエヴァ（10歳）は一人で歩いている。

それにしてもどっかで見たような気がするな、この森。

・・・待てよ、このエヴァの姿と両手両足に枷があるということは・

・・・。

遠くに焚き火が見える。やっぱりか・・・。

ネギの魔法に干渉し、人物の顔だけばやけさせる。

焚き火をしていた男はこつちを向いて笑った。

「よう。こんなところまで散歩か？」

それは、俺だった。

どうやら、夢はここで終わるようだ。

俺も精神接続を切るか。

が、エヴァの中で俺がここまで大きい存在だとは思わなかった。すこし、考える必要があるかもな・・・。

で、ネギは夢を覗いたことがエヴァにバレて厄介なことになるのだ
った。

・・・なんか俺だけ何もなくて悪い気がする。

翌日、停電の日。

今日で『計画』の最後だ。

ま、夜まで待たなきゃいけないんだがな。

夜、停電が始まった。

俺は気配遮断の領域を張り、空中で待機している。

(シエラ、侵入者のほうは?)

安心して下さい、暁。一人も通しません

(それは助かる)

今日で最後ですからね。出し惜しみはしないつもりです

(頼むぜ)

念話を切る。

「さあネギ。お前が出した『答え』を見せてみる」

ネギは一人でエヴァと戦うことに決めたようだ。

「ふん、アスナは連れて行かない……か」

それがお前が決めた道なら構わない。

だが、

「果たしてどこまで戦えるかな」

「む、生徒を人質（操り人形）に取られているな」

さあ、ここで一つ目の決断だ。

『魔法使い』として戦うか、『先生』として助けるか。

襲い掛かってくる生徒に対して、ネギは。

「ほう、『眠りの霧』無詠唱か」

しかも至近距離発動。さらに自分に影響がないように風でフォロームしている。成長したな。

「まさか一発で全員を眠らせるとは。答えは『両方』……か」

だが、ここからは別格だぞ。

茶々丸とエヴァに押され、逃げるネギ。だが、

「……何か狙いがあるな、あの顔は」

学園の端で、ネギの仕掛けた捕縛結界が作動する。

「だが、ここで気を緩めるなよ」

俺の呟きが聞こえたわけではないが、ネギはさらに『戒めの風矢』を発動する。

「……まだだぜ、ネギ」

エヴァが魔力で強引に拘束を解いた。
茶々丸のも同時に解かれ、杖も奪われて捨てられたネギは窮地に陥る。

「ん。あれはアスナか」

向こうからこっちにダッシュで向かってくる。
で、アスナはオコシヨが出した閃光に紛れて茶々丸をやり過し、
エヴァに飛び蹴りを喰らわせた。
だからエヴァ……「あぶるばあっ」ってなんだよ……。
なんか一気に気が抜けた。

「やれやれ、それにしてもあの『魔法完全無効化』は凄いな」

真祖の障壁すら簡単に消すんだからな。

そんな呟いてるうちに、ネギとアスナが改めて仮契約をし、最終ラウンドだ。

アスナと茶々丸はデコピン合戦、ネギとエヴァは同種の魔法を撃ち合っている。

最終局面、どうやらここらで介入した方が良さそうだな。

ヨウイス・テンベスターズ・フルゲリエンズ
「雷の暴風！」

ニウイス・テンベスターズ・オブスクランス
「闇の吹雪！」

どうやらこれがネギが使える最強の呪文のようだな。

だが、どうやらエヴァがぎりぎりですつ勝つ・・・か。

「ハックシユンー!!」

・・・くしゃみで魔力暴走・・・ね。ハハ、笑うしかねーよ。それで真祖に勝つとか。

とにかく、ネギの魔法がエヴァの魔法に打ち勝った。

「く、やってくれたわね……」

煙の中からエヴァが現れる。

……全裸は避けたがズタボロには変わりないな。

暁、停電から復旧します！

停電が終わるだど！？予定より早いぞ！

「きゃんっ！」

魔力を失ったエヴァが落ちていく。

「エヴァ！」

俺は飛び出した。

空中でエヴァを抱える。

「暁………？」

「ああ、久しぶりだなエヴァ」

「あ、ああ、ううう……暁、あかつきい……」

「あーあー、泣くな泣くな」

あやすように頭を撫でる。

「暁さん！」

「ネギ、答えを聞きに来たぞ」

「……はい」

エヴァを抱いたまま問う。

「お前が目指す『立派な魔法使い』はどついうものだ」

「人を助けるものです」

「それは全てを救う正義の味方か」

「いえ、自分の目に映る人々を守るので精一杯だと思います」

「そのために人を殺せるか」

「・・・出来るなら、殺さずに済ませたいと思います。」

僕は、最後まで殺さずにすむ方法を探します

それでも見つからなかったときは・・・分かりません」

「甘い、が・・・ま、合格点かな」

「暁、どついうこと？」

腕の中でエヴァが尋ねてくる。

「ネギに覚悟を持って欲しかったのさ。ネギを目指すのならな」

「そのために私を利用したの？」

「まあ、そついうことだな」

「ひどい！私ずつと暁が来るのを待っていたのに！」

「は？俺が来るのを？」

なんでだ？

「だつてナギが『三年したら暁に迎えに行かせるから』つて・・・」

「聞いてねーよ！」

あの野郎・・・。伝言頼むとかいくらでもやりようはあつただろ
うが！

「でも、暁がずつと来ないから自分で・・・」

「あー、でもさ。俺、噂になつてただろ？」

「聞いてないわよ？」
「は？」

いや、教室で聞いただろ。

「マスターは暁さんに会ったらどうするかばかり考えて噂を聞いて
いませんでした」

「そうだったのか、ありがと茶々丸」

「そ、そんなことない！」

「マスターはそれは楽しそうに想像を……」

「やめてー！」

さて、この主従はしばらくほっとくとして、

「アスナ」

「あ、な、なに？」

「……覚悟はあるのか？」

「え？」

きよとんとする。やはり分かっているようだな。

「魔法に関わって死ぬかもしれないぞ。それでも来るのか？」

「死ぬって……」

「俺が冗談でネギに『人を殺す覚悟』を尋ねたと思っているのか？」

「……構わないわ」

「何故だか聞いてもいいか」

「だって、ここで逃げたら私は絶対に後悔するもの」

「魔法の記憶を消して忘れることもできるんだぞ？」

「それでもよ。必ず私は心のどこかでそれを後悔する」

「……やれやれ、ネギといい、アスナといい、似たもの同士

だな」

まったく……そんな目で見つめられたら認めるしかないじゃないか。

こうして、吸血鬼騒動は幕を閉じたんだが。

(シエラ、結局あの復旧の速さは何だったんだ?)

ジジイの仕業でした

(よし、処刑してくれ)

喜んで

あー、ネギを心配するのはいいけど何でこんな手を使うんだ。

で、みんなが解散した後。

「あ、俺が先生になるって事伝えるの忘れてた」

ま、いいだろ。

学園長には『O H A N A S H I』すればいいし、ネギたちには明日知ってもらえばいいしな。

再会（後書き）

何故だ！なぜこんなにも話が進まない！

・・・ネギの意識改革しようとしたからですね。分かっています。

暁、説く。

〔 Akatsuki Side 〕

翌日。

「おいジジイ。生きて……」

そういつて俺は学園長室のドアを開けた、が

「……ないな」

うん、口からなんか出てるしな。涎とか魂とか。

「シエラ、やりすぎだろ……」

ちなみにシエラはもう俺の中に戻ってるので返事はない。

『記憶』の中に戻ったので『シエラ』という人格が消えたのだ。
外に出せば戻るが（

「まあ、書類はこっちで捏造じくぞうするからいいとして……」

もうこいつ要らないんじゃないかな。
いや、要るか。人身御供的な意味で。

「ネギ」

「あ、暁さん。どうしたんですか？」

教室に行く途中でネギに会った。

「いや何、今日から俺がシエラの代わりに、お前のクラスの副担任をすることになったってだけだ」

さらりと、爆弾を投下する。

「ええーっ！」

「む、嫌なのか？」

「き、聞いてないですよ！」

言っていないしな。

呆気にとられたネギを置いてさっさと歩き出す。

「じゃ、教室行くか」

「ま、待ってくださいよっ！」

さて、3 - A 前だ。

「じゃ、俺は外で待ってるぞ」

「はい、呼んだら入って来てください」

そうやってネギは中に入っていた。
中で説明しているのか、やかましい。

「それでは入って来てください」

・・・なんて言ってるのか。
W A W A W A 忘れ物・・・じゃない。また電波だよ・・・。
ま、普通に入ればいいだろ。

「失礼します」

中に入ったがエヴァ驚きすぎだろ。顎外れてるんじゃないか？

「あ、暁さんや」

「え、あれが噂の!？」

・・・うるさいな。座れよ、まず。
そうだな・・・よし。
大きく息を吸う。

「気を付けえ！」

俺の一喝で全員の体が硬直した。

「……各自、自分の席に着け」

席に着く生徒たち。よし、静かになった。

「静かになったところで俺の自己紹介をしたい」

一瞬間を空ける。

「故郷に帰ったシエラの代わりにこのクラスの副担任になった暁だ。担当教科は色々。担当教諭の出張などの時に俺がお前らを見ることになる」

険しい顔を崩して笑って言う。

「さつきは怒鳴ったりしてすまなかったな。これからよろしく頼む」

「……は、はい!!」「……」

「で、何か質問は？一人ずつ頼むぞ」

「はいはい、ここは私にお任せを」

「朝倉 和美か」

お前かパラッチ。

「あれ、私のこと知ってるの？」

「そりゃ自分のクラスの生徒ぐらい覚えなきゃ話になんねーだろ」

少なくとも俺はそう思う。まあ、俺にはシエラがいたから簡単に出来たんだがな。

「で、お前が質問をまとめてくれるのか？」

「そーです。ではまず、名前を」

「さっきも言っただぞ。曉だ」

「・・・それだけ？」

「ああ。本名だぞ、言っとくけど」

「それじゃ次、身長と体重」

「186センチ。体重は測ってないから知らん」

「誕生日と年齢」

「多分7月ごろだ」

「多分とは？」

「その記録が詳しく残ってないんだよな、俺には」

「で、年齢は？」

「多分・・・27ぐらいじゃないか？」

俺の肉体はそのはずだが。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

なんか静かになったぞ。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

そんなに驚くことか？

「若作りとは・・・。それじゃ、その目は？外国人のハーフ？」

「うーん。これについては出来れば聞かないでくれ。うまく説明できん」

「むむ、じゃ趣味と特技」

「趣味は読書と鍛錬、最近は散歩もだな。特技は武術と料理・・・
後色々」

「彼女とかは？」

「いない」

「じゃあズバリ、このクラスの中で好きなタイプは！」

「……ノーコメント」

というか10歳も年下のを女としては普通見ないだろ。

中には「お前絶対中学生じゃないだろ……」ってのもいるが。

「ち、つまらん回答。だったらいい女になりそうなのは？」

「……ふむ」

いい女……か。

「全員じゃないか？」

ほぼ全員がそろって真っ赤になった。何故だ！？

俺が言ったのはあくまで一般論の話だぞ！？

「つ、次！シエ、シエラ先生との関係は？」

「うーん……主従、違うな……上司と部下、違う……」

兄妹……ありえん（笑）。仲間……距離が微妙。

「そうだな……友人が一番近いような気もするな」

気がするだけだが。

「ふんふん、それじゃ……」

「そら、そろそろ授業だ。個人的に質問したい者は後で来るように」

そう言って朝倉の質問を終わらせる。そして、

「……ネギ、後で話がある。昼休み、屋上に一人で来い」

そうネギに囁いて俺は外に出た。

「暁さん」

「来たか、ネギ」

昼休み。

「用って何ですか？」

「このかの事だ」

「え？このかさんが何か？」

屋上で俺はネギと話している。

「ああ。魔法の隠匿は当たり前だが、このかが魔法に関わるのは特に避ける」

「は、はい。でも、いきなりなんでそんなことを？」

「アレの親の方針さ。このかの魔力はかなりのものだ。お前以上に。だが、このかの親はこのかに魔法に関わらず普通に暮らしてほ

しいと思っているのさ」

今朝に確認を取った。

「・・・なんだかこのかさんの両親を知っているような口振りですね」

「ああ、このかの父親と俺は友人だよ」

この世界で俺に出来た大切な友人たちの一人だ。

「・・・分かりました。気をつけます」

「特に仮契約は避けるよ。アレでこのかの魔力が発現しかねないからな」

「はい。それじゃ、僕はこれで」

「ああ、ちよつと待った」

思い出したことがあり、ネギを呼び止める。

「何ですか？」

「今日、俺の歓迎会があるんだって？」

「はい、でも何で知ってるんですか？」

「何、ちよこつと耳に挟んだだけさ」

壁三枚ほどの向こう、距離にして100メートル先の会話が聞こえただけだ。

「はあ・・・それで？」

「ああ。それで、お返しがしたいから、明日買い物に付き合ってくれないか？」

「別に構いませんけど・・・何を買うんですか？」

それに俺は真剣な顔で答えた。

「食材をちよつとな」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」
「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」
「おう、ありがとうなー、お前から」

で、歓迎会に来た。

「それにしても、よくこんな事教室で出来るよな」

主に料理とか。一体どこから……。

「細かいことは気にするものじゃないでござるよ」

「長瀬か。何の用だ？」

「む、主役に話しかけるのに理由は要らないでござるっ」

「ま、そりゃそうだ」

そう言つて俺は飲み物（残念ながらジュースだ）を飲む。

「ところで、手合わせを今度してほしいのでござる。」
「私もアルよー！」
「ござる」

あぶねえ、噴き出しそうになった。どっから湧いて出た、古菲。

「……今度な」

「約束でアルござるよ」

分かったから近寄るな。近い近い。

長瀬と古菲を追っ払った。

「タカミチ、ここは毎日こうなのか？」

「ははは、まあそうですね」

「……それにしても老けたなあ、お前」

「うぐ、言わないでくださいよ」

「……気にしてたのか。」

「暁さんは若作りだからいいですよ……」

「……まあ、たぶん40前までぐらいはこの顔だろうしな。」

「あれ？タカミチと暁さんは知り合いなんですか？」

ネギがやってくる。

「まあな」

「へ、暁さんって顔が広いんですね」

「そういえばそうだな……」

町の人とも仲良くなつたし……。よく行く店ではすでに常連扱いだ。ほかの人たちからは、なんか『ヒーロー』っぽく見られている気がする。

……そんな上等なもんじゃないんだがなあ、俺は……。

「あの〜」

「ん？」

背後からの声に振り向く。その声の主はのどかだった。

「えと、暁先生……。前、助けていただいて、その、ありがとうございます」

「気にすんな。誰だって女の子が転びそうになったら助けるだろ？」

そして俺はまた余計な一言を言う。

「それがかわいい子だったら尚更な」

ぼんっ、と音が聞こえた。……また、やっちゃまった……。

「あの、こ、これはお礼です。と、図書券ですけど……」

真っ赤になりながらのどかが図書券を差し出してくる。

「おお！早くも本屋が先生にアタックしてるぞ〜」

「先生もまんざらじゃなさそうだね〜」

その言葉と同時にエヴァから殺気が飛んできた。そんな目でのどかを見るな、エヴァ。視線で人が殺せそう、とはこういうことを言う

んだな。

ちなみに、のどかはその視線に気付かず、

「ち、違います〜！それに私本屋じゃないです〜！」

暢気に言い返していた。が、

「ありがとう。是非使わせてもらっせ」

それに俺は笑顔で答えた。すると、

「〜っ！」

のどかは真っ赤になったまま気絶した。

「お、おい！」

「うわ〜、先生笑顔だけで本屋を落としたよ……」

「馬鹿なこと言ってるじゃねえよ……」

やれやれ……。

この世界の女子は惚れっぼいのか？

のどかを保健室まで運んだあと、帰ってくるよ。

「で、先生と知り合いなんですよ、エヴァちゃん」

「それからわらひはれ、あかるひとつかひいっひよにすんねらう」
「！」

なんて言っただエヴァ!?

「あかるひ」

エヴァがこっちに気付き、ふらふらと近寄ってくる。

「……これは『暁』だよな。って言うか酔っ払ってねえか？」

「らんれるっと思いひてくえなかつたろよ！」

ぽかぽかと胸を叩かれる。

『なんでずっと会いに来てくれなかったのよ！』……か？

「……茶々丸、どうしてこうなった」

「マスターが自分でお酒をどこからか持ってきて……」

「はぁ……おい、エヴァ。普通、そんなぐでんぐでんに酔っ払うまで飲むもんじゃねえだろ」

「わらひはよつれらいもん」

「あ、はいはい。まずまともに喋ってから言っただな」

仕方がないので胡坐をかいた膝の上にエヴァを乗せる。

「何でお前らもほつといたんだよ……」

周りの生徒に聞くと。

「え〜？これジュースでしょ〜？」

「そうそう、おいしいよ〜」

・・・よく見ると、全員目が据わってやがる。

「・・・タカミチ」

「すみません・・・。僕が気付いたときにはもう・・・。」
「わ〜、暁さんや〜おかえり〜」

やはり酔っ払ったこのかが背中に張り付いてくる。

俺は抱き枕か？人形か？

「ん〜、背中気持ちええな〜」

「ひょっとほのえほのは！わらひのあはるきにはわららいれよ！」

・・・もはや、理解できんツ！

「タカミチ・・・助けてくれ・・・。」

「すいません、僕にはちよつと・・・。」

「言いながらだんだんと離れていくんじゃねえ！おい、ちよ、おま・
・・・。」

タカミチ は にげだした！

「・・・。」

「・・・ご愁傷様です、暁さん」

「そう言いながらも、ちゃっかり服の裾を掴んでるこの手は何だ、
茶々丸」

「・・・。」

茶々丸は無言で顔を背けた。

「3人ばかりずるい！私たちも！」

鳴滝（姉）の言葉に俺は戦慄を覚えた。私『たち』も・・・だと・・・！？

「そうだね。よし！皆で先生の上に乗ろう！」

生徒たちがこっちににじり寄ってくる。

「おい馬鹿！全員で乗ると超重量で俺が挽き肉になっちまうって！」

「先生にのりこめー^^」

「^^^^わあい^^」

「へ、へヴィだぜ・・・（重量的に）」

「疲れたぜ・・・」

カオスになった歓迎会を何とか終わらせた俺は、現在警備員の顔合わせの場所に向かっている。

あれから酔っ払って眠った奴等を寮に届け、後片付けをし、正式な手続きをしていたらいつの間にか時間が迫っていた。

「めんどくさいな……。よし、『開け』」

スキマを開く。

「よいしょっと」

スキマに潜り込み、出口を開く。スキマを抜けると……。

「ほい、到着っと」

「うわ、いきなり現れないでくださいよ暁さん」

「ん？なんだ、タカミチの後ろに出たのか」

大体場所はあってたわけだ。

「で、ここにるのが『裏』の警備員の皆さんか」
「そうです」

学園長がいないのはまだ戻ってきてないからだろうな、『あつち』から。

そしてエヴァは……酔っ払って寝ているんだろう。

「あー、もう知ってると思うが、曉だ。シエラが世話になった。今度は俺が世話になる。よろしく頼むぜ」

といっても、シエラはほとんど一人で警備してたんだがな。

「はい、是非！」

「おわ！」

すぐ横で大声を出されて、俺は奇声を上げた。

「あ、あんたは？」

「私は、高音・D・グッドマンと申しますっ！ 曉様、貴方の『立派な魔法使い』としてのご活躍はよく「ストップ」知って……え？」

まったく、何処で俺のことを聞いたか知らないが……

「俺は『立派な魔法使い』じゃない。あんたの信じてる『正義の味方』じゃあないんだ」

「で、でもたくさんの人を救って……」

「それは見捨てたら『俺が後味の悪い思いをするから』だ。それに、俺は救った分の何百倍もの命を殺してきた」

「……」

周りが静まり返る。

「俺はエヴァと知り合いだし、それに俺はもしあんたらの命とエヴァの命、どっちを選ぶかといえばエヴァの方を選ぶからな」
「な、何故・・・!?!?」

やれやれ、やっぱり正義馬鹿か・・・。

「そりゃ、俺はエヴァの方をよく知ってるからな。『見知らぬ九』と『大切な一』なら俺は『一』を取るぜ」
「ですが、エヴァンジェリンは真祖の吸血鬼ですよ!?!?」

割り込んできたガンドルフィーニのその言葉に俺はイラッとした。

「だったらどうした？」

「な・・・」

「お前に分かってでも言うのか?」

思い出すのは初めて会った日、両手足に枷を嵌められたエヴァの姿。

「十歳の少女が無理矢理吸血鬼にさせられた時の恐怖が」

俺の言葉を嘘だと断じた時の泣きそうな顔。

「全ての人から恐れられ、嫌われて生きていくしかなかった絶望が」

そして、俺の言葉に流した涙。

「希望を失い『ただ生きていた』あいつの日々が」

「お前らに分かるのかッ!？」

「「「「.....」」」」

ふん、考えもしなかったってところか。

「まったく、失望させてくれる」

「暁さん、彼らはそう教えられて育ったんですよ。責めないであげてください」

タカミチがとりなす。

「そうだな・・・」

「僕が言っても説得力ないかもしれませんが・・・」

「いや、タカミチはこの中ではかなりマシな方だぜ」

最近少しは成長したようだしな。

「特別だ。来いよ、タカミチ。どれだけ成長したか見てやる」

「っ・・・！ありがとうございます」

「そして、お前ら」

今度は正義馬鹿どもに向かって言う。

「俺が今言ったことをよく考えて欲しい。悪とは誰に対しての悪なのか、悪事は理由があっても悪なのか・・・それだけでお前たちの見る世界はかなり変わるぞ」

さて、この言葉が届くかどうか・・・。

「こっつして戦うのは初めてだな」

「ええ、修行をつけてもらったことはありませんたけどね」

俺とタカミチは広場の中心で相対している。俺の手には逆刃刀、対するタカミチはポケットに手を通っ込んでいる。

「今回は逆刃刀と飛天御剣流だけで相手をしてやる」

「・・・分かりました。行きますよ」

「来い」

途端に不可視の拳圧が飛んでくる。

「ふっ」

半身になりかわし、そのままタカミチに向かって駆ける。だが、タカミチも近づけまいと居合い拳を撃ってくる。

「せつ、せい、はっ！」

それを刀で弾いていく。

「どうしたタカミチ！」

「やはりこの程度では駄目ですかッ！」

タカミチはようやく咸卦法を使う。

「豪殺、居合い拳！」

「飛天御剣流、龍翔閃！」

豪殺居合い拳を龍翔閃でそらす。

「なっ！」

「動きが止まったぞタカミチ！」

だが、龍翔閃で前に飛んだため俺は空中で無防備に姿を晒しているように見える。

「空中なら！」

「甘い。飛天御剣流、龍槌、」

俺に向かって飛んでくる豪殺居合い拳を逆刃で切り裂き、そのままタカミチの目前に着地。

「翔閃！」

そしてすぐさま刀を振り上げ飛び上がる。

タカミチはガードしたが、空中に体を持っていかれる。

タカミチは腕が痺れて居合い拳が撃てず、そのまま着地した。

「タカミチ、見せてやろう」

俺は刀を正眼に構えた。

「・・・！？」

タカミチは何か感じたようで、豪殺居合い拳を飛ばしてきた。が、遅い。

「飛天御剣流、九頭龍閃」

一瞬九撃。防御も回避も出来ずにタカミチは吹き飛んだ。

「負けちゃいましたね……ハハハ。やっぱり敵わないなあ……」

「
今俺はタカミチの治療をしている。流石に骨にひびが入ったようだったからだ。」

「『ヒール』。……そう言うな。見違えるほど強くなってるじゃないか」

そう言うと、タカミチはジト目でこっちを見てきた。

「一撃も入れさせてもらえなかったのに、そんなことを言われても・

「・・・」

「そりゃ百年も生きてない奴に入れられる訳にはいかねえよ」

「・・・そうでした。結局ナギさんたちも、あなたに全員でかかっていって、ようやく一撃入れられたんです」

「ははは、あの時か。まさかラカンがナギを攻撃に乗せて飛ばしてくるとは思わなかったぜ」

いつも通りラカンの攻撃を弾いたら、ナギが目の前にいたんだもんなあ。流石に一撃貰ったぜ。ま、その後ビッグバンで全員吹き飛ばしたが。

「で、これで俺の力量は分かってもらえたと思うが・・・」

後ろを向きつつ声をかける。

「それで、さっきの答えは出たか、高音？」

「・・・まだ、です」

どうやら他の奴らもまだのようだ。

「ま、ゆっくり考えて、自分なりの答えを出すんだな。それで出した答えなら、俺はもう何にも言わねえよ」

「・・・何故ですか？」

「俺は、何も知らないくせに吸血鬼というだけで、偏見の目でエヴァを見るあんたらが気に食わなかっただけだからな。それに、あんたらが『たとえ理由があっても罪は罪』と思うんなら、俺も犯罪者だ」

「・・・」

「だから、俺は自分の目で善悪を判断して欲しかったんだよ」

ちらりと広場の隅に目を向ける。

「……ま、自分自身の存在が罪なんだと考えている奴もいそ
うだな」

そのまま俺は広場を去る。

「じゃあな、『正義の魔法使い』たち」

翌日。

「悪いな、ネギ。買い物につき合わせたりして」

「いえ。別に構いませんよ」

「ならいいが……」

そう言って後ろを振り向く。

「何でアスナとこのかがあるんだ？」

「気にしたら負けよ」

何がだ。

「すみません、曉さんと食材を買いにいって言ったら・・・」

「・・・ふう。まあいいけどな。で、なんか食いたい物あるか？デザートを作ろうと思っっているんだが」

「デザート!?!」

食いつき良過ぎだお前ら。

「・・・とにかくまず店に行くか」

「・・・たくさん買いましたね」

「そりゃ作るからには本格的に」

「だからって業務用を買うのは・・・」

そう、今俺が肩に担いでいるのは業務用の砂糖の袋だ。逆の手にはさまざまな器具が入った袋を持っている。ネギたちにも何かしら持たせている。

「いいんだよ、置き場所ならたくさんあるし。・・・ひよっとしたら足りないしな。それより、皆を俺の部屋に呼ばないとな・・・」

「
「
「部屋?」
」

全員がきよとんとした顔になる。

「ああ、俺は女子寮の管理人も兼任してるんだぜ?」

ジジイが死んでる間に勝手にやったが。

「えええっ!?!」

「な、何で先生が!?!」

「そりゃ、女子ばっかじゃ物騒なことがあつたら大変だからだろ(要らない気もするが)」

「そっか。でも暁さんが管理人なら安心やね」

「まあ確かに、強さ的には十分ね……」

多分地下図書館のゴーレム戦のことだろう。

サンライズが俺だということは既に伝えてある。

「で、先に帰って皆に俺が呼んだら部屋に来るように伝えて欲しい」

「でも、荷物はどうするんですか?」

フッフッフ。それは心配ない。

「大丈夫!何を隠そう、俺は荷物運びの達人だッ!!」

「……今、何も考えないで喋ってない?」

なんか変な目で見られた。

「いいから。ほらほら、貸してみる」

一分後、そこには荷物タワー（土台は人間）が！

「出来ちゃったわね……」

「だから言っただろうが」

「じゃ、じゃあ僕たちは先に帰ってますね」

「あとでな」

「おう」

……

「さて、いつまでも隠れてないで出てきたらどうだ？ 桜咲」

建物の影から桜咲が現れる。

「気付いていたんですね……」

「最初からな」

よいしょ、と荷物を降ろす。

「で、このかをつけまわすのは、あれか？ストー・・・」
「違いますっ！」

真っ赤になっちゃってまあ。

「冗談だ。護衛だろ？」

「・・・ええ」

「だが、護衛だったら何でそんな微妙な距離を取る？」

「え？」

・・・本当に分かってないのか？

「護衛とは、護衛対象の肉体を守るだけでなく精神も守るものだと思うぜ。その点で言えば、お前は護衛失格だ」

「っ！あなたに何が・・・！」

「だったらお前にこのかの何が分かるってんだよ」

吐き捨てるように言う。

「!?!」

「どうせ『この身は忌まわしき混ざり物だから』とか考えてるんだろっが、くだらねえ。」

「見るだけでこのかが可哀想になってくるぜ」

歓迎会中も話しかけようとして逃げられてたからな。その時の目は、まるで泣きそうだった。

桜咲は目を見開いている。

「何でハーフだと知っているんだ、ってか？生憎だが、そのくらい

余裕で分かる」

だが、今はそんなことはどうでもいい。

「それよりも考えても見る？ 久しぶりに会った友達が『もう私とあなたはただの他人なのです』とでも言うように避けるんだ。コレは辛いぜ」

「で、ですが、私は化け物……」

「だったらどうしたってんだよ。昨日言っただろうが。善悪を決めるのは結局自分でしかないんだ。お前が自分を悪だと、忌み子だと思っんなら、このかに近づかない方がこのかは安全だ。それこそ遭わないようにしてから影から守れ。……だが、このかのそばに居たいんなら、自分を認めてやれ。そして誰よりも近くでこのかを守ってやれ。要はこのかのそばにお前がいたいかどうかなんだよ」

それにお前には……

「お前には、自分を求めてくれる大切な人がいるじゃないか……」

「それでも、私は結局人間ではないのです……。お嬢様に知られたらきつと……」

「馬鹿が！」

ゴンツ、と音を立てて俺の拳が桜咲の脳天に直撃した。

「いたっ！」

「お前が守りたい人はそんな事で大切な友人を捨てる奴なのかよ！ 違っただろ！？」

あいつは、きっとそれを知っても昔のようにお前に笑顔を見せるな」

そのまま続ける。

「それに、人間じゃないとか言うな。

お前の半分は確かに人間なんだ。

お前がそれを認めないで誰が認めてやるんだ」

呆然として桜咲はぼつりと呟く。

「私は、人間……?」

「ああ」

「お嬢様のそばにいても、いい……?」

「ああ」

「私は、わたし、は……」

「ほら、殴ったところが痛むだろ。泣いちまえ」

俺は桜咲を抱き寄せた。

「そう、ですね……すごく、痛い、です……。う……う
う、うああ……うあああああ!」

「……今まで頑張ったな。そして、これからはもっと頑張るん
だけ」

「お、お見苦しいところを・・・」
「だから気にするなって」

俺と桜咲は並んで寮に向かってる。

あれから泣き終わった桜咲が真っ赤になったまま、俺にずっと謝り続けているワケだ。

「それで、決心は着いたか？」

「・・・はい。ですが・・・」

「ま、いきなりは無理か。ハーフとかは言わないけど友達には戻るってか？」

「は、はい・・・」

「このかは一般人だしなあ」

やがて、別れる場所にたどり着く。

「それじゃ後でな、桜咲」

「あ、あの！」

「ん？」

振り向くと真っ赤になった桜咲。そして、

「わ、私のことは、せ、刹那と呼んでくだひゃい！」

大事なところで噛んだ。

.....

「.....死にます」

「おiiiiiiii!?!あまりにも短絡的過ぎるでしょう!?!」

切腹しようとするのを止めるため、羽交い絞めにする。

「後生ですから死なせてください!恥ずかし過ぎます!」

「馬鹿、こんな事で死んでどうする、刹那!」

「あ.....」

「ちゃんと呼ぶから、な?」

刹那を下ろして笑いかけると、真っ赤になる。

「はい.....」

と、その口。

「あゝ、曉さんやゝ!」

「うおわー!」

背後からタツクルを食らった。流石に倒れはしないが、不意を突かれた事には変わりない。危うく『グキッ』とかいくところだった。

「はれ、せつちゃんも一緒なん?もしかして告白とか」

「ちちち違います!あえ、いや、その、わ、私はこれで「だから逃げるなって」ううう」

刹那の首筋を掴み、引き戻す。

「ちょうどよかった。ほら、このか。刹那が話したいことがあるってよ」

「はい!?」

お前が驚いてどうする、刹那。

「ほら」

「そ、その今まで避けてきてすみませんでした、お嬢様。

少し、事情がありますまた、友達になってもいいですか」

そう言っつて刹那は膝を着く、が。

「別に気にしてへんから立って?それよりも昔みたいに『このちゃん』って」

「そ、そんな、恐れ多いっ!」

まだそんなことをそれより、

「よかつたな、このか」

「暁さんが何とかしてくれたん？」

それは違つ、と首を振る。

「俺はただ、気付かせただけさ。すぐそばの優しさに。そして幸せに。……決めたのは刹那だ」

「それでも、私は暁さんがいたから決心することができました」

「そつか。ありがとな、暁さん」

「はいはい……つと、さて、用意しなくちゃな。部屋に戻つていいぞ」

「それでは、あとで」

「またな」

「……刹那、お前は俺と違つてちゃんとした人間だよ」

「そう、俺と違つて……」

『ちなみに。』

その後、デザートを皆にご馳走したんだが、どうやら美味しすぎたらしく、いつまでも皆が帰ろうとしなかった。

「……………もう材料ねえぞ」

「……………え〜」

「『え〜』じゃねえ！」

なんで一人十品も食べるんだよ！

「でもおいしかったよね」

「あのプリンとか」

「ロールケーキも！」

これらは前日から準備していたからよかったが……………『パフェ一つがどれほど美味しくなる物なのか？』などというリクエストに答ええていったら、とうとう材料がなくなった。

「……………な、ネギ。業務用で間違いなかったろ？」

「……………はい……………」

で、皆食い終わってもいつまでも帰ろうとしなかったが、

「……………全教科課題プリント一枚ずつ
ぼそっ）」

俺のこの一言で大急ぎで帰っていった。

↳ Setsuna Side ↳

『くだらねえ』

私はずっと悩んできたことを、あの人はそのたった一言で切り捨てた。

『要はお前がこのかのそばにいたいかどうかなんだよ』

そう、そうだったのだ。本当に守りたいなら、掟も何も気にせずに守り抜けばいいことだったのだ。

『お前が守りたい人はそんな事で大切な友人を捨てる奴なのかよ！』

それに私はお嬢様を信じることが出来なかった。けれど、

『お前の半分は確かに人間なんだ』

あの人は私自身ですら信じることが出来なかった私を信じた。だから、私もお嬢様を信じ、少しだけ自分も信じてみようという気になった。

「暁さん……………」

あの腕の中の優しい暖かさ。全てを守ってくれそうな頼もしい感覚。
あの感覚を、私はずっと忘れられないでいた。

暁、説く。（後書き）

ちなみにタカミチとの戦いでは、暁は気すら使ってません。

（フタエノカイセツ、アツー！）

『龍槌閃』 『龍翔閃』 『龍槌翔閃』

「るろっくに剣心」より

・飛天御剣流の技。

・龍槌閃は、高く飛び上がり、自分の体重や落下速度、刀の振り下ろしによる力を乗せて叩き切る技。

・派生として上空から刀を突き刺す『龍槌閃・惨』がある。

・龍翔閃は、本来刀の峰に拳を当てて切り上げる技。だが、逆刃刀では峰が刃になるため、刀の腹に手を当てて叩き上げる。

・龍槌翔閃は、龍槌閃と龍翔閃を組み合わせた技。龍槌閃で降りてくるときの反動も利用しているため、龍翔閃の部分の威力が落ちることはない。

『九頭龍閃』

「るろうに剣心」より

・飛天御剣流の奥義会得のための試験用の技として作られた技。

・だが、その内容は『神速で相手に突進し、一撃死級の九つの斬撃を同時に叩き込む』という技。

・その特性上、突進を避けられるだけの速さがあるか、もしくは九頭龍閃に匹敵するだけの威力を持った攻撃を九つ連続で出せないと『防御も回避も不可能な技』である。

『ヒール』
いろいろ

・体の傷を癒す術。

『ビッグバン』

「テイルズオブシリーズ」などより

・その名の通り、大爆発を起こす術。

・基本的に回避は不可能 + 超威力。ジァビスでは裏ボス（難易度最高）のを食らうと確実に1しかHPが残らないほど。

・その分詠唱も長いが、暁は脳内で詠唱を分割し十個ぐらい同時に並列思考するので一秒弱ぐらいしかかからない。

・別に超高速詠唱でも大して時間は変わらないが。

修学旅行の前に（前書き）

なんか納得がいかない出来。

久々に自分の文に『うわぁ・・・』ってなった。

けど今はこれ以上のものは書けそうにない。

自分の文才の無さにイライラするよ・・・。

修学旅行の前に

Episode 1

『のろい』

〔Eva Side〕

朝。

「うぐぐぐぐ……」

私は今、自宅のベッドの中で頭を抱えている。そう、二日酔いだ。昨日の暁の歓迎会で飲みすぎた結果がコレだ。

「大丈夫ですか、マスター」

「コレが大丈夫に見える！？　っ！？　たたたた！」

「いえ」

なら聞くなこのポケロボ。

「今日はお休みになりますか？」

「この状態で行けるわけが……うつつつつ」

「ではそのように連絡を入れておきます」

そんなやり取りの後しばらくして。

カランコラン

玄関の鐘が鳴った。

「失礼します」

一言私に断って茶々丸が対応に出る。

しかしこんな時間に私に用事だとはいったい誰だろう。

「おい、エヴァ大丈夫かー？」

暁だった。

「大体中学の歓迎会で酒を出す奴があるか！」

「やめてやめて耳元で叫ばないでお願いだから」

暁はとりあえず私がいしたくない（二日酔いは別にして）のを確認すると説教を始めた。

「自業自得だぜ」

こういつときの暁は非道い。

「ま、何にしても大丈夫そうよかった」

「そうですね」

茶々丸も非道い。どこが大丈夫なのよ。

「それにしてもエヴァ口調変わったな。なんか知ってるか、茶々丸」

「少しは貫禄が必要だと思ったからだそうです」

「なるほど。まあ確かに、あのときの雰囲気はなかなかだったな」

うつつ、茶々丸ばかり暁と会話してずるい。

でも、暁が褒めてくれたから許す。

「それよりも学校はいいのですか、暁さん」

「ああ、大丈夫だぜ。この俺は『分身』だ」

つてことは幻？

「と言っても肉体はちゃんとあるがな。ほら」

そう言つて暁は茶々丸の頭を撫でる。

茶々丸の頬が少し赤い気がする。ズルイズルイズルイ

「エヴァ、分かったから。お前も撫でてやっから、そう睨むなって」

ならいいけど。

なでなで

ふわぁ〜、やっぱり暁の手は気持ちいいなぁ〜……はっ。
見ると暁がこつちをニヤニヤしながら見ていた。

「そんなに気持ちよかったのか？顔が蕩けてたぞ？」

うぐつ。見られなくなかった。暁に昔より大人になっただって見せたかったのに。

「まあ、エヴァの蕩けた顔も見れたことだし。ほら」

暁が手の平サイズの箱を投げてきた。

「……何かしら？これは」

「二日酔い専用の薬、マインドクラッシュ……じゃなくて『マインド
フレッシユ』だ」

そんなものが！？

「ちなみに俺特製。服用は水と一緒にどうぞ」

「用意します」

「暁……ありがとう」

「何、気にすることはない」

そのセリフを言った途端、暁の姿が薄くなった気がしたけど、気のせいよね。

く Akatsuki Side く

エヴァが薬を飲んで五分後。効き目はばっちりのようだ。

「五分で効く飲み薬って……」

あゝあゝ聞こえない。

「そんなことよりも、もうすぐ修学旅行だな」

「フン、あんなもの」

「へえ、エヴァは行きたくないのか？」

「どっちにしても私はいけないじゃない」

「行けるぞ」

エヴァが固まった。

・・・前にもあったよな、こういうの。

「でもまあ、行きたくないんじゃない。呪いを解除するのは修学旅行後にするか」

「・・・待つて」

物凄い力で腕を掴まれた。

鬼気迫る表情でエヴァが顔を寄せてきた。近い近い。鼻息かかっているから。

「呪いが解けるですって？」

「ああ」

「だったら、解いて。今すぐ」

「別に修学旅行のあとでもいいだろ」

「いえ、今すぐよ。言っておくけど、別に修学旅行に行きたいとか、その間に暁を手に入れようなんて微塵も考えていないから」

「マスター、それでは白状しているのと同じです」

まったくだ。モロバレにも程がある。

「仕方ねえなあ、解いてやるよ。ほら、こっち来い」

エヴァをこっちに呼ぶ。

「こっでいいの？」

「ああ」

エヴァの胸に手を当てる。

「んっ・・・」

俺は何も聞いていないぞー。エヴァの顔が赤くなってるのも見ていないぜー。
ゆっくりとエヴァに魔力を流し込む。

「ふあああああ……」

OKOK。問題なし。色っぽい声なんぞ聞こえない。気のせいだ気のせい。

魔力を流し込んで呪いの大体の構成を掴む。

「……ここがこうして、そこがこうなって……」

「んあっ……ひゃうっ……!」

「ええと……こうなって……。そうか、こっちにこう繋がって……」

「ふあっ、ひゃ!……ひゃんっ!」

「ここがこう、そこがこうで……。よし……。エヴァ、呪い解くぞ」

「う、うん……」

一気に魔力を流し込んだ。

「あ、あああああああああ!」

「よし、成功したっぽいな。ちなみに魔力も開放されてるぞ」
「おめでとございます、マスター」

俺たちはその声をかけたが、肝心のエヴァは。

「だめ、もうだめえ……」

完全に脱力して、床に倒れていた。

うーん。火照った肌と荒い息、はだけた服……。正直目のやり場に困る。

「……………」

仕方がないので茶々丸を見つめる。

「……………なんでしょう」

「いや、別に。茶々丸かわいいなあ、と」

適当に答えると。

「……………(ボツ)」

茶々丸は頭から煙を噴いて倒れた。

結局その後、俺は2人の看病（茶々丸は整備か？）をすることになるのだった。
見舞いに来ただけのはずだったのに、どうしてこうなった。

Episode 2

『ゆーますとびー だいいんぐ』

（Other Side）

タカミチが修行をつけてほしいと曉に言ってきた。

「……まあ、いいって言っちゃいいけどよ……」
「お願いします。僕は他人を守るだけの力が欲しいんです！」

それも人を守る一つの方法ではある。

「……いいぜ。修行つけてやるよ」
「……ありがとうございますッ！」

そして、暁たちは異空間に作った修行場所に来た。

「ここは外の一時間がここ的一年になる空間だ」

「……どうやって作ったんです？」

「『領域』使ってちよちよいのちよい……って感じだな」

「はあ……」

「何だよタカミチ。こんな修行に便利な空間、他にないだろ……」

「ああ、後肉体の老化は、外の一時間分しか進まないから安心しろ」

「……もう何でもアリなんですネ」

「諦める。お前が修行を頼んだ奴はこんな出鱈目な奴なんだ」

「さて、まずは……筋トレだな」

何で今更？という顔をするタカミチ。

「……俺のこの強さはな、一つには自分自身を極限まで鍛え上げたからだ」

「はあ、しかし……」

「安心しろ。半年で20年分ぐらいの筋肉がつく方法でやるから」

「ちなみにその方法とは……？」

「うむ、よく聞いた。簡単なことだ……」

あくまで真面目に暁は告げた。

「『自分の限界を超えて肉体を酷使し、即座に回復させてもう一度限界を超える』」

「え？」

「ま、要するに、何度も死にかけろっつーことだ」

「いや、そうではなくて……」

「それに筋肉は回復するときに付くからな。頑張つて死にかける」

「あの……」

「よし、まずは足から。俺の攻撃を避け続ける！武装錬金・形態フォーム『ジエノサイドサーカス』！」

タカミチをミサイルの群れが襲う。咸卦法全開で避けるタカミチ。

「それ死にますからあああつ！」

「だから『死にかける』つて言っただろ。かするぐらいで食らえ」

「無理ですつ！ つて、う、うおおおおおつ！？」

3時間後。

「よし、足はいったん終了だな」

「……（瀕死）」

「なんだ、もう体力無くなったのか？……おら、コレ」

暁はタカミチにエリクシルを飲ませる。

「次は腕だな……。よし、『スターブラチナ星の白金』ッ！」

半透明の筋骨隆々の男が暁のそばに現れる。

「僕にあつたのはそんな素質ですか……」

「ま、身体能力に依じて気と魔力が上がってるだろ？」

「いつでも咸卦法全開でしたからね……」

それにな、と暁は付け加える。

「多分ガトウ超えたぞ、お前」

「はっ？」

「いや、だからガトウ超えたって」

「……まったく実感が湧かないんですが」

当然だろう。結局毎日死にかけていたのだから。

「事實は事實だ。さて、今日で一年。修行終了だ」

「ありがとうございます。……そして、二度とごめんです、
こんな修行」

「何だ、たった一年でここまで強くなれたんだからいいだろ？」

そう言ってお互いに睨み合つ。

「……」

「……」

「……あれ？　そういえば僕の修行中、暁さんは何してたんですか？」

が、タカミチが今気付いた様子で尋ねた。

「ああ……」

それに暁は事も無げに答えた。

「重力百倍下での、お前と同じ修行だ」
「.....」

それからしばらく、タカミチは立ち直れなかったらしい。

Other Side

「暁先生つてさ、なんで彼女いないんだろうね」

きっかけは誰かが呟いた一言だった。

「やっぱり、釣り合う人がいないとか？」

「いや、実は変な癖があったり？」

「もしかして、ホ……」

「いや、流石にそれは……」

「ねえ、もしかしたら隠してるだけなのかもよ？」

少し離れた場所にいたエヴァが反応する。

「よし、だったら今度の休み、暁先生を追跡して確かめてみよう！」

「……茶々丸、私たちも暁を……」

「はい、マスター」

Akatsuki Side

「休みだ・・・暇だ・・・」

誰にともなく呟く。

最近、シエラとの引継ぎとか何とかで忙しかった分、急に休みをもらうと暇を持て余す。

「・・・一日中鍛錬つても何だかなあ・・・」

最低限の鍛錬はいつも夜にやっている。
どうする、暇をどうやって潰す。

「・・・とにかく外に出てみるか」

「いやー、いい天気だ」

まだ春じゃないのか？

「こんな日には散歩しよう、そうしよう」

歩き出すと、背後から3-Aのほとんど全員の気配がした。
エヴァも茶々丸もいるし。

「・・・」

振り返る。

見事に誰もいない。
だが気配は感じる。

「……………ほっとこう」

面倒くさいことになりそうだ。

「む、そういうえば修学旅行の準備もしなきゃいけないんだっとな」

となると買い物か。

「…………ネギのほうは準備終わったのか？」

「おーい、ネギ」

「あ、暁さん！」

魔力をたどってネギと合流する。

「修学旅行もうすぐだな」

「そうですね」

「お前としては楽しみだろ？」

「え、何ですか？」

あ、こいつ知らないのか。

「修学旅行先の京都には、お前の父さんの別荘があるんだぜ？」

「ほ、ホントですか!?!」

「ああ。自由行動の日に連れてってやるよ」

「ありがとうございます!……ってアレ?」

なんだ?

「僕の父さんのこと知ってるんですか!?!」

「ああ。今どこにいるかは知らないがな」

「そうですか……」

そうがっかりするなよ、ネギ。

「ま、頑張んな。……と。それで準備は出来てるのか?」

「あ、いえ。これから……」

「じゃあ、せつかくだ。一緒に見て回らないか?」

「あ、いいですね」

「それと、代金は俺が持つから」

「そんなの悪いですよ!」

「ハハハ、子供に払わせるほうが悪い気がするがな」

論破してネギを黙らせる。

こっぴどく時ぐらいは、子供らしく振舞って構わないんだがな。

＼Other Side＼

で、その裏では。

「ネ、ネギ君を誘った!？」

「ってことは、暁さんはシヨタコン!？」

ひどい疑惑が浮上していた。

「あつ、2人が歩き出したよ!」

「尾行再開!」

「暁がシヨタコン、暁が・・・」

「戻ってきてください、マスター」

＼Akatsuki Side＼

「やれやれ」

「どうしたんですか?」

「いや、こつちの話だ」

まったく、いつまで追ってくる気なんだか。

「お、あそこにいるのは、のどかたちか。おーい」

それにしてもあの3人は仲がいいな。

「あ、暁先生!？」

「いや、休日だから『さん』ぐらいでいいぞ?」

「こんなところでなにをしてるですか」

「修学旅行の準備だよ」

「なんで2人で?」

「暁さんと偶然会って……」

ネギからすればそうだろうな。

「で、そっちは?」

「こっちも似たようなものだね」

「なら、ちようどいい。一緒に行こうぜ?」

「確かにちようどいいね……」

何だ、急に早乙女がニヤニヤしだしたぞ。

「(ね、のどか」

「えっ!いや、その、あう……」

聞こえてるからー。

「とにかく、まずは……」

「大抵の物は買ったな・・・」

「そうですね」

「くう、私たちの作戦が次々と破られるとは！」

のどかと二人きりにして、いい雰囲気・・・みたいなアレか。残念だがその程度の作戦、テオのに比べたらたいしたことないんだよな。

・・・あいつ、俺を指名手配すらしやがったからな。

「次は、服だな」

となると・・・

「ここで別れるか？」

「いえ。男性の目から見た感想もいるので、まだです」

まだ作戦の匂いが・・・。ま、いいか。

「ネギもいいか？」

「はい、僕も見たいですし」

こういう時は、素直なんだな。

「だからって、女物の専門店に連れてくることはないだろう・・・」

「ハ、ハハ、ハ・・・」

俺もネギも顔が引き攣っている。

まだネギはいいとしても、俺はちょっと・・・。

「暁さん、コレなんてどう？」

「ん？」

「やつ、まだ心の準備が・・・」

振り返った先には、白いワンピースを着たのどかがいた。

「おう、似合ってるんじゃないか？それになにより、かわいいと思うぜ」

「いや、あの、あ、ありがとうございます・・・」

「俺が十代だったらほっておかなかったかもな」

「はっつ！？」

「・・・それは、付き合っていたかもってこと？」

「ああ」

かも、だがな。

「なんで十代だったら、なのです？」

「んー、俺は釣り合わないだろ？」

「え？逆じゃないの？」

何気にのどかに対してそれは酷くないか？

「どっちかといったら、ネギのほうが釣り合うだろ」

「僕ですか!？」

そりゃ、10歳以上の差と5〜6歳の差だったらなあ。

「で、でも暁さんは若作りだから、大丈夫だと思いますよ？」

む、そういう見方もあるか。でもな……

「ともかく、ちゃっっちゃと買い物済ませるぞ？」

〈Other Side〉

その裏で。

「うわー、あんなトコに連れ込まれてる」

「居心地悪そうだね」

ちょうどそのとき、暁が呼ばれて振り返るところだった。

「茶々丸、中の会話は聞こえる？」

「はい、どうやら試着した宮崎さんを、暁さんが褒めているようです」

「……宮崎のどか……要注意ね」

「はい、マスター」

「フフ、いっそのこと消してしまいませんか……」

「エヴァちゃん!？」

だんだんとエヴァは壊れていた。

「あ、暁さんが今3・Aの生徒と付き合うとしたら、という話をしています」

「え、本当!？」

「もっと詳しく!」

「はい、ネギ先生のほうが釣り合うんじゃないか、若作りだから暁さんも大丈夫、というような会話が行われています。

その前には、もし暁さんが十代だったら宮崎さんと付き合っていたかも、というような話も」

「そう、暁が……。フフ、フフフ、フフフフフフ」

もう駄目なんじゃないかな、この吸血鬼。

〔 Akatsuki Side 〕

「さて、今度は俺たちの服だな」

「あ、僕は服はもうあるので……」

「となると俺の分だけか」

やっぱりスーツか？

「……いや、服は適当に選ぶか。スーツは好きじゃない」

正式な行事ならスーツだな。

「とまあ、選んでみたんだが……？どうした、お前ら
なんか全員こっちを凝視しているんだが。」

「ま、まさかここまでとは……」

「センスが良過ぎるです……」

「あ……」

「か、カッコいいです！ 曉さん！」

・・・？別にたいした物は選んでないんだが。
とりあえず、貰い物のアクセサリーと一緒にしてみたんだけど
な。

「そうか？普通に選んでみただけなんだが」

いつもは、適当にもらった服とかを着てたが。

「ともかく、コレでいいと思うか？」

「「「もちろんです！」「」「」

揃いすぎだろ。

＼Other Side＼

暁が試着してみたところで。

「何アレ！すごく似合ってる！」

「カッコいい！」

「あゝ、もっと近くで見たい！」

エヴァは。

「かはっ・・・（吐血）」

やっぱりもう駄目だ、この吸血鬼。

「……………」

「どうしたの、茶々丸さん？ 暁先生に見とれてた？」

「いえ、暁さんに、そのよく似合っているとは思いました」

「あれ？ そういえばなんで茶々丸さんは『暁さん』って呼ぶの？」

「そういえば……」

「怪しいね……」

「いえ、別に怪しいことなどは。ただそう呼んでほしいと言われただけです」

「ますます怪しいじゃんかー！」

もはや隠れる気は無いのではないだろうか。

〈 Akatsuki Side 〉

なんか後ろが騒々しい。普通の人間には聞こえないだろうか。

「さて、付き合わせて悪かったな」

「いえ、僕もちょうどよかったですから」

「その、楽しかったです！」

「うん、眼福ものも見れたしね」
「あれは確かに眼福だったです」

そんな大袈裟な。

「さて、帰るか？」

「いや、これから僕はちょっと寄っていくところがあるので・・・」

そう言ってネギは去っていった。

「で、そっちは？」

「（キュピーン）私たちも少し用事があるから」

「はい、先にのどかと帰っていてください」

「えっ!？」

「そうか・・・。じゃあ行くか、のどか」

「は・・・はい!」

「今日はありがとうございました、暁先生」
「だから言ったる? 『暁さん』でいいって」
「あ、はい、暁さん・・・」
「それでいいんだ」

道をゆっくり2人で歩く。

「」
「」
「」
「」
「」
「」
「」
「」

沈黙が降りる。しかしどこことなく心地よい。

「あの・・・」

「どうした？」

「今日の、十代だったらほっておかなかったかも・・・って言うのは本当ですか・・・？」

「ああ、本当だよ」

「そ、そうですね・・・」

真っ赤になって黙るのどか。

「・・・着いたぞ」

「え？・・・あ」

もう、俺たちは寮に着いていた。

その後、他愛無い会話をして俺たちは別れた。

ただ、最後にのどかが笑ってくれたのは、少し嬉しかった。

それで結局、今日一日の尾行は何が目的だったんだ？

Other Side

「むー。よく分からなかったね」

「うん、なんであれで彼女いないんだろ」

「けど、どこか一歩引いた感じだったよねー」

尾行が終わったあと、収穫がないまま解散する。

「……（一歩引いた感じ、か）」

「どうしました、マスター」

「いえ、なんでもないわ」

エヴァは暁ののどかに対する態度に少し引っかかっていた。

「……（暁ならあの程度の好意に気付かないはずがない。なのに、受け入れるでもなく、諦めさせるわけでもないのは何故？）」

その疑問はずっと消えることはなかった。

修学旅行の前に（後書き）

）解説とかつすねエ・・・）

『何、気にすることはない』

「テイルズオブデスティニー」より

・空気王こと、ウツドロウ・ケルヴィンの台詞。

・PS版では役回りゆえにこの台詞を言うことが多かった。

・空気王とは、PS版で『物語後半での加入レベルが序盤のまま』、
『ソーディアンも終盤でようやく修理できる』などの理由で、パ
ーティ内で空気と化していたことから。

418

『クレイジー・ダイヤモンド』

「ジョジョの奇妙な冒険」より

・東方ひがしかた 仗助じょうすけのスタンド。

・近距離パワー型。だが、スタープラチナにスピードは及ばないらしい。精密動作も銃弾を止めるぐらいには出来る。

・能力は『触れたものを直す・治すこと』。無生物なら完全修理、生物なら肉体を完治させることが出来る。ただし自分は対象外。

・その『なおす』のは、『料理を原材料に戻す』や、『複数の物体の融合』などに応用が利く。

・ただし、内科的病気や、生物の死は治せない。が、逆に言えば『生きている限り治せる』ということでもある。

修学旅行 1日目

〔 Akatsuki Side 〕

ヒヤッハー！修学旅行だー！

・・・なんだ今の。

なんか「あべし！」で「ひでぶ！」な感じがしたが、
いや「たわば！」か？

「よう、ネギ」

「あつ、おはようございます！暁さん！」

駅に向かう途中でネギに遭った。

「嬉しそうだな、ネギ」

ホント、今にも飛び跳ねそうだな。

「はい！ようやく父さんの手がかりが掴めたし、それに京都自体も
楽しみなんです！」

「そういえば、お前は日本初めてだったな」

「はい、そうなんです」

「向こうに着いたら気をつけるよ？」

「え？」

ネギは理解していないようだったので、昨日の事を説明した。
昨日の事とは……

「護衛い？」

俺は学園長室で素っ頓狂な声を上げた。

「うむ。ネギ君に関西呪術協会の長……婿殿への親書を持たせておつての」

「……なるほど、子供だからくみやすしと見て妨害をかけてくる強硬派がいるかもしれない、と」

「うむ、それに……」

「わかっている。このかだな？」

あれほどの魔力量を持つこのかを放つて置く筈もない。

「分かっておるなら話は早い。……あの子らのことを頼んでもよいか？」

「ああ、友人の子供達だ。任せておけ、ジジイ」

「……前から思つとつたんじゃが、おぬしの方が年上なのに何故『ジジイ』呼ばわりされねばならんのかのう？」

この言葉がきつかけで論争が始まってしまった。

「外見に決まってるだろ。それに俺は中身も若いからな」

「たとえそうであっても実際に年齢が……！」

「外見に中身が伴っていれば……！」

結局この論争は一時間半続いた。

……って最後の方は関係無いんだが。
そんな感じのことを三行程度で説明した。

「ネギ、親書の方は？」

「はい、ちゃんとポケットに」

「盗まれたときのための魔法でもかけといた方がいいぞ？」

「あ、そうですね。そうします」

やれやれ。少しは考えとけよ。

まあ、盗まれるつもりがなかったって事でもあるんだろうが。

さーて、俺はここから先の原作知識とやらを持っていない。

ここからは自分の判断と勘でやっていかなければならないか。

しかし、何故『アイツ』は全体だけ説明した上に1〜3巻だけ俺に
読ませたんだ？

あいつなら全巻読ませるぐらいはしそうなものだが。

京都へ向かう交通手段は新幹線だった。

「新幹線……か」

まあ、逃げ場の無い飛行機よりはマシか。
いざとなったら飛び降りればいい。

そして出発。

さて……ここで来るか？

「あら、暁。こんなところで何をしているの？」

通路で立っていると、エヴァに声をかけられた。

「エヴァか。ちょっと依頼をされてな。警戒中だ」

「ふーん。それ、手伝った方がいいのかしら？」

「いや、別にいらないだろ。思う存分修学旅行を楽しんでくれ」
「そう。ならお言葉に甘えさせてもらおうわ」

そのとき、悲鳴が聞こえた。

「カエル〜!？」

か、蛙……？

こっちにも数匹がぴよんぴよん飛んでくる。

「……これは式か」

流石にネギにコレを解除するのは無理だろう。

「失せろ」

その一言で全ての蛙は紙に戻った。

遠くからネギが、視線だけで感謝の意を告げてくる。

こっちも、気にするなと返した。

そして通路に戻ったとき、ネギの背後に式の気配を感じた。

ソレは燕の形をしていた。

燕はネギをすり抜け、親書だけを啜えてこっちに飛んでくる。

「……やれやれ、詰まらねえことをする。ネギですらコレは阻止できるぞ」

あいつが親書にかけたのは、簡単な魔法。親書を簡易ゴーレムのよ
うなものにする魔法だ。

親書が燕に噛み付いた。そのままお互いに攻撃をする。傍から見るとアニメなんかでありそうな光景だ。

しかし、燕は飛ぶのをやめない。とうとう俺のいる通路までやってきた。

「ふ……秘剣・燕返し」

ただ飛ぶ燕を斬るためだけに生み出された秘剣が、その本領を發揮する。

まず相手を狙う一ノ太刀、そしてそれを避ける先に放つ二ノ太刀、

二つの時間差を補う「払い」の三ノ太刀。

それらが『同時』に繰り出された。

結果、親書に動きを拘束されていた燕は、その三つの斬撃の直撃を食らった。

切り裂かれた俺の背後で紙に戻った。

「あ、暁さん……」

そのとき背後に刹那が現れた。

そういえば、刹那もこの親書の件に絡んでるんだっただな。

「その親書はネギに渡しといてくれ。俺は寝る。……全く、期待外れにもほどがある」

「あ……」

返事を待たずに背を向ける。

まさかこんな程度の低い嫌がらせしかしてこないとはな。

「あ、期待外れってのは刹那のことじゃねえからな？そんな泣きそ
うな顔するなよ」

それだけ言っただけでその場を去った。

寝ているうちに京都に着いた。変な気配はしなかったもので、あれか

ら何も無かったのだろう。

「着いたか。……久しぶりだな」

この間来たときは、詠春のところに直接跳んだからな。この風景を見るのは久しぶりだ。

「まずは……清水寺か」

「コレが噂の飛び降りるアレッ！」

「誰かつ！飛び降りれっ！」

「では拙者が……」

「させるか！」

釣竿で長瀬を一本釣りする。

「ふはははははは！フィィィィィッシュ！」

「……俺ってこんなキャラだったけか？」

「で、こっから向こうまで目を閉じたままたどり着ければ、恋が成就するって話だ」

「何で先生がそんなこと知ってるの？」

「・・・昔、京都を訪れたときに案内されてな」

「では、私から・・・」

「あー、ずるい。私もいく！」

「わ、私も・・・」

「（むっ）・・・私もいくわ」

雪広、佐々木は分かる。まあ、のどかも分かる。だが、何故エヴァが・・・？

「・・・フツ」

まあ、楽しそうだからいいか。

「・・・っておい！」

咄嗟に走り出した雪広と佐々木を抱き止める。

「何するんですの！いくら先生といえども、私の恋路を・・・」

「ちよつと前見てみる」

「「前・・・？」」

2人が前を向いたので、拾った石を数メートル先に投げてみせる。するとその地面は、ぼすつと言つ音を立てて陥没した。というか、落ちた。

「お、落とし穴・・・？」

「しかも蛙入りの、な」

寸前で鳴き声が聞こえたから気付けたものの……

「誰だか知らんが、悪質な嫌がらせだな。女子が目がない恋占いの石に罫を仕掛けるとは」

「まったくですわ！純情な乙女の恋心を何だと思っているのかしら！」

純情……ねえ？

「シヨタコンって純情なのか？」

「ぼ、僕に聞かれても……」

まあ、それは置いて。いて。

「気を取り直して音羽の滝に向かうか」

「で、この滝は右から健康・学業・縁結びに「利益がある」ということだ。

ただしきちんと順番を守って飲むこと」

「……先生、なんかガイドみたいです」

「ふつ、伊達に一日中観光名所を連れ回された訳じゃないぜ。……
…つて、ネギ！」

「……！はい！皆さん、縁結びの滝の水は飲まないでください！」

が、時既に遅し。

クラスの半数以上が酔い潰れていた。

風に乗って酒の匂いがしたからなにかと思えば……………。

「こんな仕掛けまでするとはな……………」

滝の上に酒樽が仕掛けてあった。

イライラさせる奴等だ……………ああ。本当に、イライラする。

その後、酔い潰れた生徒達を急いでバスに格納（もはや荷物だ）し、その日の観光は終わった。

「疲れたぜ……………」

珍しく疲れている。って言っても肉体的に、よりむしろ気力的に、なんだがな……………。

「……………風呂だ。風呂しかない」

そうだ、まだ俺には風呂がある！

「お、ネギ。お前も今から入るのか」

「はい」

「あ、あかにん暁兄久しぶり！」

暁兄ねえ……………。

「……………そういえばいたな、エロオコジヨ」

「なっ！暁兄までそんな言い方するのかよ！」

「中身親父のエロオコジヨだろ？」

むしろそれ以外に呼び方が思い浮かばん。

「ともかく、風呂だ風呂！」

いざ、魂の洗濯へ！

「わーっ！引つ張らないでくださいーっ！」

「幸せだ……」

「気持ち良いですねー……」

「風呂は日本人が生み出した最も価値ある物のひとつだと思っぜ……」

「これで桜咲刹那の件がなければなあ……」

カモの言葉に引っかかる。

刹那が何かあるのか？

「……刹那がどうかしたのか？」

「はい、実は……」

その時、入り口の方から物音がする。

「ん？ありゃあ、刹那か。お……」

「（ちよっと！何でいきなり呼ぼうとするんですかー！？）」

「なんでって、噂をすればって奴だろ？丁度良いじゃねえか」

「（そうじゃなくて……）」

「いやー、それにしても綺麗な体だな。眼福眼福」

「（そうですね……じゃなくってなんで刹那さんがここに！？）」

「（混浴って言うんだよ、兄貴！）」

「困ったな……」

その時、刹那の一言が届く。

「魔法使いであるネギ先生なら何とかしてくれると思ったんだが・・・」

「(?!?・・・僕が魔法使いだと知っている!?)」

ネギが取り出した杖を握り締めた。その際に出たわずかな殺気を刹那は感じ取る。

・・・む、『刹那を最初は敵と勘違いする』ってコレのことか？

「誰だっ!?!」

咄嗟にネギは逃げようとするが、それを追って刹那は斬岩剣を放つ。

どうでもいいが、コレが『神鳴流奥義』ってのがどうもワカラナイ。岩を断つぐらい簡単だろ。

せめて鉄ぐらいにして「斬鉄剣」・・・ってそれじゃ無敵の剣の名前だな。

ともかく、それを岩陰でかわしたネギは『フランス風花 エクサルメティオー武装解除』を唱える。

が、武器を吹き飛ばしたぐらいで安心してちゃあ駄目だな、ネギ。結果としてネギは、無手で突っ込んできた刹那に股間と首を押さえられ・・・。

「そこまでだ、刹那」

・・・なかった。その前に俺が後ろから刹那の腰と首に手をまわして止めたからだ。

今までどこにいたかってか？お湯の中だよ。もちろんあらゆる気配を断った上でだが。

「あ、暁さん！？」

刹那は俺に抱えられているのが分かって、真っ赤になってしまった。

「ネギ、杖をおろせ」

「え？え？二人は知り合いなんですか！？」

「ああ、刹那はこのかを・・・」

そのとき、脱衣所の方で悲鳴が聞こえた。

「これは・・・このかとアスナか！刹那、ネギ！」

「「はいっ！」「」

俺たち三人は脱衣所に向かって駆けた。

そこで見たのは、二人から下着を剥ぎ取るうとしているサルたちだった。

「ク、ククク、クツクツクツク」

「「あ、暁さん……?」」

俯いている俺の顔を見たネギと刹那が思わず俺の名を呼んだ。が、今はそんなことはどうでもいい。

「今日一日中さんざん嫌がらせておいて、仕舞いには一般人まで巻き込むたあい度胸じゃねえか……」

刹那から夕凧を奪い取り、抜く。

「クツクツク、ハツハツハ……ハハハハハハハハハハ!!」

顔を上げる。サル共を睨み付ける。

「……斬る」

夕凧を振りかざす。

「食らえ、神速の斬り!!」

夕凧から乱れ飛ぶ剣圧がサルを斬り裂く。

「閃覇、瞬連刃!!」

いったん納刀して構えた後、さらに速さと数を増した剣圧がサルを斬っていく。

「勝てない勝負はするもんじゃないぜ」

刀を納めながらのその一言と共に、最後のサルが消えた。

「あゝ、少しはすっきりしたな」

刹那に夕風を返しつつ、呆然と立っている　アスナふたりとこのか　に告げる。

「さて、2人とも。美人がそんな素肌を晒しとくもんじゃないと思っぜ？」

「へ・・・？」

そういつて2人は互いの姿を確認する。そこには、下着を取られて裸になった姿。2人とも真っ赤になった。

「ネギ。もう一回入りなおすか？」

「え？いや、その・・・」

「なんなら、その三人も一緒に入るか？」

「へっはい！？」

「いや、寒いだろ？それに刹那も、さつきは入り損ねたと思っしな」

「いえ、でも、あの、私は・・・」

・・・埒が明かないな。

「もういい、勝手に連れて行く」

刹那とネギ、ついでにこのかを抱えて風呂に向かった。

その後は普通に風呂に入った。
アスナとこのかに礼を言われたが、アスナにはネギの代わりに、このかには刹那の代わりに助けただけだと言っておいた。

「やれやれ、隙は見せなかったはずだが……」

夜の旅館で一人呟く。

相手はこつちを余程舐めているらしい。

「………気に入らねえ」

一般人の生徒達を巻き込んだことも、何も知らないこのかを狙うことも。

何もかもが気に入らない。

もし『敵』に直接出会ったときは、この手で……

「……まずい。『あの頃』に思考が近くなってるぞ」

落ち着け、俺。

「まず状況の確認だ」

こちらは、相手の嫌がらせをたいした被害もなく、排除している。それに、式返しの結界が張られたのを感じた。おそらく刹那だろう。

こちらには、かなりの腕を持つ人間が大勢いる。いざとなったら彼等の手を借りるのも手だ。まあ、俺がいればほとんど要らないんだが。

「が……それを相手は知らない」

それに、いくら結界を張っても術者本人が中に入ってきては意味がない。

「刹那に知らせておくか」

「あら、暁。夜這いにも来たの？」
「言ってる」

一言でエヴァを切って捨てる。

「刹那、このかの件だが」
「はい、向こうで話しましょう」

「な、術者が既にここに……!?!?」
「あくまで可能性だがな」

そのことを伝えていたとき。

「……!?!?」

「刹那！」
「はい！」

異様な気配を感じ、俺たちはこのかの元へ向かった。

「アスナ、このかはどうしてる!？」

「え・・・そのトイレに入ってるけど？」

言われたトイレの中の気配を探る。よく似せてあるがコレは・・・
!

「くそ! やられたっ！」

扉を開く。中には札が一枚、このかの声を発していた。

「アスナと刹那、ネギと一緒にこのかを追え。俺は少し遅れて行く」

「何を・・・」

「保険だ！」

そのまま部屋を飛び出し、6班の部屋に来る。

「エヴァ！」

「何かあったようね」

「ああ、このかが攫われた。」

だが、俺がここを離れたときを狙って、別の奴が仕掛けてくるかも知れねえ。

その時は頼む」

「いいわよ。その代わり……」

エヴァの言葉を遮って切り札を持ち出す。

「修学旅行が潰れても良いのか？」

「全力で敵を潰すわ」

即答かよ、オイ。

「感謝するぜ。修学旅行の後で一つだけ言う事聞いてやるから」

走り去りながら、そう告げた。

最後に見たエヴァはなんだか赤い顔で体をくねらせていたが考えないことにする。

同時に茶々丸がどこか不満げな顔でこっちを見ていたことも。

外に飛び出た俺はネギたちの気配を探る。

「……見つけた！」

思っていたよりも遠かったが、俺は飛んでその場に向かった。

その場に辿り着いた時、俺は敵のその言葉を聞いた。

「……まずは呪薬と呪符まじで使つかって、口を利くけんよにして、上手いことうちの言うコト聞く操り人形にするのがえーな……」

……だな、もはや『コレ』は私の人……

……すりなんかになんか負けん！俺と一緒にう……

．．．ないですよ。最後に見たのが
のか．．．

．．．『さよなら』．．．

俺の視界が、血の色に染まった。

Other Side

暁と別れたアスナと刹那はネギと合流し、着ぐるみ女の追跡を開始した。

「見つけた！」

「待てー！ーっ！」

「ち、しつこい人は嫌われますえ！」

そんな台詞を吐きながら、女は駅に逃げ込む。

「この駅、人払いがされてます！」

「だから誰もいないのね！」

そう言いつつ、女が逃げ込んだ列車に乗り込む。ギリギリで間に合い、列車は走り始める。

「先生、前の方に追い詰めますよ！」

「はい！」

追いかけてくるネギたちに向かって女は唱えた。

「お札さん お札さん ウチを逃がしておくれやす」

それだけであつという間に列車内に水が満ちた。

「わーっ！何この水！」

ネギたちは溢れる水に動きを封じられ、呪文を封じられ、まともな
対抗策が打てないでいた。
そんな中、刹那は思う。

（私はお嬢様を守ると誓った。

お嬢様を避けることがお嬢様を傷つけていたことに長い間気付か
なかった。

けれど、あの人が教えてくれた）

刹那は思い出す。先ほど見た暁の剣技を。

（思い出せ、あの太刀筋を！）

記憶の中の暁の動きに、自分の流派の動きを加えて、放つ。

（絶対に、守る　　っ！　斬空閃！！）

疾はしった剣圧は、列車のドアを両断した。

列車が止まり、ネギたちも女もずぶ濡れでホームに降り立った。

「み、見たか、そのデカザル女。嫌がらせは諦めておとなしくお

嬢様を返すがいい」

「ハア、ハア、なかなかやりますな。しかし、このかお嬢様は返しまへんえ」

女がこのかを『お嬢様』と呼んだことに驚くネギとアスナ。

再び逃げ出した女を追いつつ、刹那はネギたちに、関西呪術協会内にこのかの力を利用して協会を牛耳ろうとする勢力があることを語った。

追いついた先には、着ぐるみを脱いだ女の姿があった。

ネギはその姿に見覚えがあった。

「・・・あなただっただんですね。」

新幹線でも、お寺でも、旅館でも式神を操って僕たちの邪魔をしていたのは」

「フフ、覚えててくれて光栄やな。それに、よーここまで追ってくれましたな」

そやけど、と女は続ける。

「それもここまでですえ。三枚目のお札ちゃん行かせてもらいますえ」

「おのれ、させるかっ!」

刹那がそうはさせじ、と突っ込んでいったが、ネギはその呪符の内容を理解し叫んだ。

「刹那さん!下がってください!」

「!」

「喰らいなはれ!三枚符術 京都大文字焼き!」

大文字が階段に燃え上がる。

咄嗟に後ろに飛んだため、刹那は自身が丸焼きになることを避けることが出来た。

そして、ネギは呪文を唱える。

「ホホホ、並の術者ではその炎は」
フランス 風花 サルタティオ・ブルウエレア 風塵乱舞!」
なっ!」

ネギの放った風で大文字は吹き飛ばされた。

「逃がしませんよ!!このかさんは僕の生徒で……大事な友達です!!」

そう言い放ったネギは、アスナに180秒間の契約執行をする。

そしてさらに、ネギはアスナにアーティファクトを渡す。

しかし、カードに描かれているのと違い、出てきたのはハリセンだった。

「な、何コレー!タダのハリセンじゃない!」

「あ、あれー、おかしいな……?」

アスナは半ばヤケクソで女にハリセンを叩き込もうとする。刹那もそれと同時に切り込んだ。

だが、熊と猿の着ぐるみ（？）が二人の攻撃を受け止める。いや、猿の方は白羽取りしようとしたが手の長さが足りず、ハリセンの直撃を頭に貰っていたが。

「……っ！さっき言った呪符使いの善鬼護鬼です！！」

後ろに下がりながら、刹那はアスナに言う。

「間抜けなのは外見みたくだけです！気を……」

つけてと言いかけたが、その前にアスナが猿をブツ叩いていた。すると、あっけなく猿は消えていく。

「……って神楽坂さん!？」

「あ、ゴメン。なんだか今のタイミングで仕掛けるのが一番いい気がして」

何故そう思ったかは自分でも分からなかったが、とにかく、とアスナは続ける。

「よく分かんないけどいけそう！その熊（？）は任せてこのかを！」

「すみません、お願いします！」

そう言って突っ込んでいった刹那に、女の後ろから何者かが突っ込んできた。

両者は空中でぶつかり、弾かれる。

刹那は、その一瞬で相手が神鳴流だと悟り、体勢を整える。

「あいたた〜。すみません、遅刻してしもて・・・」

しかし、立ちはだかったのはゴスロリ服を着た二刀流の少女だった。

「どうも〜、神鳴流です〜。おはつに〜」

「え・・・お・・・お前が神鳴流剣士・・・？」

神鳴流のイメージとはかけ離れたその服装に刹那は唖然とする。

「はい〜、月詠つぐよみいますー」。

見たところあなたは神鳴流の先輩さんみたいですけど、護衛に雇われたからには本気でいかせてもらいますわー」

「こんなのが神鳴流とは・・・時代も変わったな」

年寄り臭いことを言う刹那。それに対して、女は言う。

この少女を甘く見ない方がいい、と。

実際その通りだった。

「え〜い、やあ、たあ、とあー」

ふざけた外見、ふざけた掛け声に反して、少女はかなりの使い手だ

った。

「ざーんがーんけーん」

左手に持った小刀でこちらの武器を封じられ、逆の手の刀が襲い掛かってくる。

一朝一夕には片がつかない、苦戦する相手だった。

アスナも、式神に纏わり付かれ身動きが取れなくなっていた。

「ホホホ、これで足止めOKや。所詮素人中学生に見習い剣士や」

「テル・マ・スキル・マギステル」

聞こえてきたその言葉に、女は足を止める。

ウンデキム・スピリトゥス・アエリアーレス

「風の精霊11人！」

ウインケルム・フアクテイイミニケム・カブテント

縛鎖となつて敵を捕まえる！」

「このか姉さんをおろした今がチャンスだぜ！兄貴！」

「ああっ！しまった、ガキほんたいを忘れてたー！」

「もう遅いです！魔法の射手戒めの風矢サキタ・マギカ・アエール・カフトウーラエ！！」

「あひいっ！お助けー！」

女はあるうことか、このかを盾にした。

「あつ……曲がれ！」

咄嗟にネギは照準をずらす。

「こつこのかさんを放してください！卑怯ですよっ！」

「ははくん……なるほど、読めましたえ。」

甘ちゃんやな……人質が多少怪我するくらい気にせず撃ち抜けばえーのに」

そして、自分の優位を確信した女はネギたちに告げる。

この調子で後でも利用させて貰う、と。

そしてこのかをどうするつもりなのか、と聞かれると女は言った。

「せやなー、まずは呪薬と呪符まじで使こて、口を利けんよにして、上手いことウチらの言うコト聞く操り人形にするのがえーな。くっくっく……」

瞬間、世界が変わった。

いや、見た目も何も変わってはいないのだ。
ただ、圧倒的な殺気がこの場を支配している。
そのせいで何もかもが色褪せて見えるのだ。
神鳴流の2人は刀をおろしている。殺気で動けないのだろうか。
ただ、その殺気の主の姿が見えない。いや、見えな『かった』。

「Cut off！（斬る！）」

空から降ってきた一撃で、アスナを掴みあげていた熊鬼は一刀両断された。

「You are not worthy as my opponent . . .（貴様では相手にならん . . .）」

さっきまで熊鬼がいた場所には、文字通り『悪魔』が立っていた。

全員がこの突然の乱入者に対して構えた瞬間、

「やれやれ」

そう言つて女の背後から少年が現れた。

「まさかこんな邪魔が入るとはね」

「新入り！今までどこで何を・・・」

「...er's...ati...」

全員が『悪魔』の方を向いた。

「Where's your motivation?」やる気はあるのか?」

『悪魔』は自分に刺さつた石の槍を砕いた。
それを引き抜いたそばから、傷が癒えていく。
そして引き抜き終わると、『悪魔』は闇に包まれた。

闇が晴れたそこには……………

「暁……………さん……………」

刹那は思わず呟いた。

闇が晴れたそこには、いつもの笑顔などない、完全に無表情の暁が立っていた。

「……………君だったのか、マスター・オブ・アビリティ『万能の支配者』」

少年の言葉にも反応しない。

ただ、心臓の辺りから何かを取り出し、腕を突き出し構えた。それは、六角形の金属のようだった。

「……………う」

暁は何か呟いた。

「え？」

「……す」

「何だつて？」

「……戦う」

「あ、暁さん！」

「戦う……殺す……戦う、殺す！」

六角形の金属が砕け散り、中から『漆黒^{くろ}い六角形の金属』が現れる。

【戦え！　そして死ぬ！】

そう叫んだ途端、暁の体の色が変わっていく。肌は赤銅に、髪は螢火に、瞳は紅く変わった。刹那は急に脱力感を覚えた。

(こ……これは……!?)

見ると、自分たちの体から紅い気のようなものが立ち昇っている。そしてそれは、暁に吸収されているのだ。すぐに危険だと判断し、アスナを抱えて階段下のネギのところまで戻る。

「これは……エネルギーの吸収かい？」

少年の問いに、やはり暁は答えない。

刀が届く前に、超重力で地面に叩き付けられた。
同時に、ネギとアスナにも重力がかかる。

「あ……暁……さん……」

意識が飛びそうになるのを必死で堪えながら、刹那は暁を呼んだ。

そんな中、このかは目覚めた。

物凄い脱力感に、目覚めた意識がまた眠りに落ちそうになる。
しかし、目の前の暁の表情がこのかの意識を保たせる。

「暁……さん……？……なんで……」

このかは不思議そうに尋ねた。

「なんでそんなに苦しそうなん？」

暁の体がピタリと止まった。

「何があったか知らんけど……そんな苦しかったらウチにゆーて
みて？」

暁の瞳から涙が零れた。

途端、暁の体の表面が砕け散り、いつもの肌、髪、瞳の色に戻る。

「……………あ……………」

暁は呆然とした表情でこのかを見た。

「この……………か……………?」

「うん」

「無事……………なのか」

「なんかようわからんけど……………無事や」

このかは笑顔で答えた。

「よかった……………本当に……………よかった……………」

「なあ……………眠ってええ?……………ちよつと……………疲れたえ……………」

「……………おやすみ」

静かに眠るこのかを見つつ、暁は泣きながら笑った。

「すまなかつたな、皆」

暁は三人に頭を下げた。

「いえ、お嬢様を助けて頂いてありがとうございます」

「だが、あれは俺の意識の外のことだ。」

「一歩間違えていれば、このかを傷付けていたかも知れない……」

「で、でも暁さん！」

「そうよ、結果として何もなかったんだからいいじゃない！」

ネギとアスナは暁を励まそうとする。

「それよりも……あそこまで我を忘れることとはいったい何なのですか？」

「……」

刹那の言葉に暁は押し黙る。

「あ、いえ、別に話したくないことでしたら……」

「……昔の光景を幻視したのさ」

暁は告げた。

「「昔……？」」

「ああ、あの女の言葉で昔を思い出してな。」

「……まったく、情けねえ。」

あの程度で我を忘れるとは、無様にも程があるぜ」

（いくらなんでも、いつもならあの程度のことです昔を思い出すことなんてなかったんだがな……）

心の中で呟く。

「別に気にするなよ？お前たちのせいじゃないんだから。」

むしろこっちが土下座したいくらいだぜ。

「・・・つとそれで？敵はどんな奴らだった？」

俺は覚えてなくてな、と付け加える。

「え、え〜つとおサルの式神を使う女と・・・」

「二刀流で神鳴流を使う眼鏡の少女と・・・」

「石の槍を魔法で出してきた白髪の少年です」

ちなみに上から、アスナ、刹那、ネギである。

「・・・式神使いと神鳴流はなんとかなるが・・・」

「あの少年が何か・・・？」

「いや、別に・・・（石の槍・・・か。たしか・・・フェイト・・・とか言ったな）」

暁はその少年が石化の魔法を使えることを思い出す。

「・・・何はともあれ、今日はこれ以上襲撃はないはずだ。明日に備えて休むとしよう」

「・・・はい」「」

「刹那は神鳴流と、ネギとアスナはその少年との戦いの可能性をそれぞれ頭の中に入れておいてくれ」

「・・・はい！」「」

そして1日目は終わった。

修学旅行 1日目(後書き)

〔解説、華麗に参上！〕

『秘剣・燕返し』

「Fate/stay night」より

・アサシンのサーヴァント、佐々木小次郎の剣技。

・このゲーム中では佐々木小次郎は実在しない人物である。

・元々は空を飛ぶ燕を斬るためだけに編み出された技。

・しかしありえない量の努力の結果、『キシユア・ゼルレッヂ多重次元屈指現象』という魔法（科学で再現不可能な奇跡）の域にまで達している。

・技としては、『完全に同時に放つ三つの斬撃』。

『閃覇瞬連刃』

「テイルズオブジァビス」より

・北米版で追加された、ガイ・セシル（本名、ガイラルディア・ガラン・ガルディオス）の技。

・いくつもの剣圧を飛ばし、最後に爆発で敵を吹き飛ばす。

・暁は爆発部分は自重した。

『悪魔』

「デビルメイクライシリーズ」より

・デビルトリガーと呼ばれる心の中のスイッチを入れることにより、半悪魔の主人公は悪魔の姿になることが出来る。

・暁は、DMC3のバージルの姿に肉体変化して使った。

・なぜバージルかというのは、暁の過去にバージルの在り方が似ていたからか・・・？

『ヴィクター化』

「武装錬金」より

・黒い核鉄を心臓にした者になる、人間でもホムンクルスでもない

『第三の存在』。

・肌が赤銅色になり、髪は蛍火（紫がかった蛍光色）、瞳は紅くなる。

・生命力を直接吸収する『エネルギードレイン』と呼ばれる独自の栄養摂取方法をとる。

・エネルギードレインは通常の生物で言う『呼吸』に当たるため、自分の意志で止めることは不可能。

・闘争心が昂ぶったときのみヴィクター化する第1段階、常にヴィクター化する第2段階、

肌が更に赤黒くなり、エネルギードレインの力や武装錬金の威力の増す第3段階がある。

『フェイタルアトラクション』
「武装錬金」より

・黒い核鉄の最初の被験者、元錬金戦団の大戦士長、ヴィクター・
パワードが創造する大戦斧グレートアックスの武装錬金。

・見た目は、NIKEのマークを二つくっつけたような物。

・特性は、重力操作。小規模ブラックホールすら作り出す強力な武装錬金。

・斧での打撃に併せて重力を操ることで、かなりの破壊力を持たせることができる。

・中央部で分離、二本の斧として使うことも出来る。

修学旅行 2日目

〔 Akatsuki Side 〕

・・・明るい。朝だ。

・・・なんだか体が重い。

何かが上に乗ってるような・・・。
目を開けた。

「・・・エヴァ、何やってんだ」

目の前に迫っていたエヴァの顔をどかす。

「おはよつのキスよ」

「いらねえ。お前は俺の女房か？」

「・・・」

体をくねらせ始めた。

「・・・何想像してるのか知らんが、先に大広間に行っとくぞ
？」

「・・・（ぶしゅっ）」

鼻血噴き出しやがった。

・・・夜、注意したほうがいいかも知れねえ。いや、マジで。

……さっき、エヴァが上に乗ってくるまで気配に気付かなかつた。

「やれやれ……やっぱり鈍ってたな」

しかし、『昔』の感覚に戻るとそれはそれで困る。

『昔』の頃に近づけば、強くはなるだろうが……

「……………」

「いただきます」

ご飯に味噌汁。これは鉄板だと思う。

「なー、暁先生？」

「なんだ、このか」

「ありがとな？なんやよー分からんけど、ウチのこと助けてくれて」
「当たり前のことをしたただけだ。礼を言われることじゃねえよ」
「うん、でもありがとな」

そういつて、このかは去っていった。

このか、眠そうだったな。

・・・俺のせいで。

一番近くでエネルギードレインを受けたんだ。体力がまだ戻っていないのだろう。

それにしても、刹那とこのかの仲が元に戻ってよかった。

2人仲良く食事している。が、時々刹那がこっちを見ている。

・・・昨日のことについて聞きたいんだろうな。

「ふう・・・」

なんで『アイツ』がこの修学旅行の話の第4巻を読ませなかったのかが分かった。

俺に嫌な思いをさせないためだ。

「今回はそれが裏目に出た・・・か」

向こうで読んでいれば違っただろうが、いきなり現実として『あの台詞』を聞いてしまった俺は、容易く理性が消し飛んだ。

「・・・」

いや、よそづ。今はこの目の前のことを考えよう。

「しほそしほま」

「ネギ、今日は班別自由行動の日だろ。どうする？」
「どうしましょうか」

「ネギくん、今日ウチの班と見学しよー！」

ダダダ、ドーン、ネギは死んだ。スイーツ（笑）……わけ分かんぞ、コレ。死んでないしな。

ネギはそのまま争奪戦の対象になっている。

まだまだこういう雰囲気には流されるのな、お前。

「暁さん」

「ん？なんだ茶々丸」

いつの間にか茶々丸が背後にいた。

「今日……」

「おう」

「……」

「……なんだ？」

「いえ、別に。失礼しました」

おいおい、そこまで言っというやめるのか。
しかし、茶々丸の表情がだんだん読めるようになってきたな。
今のは、照れた顔だ。

「さて、本当に今日はどうするかね……」
「あ、あの、暁先生！」

今度は横からのどかに声をかけられた。

「よろしければ今日の自由行動、私たちと一緒に回りませんか!？」
ふうん……五班とか……。

「いいぜ」
「えっ、本当に？」
「ああ、別に他に用事もないし……」

このかも守れるしな。

ちなみに、ネギは刹那の6班と回ることにしたらしい。
エヴァは鼻血で出遅れたせいで、俺と一緒に回れず地団駄踏んだと
か。

「暁さん……」

「刹那か、何だ？」

廊下で呼び止められる。

「昨日、あなたの意識がないとき、あなたは悪魔の姿をしていました」

……心の中で謝りながら刹那の記憶を読む。
そして、昨夜の俺の姿を見た。

「あれがあなたの本当の……」

「違うぜ。あれは俺の姿じゃない」

「え……？」

「俺は、悪魔じゃない。ただ、そういう人間に体が変化していただけだ」

暴走状態の俺が変身した男は……

「あれは半人半魔の、力を求め続けた男の姿だ」

「半人半魔……!？」

「ああ、力こそ全てと信じ、人間を捨てた男……。そしてその考え方は過去の俺自身に似ている」

だが……

「……だが、俺はあの男が、過去の俺自身が正しいとは思わない」
「……」

刹那は黙り込んでしまった。

「……悪かったな、朝からこんな話して」
「いえ、こちらが聞いたんですから……」

なんとも言えない気まずい雰囲気の中、俺たちは別れた。

奈良公園。

「鹿、多すぎると思うんだが……」
「ここはそういってころやる？」
「そうだけだよ……」
ところで……

「鹿せんべいって食うところまいのか？」
「なんで私に聞くのよ……」
「いや、食いそうだなって思ったんでな。食ってないのか？」
「食べてないわよ……」

そんなに怒るなよ。

アスナにだけ聞こえる程度の小声で呟く。

「……………今のところ敵の気配はない」

「……………(そう……………)」

「……………(そっちはどうだ、刹那)」

刹那には通信用の札を渡してある。

(こちらも問題ありません。他の班も同様です)

「(了解。じゃあ修学旅行を楽しんどけ)」

刹那との通信を切った。

「……………って」

何で誰もいないんだよ。

気配を探る。

「……………アスナは夕映と、このかはハルナと一緒にか」

って言うか離れるの速いな、おい。

ということとは、

「あ、暁先生……………」

のどか一人か。

「皆居なくなっちゃったな……………まったく、班行動の意味ねえ

「じゃねえか」

「そ、そうですね・・・」

「仕方ねえ、2人で回るか」

「えっ、あ、はい！喜んで！」

「ここが東大寺・大仏殿だ。でかい建物だろ？」

「はい、そうですね・・・」

中に入った。

・・・後ろから2人の気配がするが、ほっとくか。

「あつ、あの、暁先生！」

「ん、どうした？」

「わたつ、私、大、す・・・好き・・・」

ん？まさか・・・

「大仏が大好きでっ・・・！」

ほう、カミングアウトか・・・

「渋い趣味だな。だがまあ、いいんじゃないか？」

俺は大仏より、普通の仏像の方が好きだな。

特に、あのアルカイツクスマイルがいいと思うんだよ」

日本の仏像は柔らかい感じがするんだぜ？

「そついえば・・・いつもと髪形違うよな」

「あ、はい」

「似合つてて可愛いぜ」

笑いかける。

「・・・(ぼしゅっ)」

おお！？頭が沸騰した！？

「暁先生が大、大吉でっ・・・！」

「へえ、分かるのか？」

おみくじを引いてみる。

「おお、すげえ。本当に大吉だ」

凄過ぎる、預言者か。

「すげえな、のどか」

頭を撫でる。

「はづう……」

「コレが大仏の鼻と同じ大きさの穴だ。

くぐり抜けられれば、頭が良くなったり願いがかなったりするぞうだ」

「や、やってみてもいいですか……?」

上目遣いは卑怯すぎると思う。

のどか挑戦中……

「お、お尻がハマッちゃいましたあッ!」

もはやギャグだな……。

「おいおい……。ほら、引っ張るから腕掴め」

「はい……」

しっかりと腕を掴ませる。

「おらよっ……!」

「ひゃあ!」

「うおっ!」

のどかはあっけなく抜けた。ので、俺は足を滑らせ……

ガンッ!

後頭部を強打した。

「おお痛え……大丈夫か、のどか?」

「……」

「のどか……?」

あー、今の俺らの状況は……

俺、のどかを抱いて床に倒れている。

のどか、俺の腕の中で真っ赤になっている。

周囲、啞然として俺らを見ている。

「もしもあゝし、のどか……」

「……はえ？」

「そろそろ周囲の視線が痛いんだが……」

「は、あ、や……」

うん？

「ごめんなさいーッ！ーッ！」

のどかはダツシユで逃げていった。

俺は置いていかれた。

……こんな視線の中でどうしろと……？

＼Nodoka Side＼

曉さん。

私が好きな人。

最初は、ただ助けられたお礼が言いたいだけだった。本当に好きになったのは、暁さんがクラスの皆を見守っていたときの顔を見たときだと思う。

あの顔は、幸せそうで、懐かしそうで……眩しい物を見ているような顔だった。

それから、私は自然と暁さんを目で追うようになった。

いつも皆を自然と守ってくれる暁さん。

暁さんは、厳しく皆を叱ることもある。

けどそれは、本当に間違ったことをしたときだけ。

それに、叱った後は必ず叱ったことを謝る。

そして、皆が分かってくれれば本当に嬉しそうに笑う。

私は、その笑顔が大好きだった。

今日、暁さんに告白することにした。

けど、告白は出来ないし、みつともないとは見せるし……。

仕舞いには、暁さんに恥をかかせてしまった。

それに、十歳以上も下の私に告白なんてされても暁さんは困るだけだろう。

そう考えると、涙が出てきた。

でも、それでもやっぱり私は・・・

〔 Akatsuki Side 〕

「だっはー!」

疲れた・・・。

何とかその場を誤魔化し、現在のどこかを搜索中。

「…………一度他の奴らと合流するのも一手だがな」

だが…………どうやらのはこつちに向かっているようだな。

「暁先生ーッ!」

「のどか、探したぞ」

「あいつ、実は私…………大…………大…………大…………根おろしも好きで…………!」

俺はアレ、それほど好きじゃないんだよなー。

「いえっ、じゃなくて大福・・・あんころもち・・・いえっ」

「・・・腹が減ってるのか？」

「ち、ちがつ、あ、あの、先生、私・・・」

・・・覚悟は決まったか。

「私、暁先生のことずっと好きでした！ 私、私・・・暁先生のこと大好きです！」

やれやれ・・・ようやく言えたな。

微笑ましい気持ちになりながらも、尋ねる。

「一応聞くが、それはLikeじゃなくてLoveなんだな？」

「は、はい！い、いえ、分かっています、突然こんな事言っても迷惑なのは・・・。」

せせ、生徒と先生ですし、歳も離れていますし・・・ごめんなさい」

そうしてのどかは続けようとした。

「でも私の気持ちを知ってもらい「そこまでよ！」えっ!？」

エヴァ が あらわれた！

「コマンド？」

「たたかう

まほう

アイテム

はなす

「……何だ、エヴァ」

「とりあえずさっきの電波は無視する。」

「宮崎のどか、あなたに暁は渡さないわ。暁は私のものよ」

「え？あ、その……」

「……いつ俺がお前になったよ……」

「それに……」

「よく考えれば、俺はエヴァに好きだってまだ言われてないんだが」

「じゃあ、『私は暁が好き』。これで良いわよね」

「いや、そうじゃなくて……」。

「それに私はもう何びゃ」「はいはい、ストップエヴァ」って、ちょっとまだきやあああああ！」

「エヴァを藪の向こうに投げた。」

「それに今、何百年もって言おうとしたよな。」

「で、返事なんだが……」

「は、はい！」

「のどかはまだ中学生だ。早いと思うんだよ。」

それに、まだ俺のことを全て知ってるわけじゃねえだろ？」

「はい……」

少女の初恋を切って捨てることは出来ない。

が、『俺』に関わるのは危険だ。

だが、それでもその思いが変わらないのなら……

「だからだ。もっと時間を置いて全部俺のことを知ってからだ。」

それからまたもう一度好きだと言えたら俺は返事をする。

……これでいいか？」

「はい、今はそれで十分です」

……のどかは変わったな。少し芯が通ってきた。

「……で、そこで見ている出歯亀野郎ども、出て来い」

……しーん……

「……出て来ないと後で課題プリント十枚な。ネギは……」

「すみません！覗くつもりは……」

「そう、偶然来ちゃっただけ！」

「はい、決して尾行していたわけでは」

「私はのどかの恋路を見守っていたただけだけど？」

「私もなのです」

「ウチはせつちゃんについてきただけやえ？」

「わ、私はエヴァンジェリンさんに引つ張られて……」

「……………」

こいつら……………。

「言い訳はもういいんだ……それより、他人の告白を覗いたんだ。万死に値する。」

小便はすませたか？

神様にお祈りは？

部屋の隅でガタガタふるえて命乞いをする心の準備はOK？」

「……………えっ、ちよっ……………!!」「……………」

「問答無用オ!!」

ドカバシボカドゴシャシャシャシャ デストローイ

夕方。

一人外を歩いていて。

あれからいるんな奴らに質問とかされまくって、かわすのが大変だった。

エヴァはエヴァで投げ飛ばしたことを烈火の如く怒りやがる。

まあ、あとでスイーツと人形作ってやるって言ったら許してもらえたが。

そんな時、一匹のネコが車に轢かれそうになっているのが見えた。

「なに！つくそ！間に合え！」

発動するのは、縮地！

「オオオツ！！！」

ネコは掬い上げて道の向こう側に投げたが、俺は車の前にまだいる。時を止めようとするが、視界の端に朝倉が見えた。

何故ここにいるのかなどはどうでもいい。

ただ、朝倉の前では派手な能力は使えない。下手すると魔法がバレる。

どうする、こういうとき使える能力は……！

いや、能力に頼るんじゃない、自分の力で……！

「疾ッ！」

車の下に体を滑り込ませる。
肩に車の底が当たる。タイヤに巻き込まれそうになる。
咄嗟に車の底に手を掛け、勢いよく車の後ろから飛び出した。
そのまま何回か路上で転がる。そして、立ち上がった。

「ふう……何とかだったな」

「せ、先生、大丈夫!？」

「朝倉か。ああ、何とか大丈夫だったぜ」

「ホント見てるこつちが死ぬかと思った……」

「いや、本当に危なかった。もうあんなことはしねえよ」

その時トラックの運転手が出てきた。

「だ、大丈夫ですか!？」

「ああ、なんともない。急に飛び出して悪かった」

その後二言三言かわし、向こうに謝ると運転手は去っていった。

「……先生っていったい何者？」

「さあて、何に見える？」

「さっきネコの前まで瞬間移動したよね？」

「違う。ありゃあ縮地って言って武術の達人が可能とする歩行術だ」

「どつちにしてもなんで先生がそんなの使えるのさ」

「何、子供が先生やってるんだ。別に武術の達人がいてもおかしくないだろう？」

そういう問題じゃないんだけど、といった顔を朝倉はした。

「ほら、一人でこんなとこブラブラしてていいのか？」

「あ、そ、そうだね……」

「それじゃあな」

さてと、風呂でも入るか。

「あゝ、風呂つていいよなあ……」

何はともあれ、これさえあれば大抵の苦勞は乗り切っていける気がする。

つて誰か入ってきたな。

「あら、暁先生」

「おう、しずな先生。あんたも風呂か？」

「ええ。先生、今日はお疲れ様でした」

「お互いにな」

2人で風呂に入る。

こっちもだが、向こうも向こうで大変だったろう。

「それで……よろしければ、お背中流しましょうか？」

「あん？別に構わねえけど……」

しずなつてこんなことする奴だったか？

「あら、遅しい肩……」

「お褒めの言葉ありがとう」

とりあえず背中を流してもらおう。

「……なあ、しずな先生」

「なんですか？」

「当たってるんだが？」

もちろんアレが。

「当ててるんです」

「そうか」

……。

「ねえ先生？」

「何だ？」

「先生は何か隠して……」

その時、風呂のドアがまた開いた。

「あ……」

ネギ（+カモ）だった。

「あ……その……『じゅめんなさい』……」

俺たちの姿を見たネギは脱衣所に取って返そうとする。
が、ここは風呂場だ。その場で急な方向転換なんぞしたら……

「あつっ！」

転ぶよな、そりゃ。

「痛え！兄貴、潰れる潰れる！」

このクソオコジヨが……。

「お、オコジヨがしゃべった!?」

「あ、いえ、これはですね……」

「やっぱり、ネギ君がしゃべるオコジヨを飼ってるんだもの！
ネギ君と親しい暁先生も何かあるのね！」

「……分かった。お前、しずなじゃないな」

しずな（偽）があわてた様子で言う。

「な、何を言っ……」

「まあ、疑うべき点はいろいろあったんだが、確実に偽者だと分か
つたのは……」

こいつには……

「胸の大きさが足りない!!」

「なっ、何いっ！失礼ね、それでもクラスNo.4よ！」

「ほう、なら朝倉か」

「えっ、何で分かるんですか!?!」

「俺にクラスのことまで分からないことなどない……」

具体的には『心眼・ブラボーアイ』を使った。
能力の無駄遣い？むしろ有効活用だろう。

「なんならスリーサイズを言ってみせようか。あー、上から8……」

「ちょ、ストップ！」

あわてて朝倉が変装を解く。

「よく分かったね、先生」

「で、俺の秘密を知ってどうするつもりなんだ？」

「暁先生の秘密を暴けば、スクープ間違いなし！」

「ついでにネギ君の秘密も暴けば、さらに大スクープに！」

「……一言言っておく」

相変わらず麻帆良の奴らは危機感が薄いな。

「俺の秘密はスクープになんて出来ねえぞ」

「な……!？」

「暴いても即座に揉み消される。下手したら……」

朝倉の耳元に口を寄せて呟く。

「……消されるぞ？」

小声でも殺気を籠めている。

朝倉は蒼白な顔でその場へたり込んだ。

と、その時。

ワイワイガヤガヤと3-Aが入ってきた。
そんなに騒いでないはずなんだが……

「暁先生!?!」

「ネギ君!?!」

「朝倉、どうしたの!?!」

「まさか、暁先生が朝倉に手を出し……」

「んなわけあるか!」

「じゃあ……」

「朝倉の変装取材だそうだ」

しずなの格好で来たことを告げると、3-Aの面々は納得した顔をする。

「……前科があるのか。」

腰が抜けている朝倉を立たせる。

その際、小声で話しかける。

「この事は忘れる。それがお前のためであり、俺たちのためでもある」

「……そんなこと出来ないね」

何だと?

「ここまで話しておいて忘れる?それは無理だよ」

「……」

皆を追い返した後、脱衣所の前で話す。

「暴露もスクープもどうでもいい。ただ、私は真実が知りたいんだ」

ため息をついた。

何でこう頑固者が多いのかね、うちのクラスは……。

「俺のことは話すことが出来ないが……。」

その代わり……。

「しゃべるオコジヨのことはネギに聞くといい。きちんと話してくれるだろう。」

だが……。

「覚悟しておけ。あの世界は表面は綺麗でも、裏は黒いぞ。」

「そんなのは普通の世界でも同じでしょ？」

「ふ……そうだよな。記者であるお前なら知ってるよな。」

心配は無用……ってか。

さて、結局バレてしまったが仕方ないか。

まさか他人を巻き込むこともないだろう。

と、その時俺はそう考えていた。

けれど、それは甘かった。

……。

ああそうだよ！キス争奪戦なんか起こすとは思わなかったんだよ！

あのオコジヨ……いつか全殺した。

修学旅行 2日目 (後書き)

くブラボー！いい解説だ！

『心眼・ブラボーアイ』

「武装錬金」より

・錬金戦団・戦士長、キャプテンブラボーこと防人さきもり衛まもるの持つ、1
3のブラボー技アイツの一つ。

・鍛え抜かれた己の眼力で、対象を完全に解析する。寸法や特徴だけ
けでなく、能力まで完全に分かるといふ凄さ。何なんだアンタ。

一瞬の油断が命取り（マジで）（前書き）

ちよつと今回はアダルティWWW

一瞬の油断が命取り（マジで）

修学旅行二日目の夜。

とある戦いが幕を開けようとしていた……。

「くちびる争奪！！修学旅行でネギ先生&暁先生とラブラブキッス大作戦！！」

ただ寝ているだけじゃつまらない、というわけでゲームが始まった。ルールは簡単。ネギか暁とキスするだけ。チーム戦だが、別に途中でパートナーを変えても構わない。

参加者は、

一班から 鳴滝姉妹。
二班から 古菲&長瀬 楓。
三班から 雪広 あやか&長谷川 千雨。
四班から 明石 裕菜&佐々木 まき絵。
五班から 綾瀬 夕映&宮崎 のどか。
六班から エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル&絡繰 茶々丸。

さて、どこが勝利するのだろうか。

ちなみに、朝倉は魔法のことはネギから聞いたが、仮契約のことは聞いていない。

さらに、カモが無断で仮契約陣を旅館周りに描いたことも知らない。カモの末路が既に見えた気がするが・・・

川、ー、く、な、に、気、に、す、る、こ、と、は、な、い、。

その頃、暁とネギは警備の話し合いが終わり、軽い雑談をしていたところだった。

が、暁は急に寒気を覚える。

「なあ、ネギ・・・少し寒気がしないか？」

「あれ、暁さんもですか・・・？」

どうやらネギも同じ気配を感じているようだ。

「ここにいると何か嫌な予感がする。具体的に言つと女がらみのな
恐るべき予感である。」

「それだったら、一緒にパトロール行きませんか？ちょうど刹那さんからいいもの貰ったんです」

そう言つて式神の紙を取り出すネギ。

「おお、それは便利だな。俺の分の名前書いといてくれるか？」

「え、でもこれ本名書かなきゃいけないんですよ？」

『暁』は偽名ではないのか。

「大丈夫だ。……俺はあのときから『暁』なんだからな」

「それならいいですけど……」

「じゃあ、先に外に行つておくぞ？」

「はい、準備してから行きます」

暁は窓から出て行つた。

それを見送つて、ネギは紙に名前を書く。

「えっと、ネギ・スプリングフィールドってあ……間違えた」

その後も何回か書き直すが、ネギは自分の名前が書けないでいた。四回ほど間違つてからようやく書き終え、次は暁の方を書く。

「あかつき……ってうーん、筆で漢字は難しいなあ」

その後二回ほど間違えた後、書き上げた。

間違えた紙はゴミ箱に放り込んで、ネギは正しく書けたものに向かつて言う。

「お札さん お札さん 僕と暁さんの代わりになってください」

すると、ネギと暁にそっくりな式神が現れた。

「わー、すごいや！本当にそっくりだ！」

が、暁を待たせていることを思い出しあわてて告げる。

「僕たちの代わりにそれぞれの部屋で寝ててね」

「ネギです（コクッ）」

「暁だ（コクン）」

「よーし、じゃあパトロールにいつてきまーす！」

そしてネギが去った後、ゴミ箱から名前書きに失敗した式神たちが出てきた。

「ぬぎですー」

「みぎです」

「ホギ・ヌプリングフィールドです」

「やぎですー」

「あかしきだぜー」

「焼D A Z E」

何このカオス。

「こんにちは、ネギです。なんだかいっぱい出てきてしまいましたね」

「そうですね」

「ういむしゅー」

「はい」

「うんー」

「だなー」

「なあ、せっかくだからそれぞれやりたいことやってみないか？」

「っていつでも特にないですねー」

「式神ですしね」

「だったら、とりあえずその場のノリで行動するかー^^」
「「「「「おー^^」」」」」

というわけで自分たちの部屋で待機することになった。

く焼く

数分後、暁の部屋。

「む、新田だぞ」

「ああ、長谷川が正座だな」
「誰が行く？」

「O R E D A！」

「「「「「いってら〜」」」」」

何故これで意思疎通が出来るのか。

「よう、長谷川」

焼は軽く手を上げてみせた。

「……なんですか、暁先生」

「こんなところでどうしたんだ？」

「……くだらないイベントに巻き込まれたんですよ」

どこかいらついているようだ。

「そりゃあ、大変だな。……で？」

男は長谷川の隣に屈みこむ。

「は？」

「なんか皆に言いたい事があるんだろっ？」

「いえ、別に……」

「あんな、どんな事でも聞いてやるから、ここで一旦全部ブチ撒けてみる」

ほれ言ってみるとばかりに、指を動かす。

「……別に言ってもどうせ『それがどうした？』って言われますから」

「言わねえって……なあ、ちっ」

「っ!?!?」

何故それを、という顔をした長谷川に男は告げる。

「そりゃあ、俺のクラスの一員なんだ。」

ちゃんと把握してないとな。

ああ、こないだのメイド服はなかなかだったと思うぞ。

後はもう少し奉仕するっていう態度が・・・云々」

突如メイド服について熱く語りだした男を、長谷川は呆気に取られた顔で見ている。

「だからなあ、言ってみろよ。馬鹿にはしねえって」

「・・・絶対に誰にも言いませんね？」

「おう」

それから男は長谷川の今まで心の中で溜め込んできたものを全て聞いた。

常識的に考えておかしい事を麻帆良の人間があっさり受け入れている事。

それを指摘した時、まるでこっちが変な物のように見られたこと。

それら全てを男は聞き、相槌を打った。

ちなみに、途中で空き部屋に場所を移している。

ところで、と話が一段落ついたところで男は言う。

「お前そういう口調だったんだなあ。まあ、そっちの方がこっちも話しやすいが」

「何言ってるんだ・・・って、あ！！」

いつの間にか素の口調に戻っていることに気づき、慌てる長谷川。

「なに、別にいいぜ。さっきの口調なんかよりはよっぽどいい」

それにしても・・・

「いくら俺でも、あの学園は変だと思っぜ」

「……だよな、あの樹とか……」

「そもそも学園長が……」

それからしばらく2人で、麻帆良のおかしなところを挙げていた。そして最後に、

「だから、別に一人で抱え込む必要はねえんだよ。俺でよければいつでも聞いてやるから」

な？と男は笑いかけた。

「……………（ハッ）。くそっ」

そんな男に見惚れてしまった長谷川は思わず悪態をついた。

「じゃあな。ほら、部屋帰っていいぞ」

「いいのか？」

「巻き込まれただけなら別に構わねえだろ」

「ああ………ありがとな」

「あん？何か言ったか？」

「べ、別に何も言っただけだよ！」

そのまま長谷川は去っていった。

「さて、向こうはどうなってるかな？」

向こうの部屋のことを想像し、男は悪戯っ子のような顔で笑った。

ちなみに、いつの間にか捕まっていた明石もこっそり部屋に帰した。

くあかしきく

焼が出て行ってから数分後。

「お、来たな」

「ああ、来たな」

「じゃあ、俺は隠れるから」

暁（式神）が気配を消し、押入れの中に入るとほぼ同時にドアが開いた。

「たのもー」

「暁先生はいるアルかー!?」

「おう、ここにいるぜ。何の用だ？」

「私たちと戦うアルよ！」

「……まあ、約束してたし。……いいぜ」

そう言っつて場所を屋根の上に移す。

「2人同時でも構わねえから、ほら来い来い」

「同時でいいのでござるか？」

「ああ」

その瞬間蹴りが飛んできた。

「ああ」と言っつた口の形のまま、体を反らしてかわす。

そこに足払いがかけられる。

バク転でかわす。

背後に長瀬が現れる。

拳の突きを受け流し、投げ飛ばす。

次の瞬間、古菲が襲い掛かってきた。

「竜巻旋風脚！」

向こうの攻撃が当たる瞬間に、こちらの攻撃が古菲をはじきとばす。が、その後の硬直の隙を突いて長瀬と古菲が同時に攻めてくる。

飛び道具を弾き返し、突いてくる腕の上に逆立ちになり攻撃をかわす。

かなりのスピードを持った攻撃を無傷でやり過ごした。

「流石、やるな」

「それはこっちの台詞でござるよ」

普通、体が大きくなればなるほど動きは鈍くなるのが道理である。だが、この男はそれを微塵も感じさせない。

長瀬と古菲は男の予想以上の強さに舌を巻く思いだった。
そして……

「先生の動きには何か妙な物を感じるアル」

「うむ、あの動きは格闘家というより……」

あの動きは戦士のソレだ。

「お、それに気付くのか」

「しかし、何故学校の先生をしている人がそんな動きが出来るアルか？」

何故命を賭けて戦う者の動きが出来るのか。

「答えては……くれないのでござるな」

当然、といったジェスチャーを男はする。

「聞いたかつたら、それこそ拳で聞き出せばいいじゃねえか」

「そつするアル」

古菲と長瀬、2人の姿が消える。

「だが……こつちも負けるつもりはねえ」

男が初めて構える。

「破ッ！」

「せいッ……！」

二人の同時の攻撃。タイミング的にも、絶対にかわせない一撃のはず。間違いなく当たると思ったが。

「残像だ」

手刀が二度閃いた。

次の瞬間、2人は膝から崩れ落ちた。

「アイヤー。まさか手も足も出ないとは思わなかつたアル」

「やはりまだ修行が足りないでござるな」

「何、2人とも十分強いぜ。俺に縮地を使わせただからな」

「実力の欠片しか出していない人間にそれを言われても……」

「慰めにならないでござるな」

確かに。男はまったく戦う気がない様に見えた。

それ即ち、殺気も闘気もなしに戦ったということ。

相手にそんな姿勢を取られる事。戦う者としてこれ以上の屈辱はない。

「まあ、お前たちはまだ十分若いんだ。まだまだ先があるってことだ」

そう言つて2人の頭の上に手を置いた。
しばらく頭を撫でる。

「先生」

古菲が声を発した。

「ん？」

「師父つて呼んでもいいアルか？」

「あー、それは……」

男は困つた顔をする。

「ぜひ弟子にして欲しいアル！」

「と言つてもな……。まあ、ちょっと考えさせてくれ」

「いい返事を期待してるアルよ」

そう言つて古菲は帰っていた。

「まさか長瀬はそんな事言わないだろうな」

「む、言つてはいけないのでござるか？」

唇を尖らせて不満顔をする。

「おいおい、マジか？」

「冗談でござるよ」

「……からかうんじゃないよ」

そして、

「ま、出歩くのはいいが見つからないようにな

「そんなへまはしないでござるよ」

そのまま別れた。

（暁（式神））

あかしきが出て行ってから更に数分後。

「……俺は寝てりゃいいんだよな」

そう言って横になる。

「いやー、にしても式神の俺たちがここまで自由意志を持つとはなあ」

実際、ネギの式神は言われたことしか出来ない。

が、暁の姿の式神は意思を持ち、姿だけでなく更にその力の一部をもコピーしている。

「流石『規格外』ってところかな」

それに、この男は『暁』の名をすっかり書かれている。

そのために残り2体の式神よりも更に自由意志を持っている。

「ま、せつかくだから本体のためになることをしようと思ったんだが・・・」

焼も、あかしきもどっちも暁の事を思って本人のふりをしているのだ。

「焼はフラグ建て・・・だっけか、あかしきは約束を果たしたし・・・」

フラグ建ては暁のためにはあまりならない気がする。

「お？誰か来るな。寝たふり、寝たふり・・・」

「し、失礼します」

のどかが部屋に入ってきた。

「ね、寝てるんですか？」

「……………」

「え、えと……こんな形ですみません……でも……」

のどかの顔が男に近づく。

「私、嬉しいです……キス……させてください……」

その時。

「帰ったZE」

天井裏から焼が帰ってきた。

「帰還したぜー」

窓からあかしきが帰ってきた。

「へ、曉さん……？」

「やば・・・！」

「しくつた！」

「馬鹿！あと少しだったのに！」

当然、のどかは暁が三人いるという状況に……

「ひ……………」

パニックを起こし……

「ひゃあああああああ！」

悲鳴を上げて気絶した。

「とりあえず逃げるぞ！」

「「おう！」」

暁たち（式紙）は逃げ出した。

「…………とと、ちゃんと寝かせとかないとな」

布団にのどかを寝かせて。

その直後、悲鳴を聞いた夕映が駆け込んでくる。

暁たちは屋根の上で相談する。

（おいおい、どーするよ）

（あゝ、まさか来るとは思わなかったZ E）

（とりあえず、俺は綾瀬んとこ行くぜ。あと星やめろ。キモい）

（ひどいなオイ）

（同じ式神だからな）

(・・・なー、そろそろネギの姿の式紙も消したほづがいいのか？)

(ああ・・・二、三体消せばいいんじゃない？)

(じゃー、俺たちはそっち方面やるわー)

(了解)

(把握！)

暁が夕映の対処、焼とあかしきはネギの式神のある程度の掃討と決まった。

〜焼(二回目)〜

ネギ一人目を発見した焼。

「・・・なんで廊下にいるんだ、ネギ？」

「みぎです」

「いや、どうでもいいけどよ・・・。とりあえず、ほい」

みぎの頭にチョップを食らわせた。

煙とともにみぎは消えた。

「この煙、出過ぎ・・・。この式神絶対忍者だろ・・・」
「先生!？」

「げ」

(誰かに見られてたのか!?)

男は後ろを振り向く。

「・・・なんだ、まき絵か」

「なんだじゃないよ! 暁先生、ネギ君をどうしたの!?!」

「ああ、大丈夫大丈夫。ありゃあネギのニセモンだ」

「ニセモノ・・・?」

「そーそー。だから心配しなくてもいいんだよ」

「よかつた・・・」

(ん? そう言えばさつき・・・。ならここで・・・)

「なあ、まき絵・・・」

「なに? 先生」

「改めて見てみると、お前可愛いな・・・」

「ええ!?!」

突然の男の一言にドギマギするまき絵。

「だから・・・」

さらに男の口から信じられない言葉が。

「キス、してもいいか?」

くあかしき(二度目)く

廊下。

「おー、ネギ発見」

「やぎです」

「どうでもいー。とりゃ」

「ぬぽっ」

レバーブロー。ヤギは消えた。

「およ?」

「あ、師父!」

そこで会ったのは長瀬と古菲だった。

「だからー、それはまだって言ってるだろ?」

「えー」

(ん?そっぴゃー……)

「そうだなー……」

ちよっどいいと思い、告げる。

「キスしてくれたらいいぜー?」

「へ?」

「おおー、大胆な要求でござるな」

「なんだったら長瀬もするかー?」

「は?」

「いやー、せつかくだからするかって話」

（ 暁（式神） ）

暁の部屋。

「暁さんは私がきつと連れてきてあげますから。ここで休んでいるのですよ、のどか」

そういつて夕映は廊下に出る。
が、目の前に暁がいた。

「せ、先生!？」

「あん？綾瀬じゃねえか」

「ちょうどよかったです。先生、実はあの・・・」

「なんだ、のどかは寝てるのか」

「え、ええ」

いつの間にか夕映は暁の部屋に押し戻されていた。

「ま、いいか。なあ、夕映」

呼び方が変わった事に気づいた夕映。
何か違うと思ったが、遅かった。

「お前が欲しい」

「あ、暁先生・・・？」

「駄目か？」

「あ、いえ、いや・・・あっ」

迫ってくる暁を避けて後ずさりした夕映は布団に足を取られ転んだ。

「夕映」

そこで夕映はそばに寝ているのどかに気付く。

「あ、暁先生見損ないましたよ！のどかに告白されて・・・」

「そうだな、だったら夕映とのどかどっちもとればいい話だな」

「うっ・・・うっ・・・？」

つっと髪が撫でられる。

「はう・・・な、何故私を・・・」

「さあな、こっぴつに理屈を問うのは無粋ってもんだろ」

夕映の首筋に男の顔が埋められる。

そのまま息を深く吸った。

「夕映はいい匂いがするな……」
「や、やめ……!」

夕映の体が恥ずかしさに震える。
流石に暁を押し返そうとするが、
さわり。

「ひゃっ!」

首筋を撫でられて脱力する。
暁の顔が迫る。胸に手が伸びる。
もう駄目かと思ったその時だった。

「勝手に何してくれてんだこの野郎……」

く 暁（本人）く

旅館の外。

「さーて、そろそろ帰るか？」

「はい。特に不自然な所はありませんでしたし。．．．ところで暁さん」

「あん？」

「のどかさんの事どうするんですか？」

「．．．．まだ早いぜ。あいつには」

だから、と続ける。

「運命を乗り越える覚悟と力を持つまでは、保留だな」

「そうですね．．．．」

「じゃあな、俺は自分の部屋に帰るわ」

「はい、僕も帰ります」

そしてネギを見送った。

暁も帰ろうとしたその時と、その時。

「おう、エヴァと茶々丸じゃねえか」

「こんばんは、暁」

「こんばんは、暁先生」

「で、何でここにいるんだ？」

「それはね．．．．」

エヴァが暁に近づく。

完全に油断していた暁。

エヴァにキスされ．．．．

「はいストップ」

なかった。

エヴァは顔面を掴まれて止められている。

「今のは確実に虚を突いたと思ったのだけれど……」
「今までが今までだからな」

で、と暁は続ける。

「何でここに来たんだ？」

「あの程度の式神で私の目を欺こうだなんて六百年おそ……」
「私が暁さんの反応を追跡しました」

「……」

「わざわざキスしに来たのか？」

「え、ええ、今敷地内でキスをするとな仮契約が発生するのよ」

せつかくだから……と言ったエヴァ。だが暁は聞いていなかった。

「なん……だと……？」

急いで辺りを確認する。

「……」

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

暁の体から殺気が噴き出した。
契約陣がかき消える。

「エヴァ……教えてくれて感謝するぜ……」

「……どうするのですか？」

「ふ、ふふふ、ふふふふふふふ」

「茶々丸、逃げるわよ」

「はい、マスター」

「あのオコジヨ、皮を剥いで九分殺しだ!!」

オコジヨの死亡フラグが確定した。

「って帰ってきたのはいいものの、なんで俺が3人もいるんだよ」

とりあえず近場の奴の所へ向かった。

「キス……してもいいか？」

「え」

式神がまき絵に迫っているところだった。

「ナツパーム、デス!!」

「デストロイ」

一撃死技を叩き込む。

「え？え？先生が二人？消えちゃった？」

「・・・ありやあ俺のニセモンだ」

「ええ！？あの暁先生自体も偽物だったの！？」

「ああ。・・・ところで、今お前は何やってんだ？」

「え、えーと・・・」

しどろもどろにまき絵は説明した。

「・・・分かった。ちよつと後始末するから、早く部屋に帰れ」

「で、でも・・・」

まだ何か狙いがありそうなまき絵に暁は言った。

「お前は可愛いからあんなニセモンに狙われるんだよ。だから、な
？」

「うう・・・（か、可愛いってまた・・・）」

とりあえずまき絵を返した。

「この調子じゃ他の奴もやばそうだな・・・」

次の気配に急いだ。

「い、行くアルよ・・・？」

「おう、来い」

辿り着いたのは古菲がキスする寸前だった。

「させるか」

式神の目の前に潜り込む。

「はっ！」

腹を抉る一撃。

「真・昇竜拳!!!」

「ウボアー」

式神は消えた。

「あれ、師父アルか？」

「師父かどうかはともかく、危なかったな」

後ろを振り向いた。

「えい！」

ちゅっ

「は？」

古菲にキスされた。頬に。

「キスしたから師父って呼んでもいいアルね？」

「何のことだ？」

「さっきの暁先生が『キスしたら師父って呼んでもいい』と言ったのでござるよ」

「おいおい、そりゃあ俺は関係ねえだろう」

「乙女の純情を弄んだのでござるか？」

「ちよ・・・」

「せっかく勇気を出したのに・・・ひどいアル！」

「だーっ！分かったよ、俺の負けだ」

両手を挙げて降参のポーズをした。

グツとガッツポーズを古菲は取った。

「ただし、弟子入り試験に合格したらな」

「聞いてないアルよ！」

「ま、チャンスがあるだけいいだろ？」

「そうでござるよ。試験に受けられただけの話でござる」

「む、それはそうアルが・・・」

「んじゃ、後始末系の仕事があるのでこれで」

「あ、待つアル！」

「待たねえ」

最後の気配に向かった。

最後の式神はなんと夕映を押し倒していた。
すかさず殴り飛ばす。

「勝手に何してくれてんだこの野郎……」

「え、暁さんが二人！？どういう事なのです!？」

「ん……どうしたの……?」

のどかも騒ぎに起き出す。

「え……ええ!? 暁さんが二人!？」

「二人とも、コイツは偽物だ。……何してんだ、テメエ」

夕映とのどかを背後にかばい、暁は尋ねる。

起き上がった偽物が不満げな口調で反論した。

「何だよ本物。せつかく良いところだったんだから邪魔するなよ」

「何だと?」

「俺たちがこついう事をすれば、あんたが得すると思ってこんな事してんじゃねえか」

暁は溜め息をつく。

「俺の為ってなあ……。こんなのがなるわけねえだろ」

そして背後の二人に向かって言う。

「安心しろ。お前達には手出しはさせねえ」

「はい……!」

「はい……です」

「と言うわけで、消える」

「もうちょっと楽しみたいんだ。逃げさせて貰っせ」

一瞬で窓際まで移動した式神。しかし、

「残念だったな」

既に背後に暁がいた。

振り向いた式神だが、

「『極死・

首筋に飛んできたナイフを弾く。が、

七夜』」

次の瞬間、首を捻じ切られた。

「………やっぱ本物には敵わねえか……」

首だけになった式神は呟く。

「当たり前だ。偽物に負けてたまるか」

ソレを見下ろしながら暁は言う。

「ふ………でも、楽しかったぜ」

「それは……良かったな」

「ああ………」

満足そうに式神は消えた。

「暁さん、これは一体どういう事なのです?」

「ああ、これか。これはおそらくイベントの一環だろうぜ」

「イベントのことを知ってるんですか?」

「さつき聞いたばかりだがな。さて、後始末があるんだ。お前達は帰りな」

背を向けた。

「はい。でも……」

「暁さん、ごめんなさいです!」

「あん?」

後ろから夕映に抱きつかれた。

「おいおい、一体何の真似だ?」

振り向いた。

「えい!!」

「うおお!?!」

のどかの顔が迫る。

避けようとするが、夕映がしっかり抱きついていて動けない。

無理矢理引き剥がせばいいが、下手すると怪我をするかもしれない。その一瞬の躊躇が……

ちゅっ

のどかのキスを許した。

「お、おい！」

後ろに夕映がいるのを忘れて、反射的に後ずさり、

「きゃあ！」

「危ねえ！」

下敷きにしそうになったのを回避し、暁自身を下に、夕映を上を持つてくる。

だがその結果、

ガン！

「がっ……！！」

丁度柱の角に頭をぶつけた。

不意打ちに、暁の意識が一瞬飛びかける。

そしてそのまま夕映が倒れ込んできた。

ので当然、

ちゅっ

二人はキスをすることになった。

「すまん、こんなつもりはなかったんだ……。許してくれ……」

暁は現在土下座をしている。
地に頭を擦りつけて謝罪している。

「い、いえ！私は自分からしましたし……」
「わ、私のは事故です！あれはノーカンです！……」
「本当にすまねえ……」

今の暁の頭の中は、のどかと夕映への謝罪と、エヴァへの言い訳でいっぱいだ。
どうせエヴァは『あの二人だけするのはずい』と言ってキスを迫るだろう。

(ムジムジするお……)

更に、テオドラがいる。

向こうに行った時、この事がばれたら……

(ヤバイ、かなりヤバイ)

「と、とりあえず俺はこのイベントの後始末やってくるわ」

「は、はい(です)……」

「朝倉、そこにいるんだな？」

「げ、暁先生!？」

イベントの主役が来たことで焦る朝倉。

「お前、仮契約のこと知ってるか？」

「はい?何ソレ?」

おいしいの?とばかりの朝倉の表情に、暁は『朝倉は嘘を言っていない』と判断する。

「知らないのか。ならいいが。で、カモもいるな?」

「うん、いるけど……」

「ちよつとこつちに寄越してくれ」

「何するのさ?」

その問いに、暁は惚れ惚れするような笑顔で答えた。

「ちょっと臨死の恍惚を味わって貰おうかな……」

参加者は、暁にこっそり絞られた上で部屋に帰された。そして……

その後、

この夜力モの姿を見た者は

誰もいなかった……。

一瞬の油断が命取り（マジで）（後書き）

うわあい、何かフラグがひどいことになってるぞ。

ちなみに首をねじ切る瞬間はのどかたちには見せていません。
振り返る前に捻じ切っていました。

↓受け取れよ。あんたへの手向けの解説だ↓

『たつまきせんぱうしきやく
竜巻旋風脚』

「ストリートファイターシリーズ」より

・リュウやケンが使う技。

・体ごと回転しながら蹴りを繰り返す。

・上位技の『真空竜巻旋風脚』はその様子から『ヘリコプター』とも呼ばれる。

『ナパームデス』

「ギルティギアシリーズ」より

・ソル・バッドガイの使う一撃必殺技。

・炎を身に纏い、上空へ飛翔する。

・暁は、まき絵に見えないよう当たる瞬間だけ炎を開放した。

『真・昇竜拳』

「ストリートファイターシリーズ」より

・格闘ゲームにおける対空技の代名詞、昇竜拳の上位技。

・波動の力を込めたショートアッパーから昇竜拳につなぐ技。

『極死・七夜』

「月姫」や「メルティブラッド」より

・七夜 志貴（というより七夜一族）の技。

・ナイフを投擲し、直後相手の頭上に飛び首を捻じ切る。

・ナイフを避けねば心臓にナイフが刺さり、ナイフを避ければ首を取られる。

・さらにナイフと七夜はほぼ同時に襲い掛かってくるため、実質回避不可能。

修学旅行 3日目

〔 Akatsuki Side 〕

朝。

「何だと！？ 仮契約が成立していた!？」

「は、はい……………」

俺は叫び声を上げた。

「何でだ？俺は確かにあの時契約陣を消したはず……………」

「もしものために俺っちが二重に書いてたんだ」

「あゝあゝ？またためーか糞オコジヨ。もう一度

るぞ、コラ?」

す

「すいませんごめんなさいわおれっちがわるうございました」

「たく…………。とりあえずトラウマ再発したオコジヨは放って置く。」

「でも不思議なんです、暁さん」

「あん?」

「のどかさんに夕映さんとキスしたんですよね?」

「ああ」

事故だが。

「ですけど、出てきたパクティオーカードには、絵柄がないんです」

「なに？」

ネギが持っている物を見ると、確かに何も書いていない。真っ白だ。

「……ちよつと貸してみる」

「あ、はい」

とりあえずよく調べてみようと思いつき受け取ったときだった。

パアッ！

「うおっ、まぶしっ！」

いや、それほどでもないか。

「……おお！？絵柄が現れてるぞ！」

「ええ！？」

そう、俺が触れたとたん絵柄が現れたのだ。

そしてもう一つ気になることが……

「まあ、とりあえず……コピーカードは渡しまつたんだろ？」

「はい。景品だったとかで……。しかもコピーには絵柄が書いてあつたんです」

……分らんな。

「それは置いておくとして、まあ魔法のことは話さなければいいか。

で、今日本山に行くんだろ?」

「はい!」

「よし、じゃあ後で橋で待ち合わせだ」

「分かりました!」

「おう、ネギ。遅かつ・・・た・・・な・・・?」

「すみません・・・」

「暁、私を置いて行こうなんてひどいんじゃない?」

「特に行くところとかもないし、ちようどいいでしょ、暁せんせ?」

(おいおい、なんでこいつらがいるんだよ)

(ごめん!どうしても撒けなかったの)

五班と六班が来ていた。

「はあ・・・仕方ねえなあ」

これじゃ転移が使えねえじゃねえか。

「行くぞお前ら」

「い、いいんですか?」

「まあ、来ちまったもんは仕方ねえしな」

さて、どこ行くか。そしてどうやって撒くか。

ハルナの提案でゲーセンに来た。
プリクラを撮った（撮らされた）後のこと。

「おう、マナじゃねえか。どうしてこんなところに？」
「おや、暁さん。奇遇だね。ほんのちよっと寄ってみただけさ。・・・
で」

俺の背後をちらりと見ていう。

「こんなに美少女を引き連れて、いい御身分だね」
「なんだったらいくらかもらってくれてもいいぞ」
「はは、遠慮するよ」
「で、何やってんだ？」
「ガンシューティングさ」

ほう。

「じゃあ、俺も参加させてもらおうか」
「お金は出すんだろっね」
「何ならお前のコンティニューの分も出してやってもいいが？」
「私がコンティニューするだけでも？」

「ふん・・・なんなら賭けるか？」

「・・・いいよ」

「じゃあ俺が勝ったら本を三冊買ってもらおう」

「ならば私が勝ったら餡蜜を三杯奢ってもらおうか」

「・・・」

「ククククク・・・」

「フフフフフ・・・」

「ハーツハハハハハハハハハハ！！！！」

勝負になった。

「オラオラどうした！もうバテたとか言うんじゃないかねえだろうな！！」

「それはこっちのセリフだよ！」

お互いの点数で競うことになっている。

お互いが出てきた敵を一瞬で撃ち殺しているので点差はほぼない。

「それにしても意外だね、暁さんがこういうゲームが得意だったとはっ！」

「お互い様だろ、巫女さんが射撃が得意だなんてなっ！」

強いて言うなら、俺の方が少し高い。が、それは俺の側から出てくる敵が多いというだけだ。

状況が変わればあっという間に逆転する。

「今は私のほうが点は高いようだ・・・ねっ！」

「まだまだこれからだろう・・・がっ！」

お互いに減らず口を言い合う。

結局この言葉の応酬はゲーム終了まで続いた。

「同点か。あのアイテムを取っておけば勝てたのにな・・・」

「残念だね、あそこで後一発早く私が撃ち込んでおけばボスの得点は私のものだったのに」

そしてお互いに向き合う。

「・・・強いな」

「・・・暁さんもね」

そう言って握手する。

なにか絆が生まれた。

その間にネギは魔法使いのカードゲームをやっていたみたいだった。最後は乱入者に負けたらしいが。俺はその後姿だけ見送った。

・・・あの乱入者・・・。

皆の注意が俺たちから離れているのを確認し、告げる。

(刹那、ここは任せたぞ)

(はい)

(それで・・・本当に本山には向かわないんだな?)

(はい、今向かえば危険だと思い・・・)

(お前がそう思うんならいいが・・・。刹那、何か困ったことがあったらシネマ村に行け)

(シネマ村・・・ですか?)

(ああ、助っ人がいる)

それだけ言い残して、俺はネギ、アスナと関西呪術協会本山に向かった。

ちなみにエヴァはぬいぐるみを取ろうとUFOキャッチャーに夢中だった。

「で、罨にはまったと」
「うう……」

今は本山に続く竹林の中の千本鳥居の中にいる。
無限方処むげんほうじょの咒法じゆほうとやらにかかったらしい。

「仕方ないじゃない！こんなのあるって知らなかったんだから！」
「罨があるって知られたら罨にならねえだろ」

本当に優秀な罨というのは、かかった事すら気付かせずに相手を仕留める物だな。

「暁さんは何か策があるのですか？」
「ああ、無いこともない。が……」

竹林の一点を見る。

「出てきな、坊主」
「へえ、気配消す札使ったはずなんやけどな」

学生服を着た少年が出てくる。

「あつ、さっきの……！」
「代わりに札を使う気配がしてたからな。そして……サル女、てめえも出て来い」
「誰がサル女や！」

おう、簡単に釣れた。

「サルの式神を使う女だからサル女。どこが間違ってる？悔しかったら名前を言ってみる」

「ウチは天ヶ崎 千草や！」

「坊主は？」

「坊主やない！犬上 小太郎や！」

ふむ、これで身柄の確保後がやりやすくなったな。

さて、こっちに神鳴流のメガネがいねえということは……。

……まずいかも知れねえな。白髪の気配もねえ。

「……ともかく、ここから出させてもらっぞ」

「どうやって出るって言うんや？」

「こっやるんだよっ！」

ナイフを投擲する。

確か、

『無限は有限を決めることで初めて意味を成す。

故に、必ず無限と有限には境界が存在しななければならない。

例えそれがないのが無限だとしても、その概念故に必ず境界が存在する』

……だっただか？

よって、結界の境界の『死の点』を突けば……

パリーイイイイン!!!!

「この通り、簡単に破れるというわけだ」

「な、なんや!?何をやったんや!?」

「さあな。ところで……………」

二人の目を見て言う。

「お前ら、あの神鳴流と白髪頭はどこ行った?」

「……………はっ、そんな言うわけないやろ!」

やはり捕まえるついでに聞き出したほうがいいのか?
と、その時だった。

「暁先生!っ!このかさんの所だそうですね!っ!」
「のどか!?!」

マズった!尾けられてたのに気付かなかった!

手に持っているのはアーティファクトか。どうやら読心系のようだが……………

「余計なことを言うな小娘!」

「させるか!」

のどかに向かった式神をナイフの投擲で消す。
と、その瞬間。

「
ツツツツ!!!!!!」

背筋に寒気が走った。この、感覚は……。

「ネギ、アスナ！ここは任せた！」

その返事を聞かずに俺は竹林を飛び出した。

〔Sierra Side〕

気付くと私はシネマ村にいました。

服は適当に選んであったらしく、目立たない服です。

「まったく、呼び出すなら呼び出すで事前に用意などしておいて欲しいのですが」

それほど余裕がなかったわけでもないでしょうに。

「……おや？」

こちらに近づいてくる気配は……。

「刹那、どうしました？」

「シエ、シエラさん!？」

「どうしてここにいます!？」

おや、ハルナに夕映、そしてザジも一緒でしたか。

(あなたが暁さんの言っていた助っ人ですか?)

(ええ、多分。それで、今どうなっているのです?)

(遠距離からの攻撃です。白昼堂々手を出してくるとは思わず……)

(やれやれ、何故本山に向かわないのです?)

(え?)

(このようなときこそ本山に向かうべきでしょう。あそこが一番安全です)

(そ、そうですね……)

「さて、折角シネマ村にいるのです。皆着替えてみましょうか？」

「は？何を……」

「うちもちよとどうしたかったんやえ〜」

「いいね!」

「そうですね!」

というわけで着替えました。

私は、くのいちの格好にしました。動きやすいですし。着替えたのは、何かあったとき誤魔化せるからです。

しばらく道を歩いていると・・・

「人力車ですか」

するとそこから貴婦人の格好をした神鳴流のメガネ戦闘狂が降りてきました。

「どうも、神鳴流です。・・・じゃなかったです」

とかなんとか言っていましたけどどうでもいいです。

メガネ曰く、このかを寄越せということでした。

「そうは行きませんね。このかは渡しません」

「あら、きれいな人。それに強そうやわ……。名前は……。？」

「シエラです。覚えなくていいですよ」

「そんなこと言わんといてー」

「お前の趣味などでもいい！お嬢様は私たちが守る！！」

と刹那が言うと、

「そーおすかー、ほな仕方ありまへんなー」

と言って手袋を投げてきました。

そして三十分後、日本橋で決闘ということになったのです。

「逃げたらあきまへんえー、刹那センパイ」

あの、目は……危険ですね。
横を見るとこのかが震えていました。

「ねね、今の何!？」

「やっぱり桜咲さんはこのかと……!？」

「と言っかなんでシエラさんが……!？」

3班に見つかりそういうことを言われましたが、今はどうでもいいです。

「このか、怖いのですか？」

「……え?？」

……やれやれ。

「……本来ならば、これは暁が言う台詞です」

「へ?？」

「ですから、これは暁の言葉だと思って聞いてください」

一息入れる。このかの前に跪き、頭をたれる。

「『我、暁は、汝、近衛 木乃香を我が力の及ぶ限り、我が腕の届く限り、守護せん。』

我が魂が尽きるその時まで汝を護り抜く事を誓う』」

顔を上げ、このかを見る。

「『汝、我が護るべき者也』」

「え?え?」

「安心してください、このか。今、暁はいませんが、代わりに私が

あなたを護ります」

その後、周りから拍手が沸きました。

ともかく、このかが安心してくれるならそれでいいのです。

「約束通り来ましたよ、月詠」

「ふふふ、ぎよーさん連れてきてくれはっっておおきにー」

「始めましょうか。刹那にもこのかにも手は出させません」

（刹那、私が月詠と戦い始めたら逃げてください。本山に向かうのです）

（しかしそれではあなたが！）

（大丈夫です、心配しないでください）

「で、後ろの人たちは関係ないのですか？」

「そゆこと言わんとしてー。この方たちには私のかわいいペットがお相手します」

月詠はそう言うと同時に札を出す。

「ひゃっきゃこおー！」

大量の式神ですか。

「既に教師でないとはいえ、生徒に手を出させるわけには行きませ
んね」

腰の小太刀を二本引き抜く。

「御庭番式小太刀二刀流、おにわばんしき 『呉鉤十字』こたぢにとうりゅう ！！」

〔Other Side〕

戦闘開始から数分後。

「にとーれんげき、ざんてつせーん」

「御庭番式小太刀二刀流、おんみょうじゅう 『陰陽交叉』いんやうじょう ！！」

激しく打ち合う。傍目から見ると互角に見えた。が、

「あなた、なんか隠してらっしやるやろ？動きがぎこちないですえ
？」

月詠にはばれていた。何かシェラの動きがおかしいことを。

「この程度、気にすることありません」

とは言ったものの、とシエラは戦いつつ考える。

(体が予想以上に馴染んでいませんね。これはまずいかも知れませんが)

ふと顔を上げたその時だった。

城の屋根の上に刹那とこのかがいた。そして、白髪………の少年も。

「刹那!!」

「余所見はあきまへんえ」

「ぐうっ!!」

(刹那、その少年と戦ってはいけません!)

そのとき、風に乗って声が聞こえた。

「……そうだね、君には一度『眠ってて』もらおうか」

少年が手をかざす。

「……石化魔法ですか……っ!!」

シエラは己の判断の甘さに齒噛みする。

(せめて、私がこのかの元にいれば良かったものを……!)

この距離ではどうしようもない。

馴染んでいないこの体では、月詠から逃げられもしない。

「暁!!」

その名を呼んだ。

暁はシエラの目を通じて、この光景を見ていた。ゲートでは間に合わない。瞬間移動も同様だ。ならば、

「『世界』ッ！時よ、止まれッ!!」

世界が凍る。

止められるのは10秒。

飛ぶ、走る、跳ぶ。

一直線にシネマ村に向かう。

時間停止中、他の能力の使用はほぼ出来ない。

故に、たどり着く前に時間切れが来る。世界が動き出すその瞬間、

「『スタープラチナ・ザ・ワールド』星の白金の世界』ッ!!」

連続で時を止める。

こちらは止められるのは5秒だけ。

暁は、凍った世界を駆け続けた。

だが……

(間に、合わない……？俺は、俺はまた……)

「オ……オオオオオオツ！！」

久しぶりに暁の髪の色が変わる。

今、暁は白黒の世界を疾る黄金の光だ。

暁は手を伸ばした。

「『距離を』！！！」

白髪の少年は、突如現れた気配の方を向いた。

「……君か」

暁がそこにいた。

「……運が良かったな、オマエ」

「……何だった？」

「このかや刹那に危害を加えていたら、楽には死ねないところだったぞ」

「暁さん！」

刹那たちのほうを向く。

「刹那、無事だな？」

「は、はい」

「このか、さつきシエラに聞いたと思うが、俺はお前を全力で守ってみせる。だから、安心しろ」

「う、うん……」

さて、と少年に向き直る。

「改めて……久しぶり、いや、はじめまして……か」

「そうだね。『僕』は君に会うのは初めてだ」

「退くのか？」

尋ねてみる。

「……そうだね、今の君と戦うのは得策じゃない」

「だったらさっさと失せろ」

「……そうさせてもらおう」

少年は水のゲートで消えた。

月詠もいつの間にか退いている。

「……シエラ」

「すみません、暁。今の私ではどうしようも出来ませんでした」

「気にするな。俺の見通しが甘かったんだ」

そして、暁はこのかに向かって言った。

「このか。今、お前は危険な奴らに狙われている。

だから、お前の実家に逃げ込もうと思うが、いいか？」

「う、うん。なんやよーわからんけど、暁さんが守ってくれるん？」

「ああ、絶対にな」

安心させるように笑って見せた。

「なら安心やね」

このかも笑った。

一方、ネギたちの方は戦闘の最中だった。

暁が去った後、戦いが始まったのだ。

「ハハッ！どうした西洋魔術師！こんなモンか！？」

「くっ！」

「左です、アスナさん！」

「わかった、やあ！」
「チィ！ちよこまかと！」

戦況は膠着していた。
戦いはちょうど二組に分かれている。

ネギ对小太郎は、小太郎優勢。
ただしそこまでネギも追い詰められているわけではない。
ただ、攻撃が当たらない、当てられないため、防御に専念している
だけだ。

アスナとのどか対千草は、のどかのアーティファクトいどのえいじつきの効果により
アスナたちが優勢だ。
さらに、アスナのアーティファクトハマノツルギの効果もあった。

「ラス・テ・・・」

懸命に詠唱しようとするネギ。
が、小太郎はその暇を与えない。

「遅いわ！」

殴る。

「うわっ！」

吹き飛ばされ、受身を取る。
これがさつきから何度も繰り返されていた。

「兄貴、本山に向かって魔法を撃つとかしないのか!？」

もしかしたらこっちに気づいて助けてくれるかもしれない、とカモは言うが、

「駄目だよ、もし敵だと間違われたら・・・」

そう。もし『西洋魔術師が攻めてきた』と思われたら、折角の親書が意味を持たなくなるのだ。

「けどよお・・・!!」

「勝負の最中に話し合いとはずいぶんな余裕やな、え!？」

小太郎の拳がネギの腹を穿つ。

「ぐはっ!」

咄嗟に後ろに飛んで衝撃を緩和したが、それでも結構な衝撃である。

(まずい、このままだと障壁がもたない・・・!)

どうにかしなければ、と考えるネギの脳裏にひとつの作戦が思い浮かんだ。

アスナは不思議な感覚を感じていた。

「右におサルさんです、アスナさん！」

右に向かってハリセンを振る。

式神が一体、紙に戻った。

のどかによる的確な状況報告も確かにある。

が、それでは説明できない『動きの速さ』があった。

腕の振りなどではない。『状況に対処する速さ』だ。

まるでかつてそういう対処法を覚えてもらったかのように……。
猿鬼がアスナを叩き潰そうと腕を振り上げる。

……スナいいか、相手の胴体ながら空きのときは……

（脇を抜けつつ、攻撃！！）

なでるようにはたいて猿鬼を還す。

「すごいです、アスナさん！！」

のどかが歓声をあげる。

「う、うん。自分でも意外だけどね」

さつきから脳裏に掠める声は、あえて無視する。
それよりも今は……。

「ええい、さつさと倒れなはれ！」

周りに大量の小さいサルが現れる。
のどかの方も狙われている。

……しも囲まれたらどうするかって？そうだな、こっち
のほづが力量が上の場合……

(一点突破して、包囲を抜ける!!)

「やあああつ!!」

飛び出し、アーティファクトの効果に任せて目の前のサルを薙ぎ払
う。

そのままのどかを襲おうとしていたサルたちも薙ぎ払った。

「……このままじゃ埒が明かないわ。次で決めるわよ」

「は、はい。でも、どうやって……？」

アスナにはひとつの作戦があった。

「そらそら、パートナーがおらんと何も出来へんのやな!」

小太郎の挑発には乗らない。

(一つだけ、僕が暁さんに教えてもらったこと……)

『どんな奴でも、脳だけは絶対の急所なんだ。だからそこに攻撃を当てるのが一番いいんだよ』

けれど、そもそも攻撃が当たらないのでは仕方がない。

(一瞬でいい。一瞬、隙があれば……!)

「……そろそろ飽きたわ。何もしようとせん腰抜けやったか」

小太郎は腕を振りかぶる。

「終わりや!!!」

(ここだ……!)

「シム・イブセ・バ格取・セクンダム・デネキネアムスプリングファイエルデース
契約執行0・5秒間ネギ・スプリングフィールド」

が、その腕はかわされ、

「『クロスカウンター』」

小太郎の顔面にネギの拳がめりこんだ。

ネギは、吹き飛んだ小太郎の落下地点に詠唱しつつ先回りする。
落ちてくる小太郎に片手を添え、撃つ。

フルグラティオー・アルピカンス

「白き雷!!!」

「がっ……!!」

そのまま、地面に落ちる。

「どつだ!これが西洋魔術師ほくの力だ」

脳を揺らされ、雷撃を喰らい、小太郎の意識は断絶した。

「行くわよ!!」

アスナは飛び出した。

……手が何か召喚して戦っている場合……

(本体を……討つ!!)

「はああーっ!!」

「この数に勝てるか!?」

(薙ぎ払う!!)

「回転……斬りっ!!」

ハリセンを高速で振り回し、一気に消す。

「なあっ!!」

「てえええい!!」

そのまま一直線に千草に向かう。

「伏せてください!!」

咄嗟に身を地に投げ出す。

次の瞬間、頭上を矢が通り過ぎた。

見ると、屈強な式神が弓を構えていた。

次は、のどかが狙われるだろう。そう判断したアスナは、それより早く千草を抑えることを狙った。

……との間合いを詰めるとき? ああ、そりゃあ……

イメージは、弓。限界まで引き絞った弓だ。

伏せた後の低い姿勢のまま、足の裏に力を込める。

そのまま、矢を放った。

立ちふさがる式神は消し飛ばし、的に向かって突き進む。

そして……

「ここまでよ」

千草に剣を突きつけた。

いつの間にか、ハリセンは剣ツルギになっていた。

「くっくっくうう!!!!」

「式神を消して」

周りを囲んでいた式神がすべて消える。

後はどうやってこの女を捕まえておこうかと、アスナが考えていた時。

「アアアアアアア!!!!!!」

咆哮が響いた。

「何!?!」

小太郎が獣化して立っていた。

「今や!!」

「っしまった!」

それにアスナたちが気を取られた一瞬の隙に、千草は逃げ出した。

「オオオオオオオオオオ！！！！！！」

小太郎に意識は既に無い。

ただ『戦う・負けない』という闘争本能だけが体を動かしている。

「兄貴、こいつはヤバイ！逃げたほうがいいぜ！！」

「でも、本山にまで連れて行くわけには行かないよ！」

「ネギ！！」

「ネギ先生！！」

アスナたちが寄ってきた。が、

「っ、来ちゃ駄目です！！」

そうやってネギは横に跳ぶ。次の瞬間ネギがいたところの大地が爆発した。

「があああああああ！！！！！！」

いくら契約執行しても反応できないスピードだった。

さらに意識が無いため、のどかのアーティファクトも効果が無い。まさに絶体絶命かと思われた。

その時、待っていた声が聞こえた。

「ネギ、アスナ、のどか。よくここまで粘ったな」

暁が、鳥居の上に立っていた。
小太郎は暁に目標を変える。
放置しては、背を向けては駄目だとわかったのだろうか。

「坊主、狗族だったか」

「オオオオオオオオオオ！」

嵐のような攻撃を、涼しい顔でかわし続ける。

「なるほど、カモスピードも十分ある。これなら……」

暁はニヤリと笑った。

「俺が『昔』の感覚に戻るには最適だな」

暁は、気での強化も魔力での強化もやめた。

「あ、暁さん!？」

「何考えてんだ、暁兄い!!」

今の小太郎の攻撃を強化なしでまともに受ければ、いくら体が鍛えてあってもただでは済まない。

良くて骨折、悪ければ一撃であの世行きだ。

それを分かっている筈なのに、暁は強化をやめたまま攻撃をかわし続ける。

「オオツ!!シヤア!!」

「はっ、せっ、ふっ!!」

ただ、そこに危うさなど欠片も無い。

まるで最初から決められていたように踊り続ける。

そこに、シエラたちが追いついた。

ただし、シエラと刹那以外は眠っている。いや、眠らされていると
いったほうが正しい。

眠っている全員の顔の辺りに霞がかかっている。これが全員を眠ら
せているのだろう。

「シエ、シエラさん、あれは!？」

暁が強化をしていないことに気付いた刹那が慌てて聞く。

「大丈夫です。暁は死ぬ気はありませんよ」

「ですが……!！」

「大丈夫よ、刹那」

横からの声に驚く。

「か、神楽坂さん!？」

「何故だか分かんないけど、大丈夫。そう思えるの」

その顔に、焦りも不安も無かった。

「で、でも万が一ってことも……」

しかしのどかは不安で堪らない。

「のどか」

「はい!？」

「あなたはまだ暁を知らないのですね」
「・・・・・・・・」

のどかは黙り込む。

「暁を知っていればそんな心配は要りません。

暁があの子の攻撃を喰らうのより、魚が溺れたというほうがまだ信憑性がありますよ」

そういつてシエラは再び暁に目を戻す。

いまだに暁は小太郎の攻撃を避け続けていた。

ただ、だんだんと攻撃が暁を掠めるようになってきている。

「シエ、シエラさん！！」

「大丈夫、アレはわざとです」

そう、一歩間違えば死ぬこの状況で暁は限界を試していた。
しゃがむ。

（あと0.5秒遅くても大丈夫か）

後ろに跳ぶ。

（もう少し弱めに跳んでもかわせるな）

暁は、ただ命が懸かったギリギリの状況を求めている。

それには、こんな一歩間違えただけで死ぬような状況じゃ温過ぎる。
暁が求めているのは、半歩どころか「勘を読み間違えただけで死ぬような状況」だ。

「俺に、『あの頃』を思い出させる」

その顔には、笑みが浮かんでいた。

暁の動きが速くなってきた。

「……………」

ネギたちの中で、はじめにそれに気付いたのは刹那だった。
ゆっくり、ゆっくりと速くなっていく。

「ねえカモ君、気のせいかな……………」

「いや、気のせいじゃねえよ兄貴……………」

ただ、それはかわす速さではない。

「えっ……………!?!」

「あ、暁さん……………」

攻撃に反応する速度が上がっている。

しかも、暁は目を閉じている。

そしてそのまま、かわしている。

「あ、あれでどうやって避けるんですか!?!」

ネギが問う。

「暁は、相手の殺気・視線、動く空気、それらのさまざまなものを
用いて、攻撃を避けています」

「視線・・・!?!」

「ええ。驚きましたか、刹那?」

「当たり前です、目を閉じているのにどうやって・・・」

「暁が言うには『見られるとその部分がむずむずする』だそう
ですよ」

もつとも、と続ける。

「最近^{なま}は鈍^{なま}ってそんなことも無くなっていましたかね・・・」

「さあて、もう十分だな。ありがとよ、坊主」

「おおあああああ!!!」

「悪いが、そろそろ時間が無くてな」

そう言っ^て首を傾ける。

次の瞬間、爪が空を薙ぐ。

その隙を突いた。

「終わりだ」

小太郎の頭に、暁の踵が振り下ろされた。

「「大丈夫ですか、暁さん!?」「」

小太郎が倒れた後、皆が寄ってきた。

「ああ、大丈夫だ。怪我一つしてねえよ。あの坊主もただ気絶してるだけだ」

「暁、あの少年はどうします?」

少し考え込む。

「まあ、放って置いてもいいんだが……」
「連れて行ったほうが何かと便利でしょうね……」

詠春が下を抑える手札にはなるだろう。

「が、この坊主がそう簡単に喋るかね?」

「単純そうですし、大丈夫では?」

「ま、そうかもな」

その時、後ろから声を掛けられる。

「あの、暁さん……」

「……悪いな、のどか。こんな事に巻き込んで」

「いえ……私から踏み込んだんです……」

そしてのどかは暁の顔色を窺いながら言った。

「え、えつと……私がここに来た事、怒ってますか……？」

その様子が子犬のように見えて、暁は笑った。

「いや、そんなことはねえよ。むしろこっちが謝るべきだぜ」

そう言っつて暁は頭を下げる。

「いや、あの……」

「すまない、のどか。こんな危険な世界に巻き込まってしまった」

予想以上の暁の声音の真剣さにのどかは絶句する。

「下手するとここは命を落とす、いやそれ以上の目に会うことだつてある世界だ」

「えつ……」

「それでものどか、お前はこっちに来るのか？」

今なら、お前が望むなら、記憶を消してまだ何も知らない頃に戻してやれる」

のどかはしばらく考え、言った。

「……もう、私は知っちゃったんです。それを無かったことにはしたくないです」

そう言い切った後に呟く。

「でも、やっぱり本当は少し怖いんです……。
死ぬかもしれないって言われて……。
やっぱり、こんな覚悟じゃ駄目……ですか……?」

暁はじつとのどかの顔を見ていたかと思うと、そつと頭を撫でた。

「分かった。忘れたくないならそれでいい。それにその不安も当然だ。だから……」

今度は笑いかける。

「俺が守ってやる。だからそんな顔するな。これじゃこつちが悪者じゃねえか」

この後、暁の『守ってやる』宣言にのどかが真っ赤になって再起動に少し時間がかかった。

そしてその間に、暁を探し回っていたエヴァ、そしてそれに付き添っていた茶々丸が合流し本山に辿り着いた。

〔 Akatsuki Side 〕

現在、俺たちは本山にいる。

詠春に事情を説明し、匿ってもらっている。

ネギは手紙を詠春に渡し、当初の目的を果たした。

「詠春、久しぶりだな」

「ええ、本当に」

久しぶりに見た詠春は……

「なんか昔よりやつれてないか？顔色悪いぞ？」

「はは、長というのものなかなか大変でしてね」

「ま、雑談は後ですとして……」

誰も俺と詠春に注意を払っていないのを確認して言う。

「……大戦期を覚えているか？あの白髪がいた。

姿は多少違ったが」

「……!？」

「おそらく『アレ』は、人形だ。何体でも替えがきく……な。用心しておいたほうがいい」

「……そうしよう」

「俺も、本山の結界を強化しておく」

「助かる」

「なあに、このかを守ると誓ったからな」

「おや、そんな誓いを？」

その後、雑談を交わした。

夜。

宴会が開かれていた。

シエラは外で警戒だ。ただし、酒はちゃんと持って行っている。

「なかなかいい酒じゃないか。昔はこんな物飲まなかっただろう？」
「はは、年を取って多少は違いが分かるようになったのさ」

俺たちはお互いに杯を交わしている。

詠春の口調も昔に戻ってきた。

腰にエヴァが引っ付いているが、頭を撫でていればおとなしくなるので特に問題はない。

「それにしても……よく飲むわね、暁」

エヴァがあきれたように言う。

「ふん、飲まなきゃやってられないんだよ……」

「……何かあったの？」

「ああ、まあ色々な」

「何か出来ることはある？」

「そうだな、こいつらを守っててくれればそれでいい。頼むぞ」

「ええ、いいわよ」

「闇の福音が守ってくれるとは、心強い」

確かにな。

「ねえ、ところで暁？」

なにやらさつきとは違った様子のエヴァ。

「・・・何だ？」

非常に嫌な予感がする。

「宮崎のどかに綾瀬夕映と仮契約キスしたそうね？」

いったい誰から聞いた。そう思い周りを見回すと、

手を合わせてこっちに謝っている朝倉が見えた。あのパラッチ・
・

「どづいづことが説明してもらえるかしら？」

満面の笑顔が怖い。

「いいか、エヴァ。『落ち着いて』『静かに』『最後まで』『俺の話
を聞けよ?』」

「言ってみなさい」

「まあ色々あったんだが、まず後ろから夕映に抱きつかれた。

それに反応して上半身だけ振り返ると、のどかが迫ってきていた
わけだ。

当然避けようとするが、夕映に抱きつかれていて俺は動けねえ。

振り払ってもよかったが、夕映が怪我する可能性もあった。

だからろくに対応できずに、のどかとキスしちゃった。

だが、その瞬間俺は後ろに下がろうとしたんで、夕映が転び、つられて俺も転びかける。

そのままだと夕映を押しつぶすんで、とっさに夕映と俺の位置を入れ替える。

ここで不幸なことに、俺の後頭部が部屋の柱に当たったんだ。

一瞬意識が薄れかけた俺に夕映が倒れこんできて、キスすることになった。

・・・分かったか？」

そう言っつて、エヴァを見る。

「ええ、分かったわ」

「そうか、分かってくれてよかったぜ」

「要するに暁が悪かったのね？」

「待て、その理屈はおかしい」

結局、『学園に帰ったら』仮契約するということでは何とか納得させた。

学園でというのは最大限努力した結果だ。

いくらなんでも、ここでみんなに見せ付けるようにするのは・・・
・・・なあ？

「なあ、詠春」

「何だ、暁？」

「このかの事、どうするつもりだ？」

流石にもう隠しきれまい。

「・・・そうだな、暁からさりげなく告げてくれないか？」

「今告げちゃあ駄目なのか？」

「流石にこの事を説明するのは後にしたい」

まあ、下手すると命を落とすような戦いだしな。

「さて・・・今度は風呂で飲むか」

「まだ飲むのか・・・」

何だ詠春、文句でもあるのか？

風呂。

「相変わらず広いな」

詠春の長としての体面もあるのだろう。

がしかし、泳げるほどの風呂ってなあ・・・。

「まあ、酒が美味いならどうでもいいが。さて、飲むか」

酒瓶が数十本、空になった頃。

「そろそろ出るか」

と、出ようとして酒瓶を抱えつつ扉を開けた瞬間

「あっ！」

ちょうど風呂に入ってきた刹那にぶつかった。
で、抱えていた酒瓶が転がり落ち、

ドパシヤ

俺の頭に降りかかったわけだ。

「のどか」

「はい？何ですか、シエラ先生？」

のどかはシエラに呼び止められた。

「今はもう先生ではないのですが……、ともかく」

のどかの目を見て言う。

「魔法のことは聞きましたか？」

「あ、はい。さつきネギ先生に……」

「……暁はあ言いましたが、本当にあなたが暁を知り、隣に並びたいと思うのなら、あなたは強くならなければなりません」

もちろん、と付け加える。

「体だけではありません。心もです。」

ですから、この旅行から帰ったら、あなたは暁に鍛えてもらいなさい」

「暁さんに、ですか？」

「ええ。あなたはもうこつちに踏み込んでいます。」

最低限自分を守る強さが無ければ、あなた、もしくは暁が命を落とすことになります。

「……厳しいようですが、これが現実です。負けないてください」

「……はい、ありがとうございました」

シエラはのどかを見送り呟いた。

「本来なら、今からでも鍛えて欲しいのですがね。……どうも嫌な予感がします」

そして、その不安はこの日のうちに現実となる。

修学旅行 3日目（後書き）

感想・質問・要望など絶賛受付中！！
さあ、君も今すぐ書いてみよう！！

くただしその頃には、あんたは解説になっているだろうけどな

『御庭番式小太刀二刀流』
おにわばんしき こだちにとりゅう

「るろうに剣心」より

・江戸城を守る隠密（現代で言えば忍者）の御庭番衆に伝わる武術。
・小太刀を使うが、小太刀で相手に武器を封じての格闘もする。

・『呉鉤十字』
いりこうじゅうは腕を交差させ相手に斬りつける時に
丁度小太刀が交差し敵を切り裂く技。

・『陰陽交叉』
おんみやうじょうまは斬りかかった一刀目を防御された時、その小太刀
と十字になるように叩きつけ押し斬る技。その威力は鋼のトンファ
をも切り裂く。

『落花狼藉』
らっかろうせき

カタナカタリ

「刀語」より

・刀が使えない鑢やすり一族が使った刀を使わない剣術キョトウリユウ「虚刀流」、七の奥義。

・前後自由自在の構えカキツバタ「杜若」から繰り出される前方三回転踵落とし。

・前方に飛び上がるため、天井がある場合はそこを足場に出来、威力が三割増しになる。

スクナ解放、そして・・・(前書き)

長い!!!

そして、終わらない!!!!!

スクナ解放、そして・・・

〔Set suna Side〕

やってしまった。

「・・・・・・・・」

目の前には頭から酒をかぶっている暁さん。

濡れた髪が垂れて、表情がよく見えず少し怖い。

おまけにさっきからずっと無言でいるものだから余計怖い。

「あの・・・大丈夫ですか？」

とりあえず声を掛けてみた。

「・・・・・・・・刹那」

「はい！」

不思議なほど落ち着き払った暁さんの声に私は直立不動の姿勢をとる。

「お前にはこれが大丈夫なように見えるのか？」

「・・・・・・・・いいえ」

「分かってんじゃねえか・・・・・・・・。まあいい・・・・・・・・とりあえず」
「うち来い」

そう言うと暁さんは私を風呂に引っ張って行く。

ああ、私はこれから何をされるんだろう……。

「よし、後ろ向け」

「……はい」

言われた通り後ろを向く。

少し恥ずかしいが、ちゃんとタオルは巻いているから大丈夫。と思っていた。

「それじゃ、脱いでもらおうか」

「……は？」

いまこのひとはなんといった？

「いや、違うな。背中を見せろ」

「えーと、何故です？」

振り返って一応聞いてみる。

「いいから」

問答無用で上半身のタオルが剥かれる。

「あっ！！」

慌てて向こうを向く。

「ほう……」

「な、何するんですか!」

「なに、こうしようと思っただけ……我が前にその全てを現せ」

途端、私の翼が開く。

「あっ……!」

「ふむ、やはり綺麗だな」

いや、そんな見つめられても。

「やめ……」

さわり。

「ひゃあ!」

羽を撫でられた!?

「意外と柔らかいな」

ぽふぽふ。

暁さんの顔が羽の間に埋まる感覚がした。

「はあん! ひゃ、やあ……」

「それでいて潰れることなくしっかりとしている」

「や、やめてください!」

必死で懇願する。が、

「何でだ？」

真顔で問い返される。

「あの、この翼はやっぱり『忌み子』の証ですので、見られたく・
」

「関係ないな。この翼は『刹那の翼』だ。

忌み子だと？こんなに透き通った美しい羽を持つ奴が忌むべき者であるがねえだろうが」

その真つ直ぐな言葉と眼に、私は言葉が出なかった。

「大体、他人と違って何が悪い。仲間内で珍しい羽の色だったら忌み子だってか？」

だったら俺も同様の扱いだろうよ。なんせこの眼は……」

そこで暁さんは黙った。

「……暁さん？」

「いや、何でもねえ。それよりも、この翼は自由に動かせるのか？」

「え、ええ。一応飛ぶことも出来ます」

暁さんは少し考え込む。

「ということはこの羽を自在に扱えば、かなり多彩な攻撃が出来るな。」

今より数段強くなれるぜ。そいつを考えたことはねえのか？」

「ええ、やはりこの羽には抵抗があつて……」
「つつことはまずその意識改革からか」

そう言つて暁さんはまた私の羽を触り始めた。

「ひゃ、こ、これがそれに何の関係が!？」

「触つてれば慣れるだろ」

そ、それはなんか間違つている気がする。

その時、私はお酒のにおいを感じた。

「も、もしもし暁さん？」

「何か用か？」

「今酔つてますか？」

「酔つてねえ」

そう言う暁さんからするお酒のにおいはかなりのものだ。
さらに風呂には酒瓶が何十個も転がっている。

「酔つてますよね？」

「酔つてねえ」

「アレほど飲んでるのに？」

「酔つてねえつつつてんだろぅが」

あ、イライラしている。やはり酔っている様だ。

「くそ、もついいぜ」

ぼふりさわさわきゅっきゅっしゅっ。

「ひiiiiiiiiいん!!」

ちよ、こ、これは駄目!!本当に駄目!!その、き、気持ち良過ぎるから!!

「まだまだ行くぜ?」

「ひああ—————っ!!!!!!!!」

その後、声を聞いて入ってきた3-Aの皆に説明するのが大変だった。

翼は何とかギリギリで隠したものの、

暁さんが私を襲っていると誤解して跳び蹴りをかましたアスナさん（本人がそう呼んで言った）を投げ飛ばしたり、

エヴァンジェリンさんが暁さんの胸にダイブしたり、

そうしたら暁さんの膝の上でエヴァンジェリンさんが猫のように丸まって寝てしまったり、

そしてそのまま私たちが騒いでいる間に暁さんがいなくなってしまう
ったり……

とにかく、色々あったのだ。

……あの手、気持ちよかったな……はっ!私は今何を!?

＼ Akastuki Side 〵

気がついたら布団の中にいた。
横には俺に抱きついているエヴァ。

「あゝ、やっちまったか」

さっきまでの記憶はきちんとある。ただし自分のものとは思えないほど実感が無いが。

俺の酔い方は特殊だ。

ある一定の量まではいくら飲んでも、酔っぱらって理性を失ったりすることは無い。

が、その一定量を超えると歯止めが利かなくなる。

刹那とぶつかったときに浴びた酒が俺の限界を超えたというわけだ。

「やっぱ自棄酒はよくねえな……」

元々俺が風呂であそこまで飲まなきゃ良かったわけだ。

「……さて、そろそろ行くか」

エヴァを起こさないようにしてから部屋を出る。

「暁さん」

ちょうどそこに茶々丸がいた。

「お、ちょうど良かった。茶々丸、エヴァを頼む」

「はい、わかりました。……それで、暁さんは」

「少し、会いに行くヤツがいる。……これを」

茶々丸にビー球ぐらいの大きさの緑に輝く石を渡す。

「……これは？」

「結界の礎となる石だ。それを置いていれば、この部屋は安全だ」

「……この結界で十分では？」

「何、用心というやつだ」

どんなに注意してもしすぎるということはない。フェイスフェイスがいる限り。

「何も無けりゃそれでいいさ。それは茶々丸にやるよ。

プレゼントとでも思ってくれればいいぜ。

きつとその髪に良く映えるだろっからな」

「……ありがとうございます。大切にしますので」

そう言っつて俺たちは別れた。

「暁」

「シエラ、行ってくる」

「はい。こちらは？」

「外の警戒だな。念のため見張っておいてくれ」

「はい」

これだけで俺たちには通じる。

「じゃあな」

「気をつけてくださいね」

「ああ、そっちもな」

向かうは湖。スクナが封印されている場所だ。

〈Other Side〉

暁が出て行ってから約三十分後。

「どつやら特に隠れているような気配もありませんね」

シエラはあたりを警戒してまわっていた。

「今日あたりに仕掛けてくると思ったのですが……」

本山に逃げ込まれてはなかなか手が出せないはず。しかし待っていても自体は好転しない。

ならば強引にでも今日のうちに行動を起こすはずだと見たのだが……。

「仕方ありません、戻りましょう」

そう言つてシエラは本山の敷地内に入るうとする。

その瞬間、

バシッ!!!

鋭い音がしてシエラの体は弾かれた。

「っ!?!馬鹿な、弾かれた……? 暁が結界の構成を間違えると
も思えません。ならば何故……」

そこまで言つて思い当たる。

「内部に手引きする者がいた、ということですか!?!」

いくら暁が張つた結界とはいえ、内部から礎をいじられてはどうしようもない。

とりあえず内部の様子を確認することが先決、とシエラは思った。
だが、暁が強化したこの結界が、そうそう簡単に破れるはずもない。

「全力でいかなばなりませんね……」

シエラは構える。

「『ナイト・オブ・ミラージユ 蜃気楼の騎士達』、ランサー 槍騎兵・五体展開」

五人の槍を構えた騎士達が現れる。

「残り全騎士、『フォームチェンジ 形態変化・突撃槍』」

シエラの手の中に風を纏った槍が現れる。

「突貫!!!」

五人の騎士が結界に向かって突進する。

その速さはまさに風。何者にも囚われぬ猛き風だった。

全員が結界の一点を目標けて槍を突き出した。

次の瞬間、凄まじい衝撃が辺りに奔る。

それでも騎士達は進もうとする。

キシ、

ほんの少しだけ、結界にひびが入った。
その時、騎士達は力尽き消える。

「『フル・ローディング
全員装填』！！」

消えた分の騎士達も槍に装填し、シエラは駆けた。

目指すは先程ひびが入った一点。
全力の一撃を放った。

「『トルネード・スパイラル・シエイバー
竜巻螺旋槍殺』！！！！」

槍自体の高速回転と纏う風の発する真空波が結界にぶち当たる。

「はああああああああああ！！！！！！」

ガリガリと何かを削り取る音がし、

バリーイイイイイン

結界は粉々に碎け散った。

中では人間全てが石化していた。

「ここまで気付かなかったとは……!!」

本山全滅の様相に齒噛みする。

のどかたちも石になっているのを確認したあと、ネギ、アスナ、剎那、夕映、エヴァ、茶々丸がないことに気づく。

「ネギたちはわかるのですが……夕映はどこに行ったのでしょうか」

そして、エヴァたちも。

「ネギたちと一緒にいるとは思えませんね……」

その時、通路に見知った姿を見つける。

「詠春……」

既に詠春は石化していた。

「……『エスナ』」

その石化を治す。

「……シエラ、か？」

「ええ。大丈夫ですか、詠春」

「石化を掛けられたただだから大丈夫だ」

「やられたのは？」

詠春は苦々しげな顔で答える。

「……あの白髪の少年だ。情けない、これほどまでに私は弱くなってしまった」

「仕方ありません。あなたは普通の人なのですから」

そして二人は現状の確認を始める。

「完全に石化する前にネギ君たちに会った。だから今彼らが敵を追っているはずだ」

「ならば、私はすぐネギたちを追います。」

「……これを。石化した人たちに一本ずつ刺してください」

金の針を詠春に渡す。

「それと……」

「ああ、分かっている。その間に内通者は探し出しておく」

だが、それだけではない。

「しばらくの間は泳がせておいてください。私が始末をつけます」

そう、結界をいじる命令を下したものがいるはずだ。だからシエラはそっちを潰すつもりでいた。

「かたじけない」

詠春は深々と頭を下げた。

ネギ・アスナ・刹那は拙い状況に置かれていた。
千草が足止めとして、このかの魔力を使って百体を越える鬼を呼び出したからだ。

「あんた方にはその鬼どもと遊んでてもらおうか」

このままでは千草に逃げられる。だが、打つ手はない。

圧倒的な数。それは理不尽な暴力となる場合がある。この場面がまさにそれだ。

いくら上手く立ち回ってもかなりの時間を取られるだろう。
傷つき、弱り、倒されることもあるかもしれない。

「ま、ガキやし殺さんよーにだけは言っとくわ。安心しときい」

そう言っつて千草は白髪の少年と共に湖に向かう。

「ほな」

「ま、待てっ！」

「い、いったいどうしたら・・・」

だが、千草が湖に向かってから数十秒もしないうちに救いの手は差

し出された。

「こりやまた大変なことになってるじゃねえか」

「「「「暁さん！」「」」」

暁がいつの間にかネギの隣にいた。

「おう。早速だがネギ、お前だけ先に行け」

「で、でも！！」

「目的を誤るな。今の目的は『このかの奪還』だ。ならお前一人のほうがいい」

「でもこの鬼たちは！！」

「任せろ」

そして暁は言葉を紡いだ。

「【ここ】【では】【喚よべない】

途端、鬼たちは消え失せた。

「えっ！？」

「暁さん、いったい何を・・・」

「『ここでは召喚できない』っつーことにしただけだ」

万物に通じる共通言語。それをを用いて暁は鬼たちを還したのだ。

「さあ、行けネギ。こいつらの相手は・・・」

そう暁が言った途端に、刀の一撃が飛んできた。
だがそれは、

「そうはさせませんよ、月詠^{つくよみ}」

シエラの小太刀に止められた。

「あら、確かシエラさんといいましたっけ」

「覚えなくていいといったはずですが」

そのまま二人は打ち合いをはじめ。

「月詠!？」

刹那が驚くが、暁が林のほうを指して言う。

「それだけじゃねえぜ」

暁の声に応じたわけではないだろうが、林の影から大勢の陰陽術師
が出てくる。

「関西呪術協会強硬派実行部隊の皆さんってどこか」

そしてネギに言う。

「分かっただろ、ネギ。奴らの相手は俺たちに任せろ」

「……お願いします!!!」

そう言つてネギは飛び出していった。

「アスナ、ネギからの魔力供給にそのアーティファクトの効果もあるから陰陽術師に突っ込んで行つていいぞ」

「え、あ、うん!!」

アスナが突っ込む。

「刹那、とりあえずだが仮契約する」

「ええ!？」

暁は何故仮契約するのか、銃を撃ちながらその説明をする。

「おそらくあいつらはリョウメンスクナノカミという飛騨の鬼神の封印を解くつもりだろう。

そいつは俺がどうにかするが、そのためにはまずこのかの奪還が必須になる」

「はい」

「ネギがこのかを取り返せばそれでいいんだが、おそらくネギの魔力が持たねえ」

だから、

「お前の翼でこのかを取り戻せ。そのためにまず一瞬で相手に近づく必要がある。

そのための身体強化が必要だ」

「でも、私は気が・・・」

「足りねえんだよ、それじゃあな」

暁の桁違いの魔力をブーストに使うということだ。

「ただし、俺の魔力にお前の体が耐えられるのはおそらく三秒、良くて五秒といったところだ。

それでもいいなら、契約するぞ」

「……分かりました」

「さて、形式とはいえ、聞きたいことがある」

暁がいつもとは違った口調で刹那に向かって問うた。

「……刹那、お前は何の為に戦うのか」

刹那は答える。

「大切な人のために」

「刹那、お前は何故力を求めるのか」

「大切な人を守るために」

「力に溺れず、誇りを失わず、命が尽きようともその意志を貫く事を誓えるか」

「……誓います!!」

暁は頷いた。

「良いだろう。この暁、お前の覚悟、しかと見届けたぜ。これから俺はお前の力となるぞ」

「よろしく願います」

「我が戦士としての魂と誇りに賭けて」

口付けを交わし、契約を済ませる。

刹那が赤くなるのは仕方ないことだろう。

「さて、行くとするか!」
「はい!」

「昼間とは違っていい動きしてます」
「ええ、あの時とは違いますよ」

二人は打ち合いながら駆ける。
だが、シエラはこの相手に時間を掛けるつもりは微塵もなかった。

「ですが、さっさと終わりにしましょう」
そう言ってシエラはゆっくと月詠に斬りかかる。

「・・・?何です?この遅さは・・・っ!」
月詠が、シエラの小太刀を受け止めたと思った次の瞬間、シエラは月詠の後ろにいた。

「昼は調子が悪くて出来ませんでした。この『流水の動き』。あなたに捉えられますか?」
ゆらゆらとシエラの姿がぶれる。
いくら月詠が斬りかかってその刀がシエラに届くことはない。
そしてシエラは剣舞の終幕を告げる。

「終わりです」

シエラは二刀の小太刀を逆手に構えた。

「御庭番式小太刀二刀流、
『回天劍舞・六連』かいてんけんぶ ろくれん」

六つの剣閃が月詠を切り裂く。音も無く月詠は倒れた。

一方、暁たちは。

「チ、散開してやがる。これじゃ殲滅するのに時間がかかるぞ」
「でも押してるみたいよ!!」

確かに陰陽術師たちを押しではいる。が、向こうがしぶとく粘り続けているのも事実だった。

暁が吹き飛ばすことも出来るが、周りへの被害が甚大すぎる。
その時、暁たちに声がかかる。

「ここは私たちに任せてもらおうか」
「アイヤー、これが魔法アルか!!」

声のほうを見て、暁は少し表情を和らげる。

「真名と古菲か。ちょうど良かったぜ。こいつらを相手に出来るか

「？」

当然とばかりに真名は頷く。

「この程度ならね。報酬はきちんと払ってもらおうよ」

「ああ、現金＋一日だけ奢りまくってやるよ」

「師父、私には何か無いアルか？」

「有るのか無いのか良く分からん言い方だが、まあとにかくそっちも奢ってやるよ」

「さ、早く行ってくれ、暁さん」

「恩に着るぜ。……行くぞ、シエラ、アスナ、刹那」

「ええ」

「「はい!!」」

「シエラ、アスナ抱えろ」

「はい」

「二人とも、飛ぶぞ!!」

「「ええええ!?!」」

湖へ向かう途中の林の中に楓と小太郎が戦っているのを暁は見つけた。傍には夕映もいる。

（大方、ネギに戦いを挑んだが長瀬がネギを先に行かせたってこと

だろうな)

とりあえず、『任せたぞ』と書いた紙を苦無に括り付け、下に投げた。

「『任せたぞ』……でござるか」

楓は戦いながら紙を読んで言った。

「そう信頼されては応えるしかないでござるな」

「姉ちゃん、戦いの最中うちゅうのにそんな暇あるんか!？」

蹴りが飛んでくる。

それをかわして楓は言う。

「何、コタローとやら、おぬしが本気を出していないからこついでいことが出来るのでござるよ」

「へっ……!」

(さて、これが終わったなら何を曉さんに要求するでござるか)

べつやらこつちは心配ないようだった。

「ネギ、大丈夫か？」

暁たちがたどり着いた時、

「すみません、暁さん。止められませんでした……っ！」
そこにいたのは、

「一足遅かったようですね……。儀式はたった今終わりました
え」

天に向かって腕を伸ばす伝説の鬼神だった。

「くっ！ラス・テル……」

完全に復活する前に、とネギは詠唱を始める。が、

「止める、ネギ。必要ねえ」

暁が止める。

「何をやる気だい？」
『マスター・オブ・アビリティ
万能の支配者』
」

ネギの『戒めの風矢』で動きを封じられたフェイトも尋ねる。

「まあ、見てな。楽しいものが見れるぜ。」

・・・それよりネギ、よくこいつに戒めの風矢が効いたな」

本気で暁は尋ねる。

「自己強化と遅延呪文ディレイスペルを使って・・・」

「なるほど、接近戦と見せかけて零距离での遅延・戒めの風矢か。
考えたな」

そう言った後、暁はフェイトに更に戒めを掛けて、ゆっくりと振り
向いた。

「刹那、覚悟は出来たか？」

「はい・・・!!」

「シエラ、『アレ』行くぞ」

「アレですか。手加減が必要ですね」

「出来ればもう一人ぐらいいいればいいんだがな・・・」

その時、上空から声がかかった。

「あら、暁。ずいぶん楽しそうなパーティーじゃない。私も参加して
いいかしら？」

エヴァと茶々丸だった。

暁はニヤリと笑って言った。

「今なら飛び入り参加は大歓迎だぜ、エヴァ。エクスキューション
ーソードを頼む」

「いいわよ」

エヴァの手に物体を気体に相転移させる剣が現れる。

「来い、オーデイン!!」

途端に空が曇り、雷が鳴る。

現れたのは、剣を携え六本足の馬に乗った王だった。

「呼んだか、暁よ」

「ああ、今回の敵はアレだ」

オーデインは鬼神を見上げる。

「ほう、ここまで大きい鬼がいるとはな」

「あいつの右腕一本を斬り落として欲しいんだが」

「良かるう、任せるがいい」

「エヴァ、お前は左腕を一本頼むぜ」

「分かったわ。じゃあ早速行かせてもらうから」

そう言うと、オーデインとエヴァは同時に駆（翔）ける。

「喰らいなさい!!」

「受けるが良い!!」

二つの剣閃が走った。

エクスキューショナーソード

斬鉄剣

同時にスクナの腕に剣が当たる、が、その様子は正反対だった。エヴァのほうは、剣が触れたところから腕が蒸発し、オーデインのほうは、まるで紙でも切るように腕が斬り落とされた。オーデインは役目を果たしたとばかりに、すぐ消え去る。

「なああっ!？」

千草が悲鳴を上げる。当然だろう。頼みにしていた鬼神があっさり腕を斬り落とされたのだから。そしてその間にも、暁たちの攻撃は止まない。

「行くぜ。出る、エア」

「行きます。投影、開始」

暁は世界を切り裂いた剣を、シエラは最強の聖剣を、それぞれ手に取る。

「天地乖離す」

「約束された」

そして同時に振りかぶる。

「エリシユ開闢の星！！！！」

「カリバー勝利の剣！！！！」

世界を断つ一撃が、最強の幻想が、進った。

それらはスクナの腕を奪い去り、夜の空の彼方へ消えた。

「今だ、刹那！！『契約執行』！！」

そして、刹那は飛び出した。

限界を超えた強化に悲鳴を上げる肉体を叱り飛ばし、一瞬で十数メートル離れたところまで飛び、このかを奪い返す。

「やった！！」

「暁さん、刹那さんのあの羽は！？」

ネギの問いに、暁は微笑みながら答える。

「刹那は鳥族とのハーフなんだよ。」

あいつはあの白い羽を忌むべきものだと考えてるようだが、そんなことはねえ。

あれは、あいつの親があいつにくれた最高の贈り物さ。

一番守りたいものを守る、一番重要な時に役に立っただからな」

「お嬢様、お嬢様！ご無事ですか！！」

そう言つて刹那はこのかの口を塞いでいた呪符を呪言で剥ぎ取る。

「ん……？」

ああ……せつちゃん、へへ……やっぱりまた助けに来てくれた……。

暁さんは……？

「もちろん一緒です、お嬢様」

その言葉に笑うこのかだが、不思議な顔をして尋ねる。

「……？せ……せつちゃん、その背中のは……」

「……これが、私がお嬢様に隠していた物です。私は、お嬢様にこの翼を知られることが怖かった」

刹那は一気に思いをぶちまける。

「私はっ！この翼を見たお嬢様が、きつと私を恐れると、嫌うと思つていた！！」

「そ、そんなわけないえ！！だつて、その羽、キレイで天使みたいやないの……」

「私は、きつとお嬢様ならそう言つてくれるだろうと思ひました。だから、この姿を見せることが出来ました。

と言つても、そう信じる事が出来るようになったのは、暁さんのおかげなのですけど」

「……なんや、せつちゃんも暁さんに励ましてもらってたんや」

このかの言葉に刹那は目を見開く。

「え？」

「前に暁さんがな？せつちゃんがウチに何かヒミツにしとるみたい
って相談に行ったら、

『今はまだ覚悟がねえから無理だが、刹那はきつといつかお前に
すべてを話してくれるはずだ。だからそれまで信じて待っていてく
れ』

って言ってくれたんよ」

暁の真似だろうか、眉間に皺を寄せて声を低くして言葉を言つこの
かの姿に、刹那は笑みを浮かべた。

「……私たちは、両方とも暁さんに助けられていたんですね……

」

「……うん」

その時だった。

「さあ、これだけ芝居打たせて悪かったな、スクナ。今度はこっち
が約束を守る番だ」

辺りに暁の声が響く。

「芝居やて!？」

「当たり前だ。」

いくらこのかの魔力があるとはいえ、鬼神をそう簡単に操れるはずがねえだろうが。

もし出来たらそれはおそらく、形だけの紛まがい物だろうぜ」

千草の悲鳴に当然とばかりに答える。

「・・・つたく、皮肉なモノだ。

この旅で『昔』に近づけなきゃこういうことは出来なかったんだからな。

・・・さあスクナ、誓いを果たそう。

お前を、解放しよう」

そして、暁の口から詩うたが紡がれた。

「 I am the bone of others -
blood . 《体は返り血に濡れている》」

その詩うたが口から出た途端、暁の気配が変わる。

殺気が噴き出しているわけでも、ましてや幸せに満ち溢れているわけでもない。

ただ、あまりにもその気配が希薄なのだ。そして、その顔には表情どころか生氣というものが無かった。

「 Pain is my body, and anger is my blood. 《体は傷つき、心は砕け》」

誰もが、哀しい詩だ、と思った。

「 I have killed over a million lives. 《幾千の戦場を越え不敗》」

不思議なことに、誰も暁を止めようとはしない。

「 Unknown to Darkness. 《ただの一つも絶望はなく、》」

「 Nor known to Light. 《ただの一つも希望はない》」

ああ、彼は何故こんなにも悲しい詩を詠うことが出来るのか。

「Have withstood pain to win the fate. 《彼の者は常に独り、紅き大地で友に捧ぐ》」

「Yet, He will never become anything. 《故に、その生涯は何も為せず》」

最後の一文が暁の口から紡がれた。

「So as I pray, lost beautiful days. 《その体はきつと夢幻の絆で出来ていた》」

世界が、アカく染まった。

全員が、スクナさえもが、血のように深紅い荒野に立っていた。
空は紅く染まり、そこにはまさに炎のように真紅い太陽が浮かんで
いる。

その荒野には、何も無かった。無限に広がっていた。

「じ、じいは……？」

アスナが呆然と呟く。

「ファンタズマゴリア幻想空間……ってわけじゃなさそうね」

エヴァもこの空間が何だか分からないでいる。
そしてその疑問にはシエラが答える。

「ええ。ここは暁の『リアリティ・マップル固有結界』の中です」
「固有……結界……？」

ネギが繰り返す。

「そう。術者の心象風景で世界を塗りつぶす、世界そのものを変え
る、ある世界の魔術結界です」

「ここが、暁さんの心の風景……」

茶々丸も呆然として呟く。

「そつだ。ここが俺の心の風景。
『おれ』が全てを失つた場所。
『オレ』の始まりの場所。
……そして、『俺』の忘れられない過去」

暁がゆつくりと前に歩いていく。

「『ロスト
喪失』」

見えない粘り気のようなものが全員の体を覆つた。

「『ターゲットシフト リョウメンスクナ
対象移行・両面宿讎』」

そしてその見えない粘りはスクナにのみ纏わり付く。
そこで全員気づいた。

スクナの体から光が拡散し、だんだんとその体が透けていく。

「さあ、ここからだ。……『モードシフト アブゾーブション
状態移行・吸収』」

その一言と共に、光は暁に向かう。

「何を!？」

「スクナを俺が解放する」

スクナを開放するとは一体どういうことか。

「こいつは、今はこんな風に封印されてたが、元々はこいつは飛騨
の守護神のような存在だったんだ。

当時の朝廷に従わなかったことから、封印されていたがな。

そして、封印されていたこいつを誰かが支配し、悪行を行った。

こいつ自身はそんなことをさせられるのが心底嫌だったが、どうしようもなかった。

それに加えて今回の騒動だ。また同じ目に遭うようなことは嫌だったこいつにとって、俺の提案は渡りに船だったというわけさ」

提案とは一体何か。

「提案って言っても簡単なことだ。

『二度と利用されないようにする代わりに、俺の言うとおりに振舞ってくれ』って言っただけだ」

「いつの間に……」

「三十分もありや交渉はまとまるだろ。価値観もそう大して変わりはしねえ」

「これからどうするんです？」

「スクナを俺の中に取り込む。」

流石にただ解放しただけじゃ、また封印、利用される。

だからいつそのこと俺と一緒に来ないかって聞いたたら、『世の中を見て回りたいから』つつってOKもらったが」

「どうやって取り込むのよ」

「俺の固有結界の効果だ。本来は『あらゆる存在が全てを失う』つ

つー効果だが、対象を限定、失う力の行き場を俺に指示すればいい」

「相変わらず出鱈目です。固有結界の効果を変えられるなど『あつ

ち』の人が聞けば驚愕で死にますよ」

「ハッ、いまさらだろ」

そして、スクナは完全に消え去った。いや、暁の中に移ったと言っべきか。

それと同時に、世界は元の姿を取り戻した。

「凄かったです、暁さん!!」

「ホント、なんでもできるんじゃないの?」

ネギたちが集まってくる。

「暁さん、お疲れ様でした」

「大丈夫?」

刹那たちが降りてくる。

「本当に、暁ったらやる事が派手なんだから。私いらなかったんじゃない?」

笑いながらエヴァがわざとらしく言う。

「んなこたあねえよ。」

天地乖離す開闢の星本^{アレ}気出したら街一つ消し飛ぶんだぜ?
危なくて全力出せるわけないだろうが」

が、暁は軽く流す。

「……ところでエヴァ、あなたは本山が襲撃されている間どこにいたのですか?」

シエラが問うと、目に見えるほどエヴァは狼狽した。

「「・・・エヴァ？」」

「な、何でもいいじゃない」

誤魔化そうとするが、

「マスターはその時私を追い掛け回していました」

茶々丸があっさりとばらす。

「このポケロボ！何で言うのよ！！」

「事実ですから」

「何で追い回されてたんだ？」

暁が理解しかねる、といった表情で問う。

「私が暁さんにこれを貰ったというと血相を変えて奪おうとしたので」

そう言つて茶々丸はあの緑の石を取り出す。

「「「「・・・」」」」

全員の冷たい視線を受けてエヴァは小さくなる。

「だって・・・」

その時だった。

暁は異様な感覚に襲われた。

「皆、逃げろ！！」

「障壁突破・治癒阻害“石の槍”」

咄嗟に全員を突き飛ばしたが、突き飛ばした暁は攻撃の直撃を受けた。

辺りに血飛沫が飛ぶ。血溜まりが出来る。

「て、てめえ・・・厄介な攻撃してくれたじゃねえか・・・」

「君にはここで消えてもらったほうがいいからね」

「その前にあなたが消えなさい」

塵気楼の騎士がフェイトの首を切り飛ばした。

だが、首だけになったフェイトは水になり消えた。

「イリュージョン 幻像ですか・・・」

シエラは驚くほど冷静に呟いた。

「暁、大丈夫なの!？」

「暁さん・・・」

エヴァたちが駆け寄ってくる。

その時、ネギたちも、他の場所で戦っていた面々も来る。ちなみに、真名は気を失った月詠を抱えていた。

「これは・・・やべえな・・・」

暁はすぐ傍のシエラにだけ聞こえる声で漏らした。

「・・・暁」

「シエラ、後・・・頼むぜ」

「はい」

次の瞬間、シエラたちは本山に戻ってきていた。

「ええっ!？」

「あ、暁さんは!？」

「彼はあの場に残りました」

「何故!？」

全員が問い詰める。

「どうしたんだ」

その時、詠春や、のどかたちが現れる。

「詠春、いいところに来ました。至急封印の用意をしてください」

「ということは、スクナは倒したのか？」

「いえ、封印する対象は暁です」

「何だと!？一体どういうことだ!」

「それは・・・」

その時、別の声が答える。

「主殿の力が暴走するということだ」

「誰でござるか!？」

空から光る人型の何かが降ってきた。

そして、その人型には『四本の腕と二つの顔』があった。

「え、こいつって……」

「ええ。スクナ、あの鬼神ですよ」

その言葉に全員が驚愕する。

「いかにも、我がリョウメン宿儺だ」

「シエラ、これは……」

「少し待ってください。おそらくそろそろ……」

その時、大地が鳴動した。

「な、何アルか!？」

「始まりましたね」

「うむ」

「……説明は、してもらえんだろっ?」

シエラとスクナが頷いた。

「スクナ、どこまで理解しています?」

「このような事態になった理由と、事態を放置すれば取り返しのつかぬ事になる事は」

「では、まずこうなった理由を説明しましょう」

「全員が主殿の力の強大さを知っているとことと思っが……」

シエラとスクナが説明したのは次のようなことだった。

元々、暁の力は強大だ。その力の中には、本来人の手には負えぬものもある。

しかし、いつもは暁はそれらを抑え、表に出ないようにしている。

だが、今回暁は深手を負った。

しかもご丁寧に『治癒阻害』の効果がついたものだった。

いつもならすぐさま傷を治し力の制御を誤ることなどない暁だが、並の人間なら生死に関わる傷を治せない状態にされたのでは、流石に分が悪い。

結果、凶暴な力が溢れ出し周りに害を及ぼすだろうということだった。

だが、暁も何も手を打たなかったわけではない。

暁の出来る全力で結界を張った。

しかし、それらも朝まで持たないだろうと二人（？）は予測した。

「ですから、あの治癒阻害を一瞬で解除することが出来ない限り、ここは、いえ、この世界は、危険だということですよ」

「なぜ一瞬で解除する必要があるんだい？別に多少時間を掛けても・

・・・」

「簡単な事」

当然という風に答える。

「さもなければ治癒する前に術者が死ぬからだ」

ざわっと空気が揺れる。

つまり、暁自身に力の制御を期待することはほぼ絶望的。

「と言うわけで、私とスクナがあゝの結界の中で出来る限り足掻きます。」

その間に空間ごと封印する準備をお願いします」

「分かった、が・・・何故そこまでするんだ」

別に無視しても構わないだろう。自分たちだけ逃げても構わないだろう。

何故、自分を犠牲にするのか。

「簡単なことですよ」

その時、ネギたちは初めてシエラの笑顔を見た。

「暁の大切なモノがここにあるからです」

美しく、眩しい笑顔だった。

「それで、それに私はついて行っていいのよね？」

エヴァが前に出る。

「ええ。正直言つて勝てる見込みはありません。エヴァが来てくれるなら、大いに助かります」

「では、行くか」

その時、刹那が飛び出した。

「待ってください！！私も一緒に・・・」

「・・・いいのですか？命の保障はしませんよ？」

「はい……！」

握り締められたその手を見て、シエラはため息をついた。

「まったく……」

「ぼ、僕たちも行きます!!」

「そんな話聞いて、黙ってられるわけないでしょ!」

「駄目です、あなたたちでは力が足りない。足止めにもならない。それにネギ、あなたはもう限界でしょう?」

「で、でも……!!」

下手すれば勝手についてきそうな面々を見て、

「……仕方ありません。結界の外で待機しているというのなら、連れて行ってあげます」

シエラは折れた。

「はい!!」

「ただし、戦える人以外は1人しか連れて行きませんよ」

「……えっ!!」「」「」

「二人も三人も連れて行く余裕など無い」

そして、シエラは問うた。

「さあ、死んでもいい覚悟があるものだけ来なさい。

……ちなみにネギ、あなたも戦えない人の中に入っていますからね」

結局、一緒に来ることになったのは、エヴァ、刹那、真名、楓、古菲、木乃香だった。

「エヴァ、あなたは」

「愚問よ。私は暁を失うつもりは無いわ」

最後まで言わせず言い切る。

「策でもあるのですか？」

「いいえ、ただ私は暁を止めるわ。」

こんなこと、彼が望むはずないもの。……そして待ち続ける。彼が戻ってくるまで。……ふふ、不老不死もこういうときには便利な物ね」

「まったく、あんな変人のどこがいいんですか？」

「あら、彼はこの世界で一番いい男よ？分かってるでしょう？」

「……ええ、分かっていますとも」

「桜咲よ、死ぬかも知れんと言われて尚戸惑うことなく進むのは何

故だ？」

「今この剣が迷い無く振れているのは、暁さんのおかげです。
なのに、私は何もあの人に返せていない」

刹那は強く夕凧を握り締める。

「私は、今ここで引くわけには行きません！あの人が信じてくれた
私のために！！」

「龍宮と申したか。御主、何故来る？」

スクナの問いにいつもの様に真名は答える。

「このまま放つて置いてはまずいんだろう？だつたら私が手伝って
もいいじゃないか」

もちろん報酬は後できちんともらうけど、と真名は付け加えた。

「楓、いいのですね？」

「うむ、世界が危ないといわれてはじっとしていられないでござる
よ」

楓の言葉はまるで、なにか親切でことを行うような自然さだ。

「古菲は・・・」

「師父に修行をつけてもらう約束だアルよ！・・・それに

いなくなつて欲しくないアル」

古菲の言葉には最後に本音が混じつた。

「……まったく、麻帆良の人間は皆がこんなにも命知らずなのですか？」

「率先してその場所に向かう人が言つても説得力は無いでござるな」

「このか、何故あなたは……」

「ウチ、まだ暁さんにお礼ゆーてへん」

このかの顔が曇っている。

「……」

「ずっと、ずっと、暁さんはウチらを見守つとつたんよ？」

そう、おそらくは麻帆良に来たときからずっと気にかけていたのだらう。

「……だからウチ、ちゃんとお礼言いたい」

「……分かりました。さ、行きましょう」

そして彼らはその地へ向かう。

そこは異界。通常の常識など通用しないということをし、彼らはまだ理解していなかった。

辿り着いたそこには、半径一キロほどの黒い半球体があった。

「これが結界です。もっとも、中の力が濃いので外見は真っ黒ですが」

結界の前、五メートルぐらいのところまで立ち止まる。

「で、これからどうするの？ どうなるか？」

シエラが全員に説明しようとした。その時、

ドクン、

結界が、脈動した。

「「「「「！？」「「「「「」

そんなはずはない。生き物でない結界が脈打つなど。その驚きが、隙となった。

「いかんっ！皆の者、離れろ！！」

遅かった。

急に結界が膨れ上がって、全員を絡め取り、飲み込んだ。後には、何事もなかったかのように静寂だけが残された。

スクナ解放、そして・・・（後書き）

感想・質問受付中。

修学旅行編のボスは暁だったWWW

（解説！！）

『フォームチェンジ
形態変化』・『フル・ローディング
全員装填』

・シエラの『ナイツ・オブ・ミラージユ屋気楼の騎士達』の能力の一端。

・『フォームチェンジ形態変化』・・・騎士達を武器に変換する。変換できるのは剣・槍など。近代兵器は無理。

・『フル・ローディング全員装填』・・・騎士達全てを武器にする。纏う風を解放すれば『ストライク・エラFate』のセイバーの『ストライク・エラ風王鉄槌』すらそよ風に感じる暴風になる。

『スパイラル・シエイパー螺旋槍殺』

『遊戯王』より

・暗黒騎士ガイアの技、もしくはそれを冠した永続魔法。

・ 槍を高速回転させ、敵を貫く。

・ シエラは「フル・ローディング全員装填」により威力を上げていたため、「トルネード竜巻」がついた。

『統一言語』

TYPE・MOON「空の境界」より

・ 『統一言語師 (Master of Babel)』、『ゴドワード偽神の書』、『ゴドワードメイデイ』と呼ばれるくろきりなつき玄霧皇月が話すことの出来る言語。

・ 神話に伝わる『バベルの塔』の事件で神が言語を乱す以前は、全てのモノが共通の言語によって意思疎通を行っていた。それが『統一言語』である。

・ 統一言語は『万物に共通する意味の説明』が可能なカタチのない「人が世界に話しかける」言語。

・ 世界に話しかけることで、『世界の上に存在しているモノ』に影響を与えることが出来る。この言葉を否定することは、世界に存在していることを否定することだからである。

『回天剣舞・六連』

「るるろくに剣心」より

・四乃森蒼紫しのもり あおしの御庭番式小太刀二刀流奥義。

・超高速で小太刀を振るう「回天剣舞」の二刀流版。ただ、回天剣舞が六連ではなく、あくまで攻撃回数が六回。片手で三回ずつである。

・左右どちらからでも斬りかけられるので、相手に攻撃の起点を悟らせない。更に、大木をも一瞬でなぎ倒す威力を誇る。

『斬鉄剣』

いろいろ

・あらゆる物を切ることが出来るという剣。

・元々は鉄すら切れる良い刀のことであった。

・暁はFF?のオーディンを召喚し、振るわせた。

『天地乖離す開闢の星』

「Fate/stay night」より

・最古の英雄、英雄王ギルガメッシュが持つ『乖離剣エア』、その最大出力時の名称。ちなみにエアとは神の名前である。

・かつて天と地を分けたと言われる『世界を切り裂いた剣』。それ故、究極の一撃とまで呼ばれる。

・その正体は空間切断。闘せめぎ合う風圧の断層が疑似的ながらも『时空断層』にまでなり、敵を粉碎する。

『エクスカリバー約束された勝利の剣』

「F a t e / s t a y n i g h t」より

・騎士王アーサーこと、アルトリアが持つ伝説にして最強クラスの聖剣。

・所有者の魔力を『光』に変換し、収束・加速させ神霊レベルの魔術行使を可能にする。

・光の帯に見えるが、実際は光の先端にのみ攻撃判定がある。

・が、先端以外でも通過した光の『熱』があるので、十分な破壊力がある。

VS・四大精霊、VS・力を求める魔剣士の息子（前書き）

待たせたな！

V S ・四大精霊、V S ・力を求める魔剣士の息子

【存在しなかった世界 } The World That Never Was】

シエラ・断片を紡ぐ道 } Fragment Crossing }

『 Fighting of Spirits 』

闇を抜けるとそこは街だった。

「そんな、ありえませんが……」

思わず呟いた。

今の暁にここまでの物を作り上げる力などない筈。

「それに、暁はこのような街を訪れたことなど……」

見たこともないものを作り上げる……それは理性があって初めて可能な事。

力が暴走している今の状態では……。

「『記憶』を辿って？いえ、しかしこの街は細部が明確すぎる」

（『記憶』を頼りに作り上げても、必ずどこか脆い部分が出てくる筈……）

「『街の記憶』？……それにしては……っ!？」

咄嗟に飛び退る。

次の瞬間、シエラがいた場所を真空波が薙ぎ払った。

「あつれ〜？当たると思ったんだけどな〜？」

子供の声だった。

その方を見ると、そこには緑の服に緑の帽子を着た少年がいた。

「……シルフ」

「残念だね、食らってれば一瞬で死ねたのに」

あくまで少年……風の精霊シルフは笑って言う。

「何故あなたがここにいますか？」

「さあ？僕はホンモノじゃないからわかんないや」

「何ですって……？」

なら暁が精霊を作り上げたというのか。

自然の具現である精霊を？

「でも、君を通しちゃいけないってことは分かるよ」

「……ここがどこだかも分かりませんが、とりあえずあなたを倒さなければいけないようですね」

「あ、それ間違い」

「何ですって？」

次の瞬間、シエラが立っている床が爆発した。

「うあっ!!」

直撃した。

更に襲い掛かってくる爆風を避けて跳んだところに水が襲い掛かってくる。

「まさか……」

何とか回避して体勢を整える。

「ほう、我らの攻撃を受けてなお生きていられるとは」

顔を上げた先には、

「イフリート、ウンディーネ……」

三大精霊が勢揃いしていた。

風の少年、炎の巨漢、水の乙女。それらが目の前にいた。

「くっ……ノ、ノームはいないのですか？」

傷を治しながら問いかけると、

「いるよーん」

床から声が聞こえてきた瞬間、前に転がる。

無様ではあったが、結果命拾いした。

なぜなら、シエラがさっきいた場所から鋭い岩が生えてきたからだ。

「そう、間違いだよ。僕らが相手さ」

「そしてここは『存在しなかった世界(The World That Never Was)』、何もない虚無の空間に生み出された偽りの世界……それを模したモノです」

「偽りの……。後で考えましょう。」

それよりも、嫌な相手ですが仕方ありません。

あなた方を倒さねばならないと言うのなら、倒してから進みましょう」

シエラは駆け出す。

「『ランサー槍騎兵』!!」

屋気楼の騎士が飛び出す。

「ウインドカッター!!」

シルフの術がランサー槍騎兵を切り裂く。

「『アーチャー弓騎兵』!!」

掃射される矢が精霊たちの術を撃ち落とした。

その隙に狭い路地に逃げ込む。

いつまでも広場には彼らの術の餌食だ。

彼らと言えども建物をすり抜けては来られない。

そのまま、攻撃の応酬が続いた。

シエラは精霊たちと一進一退の攻防を続けている。

お互いに攻撃を受けない。相手に傷を与えられない。

異常なほど素早くシエラは動き回って、一瞬も止まることなく街を

駆け抜ける。

・・・いつものシエラからは考えられない速度で。

(・・・体に魔力が満ちていますね。暁の能力は使いにくくなっていますか・・・)

その分、『ナイツ・オブ・ミラージユ 蜃気楼の騎士達』が使いやすくなっている。不思議だった。いくら魔力を消費しても魔力切れになる気配がない。

(まさか、暁とリンクして・・・?)

暁とパスが繋がっているのだろうか。それならこの状況にも説明がつく。

だが・・・

(くっ、このままではジリ貧です)

魔力が切れなくとも肉体は限界が来る。流れ出した血は戻せないし、疲労を軽減しても限界がある。

「ねえ、そろそろ諦めない？」

「このまま戦っても君の負けだよ〜ん？」

「そういうわけにはいきません」

ここで力尽きてもしエラが死ぬわけではない。だが、同様に『中』に巻き込まれた彼女らは死んでしまう。

「ですから、出し惜しみは止めようと思います」

「戯言を・・・ならばどうすると言っただ」

「じつするんですよ」

次の瞬間、周りに建ち並んでいたビルが切り倒された。騎士達が建物と同じくらいの大剣となり、シエラがそれを振り回したのだ。

「自ら姿を見せたというのですか」

それはすなわちシエラに地の利が無くなる事のはず。

「いいえ、こちらが地の利を得たのです」

次の瞬間、世界が揺らいだ。

「これは、塵気楼!？」

ウンディーネが驚きの声を上げる。

シエラの声が聞こえた。

「さあ、導きましよう。風吹き渡る草原へ。彼らが守護した国へ」

光が溢れる。

そこにあつたのはどこまでも広がる草原、命に溢れた大地、緑が美しい山々。

そしてその草原を雄叫びおたけが駆け抜けた。

全員がそちらを見る。

そこには万を超える大軍を連れ、胸当てをつけ、剣を携え馬に乗った戦女神シエラの姿があった。

「固有結界と言う奴か？」

イフリートが問うが、シエラは頭かぶりを振る。

「似たようなものですが、違いますね。ここは私の心象風景ではありません。」

『彼ら』がいた地、『彼ら』が心に焼き付けていた地です」

いつも半透明で姿を確認しづらかった騎士達は、今はっきりとした実体を持ってそこに在る。

「彼らはここに在った。私は彼らの一部を借りていただけです。……もつとも、『私』の心を形作る者たちの中に彼らの内の一人がいたから、私がこの力を使えるようになったのですがね」

シエラは腰から剣を抜く。

「ここは彼らが駆け抜けた、守護し続けた王国。後の世にも伝えられた彼らの勇姿、とくと見なさい」

剣を天高く掲げ、シエラは告げる。

「さあ、行きますよ」

戦が、始まった。

シエラが指示せずともそれぞれが自らの役割を果たす。

弓が牽制し、盾が護る。槍が道を開き、騎馬が大地を揺らして駆け抜ける。

精霊たちは空を飛べるが、高く飛べば弩の餌食となる。

故に彼らは地上付近で戦わねばならない。

「なんだよ、なんなんだよ、これ!？」

いくら薙ぎ払っても、切り裂いても立ち上がる敵にシルフが怯む。

無言のイフリートも苦い顔で戦う。

いくら術で吹き飛ばされようと、何度でも彼らは立ち上がる。その瞳に不屈の意志を滾らせて。

いくら戦っても倒れない敵と戦うのには相当の覚悟と気力が要る。

勝つ見込みがない戦いほど苦しいものはないのだ。

更に全員の攻撃では、それぞれの武器に風が巻き起こっている。

もちろんシルフの風には及ばない。だが、力強い息吹であった。

精霊たちが怯んだその瞬間、今まで黙って見ていたシエラが声を発した。

「全軍突撃!!」

前で射ていた弓隊の隙間を徒歩の兵が駆ける。

更にそれを先導するように、シエラを先頭にして騎馬が突進する。

軍勢は大きな一つの生き物となって精霊たちに襲い掛かった。

対して精霊達は、

「エクスプロード!!!」

「タイダルウェイブ!!!」

「サイクロン!!!」

「グラントダツシャー!!!」

それぞれの属性最上級の術で応戦した。

いくら騎士達といえども、これらの術の前には敵わず蹴散らされるかと思われた。

その時、シエラが叫んだ。

「風よ!!!」

騎士団全員が武器を掲げた。

風が巻き起こる。

「命の運び手よ!!!恵みの担い手よ!!!試練の番人よ!!!」

風がだんだん強くなる。

「汝は常に我等と共に在った!!!」

我等はその腕の中で生まれ、その腕の中で育ち、その腕の中で死んでいった!!!」

「おおおおおお雄雄雄雄雄雄雄雄雄雄!!!」

「」

騎士達が雄叫びで応える。

「今、再び此処にその力を現せ！！其の名は……」

神風かみかぜ

一陣の風が疾はしった。

「負けちゃったのね」

「ええ、私達の負けですね」

ノームとウンディーネが呟く。

「うーん。ずるいよね、四対万とか」

「しかし我らが負けたのは事実。……敗者は大人しく去るとしよう」

彼らの体は半分消えている。残っている体も陽炎のように揺らいで

いた。

「では、先に進ませてもらいますよ」

シエラが彼らに告げる。

精霊たちは無言で頷く。

世界が元の姿を取り戻す。

一度も振り返ることなく、シエラはその場を後にした。

「
スクナ・記憶の摩天楼」Memory's Skyscraper

「We are not human beings」

「む……？」

気づいた時、スクナは巨大な摩天楼の前にいた。

「……ここは、一体……」

呟いた次の瞬間、殺気を感じた。

ゆっくりと摩天楼を見上げる。

そこには、銀の髪をオールバックにし、緑のコートを着た男が立っていた。

スクナは、この男を倒さねば先に進めないことを理解した。

男は急に空に身を投げたかと思うと摩天楼を駆け下りて来る。

一方のスクナは摩天楼を駆け上げる。

両者の距離は次第に無くなり・・・

男の刀とスクナの腕がぶつかった。

お互い摩天楼前の広場に数歩の距離を取って着地する。

「Who are you? (何者だ?)」

(異国の言葉か。だが・・・意味は分かるようだな)

「我は両面宿儺^{リョウメンソクナ}。御主は」

「Vergil. (バージル)」

次の瞬間、二人の間で文字通り火花が散った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一閃、二閃、三閃。

お互いの見えない攻撃が交錯する。その度に火花が闇を照らす。

二人はその場から一步も動いていない。

が、次の瞬間スクナは前に出た。

「破!」

スクナの豪腕が唸りをあげて男に襲い掛かる。

「Blast！（飛べ！）」

男の剣がスクナの腕を弾いた。

男はそのまま跳び上がり、スクナの頭に剣を振り下ろす。

「Be gone！（失せろ！）」

「ふん！！」

上からの攻撃にあわせて拳を突き上げる。

衝撃波と共に二人は吹き飛んだ。

「・・・私の腕を弾く程の力・・・それにこの魔力・・・」

スクナが視線を上げると、ちょうど男が立ち上がるころだった。

「This maybe fun・・・（楽しめそうだな・・・）」

「御主も人ではないと言うことか・・・」

両者は駆け出し、再び激突した。

「滅!!」

「Cut off! (斬る!)」

「碎!!」

「Die! (死ね)」

闇の街に硬いものがぶつかり合う音が響く。

お互い相手の攻撃を弾き、自分の攻撃を当てようとする。

だが、当たらない。

肉を斬らせて骨を断つつもりでも、かすり傷しか与えられない。

だんだんと、お互いの動きが鈍くなってきた。

これで決めるとばかりに男の周りに魔力が集まる。

「You're going down! (跪ひざまずけ!)」

そうはさせじと距離を詰めたスクナは、男が放った魔力の衝撃波に吹き飛ばされた。

急いで体勢を整えるが、その時には既に男の姿は消えていた。

と、スクナの右視界が歪んだ。

左に跳ぶ。

次の瞬間、先程までスクナの右半身があったところを見えない斬撃が切り裂いた。

「ちいつ!」

次々と襲い掛かる斬撃。スクナは必死で回避し続ける。

だが、元々崩れた姿勢で回避したのだ。
いつまでも逃げ切れるはずも無い。

「く、うおおおおおおおっ！！！！」

スクナは、頭から一刀両断された。

「This is the power of Sparda」
これがスパイダの力だ」

そう言つて男はゆっくりと刀を鞘に納めた。
そのまま広場を立ち去ろうとする。
ところが、

「ならば今度は我の力を見せてやるっ」

その言葉と同時に『左右両方から』衝撃が男を襲った。

「Ridiculous・・・!（馬鹿な・・・!）」

男は空中で体勢を整える。が、更なる衝撃に地面に叩き付けられた。顔を上げた男が見たのは、『二人になった』スクナだった。

腕は二本になり、顔は前に一つだけ。人間と同じ姿のスクナが二人いた。

「悪いがそろそろ時間が無くなって来た様だ」

二つの口から同じ言葉が紡がれる。

「決めさせてもらおう」

「Come on!（来い!）」

相手を目掛けて駆け出す。

スクナは腕を、男は刀をそれぞれ振りかざし、雄叫びを上げる。

そのまま、お互いの攻撃は交叉した。

その場に残っていたのはスクナだった。

「悪く思つな。ここで幻に負けてやる訳にはいかぬのだ」

再び一人に戻ると、スクナは摩天楼前の広場を後にした。

【??????】

『Do you want to know his past?』

このかは暗い空間を走っていた。
だがひとりではなかった。

このかの十メートル程先を数人の少年少女たちが駆けていた。
何故このかは彼らを追うのか。

それは、彼らの目にあった。

彼らの目は全員『琥珀色』だったのだ。

しかも髪は、青、白、橙、桃、赤などさまざまなのに、だ。

このかが立ち止まるれば、彼らも立ち止まりこのかを方をじっと見る。

だからこのかは彼らを追い続けていた。

彼らを追いかければ暁のことが何か分かる。そう信じて。
そしてしばらく走り続けた時、

「来るんだな」

橙色の髪の子が言葉を発した。

「ここから先へ進めば見たくないものを見るよ」

赤い髪の子が言う。

「それでもあの子のことを知りたいの？助けてほしいの？」

青い髪の子が言う。

暁が助かるならと、このかは黙って頷いた。

「だったら、逃げないで見てくれ。アイツの過去を」

白い髪の子がそうとき言ったとき、光が溢れた。

V S ・四大精霊、V S ・力を求める魔剣士の息子（後書き）

感想・質問受付中。

・・・解説っていららないんじゃないかな？

久しぶりでござるな。忙しかったのでまったくと言って良いほど暇が無かったでござる。

こんなに更新が遅かったことを許して欲しいでござるよ。

さて次は、お待たせした『暁の過去』編でござる！！

ようやくここまで辿り着いた・・・けれどここからは暗い話になりそうでござる・・・。

それでも読んでくれる人達がいるなら拙者は書き続けるでござる！！
応援よろしくでござる！

654

【要らない解説とか】

『四大精霊』

・水を司るウンディーネ、炎を司るイフリート、風を司るシルフ、土を司るノームの事。

・これらの精霊は自然そのものであり、その意思が具現化したものとも言える。

・この結界内の精霊たちは偽りの存在の為、自然との繋がりが薄い。

『ウインドナイツ
風の騎士団』

・とある世界の騎士団。その戦い方は変幻自在で風の如し、と言われた。

・その切り札は、神風と呼ばれる国を守護する風の力を借りて繰り出す全軍一斉攻撃。

・その攻撃はあらゆる物を吹き飛ばし、微塵も残さないといわれた。

『バージル（Vergil）』

「デビルメイクライシリーズ」より

・主人公ダントエの実の兄であり、魔剣士スパーダの息子。

・幼い頃の出来事により力を求め続け、悪魔として生きることを選んだ。

【過去編】いつもの朝（前書き）

今回は短め。

【過去編】いつもの朝

く????? S i d e

「・・・て・・・う朝・・・」

声が聞こえる。

おれを起こしているみたいだ。

「そろ・・・じか・・・」

でもまだ眠い。もう、すこしだけ・・・。

「・・・ら、どう・・・」

「・・・って。あた・・・げる・・・。・・・せーの」

おれは恐ろしい寒気を感じて飛び起きた。

次の瞬間、

バゴン！

そんな音を立てて、さっきまでおれの頭があった枕をフライパンが
ブツ叩いていた。

「目は覚めたようね」

そんなことを言いやがる赤い髪の少女、
赤音。アカネ

「何すんだよ、アカ姉ねえ!!」

「あんたが悪いのよ、せつかく蒼子姉ソウコねえが起こしてるのに」
「だからってコレ食らったら死ぬだろ!?!」

「まあ、それは大変ね」

それを聞いて、蒼い髪の蒼子姉がいるのに気がついた。

「おはよ、蒼子姉」

頭を掻きながら挨拶する。

「ええ。おはよう、」

優しい笑顔で蒼子姉は答えてくれた。

「アカ姉もおはよう」

「おはよ、坊」

こうしておれの一日は始まった。

二人が出て行った後、着替えてから居間に向かう。

「ふぁああああ・・・」

あくびが出た。まだ眠い。

「よう、眠そうだな」

その姿を橙也に見られた。

おれはこの少年をこう呼ぶ。

「おはよ、橙兄。ちょっと昨日遅くまで起きてたから
「そっか。おはよ」

せっかくだから一緒に居間に向かう。
もうすぐ居間だということと、後ろから走ってくる足音が聞こえた。

「おはよー 兄さん！」

おれに抱きついてきたのは桃色の髪の少女だった。

「おはよ、桃香」

頭を撫でると桃香はふにゃっと笑った。

「おいおい、オレには無いのか？」

「おはよ、トニー」

ああ、それは駄目だって……。

「トニーって呼ぶなって言ってんだろー！」
「だってこの方が呼びやすいんだもーん」

そう言つて桃香は逃げ出す。

「あつ、くそ、待ちやがれ!!」

それを本気で追いかけるマイブラザー。

大人気ないつてこんなことを言うんだなつてしみじみと思った。

「……おはよう、 兄様」

後ろから静かな声が聞こえた。

と言つても、いるのは分かつてたから驚かない。

振り向いて、紫の髪の少女に言った。

「おはよ、紫苑^{シオン}」

「……」

じつと見つめられる。

こういつ時どつすればいいかはわかつてる。

黙つて頭を撫でた。

「ん」

気持ち良さをそつに目を細める。

「じゃ、行くか」

「はい」

こうして、おれはようやく居間に辿り着いた。

「ん、来たか」

白い髪的青年が本から顔を上げた。

「おはよ、シロウ兄」

「おはよう、シロウ兄様」

「ああ、おはよう」

我慢できなくておれは尋ねた。

「なあ、飯出来てる？」

「まだだが・・・様子を見てきたらどうだ？」

あからさまにがっかりしたおれの様子を見たシロウ兄は、そう言っていると台所のほうへ視線を送った。

「そうする」

その言葉に従って、おれは台所へ向かった。

「いつてらっしやい、兄様。私はここで待ってます」

「いつてらっしやいつて・・・別に『仕事』に行くわけじゃないんだから、そんな大げさな」

そんな軽口をたたきながら。

台所からは味噌汁の匂いがしてきていた。
今日は和食なんだな……。

「ということは……っ」と

ドアを開く。その向こうに、黒い長い髪が見えた。

「おいクロエ、飯できてるか？」

「ただだけど……あ」

黒依クロエがこつちを振り向いた。

「今日はアカ姉に叩き起こされたみたいね。音がこつちにまで聞こえてきたわ」

「実際に叩き起こされてたらむしろ死んでるけどな」

あれ喰らったらむしろ永眠するし。

「また何かやってたの？」

「ああ、うん。ちょっと武器でもっと何か出来ないかなって考えてたら……」

「夜遅くなってたってわけ？」

「まあ、そんな感じ」

ため息を吐かれた。

「そ、そんなことより、もう飯出来たのか？」

雲行きが悪くなったので話題を変える。

「あと少し。向こうで待ってて」

「分かった」

「あ、待って」

居間に戻ろうとしたおれをクロエが呼び止める。

「まだ言ってなかったわよね」

笑顔で彼女は言った。

「おはよう、クロエ黒栖」

【過去編】いつもの朝（後書き）

用語解説は別のところでやっています。

過去編の人物等の解説（Version・2）

【琥珀コハクの瞳を持つ者達】

全員が琥珀色の瞳を持つ。顔は全員美形であるが、顔立ちに似た所はほとんど無い。

それぞれが違った色の髪を持つ。黒栖と黒依は例外である。

常識の一部が欠落している。例えばそれは『訓練で』躊躇なく相手の腕を折るところなどに表れている。

黒栖クロス（Cross）

暁の昔の姿。

当時約14歳。

一人称は「おれ」。

・性格

今と比べると割と素直。口調もあまり崩れていない。

・容姿

黒く短い髪。あちこちに撥ねているツンツン頭。身長146cm。

・趣味

読書に鍛錬。これは今と変わっていない。
加えて、戦い方の研究。

・特技

武器全般の扱いに長けている。

が、特定武器に特化した人には負ける。

黒依^{クロエ} (Chloe)

黒栖と同じ黒い髪を持つ少女。

黒栖と一緒に『家』に連れて来られた。

一人称は「わたし」。

・性格

冷静だが暗いわけではなく、むしろ明るい性格。

妹達の面倒も良く見る。蒼子に憧れている節が見られる。

・容姿

黒く長い髪。長さは背中ほどまで。身長142cm。

・趣味

読書に鍛錬。

そして料理（和食専門）。

・特技

銀線の扱いに長けている。

白羽^{シロウ} (Shiro)

黒栖たちの中で最年長の青年。

どつやら蒼子と恋人のような関係にあるらしい。

およそ18歳。だが、黒栖と黒依のように『家』に蒼子と一緒に来たわけではない。
一人称は「俺」。

・性格

沈着冷静で、常に周りの様子に気を配っている。
素っ気無いようであり、かなり情が深い。

・容姿

白く輝く銀に近い色の髪。撥ねてはいない。身長178cm。

・趣味

読書。

・特技

気配察知に長けている。
ナイフの扱いは誰よりも上手い。

蒼子ソウコ (Sokko)

白羽と並んで最年長の少女。

およそ18歳。

一人称は「私」

・性格

落ち着いていて、おっとりした性格。
いつも笑顔で皆を見守っている。

・容姿

蒼い長い髪。身長169cm。

・趣味

料理（オールラウンド）。

・特技

狙撃に長けている。

橙也^{トウヤ}（Toya）

白羽・蒼子に次いで年が上の少年。

約16歳。トニーと呼ぶな。

一人称は「オレ」。

・性格

明るく口数が多い。

似た性格の赤音とぶつかる事もしばしば。

・容姿

橙色の短い髪。身長167cm。

・趣味

鍛錬。

最近では機械いじりもした。

・特技

近接格闘に長けている。
赤音と同レベルのはずだが、喧嘩では勝てない。

赤音^{アカネ} (Akane)

橙也より少し年下の少女。

約15歳。

一人称は「あたし」。

・性格

明るく元気。明朗快活。

橙也とよく喧嘩する。でも大抵橙也がボコられて終わる。

・容姿

髪は赤のポニーテール。動きやすいらしい。

身長152cm。

・趣味

鍛錬と料理。

だが料理の味は壊滅的。橙也曰く、「アレは人間に作れるものじゃあわびゅ!」らしい。

しかもいくら努力してもいっこうに料理の腕は上がらない。

・特技

橙也と同じく近接格闘に長けている。

桃香^{トウカ} (Tokka)

『家』のメンバーの中で一番やかましい。

約10歳。

一人称は「わたし」。

・性格

いたずら好き。最近では橙也をからかう事にハマっている。ただし、その後必ず泣かされるが。

・容姿

髪は桃色でツインテールにしている。身長110cm。

・趣味

いたずら。

ひどいときには白羽や蒼子まで巻き込む。

・特技

電子機器操作に長けている。

この能力はシオンと一緒に発揮するもの。

紫苑^{シオン} (Shion)

桃香とほぼ同時期に来た少女。

約10歳。

一人称は「私」。

・性格

落ち着いていて大人びている。
が、中身は年相応のもの。

桃香と口論になったときは、よく自分のほづが身長が高いことを
持ち出す。

・容姿

紫のショート。身長111cm。

・趣味

みんなの観察。
じつと見る。

・特技

電子機器操作に長けている。

この能力は桃香と一緒に発揮するもの。

【その他解説】

『家』

・黒栖たちが住んでいる建物。一階建てだがかなり広い。

・むしろ砂漠に近い荒野に建つ一軒家。周りには人の住むような場所はない。

・仕事に行く時だけ乗り物が用意される。

・外観は真っ白。中も真っ白。家具はかるうじて薄く色がついていないが……。

・皆だいたい肉体の外見が4〜5歳の時、『仕事』を持ってくる奴らに『家』に連れてこられた。それ以前の記憶は全員ない。

『仕事』

・時々送られてくる赤い手紙に書いてあること。

その内容は、殺人。

『怪我の治癒や身体能力』

・身体能力は常人を超え、怪我の治癒も早い。骨折が2、3日で治るほど。

・そのため訓練でもバキバキ折る。(クロスとトウヤの模擬戦のみ)

・当人達にはそれが異常という感覚はない。比較対象がないのだから。

『名付け方』

・『家』に来たとき、その時家にいた者たちが名付ける。

・シロウより数代前は髪の色がそのまま名前だったが、似たような髪の色が出てきたためこのような名付け方になった。

・漢字は、音を辞書で引いて見つかった単語を適当に当てている。

・そもそも彼らは名前を『互いを識別するもの』程度にしか思って

いない。だから名前にも無頓着なのである。

過去編の人物等の解説 (Version・2) (後書き)

あまりにも掴みづらかった設定に少し補足してみた。

【過去編】変わらぬ日常（いま）

彼は知らない。

自分が生きている意味など。

だが、彼は仲間たちがいれば良かった。

仲間たちが、彼の全てだった。

（Cross Side）

【居間】

「それじゃ、食べましょうか」

「……………いただきます」「……………」

朝食が始まった。

クロエが作ったので今日はご飯に味噌汁だ。

「うーん、あたしが作ると何でマズくなるんだろ？」

「何でってそりやお前に才能がないんあびゅ！」

橙兄が床に沈んだ。

橙兄……………いくらアカ姉の料理がマズいからってそりや……………。

「まったく、失礼な！」

ちなみに橙兄は床に沈められる直前にお椀をテーブルに戻している。それは出来るのになんでアカ姉の拳は避けられないんだか。謎だ。

「クロス、どう？」

「ん？ああ、いつも通り美味しいよ」

「そう、よかった」

クロエはにっこり微笑んだ。

「はいシロウ、あーん」

「だからそれはやめると言っているだろう」

蒼子姉の箸を無視して食べ続けるシロウ兄。クールだ。

「クロ兄様、あーん・・・」

「いや、いいから。自分で食べるって」

「・・・じゃあ、あーんして」

蒼子姉・・・あなたは厄介事の種を撒いていったよ・・・。

「あ、クロ兄さん。わたしにもして！」

ほらね。

「誰か助けてくれ・・・」

「いいじゃんクロ坊。やってあげれば」

「・・・勝手にしたら」

なんで楽しそうなんだアカ姉。

そしてなんでクロエは不機嫌なんだ・・・？

「ほらほら、クロスが困ってるでしょう？やめなさい」

「「はい」」

助かった。でも蒼子姉、あんたが原因なんだよ・・・。

「ごちそうさま。よしクロ、勝負するぞ」

何時の間に復活したんだよ。だけど、

「わかった、受けて立つ。勝負だ！」

昨日思いついたこともあるし、おれは橙兄の誘いに乗った。

【修行場】

「行くぜ、クロ！」

「来い！」

食後、早速修行する。

「せつ、はっ！」
「ふっ、はぁ！」

橙兄の拳を辛うじて受け流す。

やっぱり橙兄はおれよりずっと近接格闘（特に徒手空拳）は強い。ただ、わざわざ相手の土俵で戦ってやるものか！腰の後ろにあるナイフ（刃潰し済み）を抜く。

「せつ！」
「甘い！」

それを橙兄は手甲で弾く。

甲高い音が響く。

そのまま何合か打ち合う。

と、橙兄が足払いを仕掛けてきた。後ろに跳び退りつつナイフを振る。

橙兄は突っ込んで来るのをギリギリで止めた。

「・・・・・・・・」

無言で睨み合う。

「おりゃあ！」
「！！！」

不意に橙兄が突っ込んできた。

咄嗟に胸の前で拳をガードする。

そのままおれは吹き飛ばされた。

…そろそろアレ、やってみるか。

吹き飛んだ先でおれは壁に立てかけてあった武器を手取る。

今度は刃を潰した槍だ。

「てえやっ!」

思いつきり跳んで上から橙兄に槍を振り下ろす。

「危ねっ!」

かわされるが、それは予想済みだ。

「せやっ!」

そのまま床に槍を突き刺す。

そして、槍を軸にして回転する。

さながら横向きに鉄棒をしているみたいに。

そのまま橙兄に向かって手を離して蹴りを放った。

「ちっ!」

それを橙兄は体を横向きにして避ける。

けどこれで終わりじゃない!

「食らえ!」

橙兄の向こうの壁を蹴って再び橙兄に攻撃を仕掛ける。

橙兄が反射的に突き出してきた腕を掴み、おれはそのまま

橙兄の腕をへし折った。

「今日はおれの勝ちだな、橙兄」

倒れた橙兄にそう宣言すると、クロエが歩み寄ってきた。

「お疲れ様、クロス」

そう言つてタオルを差し出してくれる。

「ありがとな」

そう言つてタオルを受け取るうとした時。

「まだだぜクロス！」

橙兄が跳ね起きた。

そのままおれの腕を無事な方の腕で掴んだ橙兄は、膝でおれの腕を折った。

「うおおっ！！」

思わず膝をつく。

「甘いぜクロス。実戦では腕をへし折ったからって油断したらいけね」「こんのバカがあ！！」「えでゅ！！」

橙兄の後頭部にアカ姉のドロップキックが炸裂した。

「決着付いたのに何やってんの!!」

「つてえな!別にいいだろ!」

「よくないに決まってるでしょ!」

そういうやりとりがあっている間、おれたちは。

「クロス、大丈夫?」

「大丈夫大丈夫。これくらい大したことないって。一、三日すれば治るさ」

そんな会話を交わしていた。その時。

「あらあら、またやっちゃったの?」

蒼子姉が入ってきた。

「聞いてよ、蒼子姉!橙也ったら、また勝負ついた後にクロ坊に襲い掛かって怪我させたのよ!」

「もう、困ったわね。橙也?」

「なんだよ、アオ姉」

仏頂面で答える橙兄。

「負けたのが悔しいのは分かるけど、そんなことやっちゃいけないでしょ?」

「でも・・・」

「でも、なに?」

蒼子姉はいつもと変わらない笑顔で訊ねる。

「……いや、なんでも。確かにオレが悪かったよ。クロスも、ごめんな」

すまなそうな顔で謝る。

「いって。今度の鍛錬で俺が勝つたらまた同じことになるんだろ？」

「くそ、反論できねえ……」

「でも」

そう言っと思いつきり橙兄の折れてるほうの腕を叩く。

「いつでえ!!!」

「これだけはやらせてもらうからな」

「おま、ちょ、手加減ぐらい……しろよ……!!」

橙兄はそのまま崩れ落ちた。

「自業自得よ。……さて、あたしもちょっと鍛錬していこうかな」

アカ姉は容赦がない。

「クロス、行きましょう。手当てるわ」

「頼む、クロエ」

「それじゃあ私はここで少しトレーニングしていこうかしら」

そうやっておれたちはそれぞれの日課をこなしていった。

いつもと変わらない日常。

いつまでもそれはそこにあると思っていた。

【図書室】

治療を終えた後、鍛錬をするというクロエと別れたおれは図書室に
来た。

が、そこには先客がいた。

「ふむ・・・」

「あ、シロウ兄。やっぱりここにいたのか」

ちょうど一冊本を読み終えたところだったらしい。ジャンルは推理
小説のようだ。

「どうした、クロス。いつもなら鍛錬の時間だろう」

「いや、ちょっと橙兄と模擬戦やったときに・・・」

そう言っただけで固定してある腕を見せる。

「なるほど、またか」

納得がいくと同時に呆れたような光がシロウ兄の目にちらついた。

「あははは……」

おれは乾いた笑い声を立てるしかない。

「それで、今日は何の本を読みに来たんだ？」

「今日は……」

いつも読んでいる、武器の扱いについて書かれている本の題名を言う。

「お前はよくそれを読んでいるな」

「あれは結構色々な種類の武器のことが書かれてるんだよ。武器の特性とか。」

「だからまず新しい武器を選ぶときはあれを参考にしてるんだ」

「そうか、お前にはぴったりの本なのだな」

「ああ……あれ？」

シロウ兄と会話しながらも探していたのだが、その本がない。

「確かに前回読んだときここに返したはずなのに……」

「クロ兄様、どうぞ」

その時、シオンが探していた本を持ってやってきた。

「助かるシオン。これ、どこにあった？」

「桃香が持っていました」

「………なんでだ？」

「さあ」

何でまた桃香が………？

「クロ兄様。それを読み終わってからで良いですから、また本を読
んでくださいますか？」

「別に良いぞ」

最近シオンと桃香はおれとクロエに遊んで欲しいようだ。

多分ここに来たばかりの頃からおれ達に世話されていたからだろ
う。

でもまあ、うざったいこともないし別に構わないんだけどな。

そして、いつもの本を読み終えたおれは、約束通りシオンに本を読
んでやった。

そんなこんなで今日も過ぎていった。

唯一この日常が崩れるのは『仕事』のときだけ。

『名前も知らない誰かを殺す』時だけだと思っていた。

例え日常が変化しても、それは些細な変化。

一緒に笑い、訓練し、生きていく仲間がずっといると思っていた。

【過去編】変わらぬ日常（いま）（後書き）

短すぎる・・・。

過去編の解説は専門の場所でやってますん。（どっちだよ）

名前の書き方とかは気にしない方向でお願いします。

【過去と現代】答え

空は、^{アカ}紅かった。

大地は、^{アカ}深紅かった。

太陽は、^{アカ}深紅かった。

『彼』は、それらと同じく赤く血に濡れた手を見て、小さく笑う。

またこの光景か、と。

ここまで、長かった。

たった2人の人間を殺すのに、四年もかかった。

だが、それだけを目的として生きるのも、もう終わり。

今、自分の体にある傷。

脇腹を深く抉る傷。

この傷は、おそらく致命傷だろう。

これでようやく終わりか、と目を閉じる。

そして、今までの記憶に思いを馳せた。

〈Cross Side〉

始まりは、一通の手紙。

いつもと何ら変わらなかった赤い手紙。
いつもの『仕事』だと思った。
いつも通り、人を殺すだけだと思っていた。

だが、違った。

帰って来た時、一番若い二人が倒れた。

2人の脳の限界が、来たのだった。

そんなことは、知らない自分達は右往左往していた。

そこに、流し込まれたガス。

全員が、意識を失った。

目が覚めたときは、既に一人、何も無い白い部屋に放り出されていた。

武器は奪われていなかった。

とにかくここから出ようと、目の前にあったドアを開け、道なりに進むこと数分。

やはり白い、広い部屋に出た。

そこで待っていたのは、一人の女性。

と言っても、画面に映ったものであったが。

その女性は言った。

『はじめまして、【製造番号 K - 1504】』

訳が解らず戸惑う自分に、女性は言った。

『今、あなたが一番知りたい事は何？』

仲間達の事だと答えた自分を見て、女性は笑った。
とても、嫌な笑みだった。

そして、映し出されたのは血の海に沈んだ仲間たち。

白が、蒼が、橙が、赤が、桃が、紫が、それぞれ別の画面の中で血の中に浮かんでいた。

仲間の名を呼ぶ自分に女は得意げに語った。

クロスたちは厳密に言えば『人間ではない』こと。

『人間をベースにした何か』、『造られた存在』だということ。
クロスたちは『最強の兵士を作り上げる』計画……その産物
だったこと。

身体能力の向上、細胞の活動速度の向上などを遺伝子から変えること
とで付与したこと。

だが、紫苑と桃香は違ったこと。

二人は肉体的強化はされていなかった。

通常、人間の脳は半分以上が使われていない。

それを強制的に全てを使うようにしたのが、紫苑たち。

紫苑たちが倒れたのは『脳の耐用限界』が来たからだった。

二人は情報化社会の電腦戦争を想定した『型』だった。

『けれども、この計画は終了することになったのよ』

女は語る。

コストパフォーマンスが悪いこの計画は終わることになった。

だがその研究を全て捨てるのはもったいない。

だから、『成果』を持っていくことにした。

『普通は一番新しい型から持っていくけれども……ね』

『仕様変更』したあの二人では『研究成果』にはならない。
ならば、

『次に新しいのから持っていくのが妥当よね』

そして向かい側のドアが開く。

そこから歩いてくるのは自分がよく知った黒髪の少女。

だがその顔に浮かべていたのは、完全なる無。

どこにも思いが感じられない表情だった。

「……クロエに、何をした」

『ただ言うことを聞くようにしただけよ』

「そのために何をした！」

『そうね……、ただちよつと薬とかを使っただけよ?』

そこに声が割り込む。

『そこまでにしろ。時間の無駄だ』

あの男だった。

『さつさと始める。そろそろ引き上げるのだからな』

その言葉と同時にクロエが襲い掛かってきた。
必死に名前を呼ぶ。

『無駄だな、もはや『コレ』は私の人形だ』

銀線が閃く。

いつもは頼もしい相棒の武器だからこそ、その恐怖はわかっている。
一度体に巻きついたならば、一瞬でその部分は切り落とされるだろう。

絶対に捕まるわけにはいかなかった。

一度捕まれば、それが即座に死に繋がる。

『さあ、研究成果を見せて頂戴』

細い線が首に迫る。

後ろに飛ぶ。

それを追ってクロエが迫る。

着地を狙った足への攻撃。

だが足を空中で一瞬曲げ、着地のタイミングをずらしてかわす。

同時に牽制としてナイフを振るうことも忘れない。

それはいと容易くかわされたが、元々足止めになるとは思っていない。

こっちに銀線を伸ばす際の邪魔になればよかった。

そして、クロエに対し呼びかけを続けるが、まったく反応が無い。

唇を強く噛む。

が、そんなことをしていられる程、余裕がある相手ではなかった。
背後から銀線が伸びる。

咄嗟に突き出したナイフが絡め取られて奪われる。
素手になった自分に、銀線が襲い掛かる。
こちらに迫ってくる銀線を見、そこに絶対的死を見た。

容赦も手加減も無い完璧な攻撃。

それを理解した瞬間、視界は白く染まった。

力尽きて倒れたのは、クロエの方だった。

呆然として、地に伏したクロエを見る。
自分が何をしたのかよく分かっていなかった。
実際は、腕を犠牲にしてクロエを止めようとしただけ。
伸びてくる銀線の前にわざと腕を晒し、首への一撃を避ける。
そして、隠し持っていたナイフを投げ、クロエの頭を狙った。
通常の状態なら、クロエは腕を盾にしても自分の腕を切り落とし、
すぐさま首を落としていただろう。
だが、先程のクロエは、体全体で攻撃を避けた。
まるで体を少しも傷つけまいとするように。
その隙が、決定的だった。
最後の隠しナイフが、体勢を崩したクロエの胸に突き立った。

『・・・やはり、思考はあった方が良さそうね』
『そうだな、その方が臨機応変な対応が出来る』

後ろでそんな事を言っていたが、気にならなかった。
駆け寄り、抱え起こす。

抱えた体が震え、目が開いた。

「・・・クロ、ス」

さつきまでとは明らかに違う、意思を持った目だった。

同時に、自分はクロエに残された時間が、殆ど無いことを悟った。

「・・・何だ？」

だからこそ、クロエのしたいようにさせた。

「ごめんなさい・・・」

「うん」

「あなたに・・・私を殺させて・・・」

クロエが言葉を発すると同時に、細く息が漏れる。

「・・・別にいい。それよりも、クロエの方が」

「・・・私は、いいの・・・私はね、クロスの・・・傍にいられればよかった」

「・・・」

「・・・そんな顔しないで。最後に見たのが・・・クロスの顔で・・・よかった・・・」

「クロエ・・・！」

何故そんなにも君は、満足気な顔をしているのか。
自分には、理解できなかった。

「・・・クロス・・・生きて・・・」

静かに、クロエは息を引き取った。
そつとその身を横たえる。

同時に、大地が揺れた。

「!？」

『ありがとう。十分なデータが取れたわ』

『お前達は用済みだ。ここで朽ちろ』

こいつらは何を言っているのか。

『さよなら。大地の底で眠りなさい』

次の瞬間、天井が崩れてきた。

自分は、何もせずに落ちてくる天井を見ていた。

そして、『オレ』は目覚めた。
瓦礫をどけ、這い出る。

開けにくい瞼を強引に開く。

深紅^{アカ}い荒野。

空は紅く染まり、炎のように真紅^{アカ}い太陽が浮かんでいる。

もちろん錯覚なのだろう。

だが、頭から流れる血で濡れた目で見る風景は全てがアカく見えた。

「フッフ・・・ハハハ・・・」

空虚な笑い声が自然と出てきた。

「死ねなかったなあ・・・」

あのまま黙っていれば瓦礫に潰されると思ったのに。

何をする気も起きず、空を見上げる。

みんな死んでしまった。

『おれ』は何一つ出来なかった。

『オレ』は、からっぽになってしまった。

そうなってしまったから気付く。

『おれ』にはあの日常しか、あの世界しかなかったのだと。

あの男達への怒りはない。

ソレを感じる心がオレに残っているかどうかすら怪しい。

「これから……どうしようか……」

そのとき思い出したのはクロエの最後の言葉。

『生きて』と言う願い。

「……分かったよ。クロエ」

オレは、果てなき荒野へと歩き出した。

彼女の願いを叶えるためだけに。

それから一年は生きていく場所を探して彷徨った。

荒野の先の港町で荷物に紛れて船に乗り、海を越えた。

そして着いた町でオレは自分が「日本人」に似た容貌をしていることを知った。

だからオレは日本に向かった。
そこでオレはあいつに出会った。
雨に濡れて途方に暮れていたオレをあいつは平然と自分の家に招き
入れた。

「ねえ、君はどこから来たんだ？」

「知らない」

「君何歳？どこの国の人？」

「知らない」

自分のことすら知らず、無愛想なオレにあいつは熱心に話しかけて
きた。

「君は何で日本に来たんだ？」

「生きやすそうだから」

「何だつて？」

あまりにもしつこく聞いてくるので、オレは今まであつたことを全
て話した。

オレたちの生まれから全てをなにもかも。

普通なら信じるはずもないその話。

だが、

「ふーんそうなのか。大変だったね」

あっさりとあいつは受け流した。

「でもさ、それなら復讐したいと思わないのか？」

「復讐？」

「うん。その人達は君たちの命を侮辱した訳じゃないか。

その人達は十分君に復讐される理由があると思うよ」

そんな事を考えたことは一度もなかった。
けれど。

「・・・そうか、復讐か」

それを目的にして生きるのもいいかもしれない。
そう思った。

それからの一年はまず一般常識と普通に生活していくための技術を
覚えた。

あいつがオレに丁寧に教えてくれた。

そして復讐が始まった。

桃香と紫苑が得意としていたハッキング。

それを自力でやる。

顔しか知らないあいつらの情報を探るのは困難だった。

まず、オレ達を生んだ計画の参加者からあいつらを探った。
名前は簡単に分かった。

しかしそこから問題だった。

奴らは居場所を明らかにしていない。

だから居場所の見当を付けることにまず二年かかった。
それから、見当を付けた場所を一年かけて虱潰しに探して回った。

そしてようやく辿り着いた。

あいつらの場所に。

だが、オレが探していることを知っていたのだろうか。

あいつらは新しい『研究成果』とやらを出してきた。

オレ達と同じように生み出された物だった。

その研究成果との死闘でオレは深手を負いつつもあいつらを追い詰めた。

そこであいつらは命乞いした。

自分たちが生きることが人類の新たな可能性に繋がるのだ、と。

正直、笑えた。

それまでの経験でオレは自分の異常さに気付いていた。

人間は2、3日で骨折の治癒などしないし、腹をぶち抜かれて生きてもらえない。

驚くほど脆弱な存在。

それが人間だった。

だが、彼らはとても強かった。
オレなんかより、遥かに。

その強さを、オレはこの一年で実感していた。

スペック自体が違うオレに傷を与えた兵士。
悪あがきと知りながら、戦い逃げ果せた男。

人間には心の、意志の強さがあつた。

どんな時でも諦めず、立ち向かって、歩き出せる強さ。

歴史は人間のその強さによって動かされていた。

だがオレは、立ち止まってしまった。

だからオレは言った。

「そんな強さはいらない。人間は自分で進化していける。

人間は既にオレ達を遥かに超えている。お前らの存在など不要だ」

そうして、オレの復讐は終わった。

あつけない幕切れだった。

そして建物から出たオレは、四年前と同じ光景を見る。

全てがアカい世界。

またココに戻ってきてしまった。

だがもうオレは疲れていた。

そこから抜け出す力は残っていなかった。

生きることは辛かった。

それは、あいつとの生活で気づいた。

初めの頃、オレに後悔などなかった。

生き物が死ぬのは当然で、それが早いか遅いかの違いだけだ。だからクロエが死んだのは、悲しくてもそれを恨むことなどなかった。

涙を流したのは、守るべき人を自分の手で殺したから、それだけだった。

けれど、あいつと過ごしているうちに気付いた。

あいつと居るとオレは『普通の幸せ』を感じられる。

その幸せを感じると、オレはオレだけが生き残っているこの状況に苦しむ。

クロエは、あんなにも満足そうな顔をして死んだ。

だが、この幸せを得てこそ彼女はあんな表情を浮かべるべきだった。

この幸せをみんなが受け取っていいはずだった。

そのことがオレを苦しめた。

生きることが辛かった。

生き残ってしまったことを、オレは後悔していた。

だからここでもう終わりにしたかった。

だが、またオレは生き残ってしまった。

この身体はそう簡単に死ぬことを許さなかった。
苦しみながらオレは、惰性で日々を過ごしていた。
そんなとき、あいつが言った一言がオレを救った。
それから『俺』は後悔することを止めて生きてきた。

はずだった。

＼Side Out＼

〈現代・結界内〉

歪な形の月が照らす暗黒の街。

その街の一つの広場に多くの人がいた。

だが、その場に立っていたのは僅か一人。

少年の姿の暁だった。

残りは全て倒れ伏していた。

シエラもスクナムエヴァも刹那も真名も楓も古菲も。

全員が満身創痍だった。

「馬鹿な……ここまで……!?!」

シエラが呻くように言う。

彼らはそれぞれ戦いを潜り抜けてここに辿り着いた。

そして暁を止めるため戦った。

だが、彼らは暁に指一本触れることすら敵わなかったのだ。

「くっ……!」

一番傷が浅い刹那が立ち上がる。

「刹那、止めなさい！死にますよ！？」

「私は、彼に借りがあります。今度は私が返す番です！」

シエラの制止を振り切って刹那は飛び出す。

まさに捨て身の一撃。

容易く迎撃できる攻撃だった。

だが暁は、全く避ける素振りも見せない。

そして、刹那の刀が暁に届く寸前。

「せつちゃん、ダメーーーーっ！」

その声でギリギリ暁は串刺しにならないですんだ。

「お、お嬢様！？」

「はぁ・・・はぁ・・・あかんよ、暁さん。死んだらあかん・・・」

広場に走り込んできたこのかは、ゆっくりと暁に近づいていく。

「いけませんお嬢様！今の暁さんは・・・！」

「大丈夫、暁さんはウチらのこときちんとわかつとるよ」

「な・・・！？」

「だからせつちゃんに殺されようと思ったんやろ？」

無言のままの暁。

このかはそのまま続ける。

「ウチ、暁さんの過去、見たえ？」

暁さんは辛かったんやろ？」

ウチらには分からないほどの苦しみを抱えてはる」

でも、と続ける。

「死んだらあかん。だって、それがクロエさんとの約束やないの！」

びくり、と初めて暁が反応した。

「ウチ、クロエさんと会ったんよ。暁さんを頼むってゆーてはった。それに……」

このかは暁の胸に頭を寄せて呟く。

「ウチらを勇気づけてくれたのは暁さんや。

その暁さんが自分に負けたらあかんよ。

……ね、戻ってきて、暁さん？」

「……」

ゆらり、と暁の身体が揺れた。

「……情けないよなあ」

暁の声がこのかの足下からした。

「!？」

ぞぶり、と音がして影から腕が生える。

もう片方の腕がすぐに出てきて体を引き上げる。

「俺が守らなきゃいけないのに、なんで俺がこのかに守られてるんだか」

「……………暁（さん）……！！」「……………」

立ち上がりながら、ふふ、と薄く笑う。

「悪かったなみんな。ここまで来させて」

いつの間にか全員の怪我は治っていた。
幻覚だったのだ。

「先に戻っている。『俺』は『オレ』とケリをつける」

「……死んだりしないわよね？」

「死ぬかよ」

暁がこのかたちに背を向ける。

「さ、行け」

皆は走り出した。

「なあ、『オレ』」

「なんだ、『俺』」

「後悔してるか？」

「してるね。オレは生き残るべきじゃなかった」

「そうか。でもあいつらは『おれ』の死を望んでいなかった」

「知っている。でもあいつらが『外』を、『世界』を知っていたら
生きたいと思っただけだ」

「ああ、そうかもな。でも俺は生きなければならぬ」

「約束か。」

「それに、別の生きる理由も見つかった」

「・・・それはなんだ？」

「世界を見て回る。それが俺の願いであり、俺の償いであり、俺の
あいつらに捧げる華だ」

「・・・そんなことが」

「あいつらは『記憶』にいる。俺と、共に在る」

「・・・それは幻だ」

「いや、本当のことだ」

「・・・」

「・・・あのクソツタレの神が記憶をくれてはじめて知ったことだ」

が、あいつらは満足していた。
精一杯生きた末の死だったんだ。それを俺が勝手に後悔するのはあ
いつらへの侮辱に当たる」

「・・・ようやく分かったんだな」

「ああ、答えは見つかった」

「遠回りしたな」

「ああ」

「オレはもういらぬか？」

「ああ。記憶の海で眠れ」

「やれやれ、長い自分探しだったな？」

「ほっとけ」

「じゃあな」

「ああ。さよなら、『製造番号 K - 1054』」

く結界外く

全員が、結界の外に集まっていた。
本山にいるべき詠春まで。
誰もが息を潜め、結界を見つめていた。
このかたちが外に出してから数分後。

結界が蠢き始めた。

「皆さん、気をつけて」

シエラが静かに言う。

その間にも結界は蠢き続ける。

と、急にその動きが止まった。
ゆっくりと、結界が収縮を始めた。
このかが、走り出した。
刹那がそれを追う。
皆が、走り出した。

目指すのは、スクナが目覚めた場所。
結界はそこに向けて収縮していた。

全員が辿り着いた時、丁度収縮が終わるところだった。
黒く大きかった結界は、今や人一人をギリギリ包める大きさになっ
ていた。
ピタリと収縮が止まった。

数秒の空白。

無限にも感じられたその時間を、ピシリという音が破った。
結界の表面に亀裂が走る。
ポロポロと結界は崩れ落ちていった。
ようやく中の人物が姿を現す。

「ただいま、皆」

暁が、帰ってきた。

く????く

「何、あれだけやって失敗したじゃと！」

「申し訳ありません、父上」

暗い一室で何者かが話している。

「既に天ヶ崎らも向こうに捕縛されたと・・・」

「役立たず共が！」

彼らが、今回の一件の『呪術協会側の』黒幕だった。

「どうしますか、父上。このままでは我らの存在が・・・」

「分かっておる！」

スクナを使えば天ヶ崎でも計画を成功させることが出来ると思っていた。

だが結果は失敗。

このままでは天ヶ崎の裏に自分たちがいることが露呈してしまう。どうやってこの危機を乗り切ろうかと老人は考えを巡らせていた。そこに。

「邪魔するぜ」

戸を吹き飛ばして男が入ってきた。

「な、何奴！」

「悪いが、貴様らに名乗る名はねえな」

「長手の者か、何が目的じゃ!？」

「黙れ、『ヘブズ・ドア』。俺の許可無しに行動することは出来ない」

二人は急に声を発せなくなった。

同時に身体も動かなくなる。

「さて、質問に答えて貰おうか」

男はゆっくりと話す。

老人達は何とかしてここから逃げ出す方法を探る。

が、

「言っておくが、助けは来ないぜ」

老人達の希望を男はあっさりと切って捨てた。

「『俺の質問に嘘偽りなく答えなければならない』……。さて、まず最初の質問だ」

男が老人の顔を見つめる。

「あんたはこの計画で死者が出ても構わないと思っていたか？」

老人の意志とは裏腹に口が開く。

「うむ」

ズン、と空気が重くなる。

「ほお。次だ。呪術協会側に死者が出ても構わない、と？」

「うむ」

更に空気が重くなる。

「ふん。この計画にこのかを使うことはあんたが指示したのか？」

「うむ」

ドッ、という音を立てて老人のすぐ横の床に穴が開いた。

「おっと。……このかを使った理由は？」

「あの血に宿る魔力があつたからだ」

「ふん。ならば、自分の子供にその魔力があつたら、あんたはどうした？」

「我が子を使つただろう」

「その隣のアンドラは？」

「同じ考えだ」

男の目が冷たく光った。

「この計画の目的は？」

「我らが関西呪術協会の長となること」

「長になつたら何かあるのか？」

「我らの栄華の時代が始まるのだ」

「驚くほどゲス野郎だな。まだ関西への怨恨の方がマシだぜ。」

「・・・反省の色があれば考えようと思ったが、無駄だったな」

フフ、と男は小さく笑う。

「『^{ヘヴンズ・ドア}天国の扉』か、皮肉だな」

月明かりを背にした男の顔の中心で、琥珀色が輝いていた。

「この能力であんたらがくぐるのは『^{ヘルズ・ゲート}地獄の門』だ」

「帰ったぜ、シエラ」

「お帰りなさい、暁。・・・彼らは？」

「裁いた。奴らは死んだ」

「・・・？まだ生命を感じますが？」

「命は取っていないだけだ」

「・・・具体的に」

「あらゆる感覚を奪った。五感、体性感覚、内臓感覚、運動感覚、その全てをな」

「・・・確かに、それは死と同義ですね」

「ああ。・・・やれやれ、修学旅行、ようやく終わりか」

「お疲れ様でした」

「（グラリ）・・・お？」

「・・・お休みなさい、暁。明日のことは考えず・・・

「・・・そうだな、ゆっくり休むことにするぜ・・・」

【過去と現代】答え（後書き）

久しぶりです。

リアル事情でしばらくかけませんでした。

これからも忙しいので更新は不定期になりますが、どうぞよろしく
お願いします

く だが解説 く

『ヘブンズ・ドア』

「ジョジョの奇妙な冒険」より

・ 第四部に出てくる漫画家、きしへるはん岸辺露伴のスタンド。
・ 人を本にし、記憶や思考を読むことが出来る。
・ 命令を書き込むと、本にした人物は絶対にそれに従わざるを得ない。

・ 『足が動かない』と書けば歩けなくなるし、『自殺する』と書けば自殺する。

・ ただし死体に使っても「死」の文字で埋め尽くされていて生前の記憶は読めない。

修学旅行の終わりと弟子入り試験

〔 Akatsuki Side 〕

夢と現実の境界を彷徨っている。

・・・目だ、この理論では魔・・・
・・・と20年もない！？それ・・・
・・・が、魔力の供給すら・・・

腕に何か当たっている感触がある。
それほど重くはない。

ああ、この感触は・・・

「・・・」

覚醒。

右腕を見る。

案の定そこにいたのはエヴァ。

俺の腕を枕にしてすやすや眠ってやがる。

「あーあー、涎なんか垂らしやがって・・・」

拭ってやる。

「……………んにゃ……………うぐぐゅ」

ん？

「……………眠い……………」

「眠い……………？」

……………どんな寝言だよ、そりゃ。

「……………起きるか」

エヴァを起こさぬようにして起き上がり、扉を開ける。

「……………いい朝だ」

「起きましたか」

「詠春か」

向こうから詠春が歩いてきた。

「傷は大丈夫なのですか」

「ああ。もうなんともねえよ」

「もうあんな無茶はしないでくださいよ」

「しねえよ」

生徒一人救うために世界を危機に晒してどうする、ってな。

「あいつら……………このかたちは？」

「まだ寝ているんじゃないでしょうか」

「そうか……。で、天ヶ崎たちは？」

「捕縛してあります」

「逃がすなよ」

「勿論です」

静かに今までのことを振り返る。

鈍った勘も今回の修学旅行で随分戻った。

次からはあんな醜態は晒さないようにしねえとな。

「……ふう」

「ふふ、流石に疲れましたか？」

「まあな。……っしや、そろそろあいつら起こして戻ることにするぜ」

「そうですね」

それに……。テオに説明しなきゃいけないこともできたしな……。

黙ってれば分からない？

いや、あいつは絶対に何があつたか突き止める。

それならいつそ自分から話すぜ、俺は。

さて、皆を起こしに行きますかね……

俺は修学旅行最終日の自由行動でナギの別荘に来ていた。
無論、ネギたちを連れて。

その前にはエヴァにつき合わされていたがな。
綾瀬たちへの説明はシエラがしてくれたいらしい。
事件の後始末などもシエラと詠春がやってくれた。
持つべきものは優秀な友人だ。

「主殿、我が着いて来て良いのか？」

「ああ。別に構わねえだろ」

そして、スクナは今二人になっている。
人間に擬態するために必要だったのだ。

神は性質的に中性だから、男と女の二人に分けなきゃいけない。

ま、もともとスクナが二人に分かれることができたので楽だったが
な。

ちなみに男のほうミッルが光流、女のほうエイラが影羅だ。

とりあえず名前がないと不便なのでつけた。

名前の由来？ 適当に決まってる。

「いいです」

「へえ、ナギの野郎の別荘にしてはなかなか・・・」
「なんか秘密の隠れ家みたいねー」

草木に覆われちゃあいるが、天文台もありなかなかいい感じの建物だった。

そして中には山のように本があった。

「というか本当にナギが集めたのか？コレ」

「大いに怪しいですね」

「ええ。あの馬鹿が集めたなんて信じられないわ」

独り言に突っ込まなくてもいいぞ、シエラ、エヴァ。

「お嬢様方、故人の物ですからあまり手荒には扱わないでくださいね！」

早速図書館探検部は本を見て回っているらしい。

「なかなかいい物を集めてるな」

俺も適当にそこらにあった本を読む。

と、ネギが詠春に話しかけているのが見えた。

「あの・・・長さん・・・父さんのことについて聞いてもいいですか」

そして関係のある奴らが集められ、ナギたちについての話を聞くことになった。

俺とシエラもその場に同席する。

一方スクナは現代の知識に興味津々で、ただの本でも熱心に読んで

いた。

そして詠春はある写真を見せる。

「……この写真は？」

「サウザンドマスターの戦友達…黒い服が私です」

ん？こりゃあ……

「戦友……？」

「ええ、20年前の写真です」

「わひゃーこれ父様！？ わかーい！」

「私の隣にいるのが15歳のナギ……サウザンドマスターです」

そついや大戦中に撮ったつけな。
すっかり忘れてたが。

「へー、どれどれ？ どれがネギのお父さんの？」

「この人やて。かつこえー。ええ男やー」

「あれ？この人……」

「暁さん！？」

「えっ！？なんで暁先生が！？」

こつちみんな。

「……しゃあねえな」

説明してやっか。

どこから話すか・・・

「・・・元々俺は賞金首だったんだ」

「賞金首!？」

「ってことは先生は悪い人!？」

「勝手に悪者にすんな。

・・・まあ実際はたいしたことないんだぜ？
ちよつとした誤解から始まったことだしな。

で、そんなこんなで有名になった俺だが、20年前にある組織から勧誘を受けた。

仲間にならないかってな。

だが俺は断った。その組織は戦争を引き起こしていたんだ。

この戦争の詳細については省くが・・・

そいつが詠春たちの敵。ネギ、お前の親父が戦った相手だったわけだ。

その勧誘を断った俺は、ナギ達と協力して戦うことにした。

で、これがその戦争のときの写真っつーことだ」

「へー!」

「暁さんってスゴイ人やったんやなー」

「というか、暁さんって本当は何歳なの？」

「600歳は超えてるぜ」

「は!？」

「『カオス・エンペラー混沌の帝王』をちよつと調べてみればいいぜ。

それが俺だから」

「へー・・・」

「で、だ。詠春もナギと一緒にその戦争を駆け抜けた仲間だったんだよ。」

そして、戦争の活躍からナギはサウザンドマスターと呼ばれるようになった。

「……つってもあいつは呪文千個も使えねーけどな」

「そして、天ヶ崎千草の両親もその戦で命を落としています。

彼女の西洋魔術師への恨みと今回の行動もそれが原因でしょう」

そして、その後ろにいた奴らはその想いを利用したわけだ。

「以来彼と私は無二の友であつたと思います。

しかし……彼は10年前、突然姿を消す……。

彼の最後の足取り、彼がどうなったかを知る者はいません。

ただし公式の記録では1993年、死亡。

それ以上のことは私にも……すみません、ネギ君」

「い、いえ……そんな。ありがとうございます」

10年前姿を消す、ね。

フ……

「結局手がかりなしか。残念だったな、兄貴」

「ううん。そんなことないよ、カモ君」

そう言つてネギは別荘内を見渡す。

「父さんの部屋を見ただけでも来た甲斐があつたよ」

「そうか？」

そんなネギに詠春は地図を手渡した。

ここにナギの手がかりがあるから、と。

その後、写真を撮った。
シエラは嫌がったが、皆にせがまれて渋々一緒に写った。

別荘を出て詠春と別れる。

「・・・またな、詠春」

「ええ。また会いましょう、暁。娘を・・・このかを、頼みます」
「任せとけ」

そして俺たちは別れた。

〈魔法世界・ヘラス帝国〉

「　　とまあ、そんな感じだ」

「・・・」

俺はテオに今までであったことを報告した。
だが怖え。

無言のなのが更に。

「要するに、お主は妾との仮契約を断っておきながら、旧世界で3人も女と仮契約したのじゃな？」

「ハイ」

「よかるう、殺してやる」

「待った、その剣どっから取り出した。おい、じりじりこっちに寄って来るんじゃないえ。」

その笑顔やめる。マジで怖いから。だから、ちょっと、やめっ

」

その後俺が生きていられたのはちょっとした奇跡だったと思う。

「・・・なあ、テオ」

「何じゃ？」

沈む夕日を見ながら腕の中のテオに話しかける。

「もしも、だぞ。もしも」

」

気が緩んでいたのか、とんでもない事が口をついて出た。

「この目に映る全てが幻だとしたらどうする？」

「な、何？どういことじゃ？」

戸惑うテオに慌てて弁解する。

「いや、もしも、もしもの話だ。

お前が見ている全てが幻で、いつか消えてしまうものだとしたら
どうする?」

俺の問うた。

それに対してテオはしばらく考え込んだ後

「妾がお主なら……。そうじゃな、妾は」

そして、テオの答えに俺は度肝を抜かれた。

「……くっ、くくくっ、ハハハハハハハハ！」

「な、何じゃ!?何か変なことを言ったか!？」

「くくくっ、くっ……。いや、別に変なことは言ってるねえよ。……
くくっ。」

そうかそうか、そういう考え方があったか……」

テオを抱き寄せる。

「ア、アカツキ!？」

「最高だぜ、テオ」

そのまま口付けした。
仮契約が成立し、カードが出る。

「……ぶあつ」

「……ふう。なかなかいいモンだな」

カードを手にとって見てみる。

「ふうん。こんななってるのか」

「……ア、アカツキ」

「お？」

上目遣いで瞳を潤ませ、胸に寄りかかってくるテオ。
……しかたねえ。満足するまで付き合っ
てやるか。

〈旧世界・麻帆良〉

そして修学旅行後日。

放課後、とある広場にて。

「「弟子にしてくださいッ！」」

ネギと刹那から志願があったわけだ。

「だが断る」

「「ええっ!？」」

「嘘だよ」

流石に何も聞かずに断ることはねえよ。
さて、そろそろ来る頃か。

「師父ーっ!試験受けに来たアルーっ!」

「話つてなーん?」

古菲とこのかだ。

「このかは後で話をするからちょっと待っていてくれ。
で、お前らだが・・・」

流石に頼まれただけで弟子入りを許すわけにはいかない。
最低でも俺の出す試験ぐらいはクリア出来る実力が欲しいな。
そこで俺は先ほどから考えていた試験を課した。

「古菲、お前は『俺の胴体に一撃入れること』。

刹那は『三十秒間俺の攻撃を凌ぐこと』。

そして、ネギ。お前は『俺にどんな手を使ってでも攻撃を当てる
こと』。

それが弟子入り試験だ。

試験は今週土曜日の真夜中。いいな」

「「ハイ!」」」

「ああひとつ。人海戦術でも何でも使っていていいが、一般人は呼ぶな

「よ」

皆それぞれに考え込みながら散っていった。

「さて、このか。お前の番だ」

「うん」

俺はこのかに近衛家の血筋や協会内での立場、父親のことを語った。このか自身の魔力についても触れておく。少し複雑になったが、なんとか理解してもらえてようだ。

「・・・ほえー、ウチの知らんところでいろいろあるんやなー」

「まあな、そういうもんだろ。」

「で、どうする？」

「え？」

「魔法、習うか？」

「どのみちお前には身を守る術を覚えてもらうつもりだしな」

「うーん・・・」

まあ、興味半分怖さ半分つてところか？

「よく考えてからでいいぜ。魔法は便利だが、危険だ。」

「そこんところはあの修学旅行でよくわかってると思う。」

「だから自分で考えて、答えが出たら聞かせてくれ」

「うん、ウチ考えてみる・・・」

このかも考えながら去っていった。

「……で？その二人。そろそろ出てきたらどうだ？」
「えっつ……！」

「き、気づいてたですか？」

のどかと綾瀬……めんどくせえ、夕映でいいか、が木の陰から出てくる。

「で、何の用だ？」

「えつと……そのー……」

「暁さん……あなたは……魔法使いですね？」

「ああ。それが？」

「え」

ははあ。こういう返事は想定してなかったな。

「俺が誤魔化すと思ってたのか？」

だが、お前らは言いふらしたりしないだろ？

だったら別に隠す必要も無いし、この間何があつたか教えてやってもいいぜ」

中途半端に隠して首突っ込まれるよりはマシだしな。

で、その後のどか達の質問に答えていった。

つっても主にこの麻帆良のことだったがな。

「……と言ったところか。これで質問は終わりか？」

「は、はい。でも、その……」

「お願いがあるのですが……」

「あん？」

「わ、私たちに魔法を教えてくださいませんか！」

「無理だ」

「即答ですか!？」

「いや、正確に言えば無理じゃねえけどな」

さっきの全員を弟子にとつたとしても、この二人を見る暇はある。
ただ……

「理由は何だ？非日常の世界に憧れてとかじゃねえだろうな」
「う……」

ドンピシャかよ……参ったな。

こいつらは多分、良く『魔法』を理解していない。

「いいか。ちよつと見てろよ」

軽く魔力を込めてそこら辺の岩を殴りつける。

岩は大きな音と共に碎けて粉々になった。

「うわっ……」

「……これが魔法の力だ。これで人を殴ってみろ。」

簡単に人が殺せる。そういうものをお前らは習いたいと言ってる
んだ」

「……」

「いいか、『知ってる』のと『使える』のは違うんだ。」

憧れだけで習うんじゃねえ」

ただ、そこまでしてでも習いたいなら止めないがな。

「ま、それでも習いたいつてんなら教えてやるよ」

「……ちよつと考えが甘かったです」

「・・・もう少し考えてきます・・・」

二人ともとぼとぼ帰っていった。

少し厳しいことを言ったが、仕方ないだろう。

好奇心や探究心を取るか、日常の平穏を取るか。

それは難しい選択だろう。

まあ、なんにせよ。

「若いつてのはいいねえ・・・」

俺はしみじみと呟いた。

それを見たエヴァに散々からかわれた後、反論した俺の『ババア』
発言にマジギレされたのはまた別の話。

ちなみにその後エヴァと仮契約した。

そして、土曜日 came。

Other Side

夜の広場で暁は待っていた。
腕を組み、目を閉じて。

「……………」

気配を感じてゆっくりと目を開く。
その視線の先には、三つの人影があった。

「……………来たか」

言葉は不要。

ただその力で認めさせれば良い。
そう彼の雰囲気は語っていた。
三人のうち一人が前に出た。
そして、試験が始まった。

【古菲】

「よろしくアル」

「来い」

さっさとしろばかりにいつもと別人のような声で暁が言う。
次の瞬間、古菲は暁の懐に入り込んでいた。

「把！」

常人なら見切ることが出来ないその一撃。
だが暁は常人ではない。

そして、人ですらなかった。

「ふっ」

大きく跳び退ってかわす。
そこに踏み込んでくる古菲に対し、暁は下から拳を突き上げる。

「くうっ！」

咄嗟に踏みとどまってかわした古菲ががら空きの彼の胴体に攻撃する。

だがその隙はフェイク。

死角から肘が飛んできた。

そのまま腕が弾かれて肘が顔に叩き込まれ

「っ！」

一瞬で暁はしゃがんで足払いをしていたのだ。
そして倒れこんだ古菲の首筋に爪を突きつけて言う。

「一回」

古菲は跳ね起きたそのままの勢いで蹴りを放つ。
だが当たらない。

思い切り後ろに仰け反って暁は蹴りをかわしていた。
逃がさないとばかりに攻める古菲。

それを捌き続ける暁。

一発も攻撃が入らない。

全てが見切られ、受け流される。

そして古菲が息継ぎをした瞬間に彼の蹴りが古菲の顎に入った。
暁は後ろに倒れこみ、そのままの勢いで足を跳ね上げたのだ。

「これで、今までにお前は三回死んだ」

倒れた古菲を見下ろして暁が言う。

その様子を見ていた刹那は舌を巻く思いだった。

(全く隙が無い・・・！　これが、暁さんの戦い方・・・！)

これが暁の本来の戦闘スタイル。

動物以上の勘と人間以上の身体能力、そして無数の死線を越えた経験が合わさって出来ている。

「まだやるか？」

「まだやるアルよ！」

古菲は身を起こした。

彼女の攻撃は全てが見切られている。

一発胴体に入れるだけなのにその一発が果てしなく遠い。それに彼にこちらの攻撃が読まれているようでもあった。

こうなつては『予想外の一撃』しかない。

確実に誰も予想できないタイミングで彼が見たことがない攻撃を仕掛けるのだ。

そして、古菲にはその当てがあつた。

「ハイツ!!」

以前にも増して激しく攻める古菲。

その様子に暁は彼女が何か企んでいる事を悟る。

(何か手があるのか・・・だが、俺に通用するかな)

「ボンチュワン
崩拳!!」

「オラア!!」

古菲の中段突きを真っ向から殴り返して相殺する。

それで体勢を崩した古菲を暁は殴り飛ばした。

追撃をかけようと駆け出した瞬間、暁は見た。

古菲がしてやったりとばかりに笑ったところを。

そして古菲の背後から何かがちちに伸びて来るのを。

(腰の飾り布での布槍術! 迎撃は・・・駄目だ、間に合わねえ!)

彼は咄嗟に身を捻った。

古菲は布が風を切る音を聞いた。
手応えは、無かった。

古菲は受身を取らず倒れた。

（は、外したアル・・・）

古菲は立ち上がらなかった。
いや、立ち上が『れ』なかった。

もうその気力が尽きていた。
だが悔しさは無かった。

むしろ、やるだけやった、という奇妙な充実感さえ感じていた。

その時、広場にパチパチという音が響いた。

「え？」

顔を上げるとそこにはこつちを見て手を叩いている暁の姿があった。

「合格だ、古菲」

「え？ え？」

「お前の攻撃は当たっていた。ほんの僅かだが・・・な」

そう言つて脇腹を指差す。

服が破れ、僅かに赤くなつた肌が覗いていた。

そのまま暁は手を差し伸べた。

「見事な一撃だった。マジで恐れ入ったよ」

古菲はその手を取った。

【刹那】

帰ってきた古菲をネギは尊敬の表情で見つめる。

「古老師、すごかったです！」

「ハハ、いやまだまだアルよ。あれでも師父は手加減してるアル」

「え！？ アレですか！？」

「気迫だけで全く殺気が無かったアル。ぜんぜん本気じゃなかったはずネ」

「強化も使っていませんでしたしね」

刹那もそれに同意する。

「うわぁ・・・試験、合格できるかな・・・」

「ま、とにかくやってみるといいアル。失敗しても得るものはあるはずネ」

「それでは、次は私がいつてきます」

「頑張ってくださいね、刹那さん！」

頷いて刹那は暁の元に向かった。

刹那は暁と向かい合って立つ。

「準備はいいな？」

「はい、いつでも」

「じゃあ、いくぞ！」

暁が飛び出した。

「ウリイヤア！」

真横からの頭部を狙った蹴り。

それを刹那は何とか受け止め、押し返す。

そしてそのまま反撃。

「雷、鳴剣ッ！」

普通なら回避不可能の雷が降ってくる。

だが暁は落ちてくる雷を察知し、かわした。

「ウオシヤア！」

魔力を纏った拳での一撃。

刹那は正面からそれを受け止める。

「斬岩剣！」

迎え撃った剣と拳が激突し大気が揺れる。

(う・・・暁さんの拳が・・・お、重い！)

刹那は負けまいと力を込める。

そのまま押し合いになるかと思われたが。

「ふっ」

「なっ！」

暁はその刀を『握って』跳躍、刹那の後頭部目掛けて踵落しを放った。

刹那は身を捻ってギリギリで回避。

片手に刀を持ったまま暁に技を叩きつける。

「斬空掌！」

「くお！」

流石に暁は手を離し、下がる。

しかしすぐに体勢を立て直す。

「やるな、だが！」

即座に疾走して間合いを詰めようとした。だがそれを刹那はさせまいとする。

「斬空掌・散！」

複数の気弾が暁目掛けて飛んでくる。
だが、それを見て暁はニヤリと笑った。

「そらッ！」

声と共に暁は消えた。

だが、刹那は気付く。

これは、古菲の時と同じ。

(下！)

見れば、極限まで体勢を低くした暁が獣のように地面を駆けてくる。
その拳は一目で分かるくらいに魔力を纏っていた。
そのむき出しの魔力を叩きつける気だ。

(迎撃は、出来ない！ 回避も・・・間に合わない！ 防御するしかない！)

そう悟った刹那は今の自分ができる限りのことをする。

「してんけつかい どうこれんかく四天結界独鈷鍊殻！」

「ウオラア！！！」

魔力と結界の衝突による爆音が響く。
だが、刹那はまだ無事だった。

(よし！ なんとか防い・・・)

「甘えよ」

「！」

ぎちり、と結界が嫌な音を立てた。

暁が、そのまま突っ込んできていた。

爆発の中に片腕を前に突き出して突進していたのだ。

そのまま結界に腕を叩きつける。

対魔力に特化しているはずの結界が音を立てて歪み始める。

「どうした？ この程度か？」

「う、ぐう！」

とうとう腕が結界を突破した。

その瞬間、刹那は覚悟を決めた。

突き出した暁の腕は空を切った。

「！ 消えた・・・わけじゃねえな。ようやく使ったか、刹那」

そう言っただけは上を見上げる。

背中に羽を現し、夜空に刹那が浮かんでいた。

そして、制限時間が迫っているのを二人は知っていた。

「・・・はい！」

「・・・はい！」

互いに向かって翔ける。

「ウオシャアアアアアア！」

「極大、雷、鳴剣ッ！」

空中で大きな爆発が起こった。

「う……」

少しの痛みの中、刹那は覚醒した。

「起きたか、刹那」

「ひゃ!?!」

すぐ近くで聞こえた声に驚いて目を開ける。

刹那は地面に立った暁に抱えられていた。

「う、あ、暁さん!?!」

「おう、合格だぜ刹那」

「え……あ」

暁の一言で刹那は何故自分が抱えられているのか理解した。
あの爆発の衝撃で刹那は意識を失ってしまったのだ。

「あ、ありがとうございます」

「お礼はいらねえよ。お前の実力で突破したんだからな」
「……はい」

「意識もだいぶはつきりしてきたみたいだな……立てるか?」
「はい、もう大丈夫です」

刹那をおろして暁はネギの元に向かう。

その時、刹那から声をかけられた。

「暁さん、これからよろしくお願いします!」

「おう、お願いされてやるぜ」

【ネギ】

「さあ、とうとうお前の番だぜ。ネギ」

「・・・はい」

「お前の試験は俺に攻撃を当てるだけだ。防御させるだけでもいい」

「はいっ!」

ガチガチに緊張しているネギ。

流石に見てられない暁は少し策を講じる。

「行くぞ、覚悟はいいか?」

「え、あ」

「まあ無くても行くが」

「それじゃ聞く意味ないじゃないですか!??」

「冗談だ。少しは緊張が解れたか?」

「あ、す、少しだけ・・・」

「それじゃあ、行くか!」

「はい!」

「やあ！」

「ふっ」

「てんしんこた転身跨打！！」

「止まって見えるぞ、ノロいッ！」

突っ込んできたネギの攻撃を暁は屈んでかわし、そのまま殴り飛ばす。

「くあっ！ く、まだです！ ラス・テル・・・」

「させるかよ！」

「うあっ！」

ネギの詠唱を暁は背後から蹴り飛ばして妨害した。すぐさま体勢を整え、間合いを詰めてくるネギ。それから何発かのネギの攻撃をかわした暁は呆れたように言った。

「古菲に中国拳法を習ったみたいだが・・・おい、まさかこれだけつてことはねえだろうな」

「ふっ、くう、はあ・・・」

「ふう・・・（見込み違いだったか・・・？）」

首を振り、溜息をつく。

「しゃあねえ。次で決める」

「・・・！」

暁は静かに構えを取る。

「コオオ………ッ！」

次の瞬間、ネギは殴り飛ばされていた。

広場の中心に向かって吹き飛ぶネギを更に暁が追う。そのまま追いついて拳を構える。

「寝ろ」

暁はネギを地面に叩きつける気だ。

「かかりましたね？」

「何？」

「エリミットム解放！」

「サギタ・マキカ魔法の射手

「セリエス・ルーキス連弾・光の101矢！！」

ゴアッ！

「チッ！」

暁は縮地で放たれた魔法の矢を回避した。

「……驚いたぜ。ディレイ・スベル遅延呪文か。だが、一步足りなかったな」

そして暁はまた拳を構える。

「まだですよ、暁さん。周りを見てください」

「周り……ッ！これはッ！」

暁が目を見張ったのは当然だ。
何故なら暁がかわした魔法の矢が全て向きを変え、再びこちらに向
かって来ていたのだから。

「全方向からの魔法の矢です。流石にかわせませんよね？」

「・・・参ったぜ。最初からこれを狙ってたのか？」

「はい、僕のスピードじゃ暁さんについていけないことは分かっ
てましたから」

「やれやれだぜ」

暁は腕を下ろす。

本当はこれをかわすことも可能だった。

ネギを盾にすればいい。

だが、自分を危険に晒すような作戦を実行するその度胸に免じて今
回は攻撃を受けてやることにした。

ネギを背中に隠し、暁は魔法の矢全てをその身で受け止めた。

「おめでとぅ、全員合格だ」

ちょっと焦げているが、感心した顔で暁が言った。

「正直、全員が試験に合格するとは思わなかった。誰か一人くらい
は無理じゃないかと思っていた。

だがお前らは持てる力全てでこの試験に合格した。

よつて、これからお前らは俺の弟子と言つことになる。よろしく頼むぜ」

「……ハイ！」

「さて、弟子になったのはいいが、俺からお前ら一人につきひとつずつ課題がある」

「？　なんですか？」

「まさかまた何か……」

「今回見たいなのアルか？」

全員が疑問を口にする中、暁はおもむろに言った。

「ネギ」

「はい？」

「お前は3 - Aの成績を学年平均以上にキープな」

「え……!？」

「古菲と刹那はクラス内順位を半分より上にするこど。」

「じゃねえと修行つけてやんねえからな」

「……うえつ!？」

「文武両道。当然だろ？　なんてつたつてお前らは俺の弟子なんだからな。」

修行はいつでもつけてやるからな、待ってるぜ。

ほら、今日はもう遅い。とつとと帰れ、お前ら」

「……ハイ……」

試験に合格したのはいいが、思わぬ課題に肩を落として三人は帰っていった。

三人を見送って、暁は再び広場に戻ってきた。階段に腰掛け、独り言のようにつぶやいた。

「さて……」そろそろ出てきたらどうだ？ 超 鈴音

「気付いて……いたの力？」

ゆらり、と超は姿をあらわした。

古菲も刹那も全く気付いていなかったが、暁は気付いていた。

「見られている感覚がしたからな」

暁は自分へ向けられた視線を感じる事が出来た。

「で、何か収穫はあったか？ 『修学旅行中から』ご苦労なこつた」

「！」

「……と言つても、お前が俺を見ていることに気付いたのは修学旅行後半なんだがな。」

それで？ 俺に何の用だ？」

「……そうだね。聞きたいコトがあるヨ。……あなたは何者だ？」

急に超の気配が変わった。

暁は、超からここでは異様な気配、感情を排除した『冷たい意志』を感じた。

尤も、暁にとっては懐かしいものであったが。

「……そんなことか？ 俺は暁。それ以上でもそれ以下でもない」

「惚けないでほしいネ。あなたの素性を答えてもつうヨ」
「・・・そうだな、教えてもいい。ただし、『お前が先に話したら
な」

超は暁をしばらく凝視した後、溜息をついた。

「お見通し・・・と言うわけカ」

「ああ、お前はここの人間とは『おいが違う』からな」

「そうだな、あなたには話してもいい。 暁サン、私は『

未来』から来たんだ」

「未来・・・なるほど」

「意外と簡単に信じるネ？ 嘘を吐いているとは思わないのカナ？」

「お前はこんな場面で嘘を吐くヤツじゃねえよ」

暁はゆつくりと広場を歩く。

「今度は俺の番だな。俺は

俺も『未来』から来た」

「『未来』、カ？」

「ああ、俺は今より少し先の未来から600年前に時空転移したん
だ」

（『別の世界の未来から』・・・だがな）

「あなたも・・・そうカ・・・」

超は何か思うところがあったのか、視線を空に向けた。

「さあ、俺は答えたぜ。次はお前の番だ」

「・・・次はここに来た『理由』を話すヨ」

「ここに来た、理由か・・・。ちよつと待て、その話は俺から話そ
う」

「いいのカナ？」

「ああ、なんせ俺が時空転移した理由は『無い』からな」
「なん……」

絶句した超に向かって暁は苦笑する。

「いや、マジな話だ。俺は他者の意思で送られたただだからな。
ま、信じる信じないはそっちの勝手だ。それで？ お前はどんな
んだ？」

「ワタシは」

「そう、私は『世界を救うために』この時代に来た」

暁が超を見つめる。

「……それは、魔法世界の、アレか？」
「やはりあなたは知っているみたいだネ」
「20年前のあの戦を戦ううちに、な」

二人は黙って向き合った。

「お前はそれが目的か。歴史を、変えるために来たのか」
「そういうコトになるネ」

「……？ だが、待てよ……（まさか……いや、そんなはず
は……）」

「どうしたのカナ？」

「（そんな……コトが……だが、可能性としては……！）」

「暁サン？」

ドゴォー！！

突然暁は地面を殴りつけた。

暁は何故か怒っていた。

握り締めた拳から血が噴き出していた。

「！？」

「(クソが・・・ツツ！！　こんなことがあっていいのかよ、おいツ！！)」

「・・・大丈夫か？」

「く・・・いや、たいしたことじゃねえ・・・気にするな・・・」

「そう、か？」

「・・・それで？　お前は何故俺のことを調べていた？」

「・・・ワタシの知っている情報にはあなたの存在が無かったからネ。

どんな文献にもあなたのことは載っていなかった。

だから不思議に思ってたあなたのことを調べていたヨ」

「(やはり・・・か・・・！)」

暁は唇を噛んだ。

だが一瞬でその表情を消し、尋ねる。

「そのことについては俺から言える事は無い。残念だがな。

・・・それで？　これからお前はどつする？

どつやってその目的を達成するつもりだ？」

「それは言えないヨ。あなたがワタシの仲間になってくれたら、話は別だけどネ」

「俺が聞いているのは『計画』じゃねえ。『手段』だ」

「・・・・・・・・・・」

超が表情を消す。

「『魔法の存在を全世界に暴露する』。それがワタシが世界を救うために考えた手段だヨ」

「・・・そうか・・・・・・・・なら」

暁は首を振った。

「俺はお前の仲間にはなれねえな」

「・・・・・・・・・・何故・・・カナ？」

「悪いが・・・」

暁はゾツとするようなな笑みを浮かべて言った。

「俺は『人間と言う種』をそこまで信頼していないからな」
「・・・・・・・・・・」

「個人個人としての人間は信頼してもいいと俺は思っている。だが、種として見たときの人類を俺は信頼していない。

現在の状況を見る。自分たちが作り出した兵器にすら振り回されるような種だぜ？」

その上『魔法』なんて力が公になればどうなることか」

その上魔法は『個人』が使えるのだ。

紅き翼クラスになれば小国程度なら一人で滅ぼせる。

それが限りなく少数だとしても、『立派な魔法使い^{マキステル・マキ}』だとしても、人間と言うものは自らにその力が向くのではないかと恐れる。そして自分たちもそれに対抗できる力が必要だと焦るのだ。

『その末に自分のような存在が生み出されるかもしれない』

暁はそれを恐れていた。

「・・・悪いな。だが、お前のことは誰にも言わねえからよ。

お前も俺のことは秘密つてコトで頼むぜ」

「・・・ふう、仕方ないネ。ここは引いたほうが良さそうダ」

「助かるぜ。それじゃあな、超」

「また明日ネ、暁センセイ」

暁は去って行く超を見送った。

そして今度こそ独りになった広場で暁は呟く。

「俺は全てを救ってみせる」

「テオのおかげでその見通しも立った」

「だから俺には、あいつの計画を認めることは出来ない」

「だが、俺はあいつに伝えるべきだったのか？」

「『この時代』は……………」

「『あいつの世界の過去ではない』と言いつつ何を……」

修学旅行の終わりと弟子入り試験（後書き）

『パクティオーカード説明』

【暁】

主：テオドラ

名前：ACATUCI（暁）

称号：FACTICUS ANIMA（造られた生命）

色調：Nigror（黒）

徳性：audacia（勇気）

方位：centrum（中央）

星辰性：Sol（太陽）

数字：MC？（1054）

アーティファクト：変わらぬ世界

【エヴァ】

主：暁

名前：ATHANASIA ECATERINA MACDOVE

LL EVANGELINA

称号：MAGISTRA PUPARUM（人形使い）

色調：Viola（スミレ色）

徳性：fides（信仰）

方位：septentrio（北）

星辰性：Pluto（冥王星）

アーティファクト：幻影の鏡

『アーティファクト説明』

【変わらぬ世界】

- ・『製造番号 K - 1054』の願いを映し出したアーティファクト。
- ・範囲内の状態をアーティファクト発動時のままで魔力が続く限り保つ。
- ・発動中は外部からも内部からも影響を受けない無敵のアーティファクト。
- ・物は壊れず、劣化しない。生物は傷ついたり、老化することもない。
- ・効果範囲は直径およそ500メートル。それ以下ならば自在に設定できる。
- ・ちなみに暁以外も使うことが出来る。
- ・見た目は輝く球。発動時は砕け散って範囲を覆う。
- ・その球の色は使用者の心を映すと言う。
- ・発動の鍵言葉は『この瞬間を永遠に』
- ・終了の鍵言葉は『夢は終わる』

【幻影の鏡】

- ・暁の全身を映せるくらい大きな鏡。いくつかに分割可能。
- ・能力は映したモノの実体を無くすこと。姿も見えなくなる。気配も消える。
- （これを『幻影』状態と呼ぶ）
- ・但し鏡にはバッチリ映る。波立っていない水などにも映る。
- ・原理としては、『幻影の鏡』が現実世界の存在を鏡の世界に吸い出していると考えられる。
- ・使用者は鏡に映すだけで『幻影』状態になれる。
- ・それ以外の者は鏡に自分が映っていることを認識した上で、使用者がその名前を呼ばなければならぬ。

- ・『幻影』状態の時は何者からも干渉されないが、代わりにこちらからも何もできない。
- ・使用者が『幻影』状態から抜け出すには自分の姿をはっきり映す物に触れることが必要。
- ・他の者は『幻影の鏡』に触れる、『幻影の鏡』が解除される、使用者が許可する以外の方法で出ることとは出来ない。
- ・これで襲われたら普通はどうしようもない。
- ・ちなみにもうひとつ別の使い方がある。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9128k/>

規格外の男

2011年6月19日11時10分発行